青森県埋蔵文化財調査報告書 第274集

山下遺跡Ⅱ
米山(2)遺跡

－青森県新総合運動公園建設事業に伴う青森市宮田地区の遺跡発掘調査報告－

２０００年３月

青森県教育委員会

序

青森平野を囲む丘陵部には、縄文時代から平安時代・中世までの遺跡が多数あります。このなかで、国史跡三内丸山遺跡や小牧野遺跡などのある青森市西部・南部地域は、東北縦貫自動車道建設や工業団地造成などの開発事業に伴い、大規模な調査がたびたび行われてきました。これに対して東部地域では、これまで比較的大きな開発事業が少なかったのですが、青森県新総合運動公園が東部地域の宮田地区に建設されることに伴い、平成７年度に当該地区の分布調査が、平成８年度に試掘調査が行われた結果、東部地域にも、縄文時代･平安時代などの遺跡が多数埋もれていることがわかりました。これらの遺跡の本格的な発掘調査は平成９年度から行われ、平成９年度調査の成果については、『山下･上野尻遺跡』（平成11年３月青森県埋蔵文化財調査報告第255集）で明らかにしたところです。

今回、調査成果を報告する山下、米山（２）遺跡は、いずれも平成１０年度に発掘調査したものですが、山下遺跡からは中世のものとみられるカマド状遺構が多数発見され、米山（２）遺跡からは縄文時代後期の集落跡が発見されました。いずれも、青森市東部地域では初めての発見になります。

この報告書で明らかにされた事実をもとに今後更に多くの事実が明らかにされ、この地域の歴史の解明が進むことを期待しております。

終わりに今回の発掘調査の実施、報告書の作成にあたって、ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成１２年３月

青森県教育委員会

教育長　佐藤　正昭

例　　言

1．本報告書は、青森県新総合運動公園建設に伴い、平成10年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した青森市宮田地区所在の山下遺跡・米山(2)遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は末尾に記した。ただし、石器・鉄製品については当センターの畠山昇が、土器については永嶋豊が執筆した。遺構に関するその他の記載は末尾の執筆者名による。

3．出土した資料の自然科学的同定・分析等は下記の諸氏に依頼した。

石器の石質鑑定　　松山　力（八戸市文化財審議委員）
放射性炭素年代測定　　木越　邦彦（学習院大学教授）

4．本報告書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の５万分の1地形図の「浅虫」・「青森東部」・「青森西部」・「油川」である。

5．挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。

6．遺構･遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
(1)遺構内外堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原：1994)を用いた。
(2)遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は石器類はcm、重量はｇである。
(3)図中で使用したスクリントーンの表示は次のとおりである。

7．引用・参考文献については本文末に納めた。

8．発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、当センターで保管している。

9．発掘調査および本報告書作成にあたって、下記の諸氏からご協力･ご助言を得た(順不同、敬称略)
秋元 信夫、井上 正孝、宇部則保、越田賢一郎、北林八洲晴、酒井 宗孝、桜田　隆、鈴鹿 良一、瀬川　滋、仙庭 伸久、高木　晃、高橋　潤、高野 晋司、高橋与右衛門、田中 寿明、長尾 正義、新岡　巌、羽柴　直人、藤井 安正、古屋敷則夫、本堂 寿一、室野 秀文、八木 光則

目　　次

序
例言
第１編　調査の概要 …… 1
　第１章　調査要項 …… 2
　第２章　調査の方法 …… 5
　第３章　調査の経過 …… 6
　第４章　遺跡の地理的環境 …… 7
　　第１節　地形･地質 …… 7
　　第２節　基本層序 …… 8

第２編　山下遺跡 …… 11
　第１章　試掘調査の成果 …… 13
　　第１節　検出遺構 …… 13
　　第２節　出土遺物 …… 13
　　第３節　まとめ …… 19
　第２章　発掘調査の成果 …… 20
　　第１節　検出遺構と出土遺物 …… 20
　　　１　縄文時代の遺構 …… 20
　　　（１）土　坑 …… 20
　　　（２）土器埋設遺構 …… 24
　　　２　時期不明の遺構 …… 25
　　　（１）土　坑 …… 25
　　　（２）井戸跡 …… 27
　　　（３）カマド状遺構 …… 29
　　　（４）溝跡 …… 40
　　　（５）小ピット群 …… 40
　　第２節　遺構外出土遺物 …… 42
　　　１　縄文時代の遺物 …… 42
　　　（１）土器 …… 42
　　　（２）石器 …… 55
　　　（３）石製品 …… 56
　　　２　縄文時代以外の遺物 …… 56
　第３章　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 …… 60
　第４章　まとめ …… 61

第３編　米山（２）遺跡 …… 63
　第１章　検出遺構と出土遺物 …… 66
　　第１節　竪穴住居跡 …… 66
　　第２節　土　坑 …… 81
　　第３節　溝状土坑 …… 84
　第２章　　出土遺物 …… 88
　　第１節　土器 …… 88
　　第２節　石器 …… 102
　　第３節　古銭 …… 105

第３章　まとめ …… 111
第１節　検出遺構 …… 111
第２節　各時期の概観 …… 116
山下・米山(2)遺跡参考文献 …… 120
土器・石器観察表 …… 122
写真図版
抄録

挿　図　目　次

第１編　調査の概要
図１　遺跡位置図 …… 3
図２　調査対象区域図 …… 4
図３　遺跡の基本層序 …… 9
第２編　山下遺跡
図４　山下遺跡試掘・発掘調査区域図 …… 12
図５　試掘調査で検出した遺構 …… 14
図６　試掘調査出土土器 …… 16
図７　古銭 …… 17
図８　山下遺跡試掘調査区出土石器 …… 18
図９　山下遺跡Ｃ区遺構配置図 …… 21
図10　山下遺跡Ｄ区遺構配置図 …… 22
図11　縄文時代の土抗 …… 23
図12　土器埋設遺構 …… 24
図13　時期不明の土抗 …… 26
図14　井戸跡 …… 28
図15　第１号～第５号カマド状遺構 …… 36
図16　第６号～第10号カマド状遺構 …… 37
図17　第11号～第15号カマド状遺構 …… 38
図18　第16号～第19号カマド状遺構 …… 39
図19　溝跡と小ピット群 …… 41
図20　山下遺跡Ｃ区遺物出土状況 …… 46
図21　山下遺跡Ｃ区出土土器１ …… 47
図22　山下遺跡Ｃ区出土土器２ …… 48
図23　山下遺跡Ｃ区出土土器３ …… 49
図24　山下遺跡Ｃ区出土土器４ …… 50
図25　山下遺跡Ｃ区出土土器５ …… 51
図26　山下遺跡Ｃ区出土土器６ …… 52
図27　山下遺跡Ｃ区出土土器７ …… 53
図28　山下遺跡Ｄ区出土土器 …… 54
図29　山下遺跡出土珠洲焼 …… 56
図30　山下遺跡Ｃ区出土石器１、石製品 …… 57
図31　山下遺跡Ｃ区出土石器２ …… 58
図32　山下遺跡Ｃ区・Ｄ区出土石器 …… 59
第３編　米山（２）遺跡
図33　米山（２）遺跡Ａ区遺構配置図 …… 64
図34　米山（２）遺跡Ｂ区遺構配置図 …… 65
図35　第１号住居跡１ …… 68
図36　第１号住居跡２ …… 69
図37　第２号住居跡 …… 70
図38　第３号住居跡１　遺物の出土状況 …… 73
図39　第３号住居跡２ …… 74
図40　第３号住居跡３ …… 75
図41　第３号住居跡４ …… 76
図42　第４号住居跡１ …… 77
図43　第４号住居跡２ …… 78
図44　第５号住居跡１ …… 79
図45　第５号住居跡２ …… 80
図46　第１号～第３号土坑 …… 85
図47　第４号～第12号土坑 …… 86
図48　溝状土坑 …… 87
図49　米山(2)遺跡Ａ区遺構外土器１ …… 91
図50　米山(2)遺跡Ａ区遺構外土器２ …… 92
図51　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器１ …… 93
図52　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器２ …… 94
図53　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器３ …… 95
図54　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器４ …… 96
図55　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器５ …… 97
図56　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器６ …… 98
図57　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器７ …… 99
図58　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器８ …… 100
図59　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器９ …… 101
図60　古銭 …… 105
図61　米山(2)遺跡Ａ区出土石器 …… 106
図62　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器１ …… 107
図63　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器２ …… 108
図64　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器３ …… 109
図65　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器４ …… 110
図66　東北地方北部出入口施設を有する
竪穴住居跡①（縄文時代後期中心） …… 114
図67　東北地方北部出入口施設を有する
竪穴住居跡②（縄文時代後期中心） …… 115
図68　山下遺跡出土土器集成図 …… 118
図69　米山(2)遺跡出土土器集成図 …… 119

第1編　調査の概要

第１章　調査要項

1　調査目的

青森県新総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市宮田地区遺跡の試掘・発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2　調査期間

平成10年4月23日から7月31日まで

3　遺跡名および所在地

（１）　山下遺跡　　（青森県遺跡台帳番号　01-277）
青森市大字宮田字山下108・109外

（２）　米山(2)遺跡　（青森県遺跡台帳番号　01-276）
青森市大字宮田字米山130外

4　発掘調査面積

（１）　山下遺跡　　調査対象面積　35,000㎡
発掘調査面積　4,100㎡

（２）　米山(2)遺跡　　発掘調査面積　1,800㎡

5　調査委託者

青森県土木部都市計画課

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

青森市教育委員会

9　調査体制

調査指導員　市川　金丸　青森県考古学会会長　（考古学）
調査協力員　池田　　敬　青森市教育委員会教育長
調　査　員　松山　　力　八戸市文化財審議委員（地質学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
所　　長　中島　邦夫
次　　長　成田　誠治
総　務　課　長　成田　孝夫
調査第二課長　福田　友之
文化財保護主幹　畠山　　昇
文化財保護主事　永嶋　　豊
調　査　補　助　員　藤谷　麻美、長谷川 浩平、本荘　瑞穂、佐藤　淑

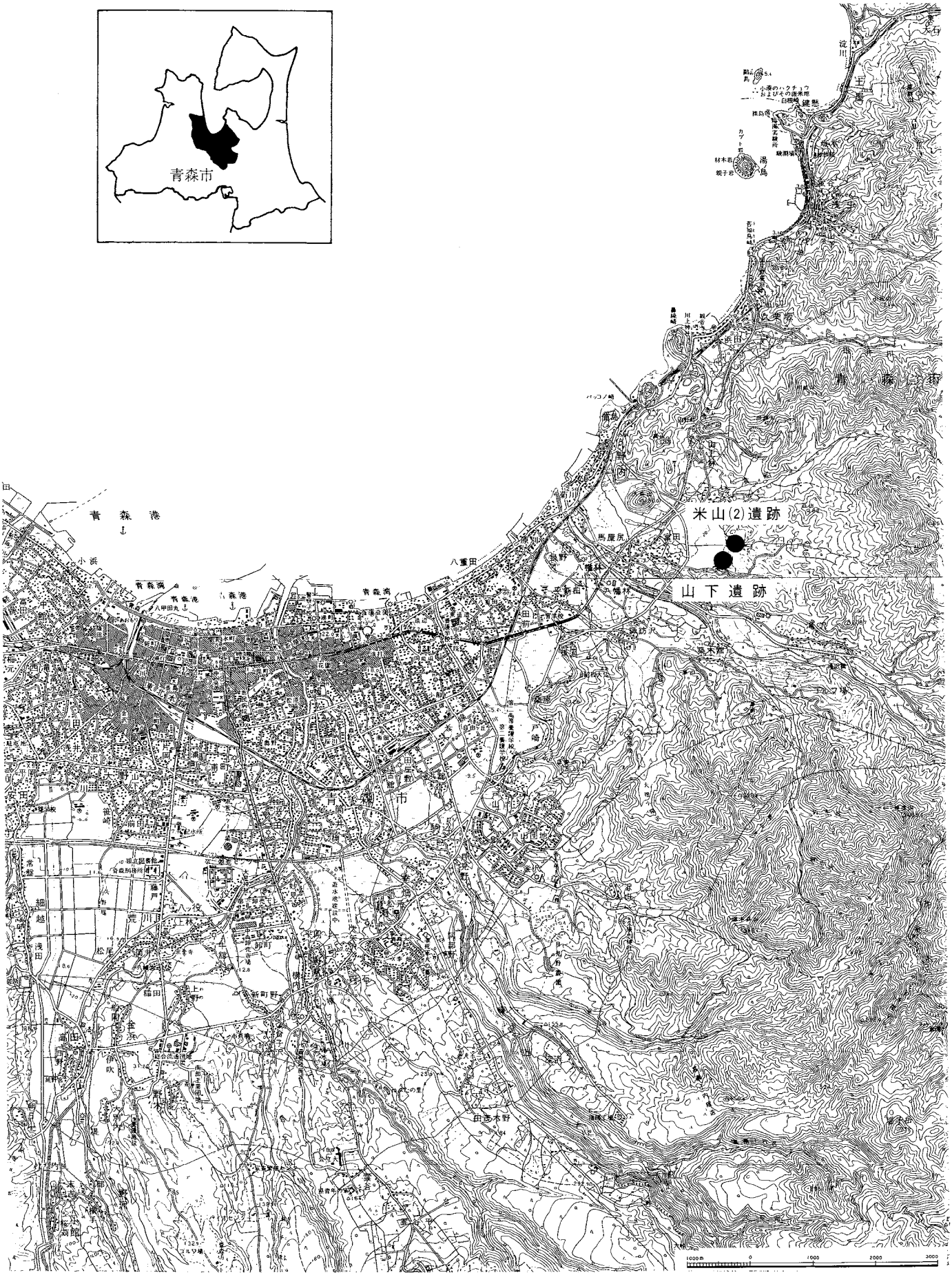


図１　遺跡位置図

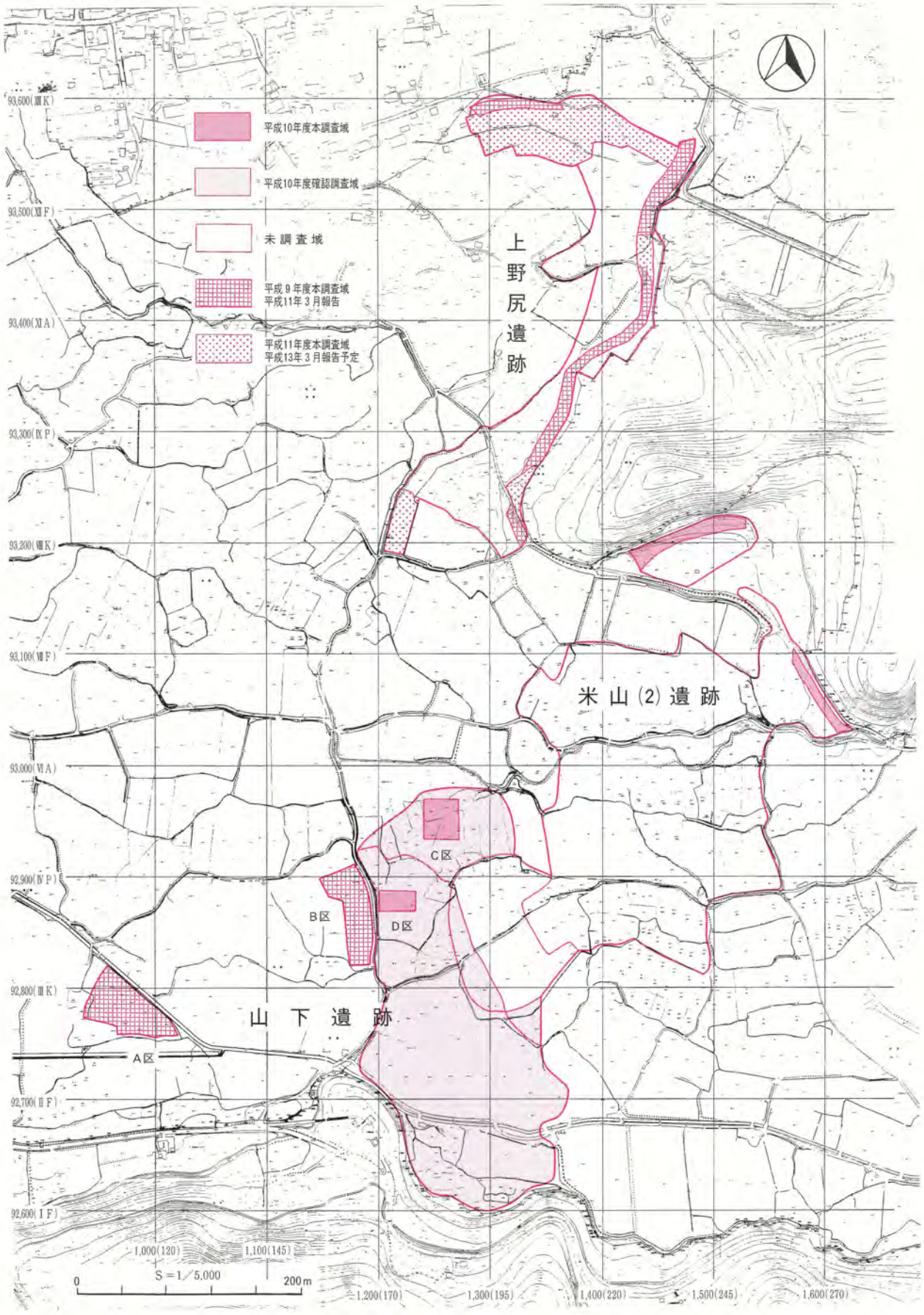

平成10年度本調査域
平成10年度確認調査域
未調査域
平成９年度本調査域
平成11年３月報告
平成11年度本調査域
平成13年３月報告予定
上野尻遺跡
米山(2)遺跡
山下遺跡
A区
B区
C区
D区
93,600(ⅢK)
93,500(ⅫF)
93,400(ⅪA)
93,300(ⅨP)
93,200(ⅧK)
93,100(ⅦF)
93,000(ⅥA)
92,900(ⅣP)
92,800(ⅢK)
92,700(ⅡF)
92,600(ⅠF)
1,000(120)
1,100(145)
1,200(170)
1,300(195)
1,400(220)
1,500(245)
1,600(270)
S＝1／5,000
0
200m

図２　調査対象区域図

第２章　調査の方法

１　発掘区グリッドの設定

グリッド番号の呼称には、新総合運動公園用地内の平成８・９年の試掘調査(遺物・遺構の内容、本調査面積を確認するための調査)・本調査のものを踏襲している。平成８年11月の新総合運動公園用地の試掘調査開始時に、公共座標軸を利用しグリッド設定を行い、座標Ｘ＝92,680　Ｙ＝644を、ⅡＡ－30と呼称することに決定した。Ｘ軸の南北ラインをローマ数字とアルファベットＡ～Ｔの組み合わせで呼称し、Ｙ軸の東西ラインを算用数字で呼称した。１グリッドを４ｍ四方に決め、Ｘ軸正方向に4m北進するたびに、アルファベットがＡ～Ｔまで進み、その後、新たなローマ数字との組み合わせで呼称し、またＹ軸正方向に４ｍ東進するたびに、算用数字が１ずつ増えていくこととなる。そのため、仮想原点ＩＡ－０は、Ｘ＝92,600　Ｙ＝520となる。「ローマ数字とアルファベット－算用数字」の組み合わせ(南西隅の交点)で４×４ｍの各グリッドを表した。

平成８年の新総合運動公園用地内の試掘調査、平成９年の山下遺跡の調査・上野尻遺跡の試掘調査と本調査・米山(２)遺跡の試掘調査、平成10年の山下遺跡の試掘調査と本調査・米山(2)遺跡の本調査、平成11年度の上野尻遺跡の本調査においても、同様のグリッド呼称法を用いており、互いの位置関係が座標で容易に確認できるように配慮した。

２　発掘調査の手順

今回の山下遺跡試掘調査では、基本的に東西2m×南北20mのトレンチを設け、調査対象地域の南側から着手し、北上していった。この遺跡は、前年の調査において、表土中から遺物が出土することが判明していたため、試掘調査においては人力による表土除去を基本とした。ただし山下遺跡本調査、米山(2)遺跡本調査の際には、作業の効率を考慮し、表土の厚さを手掘りによって確認した後に重機による表土除去を行った。表土除去の後、遺物包含層と遺構の確認を行い、本調査では、上層より順次遺構の精査・遺物包含層の掘り下げを、地山と考えられる無遺物層まで行った。試掘調査では、遺構確認状態で終了し、精査は今後の本調査に委ねることとなる。遺物の取り上げは、基本層序に従い、上層よりローマ数字でⅠ層(表土・耕作土)、Ⅱ層……を用い、基本的にグリッド単位・層単位で種類別に一括して行った。しかし、狭い範囲でまとまりを持つなど、遺物群全体の時期限定が可能であるといった、良好な出土状況を示す遺物の中には、出土状況の実測や出土地点・標高の記録を行ったものもある。

３　遺構の調査

遺構は、調査時には青森県埋蔵文化財調査センターで定めた略号により呼称したが、本書では通常の呼称で表現し、原則として検出順に略号を付けた。遺構の形態・規模・確認面下の遺構の残存状況に応じ、基本的に土坑は２分割、住居跡は４分割、カマド状遺構は４～６分割で、セクションベルトを設定し覆土の除去を行った。遺構内覆土は算用数字で表記し、遺物の取り上げは遺構内覆土層ごとに行ったが、遺構埋没開始時期を示す底面や床面付近出土のものや人為的な埋設物などは、出土状況を実測したり、出土地点・レベルの記録を行った。出土層位不明のものは、遺構内覆土として取り

上げた。

4　実測図の作成

遺構の実測は簡易遣り方法で行った。縮尺は1／20を基本としたが、対象規模に応じて適宜対応した。

5　写真撮影

35㎜モノクロ(ＩＳＯ400)とカラーリバーサル(ＩＳＯ400)とカラーネガ(ＩＳＯ100K)の３種類のフィルムを使用し、作業状況、土層堆積状態、遺構検出状況、セクションベルト、完掘状況、遺物出土状態等について撮影した。

第３章　調査経過

平成10年４月23日、調査機材等を現地に搬入し、環境整備後に山下遺跡の試掘調査に着手した。基本的に、調査対象域の南側から北側へと、トレンチ調査を進め、主に対象域の北半部において縄文時代および時期不明の遺構・遺物を確認した。

５月末、山下遺跡の遺構の分布と広がりが概ね把握できたため、試掘調査を一時中断し、６月１日、米山(2)遺跡の付け替え道路部分の本調査を開始した。主にＡ区西半とＢ区南東において縄文時代の竪穴住居跡５軒・土坑12基・溝状土坑２基を検出し、遺構精査と遺物包含層の掘り下げを行った。

7月上旬より、米山(2)遺跡の本調査と並行して、４・５月の試掘調査で、遺構が集中した山下遺跡の北側のＣ区・Ｄ区の本調査を行うこととした。両区において縄文時代の土器埋設遺構・土坑のほか、時期不明の土坑・カマド状遺構・井戸跡・溝跡・小ピット群を検出し、遺構精査と遺物包含層の掘り下げを行った。7月30日に、山下遺跡・米山(2)遺跡ともに本調査をほぼ終了し、翌31日に調査器材、出土遺物等を搬出し、予定どおり調査を終了した。

（永嶋　豊）

第４章　遺跡の地理的環境

第１節　地形・地質

遺跡の所在する宮田地区は、青森市中心街より東北東へおよそ８～９km、現在の青森湾の海岸部野内地区よりおよそ南東1.5～2kmに位置する。集落の北北東２kmには、久栗坂トンネルが浅虫温泉・平内町・野辺地町方面へと続き、さらに青森市－上北郡天間林村間のみちのく有料道路の開通後は上北・八戸地方と青森市を結ぶ玄関口ともなっている。

山下・米山(2)両遺跡は、宮田集落の東端部より東へおよそ0.4～１kmの範囲にあり、両遺跡の東方には東岳山塊(東岳標高684.0m)、北方には片越山山塊(片越山標高295m)が迫る。南側には、東岳山塊より西方に延びる山稜が迫り、北・東・南を急傾斜面で囲まれた洪積台地、沖積地上に位置している。両遺跡より南方向の約20kmには八甲田山系大岳(標高1584ｍ)が、西南西約50kmには岩木山(標高1625m)がそびえる。遺跡地内からは東岳山塊より延びる山稜によって、近くに位置する八甲田山系をのぞむことはできないが、米山(2)・上野尻両遺跡からは岩木山を確認することができる。

平成10年度の調査対象となった山下遺跡は、南の山稜裾部より北方に広がり、米山(2)遺跡は北の山稜裾部から南へと広がり、互いの北東側と南西側でほぼ接している。

山下・米山(2)・上野尻遺跡の他に、玉水(2)遺跡が位置する新総合運動公園用地は、青森湾の南岸に広がる東西幅約15km、南北幅約９kmの沖積平野である青森平野の東北端部に位置し、その後背地は野内川流域とその北方の小河川流域山地となっている。松山　力はこの青森平野東端部の沖積地を下位面・中位面・上位面に３分し、洪積台地を下位面・上位面に２分している。沖積地は、礫・砂・泥などの未固結堆積物が主体であり、洪積台地は礫・砂などで構成される土石流を主とする地層で、粘土質褐色風化火山灰層(いわゆるローム)が被覆し、地表直下には黒色土が発達している。

沖積下位面は、海抜10m以下の「野内低地帯」とこれに続く河川・沢沿いの低地帯、沖積上位面は、沖積中位面から洪積下位面との間に位置し、海抜15～30mとやや大きな勾配を有しており、北を貴船川、南を野内川で挟まれた小規模な複合扇状地性地形面となっている。また洪積上位面は、山地の急斜面下に続く谷底の緩斜面を含めた部分となる。

遺跡付近の地形区分図(松山 1999, 図3)によれば、山下遺跡はその西側や南側が沖積中位面・上位面で、北側と東側は洪積下位面で構成されており、標高およそ20～25m、調査前までは水田として利用されていた。米山(2)遺跡は、僅かに沖積面も認められるが、大半が洪積下位面で構成されており、標高20～40m、水田・畑地・植林地として利用されてきた。山下遺跡は比較的平坦部にあり、米山(2)遺跡は、山稜裾部から平坦部にかけての標高差を有する遺跡と考えられる。

なお、標高10m以下の低地帯は、縄文海進時に海面下にあったことが想定されており、両遺跡で、生活跡がみられる縄文時代後期の小海進時にも、若干の「海岸線の後退」(註１)がみられた可能性がある。(当節は『山下・上野尻遺跡』所収「地形･地質の概要と土層序」(松山　力1999)に依拠するところが大きい)

(註1)松本秀明は、海岸線の内陸側への移動と沖合側への移動は、単に海面の上昇・低下に対応するだけでは、ないことを示している(松本1999)。海岸線の内陸側への移動を「海岸線の後退」、沖合側への移動を「海岸線の前進」と表現し、一般に海面上昇は「海岸線の後退」を、海面低下は「海岸線の前進」をもたらすが、縄文時代早期中頃に海面上昇にもかかわらず、「海岸線の前進」の事例が仙台湾で多数見出されることをあげている。そしてこうした現象を、河川の堆積作用速度と海面上昇速度のバランスによって説明しており、海面上昇中であっても、それを上回る河川による多量の土砂供給があれは「海岸線は前進」現象は生じ得るし、河川の土砂供給が多量であれば、海面低下なしに「海岸線の前進」現象によって沖

積低地が形成されるとしている。松本の「海岸線の後退」現象と「海岸線の前進」現象の表現は、我々の使用する「海退」と「海進」の言葉とは、対応しないことに注意すべきであり、我々がイメージする、海岸線が迫ったり、戻ったりするという、一律的な現象ではないことを示している。
松山　力　1999「地形・地質の概要と土層序」『山下遺跡・上野尻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第258集
松本　秀明　1999「縄文時代の環境－海岸線と地形の変化－」『仙台市史　通史編1　原始』

第2節　基本層序

1　山下遺跡

調査対象域の大部分を占める沖積中位面は、南の山稜と北の洪積下位面の間に位置する浅い谷状地形である。今回、検出された遺構は、北側と北東側に集中し、谷状地形より高い地形、洪積下位面とされた部分に認められる。沖積面では、遺物は断片的に出土するものの、遺構は確認されていない。試掘調査で、広い範囲を扱ったため、全域で各層の対応関係をすべて明らかにできたわけではないが、各地点の層位の相対的な新旧関係が把握された。表土下に若干の縄文時代の遺物を含む黒褐色のⅡ層があり、その下位には限定される分布であるがⅡ層よりプライマリーな状態を示す、縄文時代後期前葉の遺物を包含する黒褐色のⅢ層がみられ、それ以下では、無遺物の、土石流起源と考えられる混礫土層･砂層や粘土質のいわゆるローム層がみられる。

山下遺跡基本層序

層名	色相	土色	土性	しまり	粘性	混入物・その他
Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	中	中	耕作土。下部には、所々に鉄分・マンガンがベルト状に堆積する部分がある。
Ⅱ	7.5YR3/1	黒褐色	シルト	中	中	上層より、鉄分の混じる部分がある。縄文土器はまばらに出土する。
Ⅲ	10YR3/1	黒褐色	シルト	弱	中	φ5mm以下の黄褐色粒子を含む。C区に顕著であり、縄文時代後期前葉の遺物を多く包含する。97山下B区のⅢ･Ⅳ層に対応するものか？
Ⅳ	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	弱	乾燥すると表面が白っぽくなる。無遺物層。97山下A地区Ⅳb層に対応か？
Ⅴ	10YR3/2	黒褐色	混礫シルト	弱	弱	φ2～10cm程の礫が非常に多く含まれる。土石流起源の礫層である。
Ⅵa	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質砂	弱	弱	ⅣH－195で、カマド状遺構の確認面となった層である。
Ⅵb	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	強	中	ⅢH－193～ⅣH－195などに分布する。
Ⅶa	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	中	中	調査区南半部で見られ、青味が強い。
Ⅶb	7.5GY4/1	暗緑灰色	シルト質砂	弱	弱	調査区南半部で見られる。

所々に、土石流起源と考えられる直径10～20cm程の砂礫層が確認された。1997年調査の山下遺跡A区･B区共に、松山　力によって最下層に砂礫層が確認されている。本年の調査では旧河川跡と考えられる部分には、均一な黒色土が堆積しており、遺物出土を期待したが、無遺物であった。ⅡP－188グリッド付近では、旧河川を検出し、その底面より若干上で、厚さ5cm程の黄褐色砂質シルト(2.5YR5／3)を確認したが、白頭山－苫小牧火山灰(B－Tm)の可能性も考えられる。

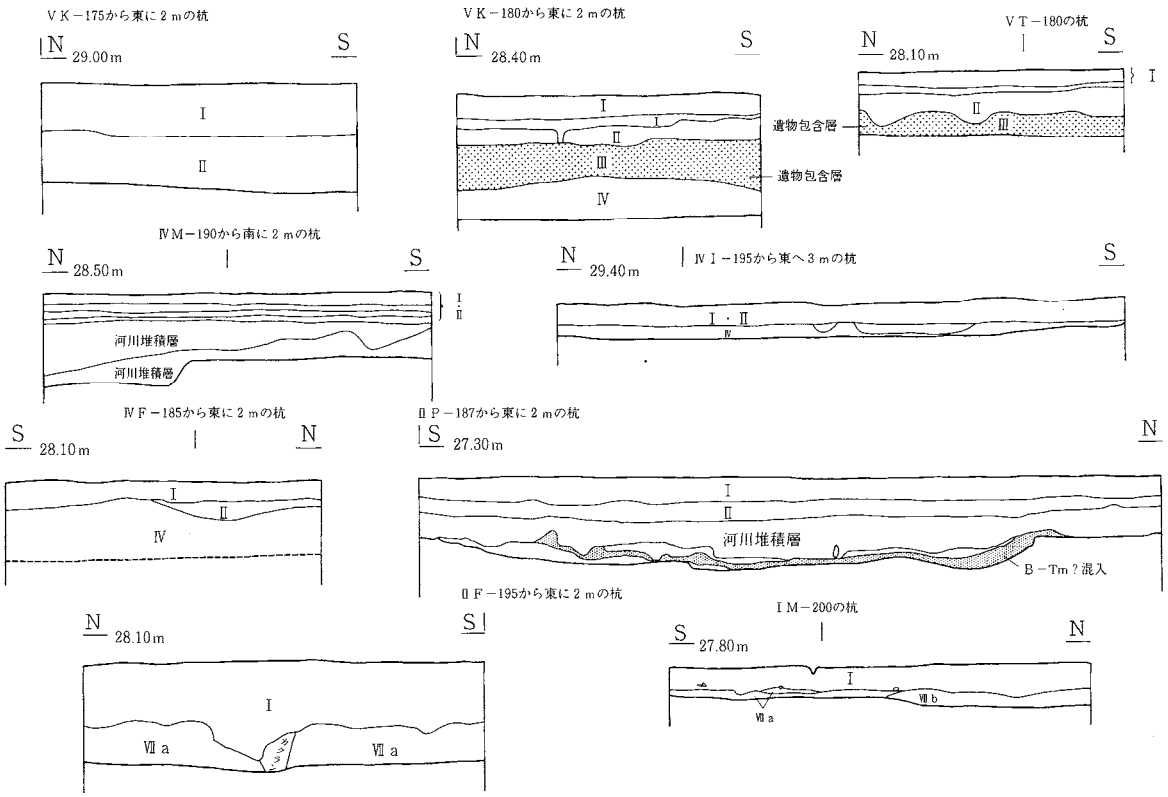
2　米山(2)遺跡

縄文時代後期の遺構が多く検出されたA区の基本層序について述べる。表土であるⅠ層は、耕作･植林による影響が大きく、Ⅱ層からは主に縄文時代後期の遺物が出土した。無遺物層であるⅣ層以下を検出した段階で、遺構確認が可能となった。当遺跡は洪積下位面によって構成され、青森西部から

浪岡付近に分布する「女鹿沢火山灰」、上北の「千曳浮石層」に比定される土層が確認されたことが、当地区土層の特徴となる。　（永嶋　豊）

米山(2)遺跡　A区基本層序

層名	色相	土色	土性	しまり	粘性	混入物・その他
Ⅰ	10YR2/2	黒褐色	シルト	弱	弱	表土。草や杉の根の影響が大きい。
Ⅱ	10YR2/1	黒色	シルト	弱	中	φ2㎜程度のにぶい赤褐色粒子を多く、φ10㎜程度の炭化物を含む。当地区での遺物包含層であり、A区西半の竪穴住居跡周辺から縄文時代後期中葉から後葉の土器が出土。
Ⅲ	10YR2/1	黒色	シルト	弱	中	Ⅱ層とⅤ層の漸移層。明褐色（7.5YR5/6）のローム層が混じる。
Ⅳ	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	中	中	φ数㎜の黄褐色粒子や黒色火山灰が混入している。隣接する上野尻遺跡でも確認され、松山力によって、青森市西部から浪岡付近に分布する「女鹿沢火山灰」や上北の「千曳浮石層」に比定されている。1号・2号・3号住居跡の床面や壁面の一部（南半部）を構成する。
Ⅴ	7.5YR5/6	明褐色	シルト質粘土	中	強	いわゆるローム層。A区西端部では層厚30㎝以上。
Ⅵ	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	弱	φ5㎜程度の緑灰色の小礫を非常に多く含む。1号・2号・3号住居跡の床面・壁面の一部（主に北半部）を構成



山下遺跡　土層図（S＝1／60）

米山（2）遺跡　A地区西端部土層図（S＝1／60）

図３　遺跡の基本層序

第2編　山　下　遺　跡

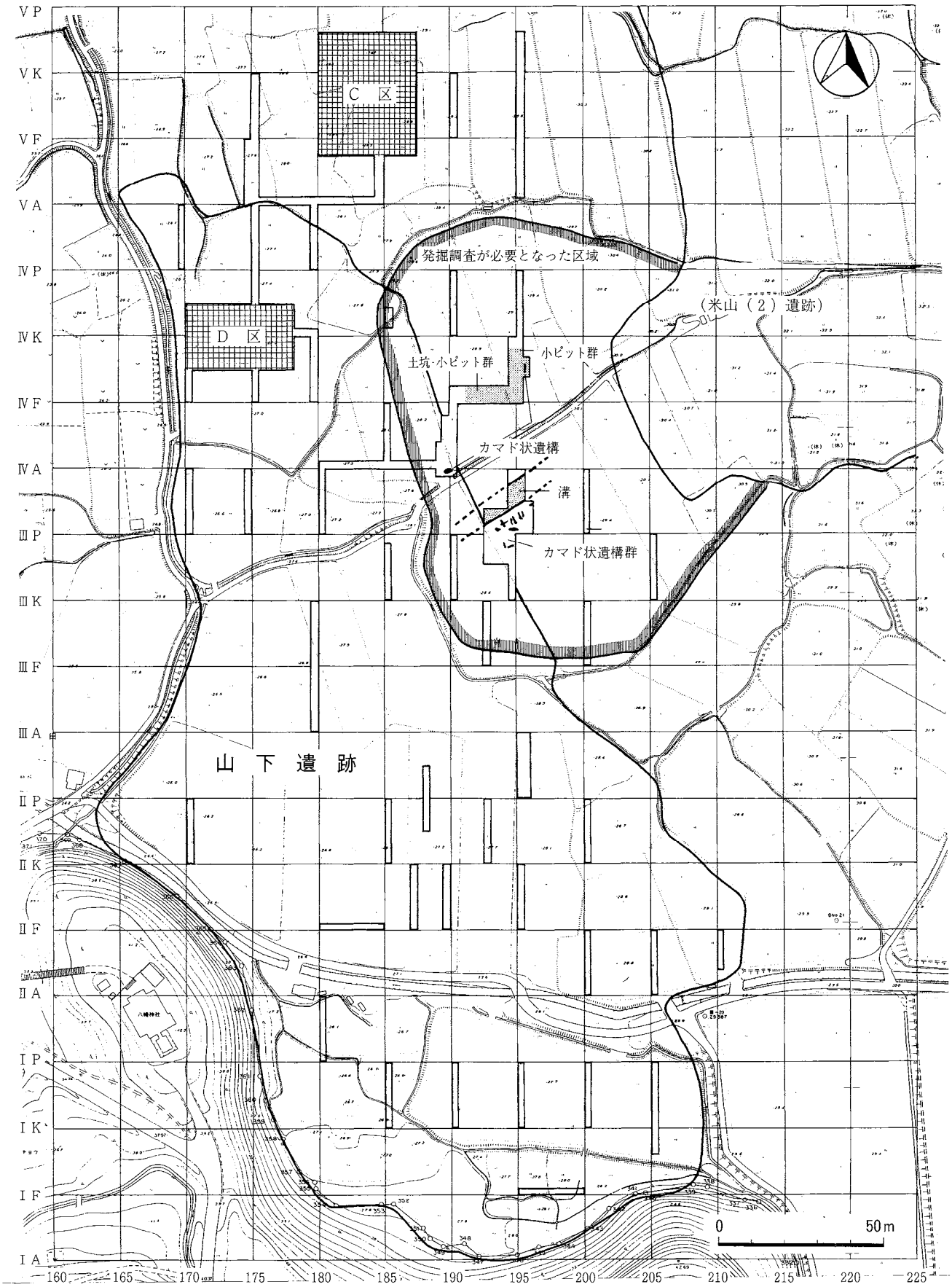


図4　山下遺跡試掘・発掘調査区域図

第１章　試掘調査の成果

本遺跡は、青森市東部に広がる水田地帯に位置している。現在は開田によって平坦な水田面となっているが、当時は貴船川に注ぐ小河川が宮田地区一帯を巡り、その間に小規模な扇状地が広がっていた地形と見られている。本遺跡はこの扇状地の標高20～25ｍの沖積台地上に立地している。平成９年度には本遺跡の西側区域が調査の対象になっており、試掘調査と発掘調査が行われている（Ａ区、Ｂ区）。今回の調査は、平成９年度調査区域の東側に広がる水田地帯が対象であり、調査の進展によって、一部本調査を行った区域もある。

第１節　検出遺構

試掘調査によって確認した遺構は、以下の通りである（図５）。

１　カマド状遺構

15基確認した。北東部に集中している。ⅣＨ・ⅣＩ－195グリッドで１基、ⅣＡ－189グリッドで１基、ⅢＯ～ⅢＲ－193～196グリッドで11基の遺構を確認した。後者の11基を確認した場所では、５基の遺構がほぼ同じ方向を向いて列状に並んでおり、周辺にも多数存在していることがうかがわれた。また、平面プランで確認できなかったが、ⅣＨ～ⅣＫ－175ラインの壁際にカマド状遺構に伴う焼土を２基確認した。

２　土　坑

２基確認した。北東部のⅣＦ－194グリッドで１基、北西部のⅣＪ－175グリッドで１基である。前者は１辺が80㎝前後の方形を呈する。後者は、調査の結果第３号井戸跡となった。

３　小ピット群

三カ所確認した。ⅣＦ－192～194グリッドとⅣＨ～ⅣＫ－195グリッド及びⅣＪ－175グリッド付近の試掘トレンチで確認した。

４　溝　跡

ⅢＰ～ⅢＴ－193～195グリッドで検出した。幅６～７ｍ前後、深さ１ｍ以上のもので、北東から南西方向に延びている。　（畠山　昇）

第２節　出土遺物

試掘調査では、南北最大幅約360ｍ、東西最大幅約180ｍ中の 調査対象面積35,000㎡中に、２×20ｍを基本としたトレンチを計2,400㎡分設定し、遺構・遺物の分布の確認作業を行った。その結果、対象範囲の南半部に分布密度が薄く、北半部で部分的に縄文時代後期を中心に、時期不明の遺構・遺物の集中域を確認した。そのうち、ＶＥ－180杭を基準に東へ28ｍ・北へ36ｍの1,008㎡（山下遺跡Ｃ区）、ⅣＨ－170杭を基準にして東へ32ｍ・北へ24ｍの768㎡（山下遺跡Ｄ区）を発掘調査の対象とした。ここでは、発掘調査対象区外の試掘調査で出土した縄文土器、石器、近世貨幣等、細片を除き図示できたものを報告する。なお中世の須恵器片がⅣＦ－175グリッド、第Ⅰ層より３点出土しているが、発掘調査Ｄ区においても同様の須恵器片が遺構外より確認されており、「第2章 第2節2 珠洲焼」の項においてまとめて掲載している。また十腰内Ⅰ式期の説明については、文様モチーフをうまく言葉で説明

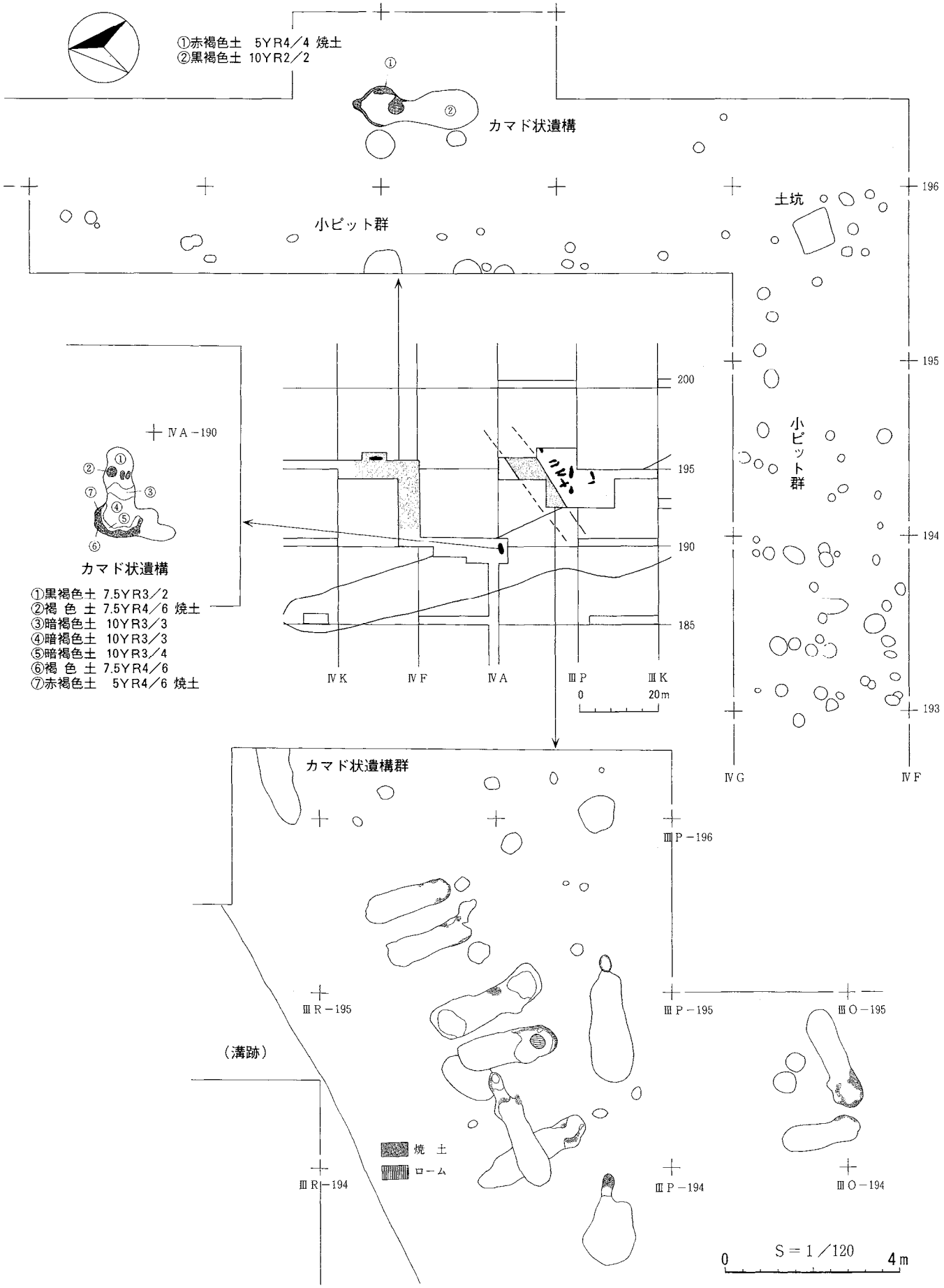


図5　試掘調査で検出した遺構

できないものが多く見られたため、主に一筆で完結する楕円形・円形・方形・三角形を呈する文様については、すべて『楕円文』という言葉を用いた。該期の土器は、全体が異なる形態の『楕円文』で構成されるものも少なくない為、非常に解りにくい説明になってしまった。

１　土　器

縄文時代前期・中期・後期・弥生時代前期の土器が出土している。中でも、ＶＡ～Ｅ－174グリッドⅢ層で出土した縄文時代後期前葉の土器群が中心となる。観察表において、各属性については記載している為、ここでは簡単に述べる。

(1)縄文時代の底部片

遺物出土の、ほとんど見られなかった試掘調査南半部において、時期不明の縄文土器底部３点が出土している。1と2は器表面が脆く流水の影響と考えられる摩滅が顕著である。

(2)縄文時代前期・中期の土器

4は円筒下層ｄ2式、6は円筒上層ａ式と考えられる。5も含めて3点出土した円筒土器はすべて口縁部に縄文原体の側面圧痕が見られる。7は胎土に石英粒を非常に多く含み、RL縄文施文後に平行沈線を施している。

(3)縄文時代後期前葉の土器群

ＶＡ～Ｅ－174グリッドを中心に縄文時代後期前葉の遺物が出土した。該期の遺物は、発掘調査Ｃ区において数多く出土している。

十腰内Ⅰ式の古い段階と考えられるもので、平坦口縁のものと大きく山形を呈する波状口縁の深鉢と橋状把手が付された壷形土器が出土している。8～13は平坦口縁の深鉢で、8～11は横位に連続する楕円文又は長方形文が施されている。8・9は器厚6～7㎜と厚く沈線幅も4㎜程度と太い。対して10・11は器厚4㎜程度の薄い作りで、沈線幅も2㎜程度の細くシャープなものである。11は粘土紐幅が1.5㎝程度である。12は文様中にLR縄文が施されるが、文様構成は不明である。13は櫛歯状工具によって横方向の条線が施される。12・13共に文様からは帰属時期は不明であったが、口頸部の傾きや沈線の様子から十腰内Ⅰ式期の深鉢と考えた。14～18は大きな波状口縁の深鉢であり、18以外は楕円文が施される。16は内面が肥厚する複合口縁となっており、沈線は粗雑である。19～24は同一個体と考えられる壷の破片である。19と20は口縁部破片で、口唇部に断続沈線とその途切れた部分に径4㎜深さ5㎜程の刺突が2個一単位で施されている。22と24は横型の橋状把手と考えられ、21と23の上部に付されるものである。25は深鉢の体部であるが、波状文風のモチーフ中にRL縄文が充填されている。

(4)時期不明の土器

26は無文の深鉢である。27は器厚3～4㎜の薄手の土器で、口縁部直下に凹線状の沈線、口頸部が無文、頸部に2条の平行沈線、体部にRLの縦走縄文が施される。器形・RL縦走縄文等から弥生時代前期の二枚橋式期の台付鉢の可能性が考えられるが、口縁部直下の凹線状沈線の類例を見ない。

（永嶋　豊）

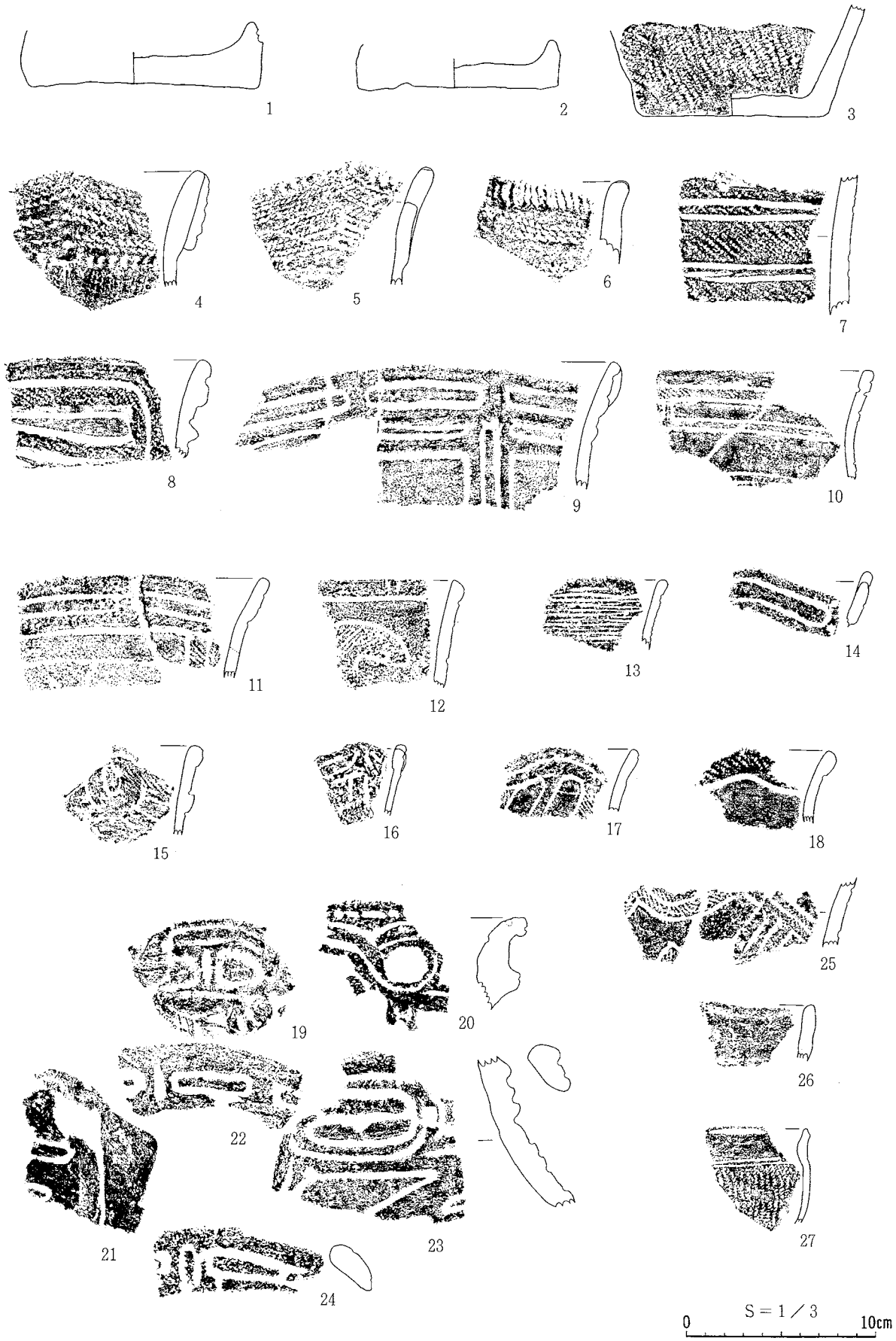

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
S＝1／3
0
10cm

図6　試掘調査出土土器

2　石　器（図８）

試掘調査で出土した石器は、石鏃１点、石匙１点、石篦１点、スクレイパー７点、Ｒフレイク10点、Ｕフレイク７点、フレイク60点、敲磨器３点、石皿・台石２点である。

石鏃（１）凹基無茎鏃が１点である。正面の中央付近の剥離が不十分であるため、やや厚くなっている。尖頭部先端が欠けている。

石匙（５）縦型で、バルブ付近を両面から調整を加えてつまみ部を作出している。体部は片面加工で、急斜度の浅い調整を加えている。

石篦（２）両面加工であるが、全体の調整は粗雑である。その中でも、基部付近及び裏面左側縁は、比較的丁寧な押圧剥離が施されている。

スクレイパー（３・４・６・７）６は両面に粗く大きな剥離が施されていて、全体に粗雑である。本類に含めたが、器体整形も不十分であることから、加工途中のものである可能性が高い。
４は、両極打法によって得られた半割剥片を素材としたものと思われ、一部に調整を施した小型のものである。３も小型の石器で、周縁の一部に急斜度の浅い調整が施されている。

敲磨器（８・９）敲石１点、凹石２点がある。８は扁平な楕円形の礫の両面に凹孔が見られるもので、片方の面には凹孔が３個見られる。平坦面には磨痕（線条痕）が見られるが、とくにＲ面に顕著である。９は棒状礫を利用したもので、一端に敲打痕が見られる。器面の全体に整形痕が見られる。

石皿・台石（10・11）10は石皿、11は台石であるが、特に加工した痕跡は見られない。

（畠山　昇）

表１　山下遺跡試掘調査区出土石器一覧表

器　種	石鏃	石匙	石篦	スクレイパー	Ｒフレイク	Ｕフレイク	フレイク	敲磨器	石皿・台石	計
出土数	1	1	1	7	10	7	60	3	2	93点

3　古　銭

寛永通宝が２点出土している。１点はⅢＴ－195グリッド、もう１点はⅣＯ－175グリッドからの出土である。銭貨の大きさや、「寛永通宝」の字体にも若干の違いが認められる。

（畠山　昇）

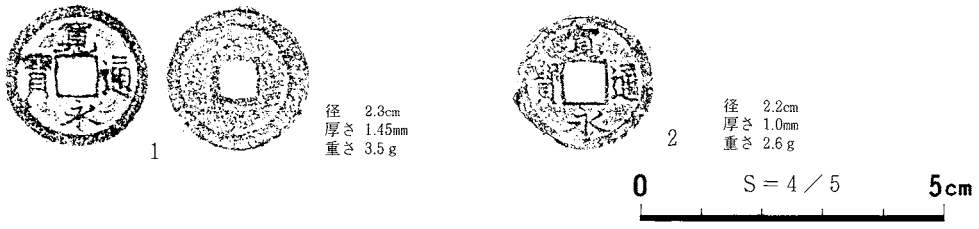


図７　古　　銭

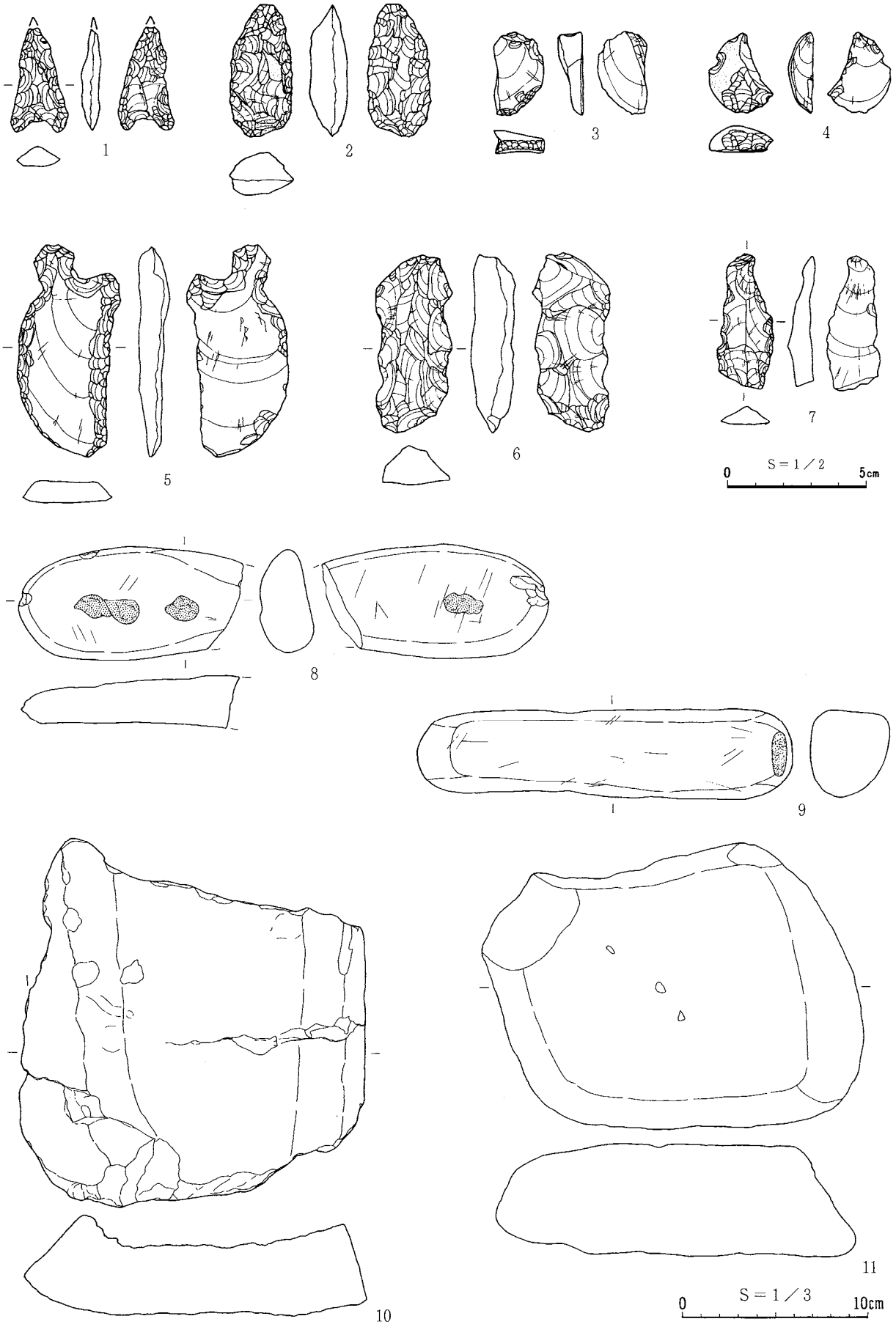


図8　山下遺跡試掘調査区出土石器

第３節　ま と め

発見された遺構・遺物の多くは、調査対象区域の北部及び北東部に見られたが、これ以外の区域では少量の遺物が出土したものの、遺構は検出されなかった。試掘調査の結果、本調査の必要があると考えられた区域は、以下の三カ所である。

1　北東部のⅢＫ～ⅣＫ－190～195グリッドの付近。カマド状遺構や、土坑、小ピット群、溝跡などが検出され、地形から見ても、周辺には多数の遺構の存在がうかがわれた。

2　北部のⅣＩ・Ｊ－184・185グリッドで、縄文時代後期の土器が若干出土した。拡張したところ、多量の遺物が出土した（Ｃ区）。

3　北西部のⅣＪ・Ｋ－175グリッドで、土坑１基とトレンチの西壁にカマド状遺構に由来する焼土を確認した。また、少量ではあるが、縄文時代の土器片も出土した（Ｄ区）。

以上のうち、「１」の区域については試掘調査にとどめ、後日の本調査に委ねることにした。その面積は、約9,000㎡である。また、この区域の大半は山下遺跡の範囲外にあることや地形上の特徴から、米山(2)遺跡に含めることにした。

「２」及び「３」の区域については、周辺を拡張して発掘調査を実施した。この成果については、次章で記述する。

上記以外の区域については、遺構が検出されなかったことや遺物の出土が散発的なことに加え、開墾と耕作のために大部分がすでに削平されてしまっていると考えられたことから、発掘調査の必要性がないと判断された。

（畠山　昇）

第2章　発掘調査の成果

試掘調査の結果を受けて、二カ所で発掘調査を行った。すなわち、縄文時代後期の土器が出土したⅣＩ・Ｊ－184・185グリッド周辺のＣ区、土坑１基とトレンチ西壁にカマド状遺構と思われる焼土を確認したⅣＪ・Ｋ－175グリッド周辺のＤ区である。（注：平成９年度の調査において、すでにＡ区、Ｂ区の調査区域が存在するため、今回の調査ではＣ区、Ｄ区とした。）

Ｃ区で検出した遺構は、縄文時代の土器埋設遺構１基と土坑２基のほか、時期不明の土坑２基、カマド状遺構12基、井戸跡１基であり、出土遺物は縄文時代の土器・石器等段ボール箱で18箱分である。

また、Ｄ区で検出した遺構は、時期不明のカマド状遺構７基、土坑５基、井戸跡５基、溝跡２条、小ピット群２カ所である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器が少量あるほか、時期不明の鉄器１点である。以下、時代別、遺構別に記述する。

表２　地区別遺構一覧表

	縄文時代		時期不明（中世以降）					小計
	土器埋設遺構	土坑	土坑	カマド状遺構	井戸跡	溝跡	小ピット群	
Ｃ区	１基	２基	２基	12基	１基			18
Ｄ区			５基	７基	５基	２条	２カ所	21

第１節　検出遺構と出土遺物

１　縄文時代の遺構

（１）土　坑

第６号土坑（ＳＫ－６）（図11）

位置：Ｃ区ＶＫ－182・183グリッドに位置する。

重複：なし。

平面形・規模：直径60cmほどの円形で、深さ12cmと浅い。壁は外側に向かって緩く立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：シルト質のしまりのない黒褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：頸部でやや外反し、口縁部に最大径を有する縄文時代後期前葉の有文深鉢の上半部（28）が、底面付近からまとまって出土した。上半部はほぼ全ての破片が存在し接合率も高く、性格不明であるが、人為的に当土坑内に残されたものと考えられる。残存部全面に幅2～3mmの細い沈線によって、文様が描かれ、口頸部には横長の楕円文が横方向に６単位施される。また体部の三角形状のモチーフは３単位となる。沈線間には1mm程度の非常に小さな節となるRL縄文が充填される。器表面の摩滅が著しいが、僅かに残る良好な器表面には丁寧なミガキとスス状炭化物の付着が確認できる。口径28.5cm・現存部高さは22cm。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

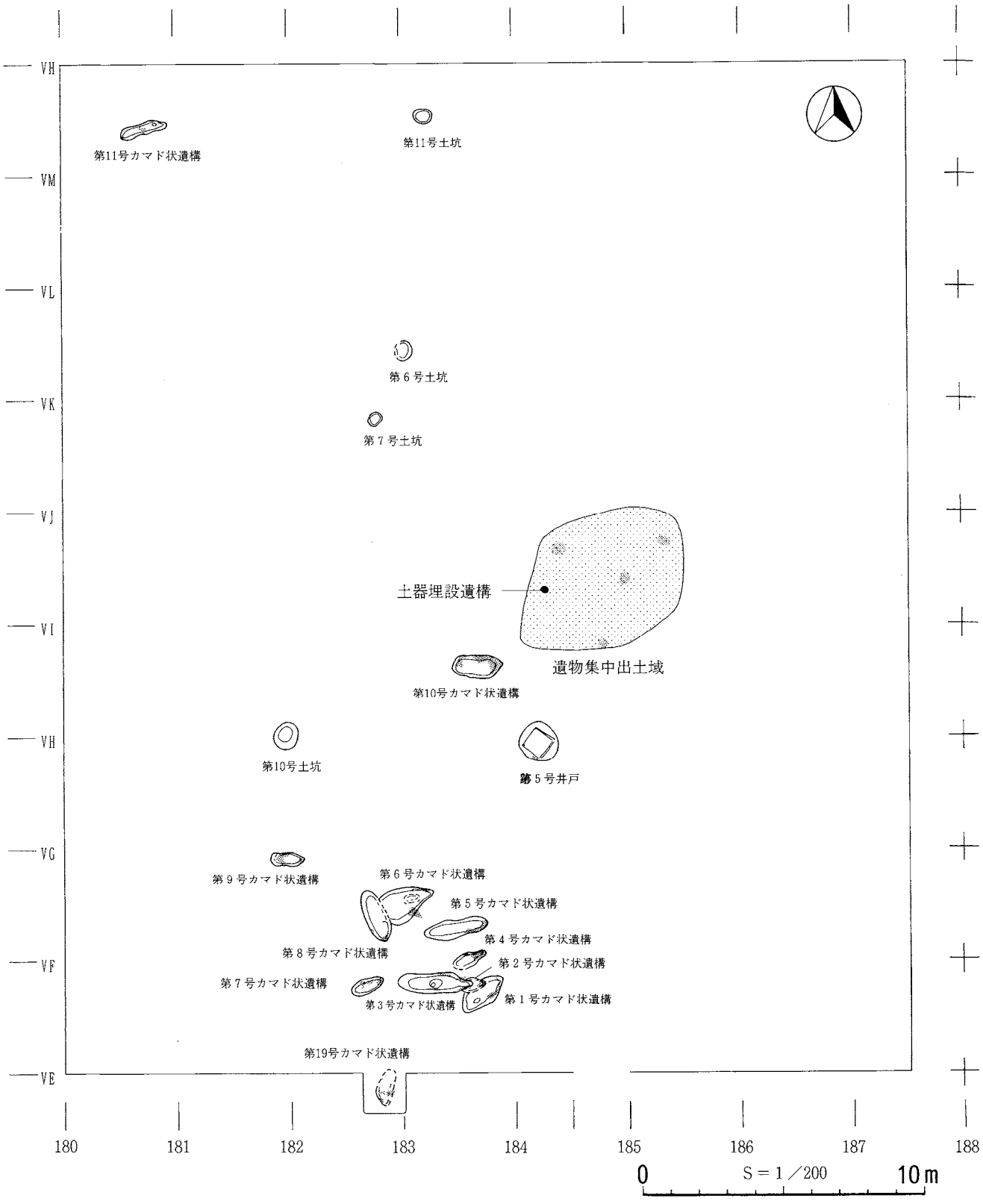


図９　山下遺跡Ｃ区遺構配置図

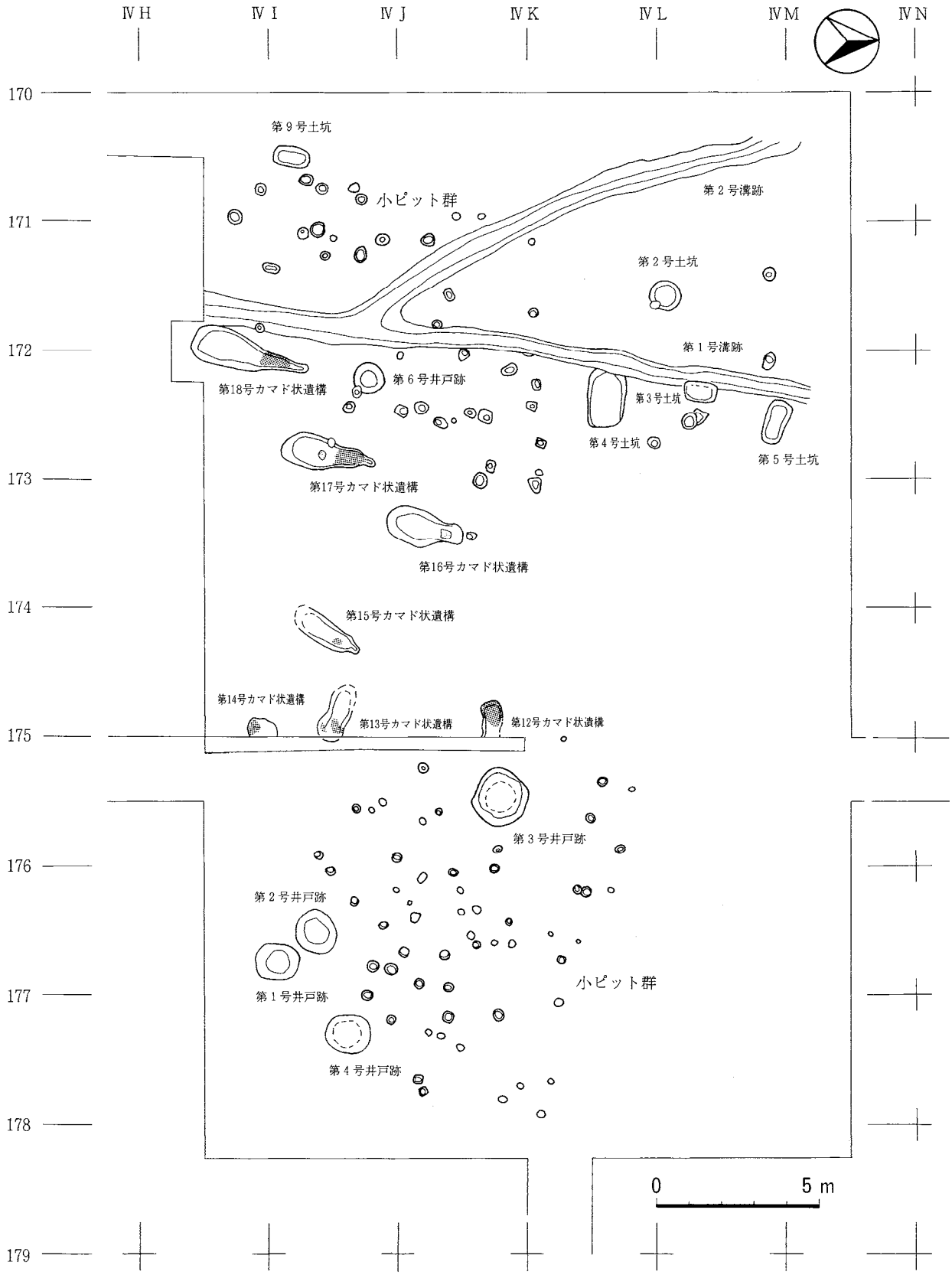


図10　山下遺跡Ｄ区遺構配置図

第７号土坑（ＳＫ－７）（図11）

位置：Ｃ区ＶＪ－182グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸42cm、長軸49cmの隅丸方形で、深さ５cmと浅い。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：小石を多量に含んだ砂質シルトの褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：縄文時代後期前葉と思われる土器が出土した。31は網目状撚糸文(Ｒ)が施される深鉢の一部、32は多軸絡条体(Ｒ)が施される深鉢の体部下半から底部である。32は底部から6～7cmの高さまで無文となり、丁寧なミガキと横方向のナデ調整が施される。

時期：出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。　　（遺物は永嶋　豊、他は畠山　昇）

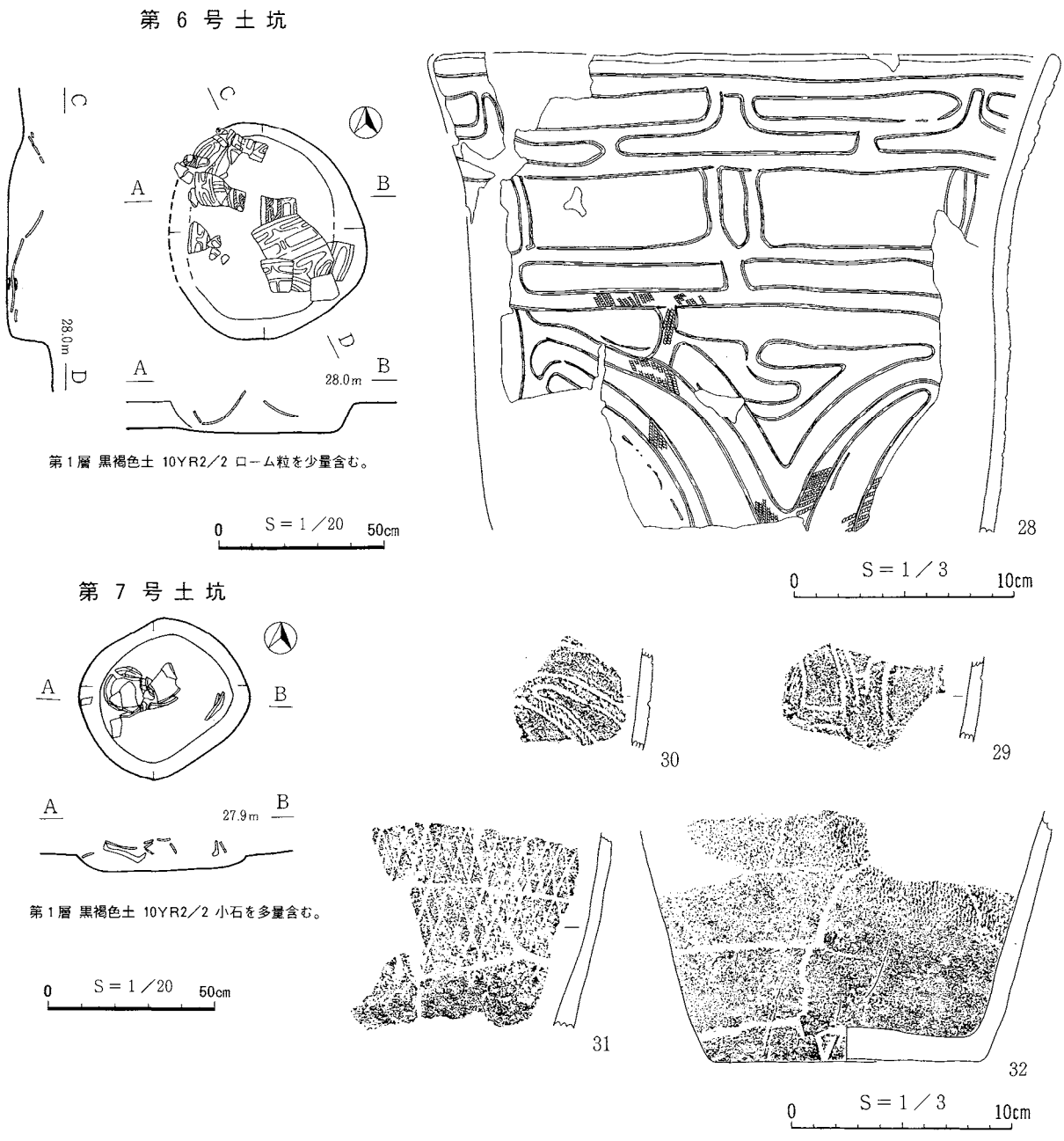


図11　縄文時代の土坑

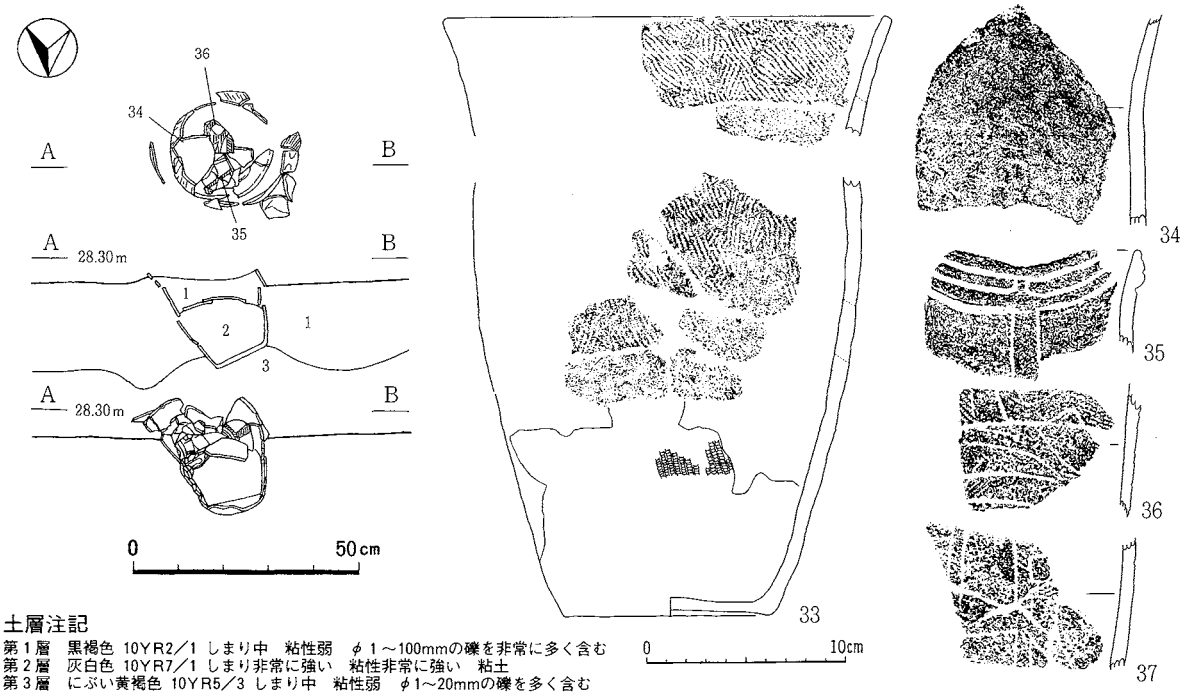
（２）土器埋設遺構（ＳＲ－１）（図12）

ＶＩ－184グリッドにおいて、Ⅲ層除去後、礫を多量に含むＶ層を検出した段階で、土器埋設遺構が検出された。当区からＶＩ－185グリッドにかけてのⅢ層では、縄文時代後期前葉の壷形土器片が散在し、接合作業の結果６個体以上が確認され、当遺構も同時期のものと考えられる(図20)。埋設土器は、確認面から30cm程度の深さで底部が検出され、深鉢形土器の下半部が、やや斜位に埋まっている。当土器埋設遺構には、土器中の底面から10～15cm程に、灰白色の粘土が明らかに人為的に納められていた。その粘土上面に封をするような状態で、埋設土器とは別個体の土器が数片見られた(図12－35～37)。土坑の掘り込みは確認できなった。

埋設土器(33)は、推定口径22.5cm・推定胴部最大径20cm・器高30cm程の頸部で外反気味となる深鉢形土器である。口縁部は僅かに残存し、口縁部～体部下半までRL斜行縄文が施される。体部下半は２次焼成により器表面が脆弱化しており、地文等は確認できない。粘土帯は2～2.5cmであり、外傾接合となる。

埋設土器中の粘土上面で見られた土器は、2個体分が確認され４点を図化している。34は深鉢の頸部と考えられ、文様は見られない。35～37は同一個体と考えられる有文深鉢形土器である。35は大型山形波状口縁の谷間の口頸部に楕円文が見られる。胴部にも楕円文が施され細沈線間にLR縄文が充填されるが、器表面の摩滅のため詳細不明である。幅3mm程度の比較的深い沈線が口頸部に、1～2mmの細沈線が胴部文様に用いられる。細沈線は施文工具の鋭利な先端部を、土器面に垂直に当てて施されている。埋設土器(33)同様外傾接合である。

[小結]ＶＩ－184グリッドの遺物集中区で確認された当遺構は、推定器高30cm・推定口径22.5cmの地文のみが施された深鉢形土器を用いた土器埋設遺構である。土器の器高の約半分以下に灰白色の粘土を充填し、その上面を別個体の有文土器片で封をしたような状態で検出された。他の類例等は検討していないが、周辺から縄文時代後期前葉の壷形土器片が多量に出土しており、埋設土器中の楕円文が施される有文深鉢から十腰内Ⅰ式の古い段階のものと考えられる。　（永嶋　豊）



土層注記
第１層　黒褐色 10YR2／1 しまり中　粘性弱　φ１～100mmの礫を非常に多く含む
第２層　灰白色 10YR7／1 しまり非常に強い　粘性非常に強い　粘土
第３層　にぶい黄褐色 10YR5／3 しまり中　粘性弱　φ1～20mmの礫を多く含む

図12　土器埋設遺構

２　時期不明の遺構

（１）土　坑（図13）

第２号土坑（ＳＫ－２）

位置：Ｄ区ⅣＬ－171グリッドに位置している。

重複：小ピットと重複し、これよりも古い。

平面形・規模：直径90cmの円形で、深さ22cmである。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。

堆積土：黒褐色土の１層だけを確認した。

出土遺物：なし。

第３号土坑（ＳＫ－３）

位置：Ｄ区ⅣＬ－172グリッドに位置している。

重複：第１号溝跡と重複し、これよりも新しい。

平面形・規模：短軸56cm、長軸102cmの長方形で、深さ34cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：黄褐色土の混入が見られる黒褐色土１層のみを確認した。

出土遺物：なし。

第４号土坑（ＳＫ－４）

位置：Ｄ区ⅣＫ－172グリッドに位置している。

重複：第１号溝跡と重複し、これよりも古い。

平面形・規模：西壁の一部を破壊されているが、短軸110cm、長軸180cm（推定）の長方形を呈し、深さ58cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：４層に分けられたが、主体は暗褐色土である。また、第４層は灰黄褐色土であるが、水の影響によると思われる褐色に変色した部分が上部に薄く見られる。

出土遺物：なし。

第５号土坑（ＳＫ－５）

位置：Ｄ区ⅣＬ－172グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸72cm、長軸142cmの長方形で、深さ約10cmである。壁の立ち上がりはやや緩く、底面はほぼ平坦である。

堆積土：黄褐色土をまばらに含んだ黒褐色土の堆積が見られたのみである。

出土遺物：なし。

第９号土坑（ＳＫ－９）

位置：Ｄ区ⅣＩ－170グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸60cm、長軸107cmの長方形で、深さ32cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。
堆積土：セクションは実測していないが、他の土坑と同じく黒褐色土のみの堆積が見られた。
出土遺物：なし。

第10号土坑（ＳＫ－10）
位置：Ｃ区ＶＧ・Ｈ－181・182グリッドに位置する。
重複：なし。
平面形・規模：短軸83cm、長軸90cmの楕円形を呈し、深さ36cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は平坦ではなく、幾分凹面となっている。
堆積土：ローム粒を含む締まりのない暗褐色土の堆積が見られた。
出土遺物：なし。

第11号土坑（ＳＫ－11）
位置：Ｃ区ＶＭ－183グリッドに位置している。
重複：なし。
平面形・規模：短軸50cm、長軸63cmの隅丸長方形を呈し、深さ25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。
堆積土：暗褐色土、黒褐色土の堆積が見られた。
出土遺物：なし。　（畠山　昇）

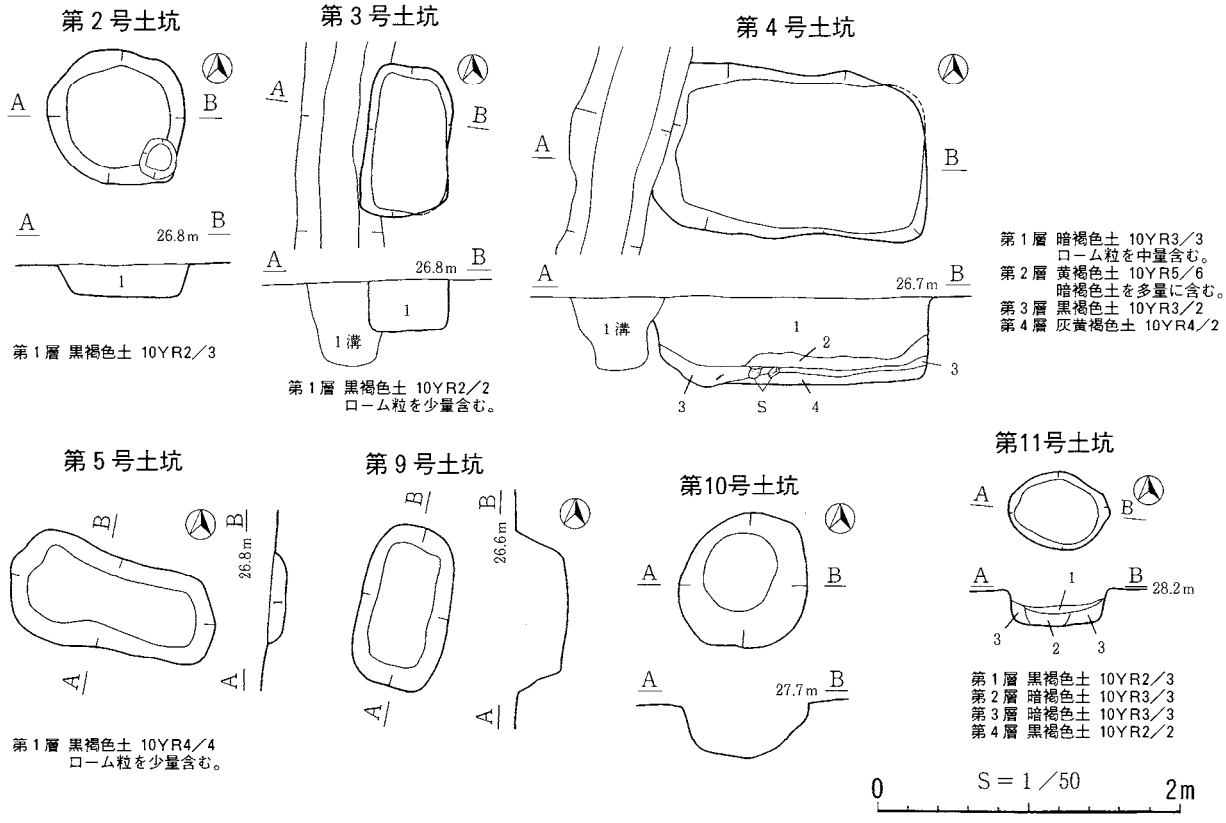


図13　時期不明の土坑

（２）井戸跡（図14）

第１号井戸跡（ＳＥ－１）

位置：Ｄ区ⅣＨ・Ｉ－176グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸112㎝、長軸137㎝の楕円形を呈し、深さ73㎝である。壁はやや急傾斜で立ち上がっている。底面には凹凸が見られた。

堆積土：湧水のために底面まで観察できなかったが、２層まで確認することができた。第１層は黒色土で上部に小礫を多数含んでおり、第２層はローム質の褐色土である。

出土遺物：なし。

第２号井戸跡（ＳＥ－２）

位置：Ｄ区ⅣＩ－176グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：開口部は短軸122㎝、長軸138㎝の楕円形を呈し、深さ約70㎝である。壁は急傾斜の立ち上がりを呈する。底面には凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。

堆積土：湧水のために底面まで観察できなかったが、３層まで確認することができた。底面近くの壁際にローム質の褐色土や締まりのない黒色土が見られるが、大半が第１層の黒褐色土で占められている。また、第１層上部には、焼土が見られる。

出土遺物：覆土上位から、やや大ぶりの刀子（小刀）が１点出土した。柄と刃部の一部が欠損している。折れた部分の観察からは３～４層の鋼の層離が見られ、平安時代のものとは異なった印象を受ける。

第３号井戸跡（ＳＥ－３）

位置：Ｄ区ⅣＪ－175グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：開口部は短軸160㎝、長軸173㎝の楕円形を呈する。ここから、20㎝ほど下の部分では、隅丸方形状に見られるが、これが本来の形状を示しているものと思われる。開口部が崩落した結果、楕円形になったものと考えられる。なお、底面の平面形は直径90㎝の円形を呈している。深さ108㎝である。壁は急傾斜で立ち上がるが、幾分凹凸が見られる。また、底面にも凹凸が見られ、平坦ではない。

堆積土：９層に分けられたが、ほとんど黒色土と黒褐色土とで占められている。自然堆積と思われる。

出土遺物：なし。

第４号井戸跡（ＳＥ－４）

位置：Ｄ区ⅣＩ－177グリッドに位置している。

重複：なし。

平面形・規模：短軸120cm、長軸135cmの楕円形を呈し、深さ約70cmである。壁は急傾斜で立ち上がっている。湧水のため、底部の状況は不明である。

堆積土：底部付近は不明であるが、４層まで確認した。黒褐色土と黄褐色土の堆積が見られた。

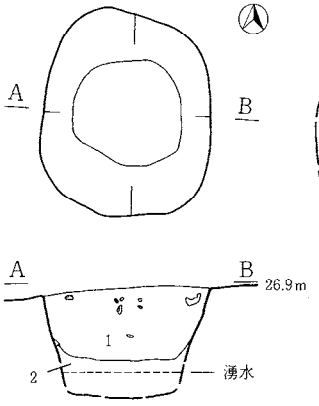
出土遺物：なし。　（畠山　昇）

第５号井戸跡（ＳＥ－５）

位置：Ｃ区ⅣＧ～Ｈ184グリッドに位置している。

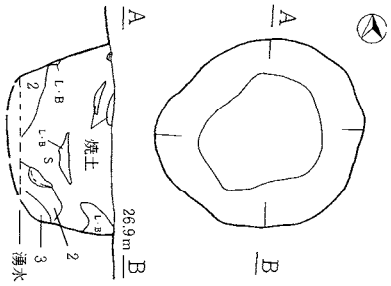
重複：なし

第１号井戸跡



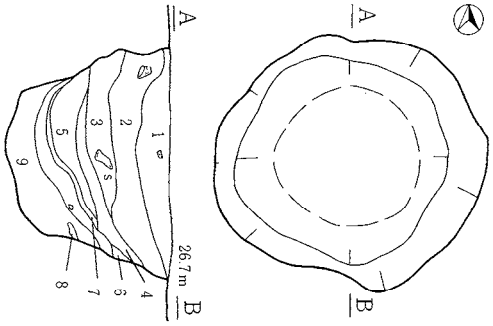
第１層 黒色土 10YR2／1 細礫を含む。
第２層 褐色土 10YR4／6 ローム質。

第２号井戸跡



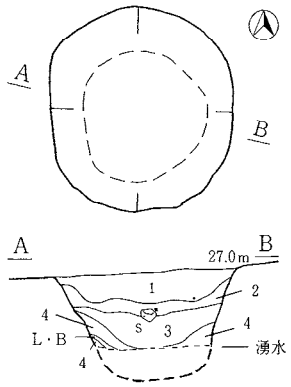
第１層 黒褐色土 10YR2／2
焼土、ローム塊を含む。
第２層 褐 色 土 10YR4／4

第３号井戸跡



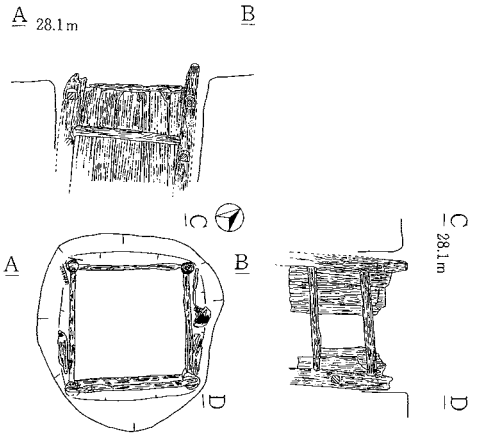
第１層 黒褐色土 10YR3／1 炭化物粒、ローム粒を微量含む。
第２層 黒褐色土 10YR3／1 炭化物粒、焼土を微量含む。
第３層 黒褐色土 10YR3／1
第４層 黒 色 土 10YR2／1
第５層 黒 色 土 10YR2／1
第６層 にぶい黄褐色土 10YR5／4
第７層 黒 色 土 10YR2／1
第８層 灰 色 土 10YR5／1 粘土質。
第９層 黒 色 土 10YR2／1

第４号井戸跡

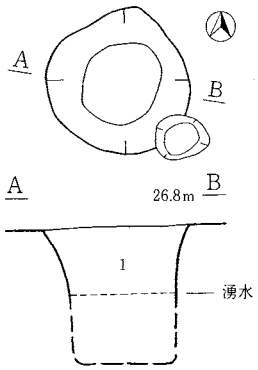


第１層 黒褐色土　10YR2／2 ローム粒を少量含む。
第２層 にぶい黄橙色土 10YR6／4 黒褐色土を多量に含む。
第３層 黒 色 土　10YR2／1
第４層 明黄褐色土 10YR6／6

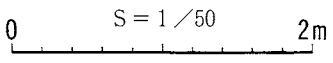
第５号井戸跡



第６号井戸跡



第１層 黒褐色土 10YR2／2



第２号井戸跡出土鉄器

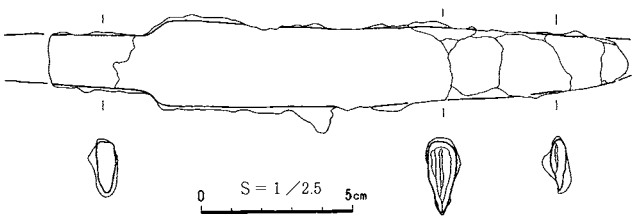


図14　井　　戸　　跡

平面形・規模：長軸140cm、短軸130cmの隅丸方形または不正円形を呈し、深さは約65cmである。底面はほぼ平坦で、一辺90～100cmの隅丸方形状と考えられる。掘り方は井戸枠付近で垂直に落ち込むが、開口部付近で外側に開く。

井戸枠：井戸枠は木組方形縦板組隅柱横桟型である。掘り方一杯に一辺80～90cmの方形井側を据える。井筒は無い。井側の四隅に径10～13cmの丸材を用いた柱を立て、一辺約5cmの角材・最上部では径約４cmの丸材を臍穴に差込んで固定している。横桟の外側に幅10～15cm・厚さ1～3cmの縦板を各辺5～7枚づつ2重にあてているが、釘は使用していない。臍穴は4×6、5×5、5×6cmの長方形・正方形となる。丸材・横桟にはチョウナと思われる加工痕が残る。

堆積土：粗砂を含んだ暗緑灰色粘質土。

出土遺物：なし。　（永嶋　豊）

第６号井戸跡（ＳＫ－１）

位置：Ｄ区ⅣＩ－172グリッドに位置する。

重複：小ピットに切られている。

平面形・規模：平面形は直径98cmのほぼ円形を呈している。湧水のため底面まで調査できなかったが、ボーリング棒による探査では、深さ約90cmであった。壁は垂直に立ち上がり、開口部近くでやや広がる。底面の状況は不明である。

堆積土：確認面下50cmほどの深さまで調査し、この範囲では黒褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。　（畠山　昇）

（３）カマド状遺構

第１号カマド状遺構（ＳＮ－１）（図15）

位置と確認：Ｃ区南側ＶＥ－183グリッドで、南北に連なった焼土を確認した。調査の結果、３基のカマド状遺構を検出し、東から順に第１号、２号、３号（ＳＮ－１～３）とした。

重複：第２号・第３号カマド状遺構と重複し、本遺構がもっとも古い。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸90cm、長軸１ｍ80cm、深さ10cmである。残存状況は悪いが、確認時に見られた明褐色土や赤褐色土、黄褐色土等で構成される部分が燃焼部と思われる。また、この部分の南西側に直径20～25cm、深さ５cmの小ピットが付設されており、この辺りまでが燃焼部と考えられる。燃焼部の規模は、幅90cm、長さ１ｍ30cm前後と推定される。主軸方位は、Ｎ－55°－Ｅ付近と思われる。

堆積土：底面直上に炭化物がレンズ状に見られ、上部に焼土粒や炭化物を含む黒色土、褐色土及び焼土層が見られた。

出土遺物：なし。

第２号カマド状遺構（ＳＮ－２）（図15）

位置と確認：Ｃ区ＶＥ－183グリッドに位置している。

重複：第１号・第３号カマド状遺構と重複している。本遺構は、第１号カマド状遺構より新しく、第３号カマド状遺構より古い。
平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は、短軸60cm、長軸80cm、深さ10cm前後である。確認時に見られた焼土や明褐色土で構成される馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられ、中央に見られた炭化物の密集部分がその開口部と思われる。主軸方位は、Ｎ－90°－Ｅ付近であり、第３号カマド状遺構とほぼ同じ方向と推定される。
堆積土：褐色土、炭化物、明褐色土、黒色土の順に堆積した状況が見られた。褐色土及び明褐色土は本遺構の構築土である可能性があり、黒色土は崩落後の堆積である可能性が考えられる。
出土遺物：なし。

第３号カマド状遺構（ＳＮ－３）（図15）
位置：Ｃ区ＶＥ－183グリッドに位置している。
重複：第１号・第２号カマド状遺構と重複し、本遺構がもっとも新しい。
平面形・規模：平面形は長円形を呈し、東端部が一段狭くなって突き出ている。この突き出た部分は煙道部で、東から煙道部、燃焼部、焚口部が一直線に並ぶ構造である。煙道部を含めた長軸は２ｍ67cm、カマド本体の長軸は２ｍ30cm、主軸方位は、Ｎ－91°－Ｅである。
本体中央の底面には短軸30cm、長軸50cm、深さ８cmの楕円形の小ピットが付設されているが、この辺りから東側の部分が燃焼部、西側が焚口部に相当すると考えられる。燃焼部は幅67cm、長さ１ｍ20～30cm、深さ17cmである。確認時に見られた焼土は燃焼部の壁か崩落土、炭化物の密集した部分は開口部と思われる。焚口部は幅55cm、長さ約１ｍ前後である。深さは５cm前後であるが、西側では底面から遺構確認面へと次第に高くなっており、壁と底面との境界は不明瞭である。底面は東・西端から燃焼部の小ピット付近に向けて傾斜しており、この部分でもっとも深くなっている。煙道部は幅22cm、長さ40cm前後で、底面は一段高くなっている。
堆積土：全体が黒褐色土で覆われているが、燃焼部の底面直上には、炭化物の層が数cmの厚さで見られ、その上に天井部崩落土の焼土層が見られた。
出土遺物：なし。

第４号カマド状遺構（ＳＮ－４）（図15）
位置：Ｃ区の南側、ＶＥ・Ｆ－183グリッドで、不整形の焼土を確認した。
重複：なし。
平面形・規模：燃焼部の一部と煙道部しか検出できなかったため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は、短軸48cm、長軸１ｍ25cm、深さ７cmである。東端の一段狭くなって突き出ている部分が煙道部と考えられ、幅23cm、長さ35cmである。壁と底面との境界は不明瞭で、全体にやや窪んだ状況である。主軸方位は、Ｎ－68°－Ｅと推定される。
堆積土：底面には炭化物の層が見られ、上部に焼土や明褐色土が堆積している。
出土遺物：なし。

第５号カマド状遺構（ＳＮ－５）（図15）

位置：Ｃ区南側のＶＦ－183グリッドで、焼土と褐色土で構成される馬蹄形状の部分を確認した。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は長円形を呈し、短軸45～68cm、長軸２ｍ20cm、深さ最大８cmである。確認状況及び堆積状況から東側が燃焼部、西側が焚口部と考えられる。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁、円形の部分が開口部と考えられる。燃焼部は幅45cm、長さ１ｍほどの規模である。焚口部は幅68cm、長さ１ｍ20cmほどの規模である。壁は内湾気味に立ち上がる。底面は、中央やや東よりのところで段を持ち、燃焼部が一段低くなっている。煙道部は検出できなかったが、東端にあったものと推定される。主軸方位は、Ｎ－80°－Ｅである。

堆積土：燃焼部では、壁や天井部の崩落土や灰や炭化物の堆積が見られ、焚口部では黒褐色土や褐色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

第６号カマド状遺構（ＳＮ－６）（図16）

位置：Ｃ区南側のＶＦ－182・183グリッドで焼土を確認し、２基のカマド状遺構を検出した。

重複：第８号カマド状遺構と重複し、これよりも古い。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸95cm、長軸１ｍ80cm、深さ25cmの長円形を呈している。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられることから、東側が燃焼部、西側が焚口部と思われる。燃焼部は幅60cm、長さ１ｍ前後の規模と思われる。燃焼部の断面はすり鉢状で、底面から外側に向かって内湾気味に立ち上がる。焚口部は幅95cm、長さは不明である。煙道部は東端に突き出た部分と思われ、底面が一段高くなっている。底面は焚口部から燃焼部に向かって傾斜し、燃焼部で最大20cmを計る。主軸方位は、Ｎ－68°－Ｅである。

堆積土：覆土の大半が暗褐色土であるが、燃焼部の底面直上には橙色の焼土と黒褐色土の混合土及び炭化物の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

第７号カマド状遺構（ＳＮ－７）（図16）

位置：Ｃ区ＶＥ－182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部付近のみの検出であるため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸50cm、長軸１ｍ20cm、深さ８cmである。

堆積土：焼土や暗褐色土、褐色土、炭化物の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

第８号カマド状遺構（ＳＮ－８）（図16）

位置：Ｃ区南側のＶＦ－182・183グリッドで焼土を確認し、２基のカマド状遺構を検出した。

重複：第６号カマド状遺構と重複し、これよりも新しい。

平面形・規模：全体の形状・規模は不明であるが、検出した部分の規模は短軸76cm、長軸１ｍ83cm、深さ25cmの長楕円形を呈している。確認時に見られた馬蹄形状の部分が燃焼部の壁と考えられることから、南側が燃焼部、北側が焚口部と思われる。燃焼部は幅60cm、長さ不明、焚口部は幅76cm、長さ１ｍ前後である。燃焼部の断面はすり鉢状で、壁は内湾するように立ち上がる。底面は焚口部でもっとも深くなっており、深さ25cmである。煙道部は検出されなかった。主軸方位は、Ｎ－156°－Ｅである。

堆積土：覆土の大半が暗褐色土、黒褐色土であり、直上には炭化物の堆積層が見られた。

出土遺物：なし。

第９号カマド状遺構（ＳＮ－９）（図16）

位置：Ｃ区の南側ＶＦ－181・182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部のみの検出のため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸50cm、長軸１ｍ10cm、深さ７cmである。主軸方位はＮ－93°－Ｅ付近と推定される。

堆積土：底面直上に炭化物、その上に黒褐色土、褐色土、焼土等が堆積している。

出土遺物：なし。

第10号カマド状遺構（ＳＮ－10）（図16）

位置と確認：Ｃ区の中央付近、ＶＨ－183グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した

重複：なし。

平面形・規模：燃焼部のみの検出のため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸80cm、長軸１ｍ70cm、深さ14cmである。確認状況及びセクション観察から、西側に焚口部、東側に煙道が付設されていたと考えられることから、主軸方位はＮ－93°－Ｅと推定される。

堆積土：底面直上に炭化物を多量に含む黒色土や焼土の層が見られるが、これは東側に顕著である。燃焼部の壁や天井部が崩落した状況と思われる。

出土遺物：なし。

第11号カマド状遺構（ＳＮ－11）（図17）

位置：Ｃ区の北西、ＶＭ－180グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

平面形・規模：残存状況はあまり良くないが、燃焼部から焚口部にかけての部分と思われる。検出した部分は短軸40～43cm、長軸１ｍ63cm、深さ12cmの長円形を呈している。また、中央からやや西よりの壁がやや狭まっている辺りから東側が燃焼部、西側が焚口部と考えられる。燃焼部の底面には直径15cm、深さ２cmの小ピットが掘り込まれ、炭化物を主体とした土が堆積していた。底面は西側から次第に低くなり、燃焼部のピットがある辺りでもっとも深くなっている。主軸方位はＮ－74°－Ｅである。

堆積土：黒褐色土が主体であるが、この中に含まれている焼土粒や炭化物は東側に顕著である。また、

底面や底面直上に見られる炭化物の堆積も東側に顕著である。
出土遺物：なし。

第12号カマド状遺構（ＳＮ－12）（図17）
位置と確認：Ｄ区の中央Ⅳ Ｊ －174グリッドで、東側が開口した馬蹄形状の焼土を確認した。
平面形・規模：燃焼部から焚口部にかけての部分しか検出できなかったため、全体の平面形・規模は不明である。検出した部分は、短軸62㎝、長軸116㎝、深さ８㎝前後で浅く溝状に掘られ、東西方向に延びている。壁は緩やかに立ち上がり、底面には若干の凹凸がある。焚口部は燃焼部の東側に付設されているが、大半が削平されている。主軸方位は、Ｎ－82°－Ｗである。
堆積土：上部と下部に焼土や焼土を含む黄褐色土や暗褐色土、黒褐色土が見られる。焼土は壁や天井部の崩落土と思われる。
出土遺物：なし。

第13号カマド状遺構（ＳＮ－13）（図17）
位置と確認：Ｄ区の南側Ⅳ Ｉ －174グリッドに位置している。試掘調査時に設けたトレンチの壁面に焼土を確認し、拡張したところ馬蹄形状の焼土と暗褐色土の落ち込みを確認した。
平面形・規模：燃焼部から焚口部にかけての部分しか検出できなかったため、全体の形状・規模は不明である。検出した部分の規模は短軸60～82㎝、長軸190㎝で、中央付近がやや狭くくびれている。このくびれた辺りから東側が燃焼部、西側が焚口部である。壁は外傾して緩やかに立ち上がる。深さは燃焼部で15㎝、焚口部で10㎝であり、燃焼部がやや深い。主軸方位はＮ－116°－Ｅである。
堆積土：焼土を含んだ暗褐色土や黒褐色土が見られる。遺構廃棄後の堆積と思われる。
出土遺物：なし。

第14号カマド状遺構（ＳＮ－14）（図17）
位置と確認：Ｄ区南側Ⅳ Ｉ －174グリッドに位置している。試掘調査時に設けたトレンチの壁面に焼土を確認、拡張したところ本遺構を検出した。しかし、大部分が削平のため失われ、焼土のみが残されていた。
平面形・規模：確認面で検出した焼土は、燃焼部の部分と考えられる。上部がほとんど削平されていることから、全体の形状及び規模は不明である
堆積土：確認調査時のトレンチでの確認では、焼土を含んだ褐色土が見られた。
出土遺物：なし。

第15号カマド状遺構（ＳＮ－15）（図17）
位置と確認：Ｄ区南側Ⅳ Ｉ －174グリッドで、南西部が開口した馬蹄形状の焼土と黒褐色土の落ち込みを検出した。
平面形・規模：平面形は長円形を呈し、北東から南西にかけて、溝状に掘り込まれている。北東側から煙道部、燃焼部、焚口部が一直線に並ぶ構造であり、煙道部を含めた長軸は2ｍ30㎝、カマド本体

の長軸は２ｍ５cm、主軸方位はＮ－30°－Ｅである。

燃焼部は幅65cm、長さ70cm、深さ14cm前後である。壁は外傾して急に立ち上がるが、一部袋状に掘り込まれている部分がある。焚口部は幅70cm、長さ140cm、深さ10cm前後である。壁は外傾して緩く立ち上がるが、南西部の末端では確認面へ向かってなだらかに立ち上がり、壁と底面との境界は不明瞭である。底面は、焚口部から燃焼部に向かってしだいに深くなり、火床面で最大の深さとなる。煙道部は幅22cm、長さ25cm前後の小さな造りとなっている。

堆積土：燃焼部付近では焼土を含んだ黒褐色土や褐色土がみられ、壁の崩落と思われるものもある。廃棄後の堆積と思われる。

出土遺物：なし。

第16号カマド状遺構（ＳＮ－16）（図18）

位置：Ｄ区Ⅳ Ｊ－173グリッドで、馬蹄形状の焼土と黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模：平面形はヒョウタンに似た形状で、北寄りの部分がくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部であり、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれらの施設が一直線に並ぶ構造であり、煙道部を含めた全体の長軸は2ｍ83cm、カマド本体の長軸は2ｍ40cm、主軸方位はＮ－12°－Ｅである。

燃焼部は幅60cm、長さ70cmの楕円形を呈し、深さ約20cmである。壁は袋状に内湾してつくられている。確認時に検出した馬蹄形状の焼土は壁の中程の部分と考えられ、南側の開口部分の直下には、板状の大礫と柱状礫が出土している。このうち板状礫はカマド本体の構成材か、支脚として利用された可能性が考えられる。なお、この上部には天井部と考えられる焼土の堆積が見られ、下部は焼けて火床面を形成している。大礫の出土した部分の壁は幅が狭くなっていて、この辺りから南側の部分が焚口部である。焚口部は幅1ｍ12cm、長さ1ｍ70cmの楕円形を呈し、深さ15cm前後である。東西の壁は、緩く外傾して立ち上がるが、南壁では底面との境が不明瞭である。底面は焚口部から燃焼部に向かって傾斜し、火床面の辺りでもっとも深くなる。燃焼の北側には幅20cm、長さ31cmの小さな煙出孔がつくられている。

堆積土：暗褐色土や黒褐色土が主体であり、燃焼部付近には炭化物が多い。廃棄後の堆積と思われる。

出土遺物：板状の大礫と柱状節理をもった礫（流紋岩）が出土している。

第17号カマド状遺構（ＳＮ－17）（図18）

位置と確認：Ｄ区南側のⅣＩ－172グリッドで、半円状の焼土と暗褐色土の落ち込みを確認した。

重複：西壁の中央で、柱穴状の小ピットと重複しているが、これよりも古い。

平面形・規模：平面形はヒョウタンに似た形状で、北寄りの部分がややくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部で、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれらの施設がほぼ一直線に並ぶ構造で、煙道部を含めた長軸は２ｍ95cm、カマド本体の長軸は２ｍ55cm、主軸方位はＮ－12°－Ｅである。

燃焼部は幅55cm、長さ85cm前後の楕円形を呈し、深さ25cmである。壁は袋状に内湾して掘り込まれている。確認面で検出した半円状の焼土は、底部近くの部分と考えられ、その直下に火床面が検出さ

れた。焚口部は幅98cm、長さ１ｍ70cm前後の楕円形を呈し、深さ10～20cmである。東西の壁は緩く外傾するが、南側では底面がしだいに高くなって確認面へ向かって延びており、壁と底面との境が不明瞭である。底面は焚口部から燃焼部へ向かって傾斜し、燃焼部と煙道部の境界付近でもっとも深くなる。燃焼部の北側には幅20cm、長さ32cmの小さな煙出孔がつくられている。

堆積土：焼土と黒褐色土が主体であり、廃棄後の堆積と思われる。火床面上部及び前庭部には炭化物の堆積が薄く見られた。

出土遺物：中央部の底面から、板状の礫が出土した。

第18号カマド状遺構（ＳＮ－18）（図18）

位置と確認：Ｄ区の南西ⅣＨ・Ｉ－171・172グリッドで、焼土が混入した暗褐色土と黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模：平面形はヒョウタンに似た形状で、北寄りの部分がややくびれている。このくびれた部分から北側が燃焼部、南側が焚口部で、煙道部は燃焼部の北側に付設されている。本遺構はこれらの施設が一直線に並ぶ構造である。煙道部を含めた全体の長軸は３ｍ60cm、カマド本体の長軸は約３ｍ05cm、主軸方位はＮ－15°－Ｅである。

燃焼部は幅55cm、長さ約１ｍの楕円形で、深さ20cmである。壁は袋状に内湾して掘り込まれており、底面は火床面を形成している。焚口部は最大幅が１ｍ20cm、長さ約２ｍ15cmの台形状を呈し、深さ17cmである。壁は外傾して緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、焚口部から燃焼部へとわずかに傾斜している。燃焼部の北側には幅25cm、長さ40cmの小さな煙出孔がつくられている。

堆積土：３層に分けられたが、ほとんど暗褐色土が主体である。底面上には炭化物を多量に含んだ黒褐色土が広く見られた。

出土遺物：覆土から、縄文時代のＵフレイクが１点出土した。

第19号カマド状遺構（ＳＮ－19）（図18）

位置：Ｃ区ＶＤ－182グリッドで焼土を確認し、本遺構を検出した。

重複：なし。

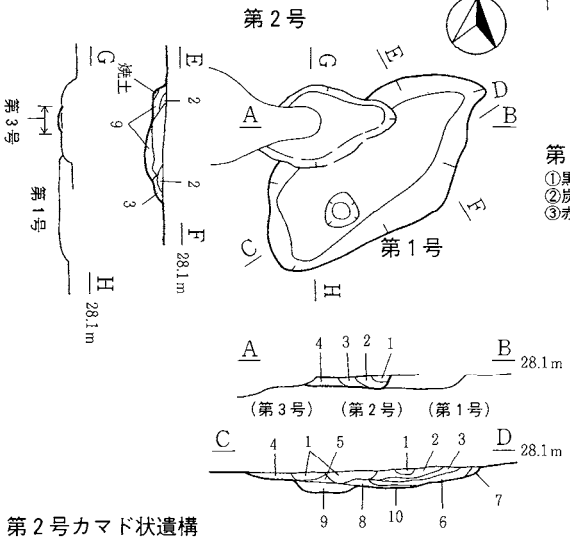
平面形・規模：部分的な確認のため、全体の規模は不明である。確認した部分は焼土のあり方から燃焼部付近と思われ、短軸が54cm、長軸が80cm以上である。ほぼ南北方向に主軸を持つものと思われる。

堆積土：焼土粒を含む黒褐色土と焼土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

（畠山　昇）

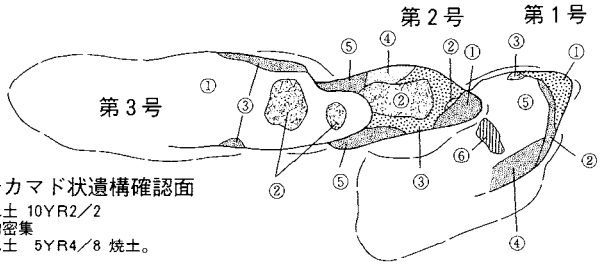
第1号・第2号カマド状遺構



第2号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2 焼土を含む。
第2層 明褐色土 7.5YR5／6
第3層 炭化物層
第4層 褐 色 土 7.5YR4／6

第1号～第3号カマド状遺構の確認状況



第3号カマド状遺構確認面

①黒褐色土 10YR2／2
②炭化物密集
③赤褐色土　5YR4／8 焼土。

第2号カマド状遺構確認面

①赤褐色土　5YR4／8
②炭化物密集
③明褐色土 7.5YR5／6 黒褐色土を含む。
④褐 色 土 7.5YR4／4
⑤橙 色 土 7.5YR6／6

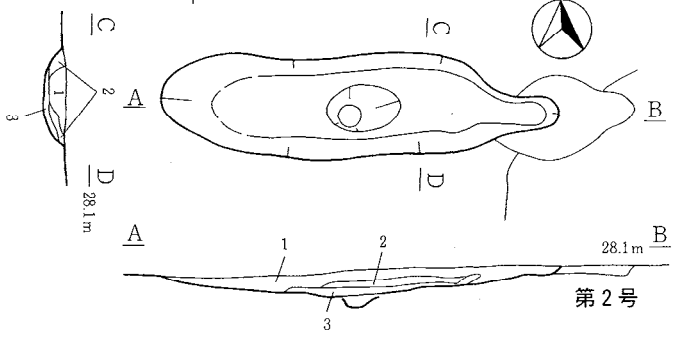
第1号カマド状遺構確認面

①明褐色土 7.5YR5／6 炭化物含む。
②赤褐色土　5YR4／8 焼土。炭化物を多量に含む
③炭化物密集
④赤褐色土　5YR4／8 暗褐色土を多量に含む。
⑤黒褐色土 10YR2／2
⑥明褐色土 10YR6／6 黒褐色土を含む。

第1号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2
第2層 赤褐色土　5YR4／8
第3層 褐 色 土　10YR4／6
第4層 黒 色 土　10YR2／1
第5層 黒 色 土　10YR2／1
第6層 炭化物層
第7層 極暗褐色土 7.5YR3／4
第8層 黒褐色土　10YR2／3 焼土を含む。
第9層 炭化物層
第10層 明黄褐色土 10YR6／6

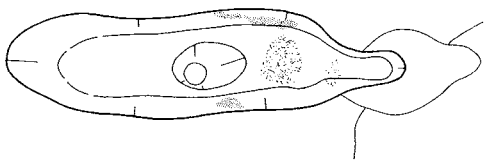
第3号カマド状遺構



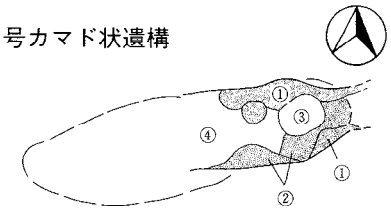
第3号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2
第2層 暗赤褐色土 5YR3／6
第3層 炭化物層 焼土塊含む。

確認状況と掘り方の合成図



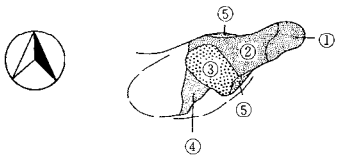
第5号カマド状遺構



確認状況

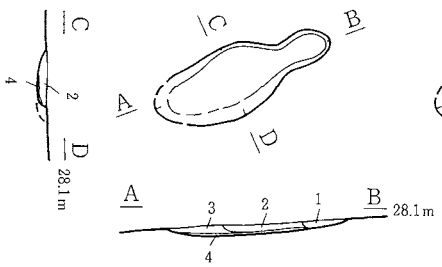
①褐 色 土 7.5YR4／6
②橙 色 土 7.5YR6／6
③暗褐色土　10YR3／2
④黒褐色土　10YR2／3

第4号カマド状遺構



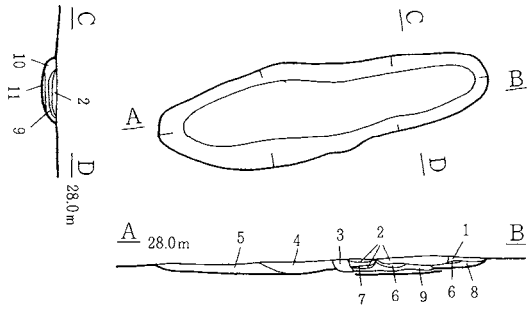
確認状況

①明褐色土 7.5YR5／6 焼土
②橙 色 土 7.5YR6／6 焼土
③明褐色土 7.5YR5／6
④褐 色 土 7.5YR4／6
⑤炭化物密集



第4号カマド状遺構

第1層 明褐色土 7.5YR5／6 焼土
第2層 橙 色 土 7.5YR6／6 焼土
第3層 明褐色土 7.5YR5／6
第4層 炭化物密集



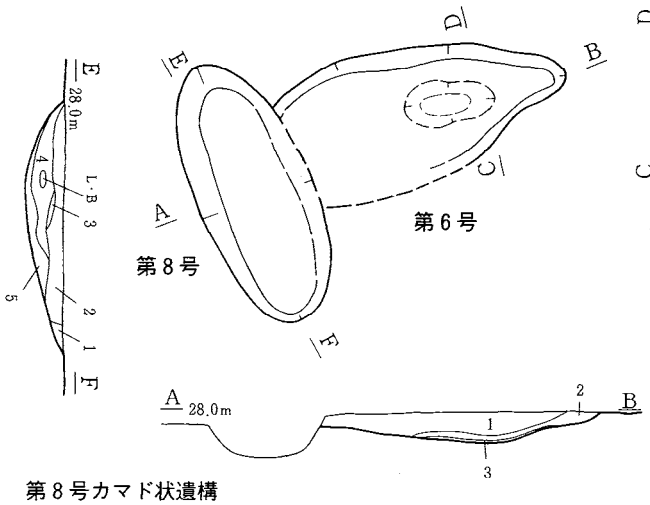
第5号カマド状遺構

第1層 橙 色 土 7.5YR6／6 黒褐色土を多量に含む。
第2層 暗褐色土　10YR3／2
第3層 黒褐色土　10YR3／2 焼土を少量含む。
第4層 黒褐色土　10YR3／2
第5層 褐 色 土　10YR2／3
第6層 灰黄褐色土 10YR4／2 灰。
第7層 明褐色土 7.5YR5／8
第8層 褐 色 土 7.5YR4／6
第9層 明赤褐色土　5YR5／8 炭化物を含む。
第10層 褐 色 土 7.5YR4／6
第11層 黒 色 土　10YR1.7／1 炭化物を薄く含む。

0　S＝1／50　2m

図15　第1号～第5号カマド状遺構

第６号・第８号カマド状遺構



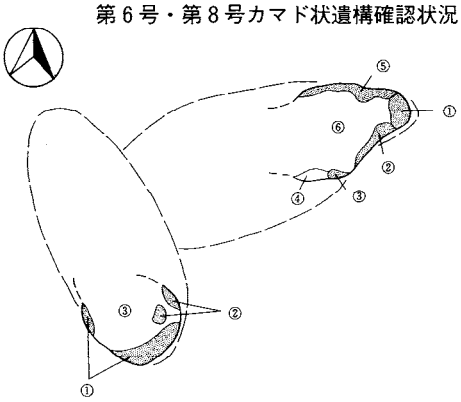
第８号カマド状遺構

第１層 橙 色 土 7.5YR6／6
第２層 暗褐色土 10YR3／4
第３層 黒褐色土 10YR3／2
第４層 黒褐色土 10YR2／2
第５層 暗褐色土 10YR3／3 炭化物を多量に含む。

第６号カマド状遺構

第１層 暗褐色土 10YR3／4 焼土粒を微量含む。
第２層 橙色土5YR6／6 ＋ 黒褐色土10YR3／2 焼土主体
第３層 炭化物層

第６号・第８号カマド状遺構確認状況



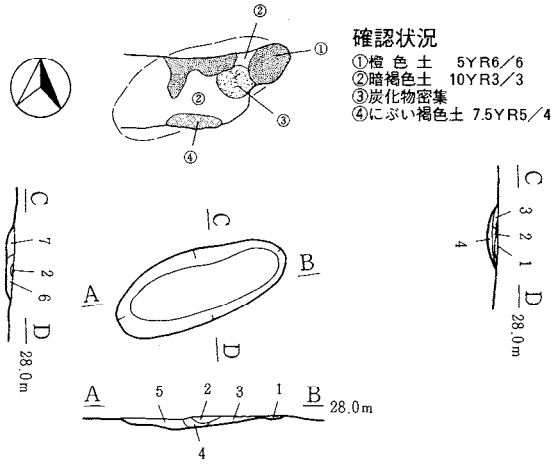
第８号カマド状遺構確認面

①橙 色 土 7.5YR6／6
②明褐色土 7.5YR5／6
③暗褐色土 10YR3／4

第６号カマド状遺構確認面

①にぶい褐色土 7.5YR5／4
②赤褐色土 5YR4／4
③橙 色 土 7.5YR6／6
④黒褐色土 7.5YR3／2
⑤橙色土5YR6／6 ＋ 黒褐色土10YR3／2
⑥暗褐色土 10YR3／4

第７号カマド状遺構

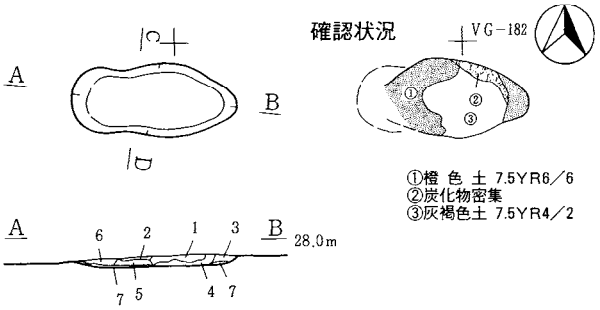


確認状況
①橙 色 土 5YR6／6
②暗褐色土 10YR3／3
③炭化物密集
④にぶい褐色土 7.5YR5／4

第７号カマド状遺構

第１層 橙 色 土 5YR6／6
第２層 暗褐色土 10YR3／3
第３層 炭化物主体
第４層 褐 色 土 10YR4／4
第５層 橙 色 土 5YR6／6
第６層 にぶい褐色土 7.5YR5／4
第７層 橙 色 土 5YR6／6

第９号カマド状遺構

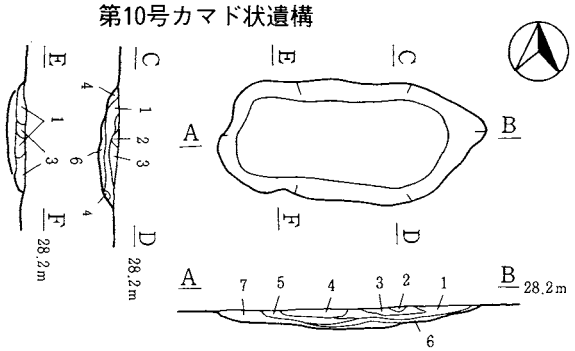


①橙 色 土 7.5YR6／6
②炭化物密集
③灰褐色土 7.5YR4／2

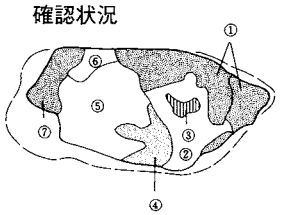
第９号カマド状遺構

第１層 黒褐色土 10YR2／3
第２層 暗褐色土 10YR3／4
第３層 褐 色 土 7.5YR4／6 焼土を多量含む。
第４層 黒褐色土 10YR3／4 炭化物を多量含む。
第５層 褐 色 土 7.5YR4／6 焼土を多量含む。
第６層 黒 色 土 10YR1.7／1
第７層 炭化物層

第10号カマド状遺構



確認状況



①明赤褐色土 5YR5／6
②黒褐色土 10YR2／2
③にぶい黄褐色土 10YR5／4
④褐 色 土 7.5YR4／6
⑤暗褐色土 10YR3／4
⑥黒褐色土 10YR3／2
⑦橙 色 土 5YR6／6

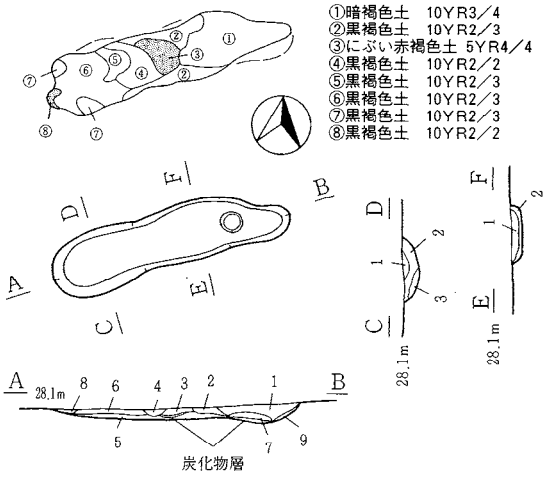
第10号カマド状遺構

第１層 明赤褐色土 5YR5／6 焼土
第２層 にぶい黄褐色土 10YR5／4
第３層 黒褐色土 10YR2／2
第４層 暗褐色土 10YR3／4
第５層 暗褐色土 10YR3／4
第６層 黒 色 土 10YR1.7／1 炭化物主体
第７層 黒褐色土 10YR2／3

0　S＝1／50　2m

図16　第６号～第10号カマド状遺構

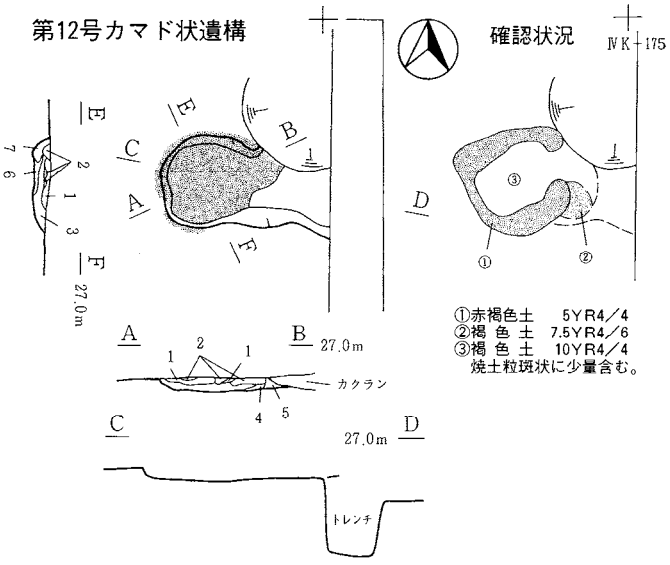
第11号カマド状遺構



第11号カマド状遺構

第1層 暗褐色土 10YR3／4 細礫含む。
第2層 黒褐色土 10YR2／3 焼土、炭化物を含む。
第3層 にぶい赤褐色土 5YR4／4 焼土、炭化物を含む。
第4層 黒褐色土 10YR2／2 焼土粒、炭化物を含む。
第5層 黒褐色土 10YR2／3
第6層 黒褐色土 10YR2／3 焼土粒、炭化物を含む。
第7層 暗褐色土 10YR3／4
第8層 黒褐色土 10YR2／2 炭化物を含む。
第9層 黒褐色土 10YR3／2

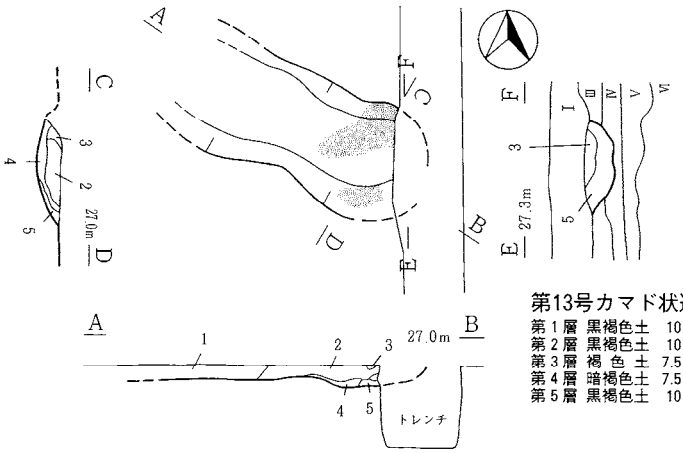
第12号カマド状遺構



第12号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2 炭化物粒、焼土粒を少量含む。
第2層 褐 色 土　7.5YR4／6 焼土。
第3層 にぶい黄褐色土 10YR4／3
第4層 褐 色 土　7.5YR3／4 焼土。
第5層 暗褐色土　7.5YR3／4 焼土を中量含む。
第6層 褐 色 土　7.5YR4／4
第7層 黒褐色土　10YR2／3

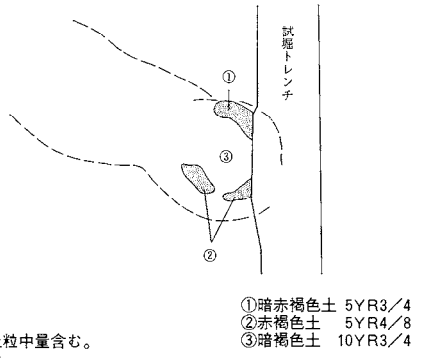
第13号カマド状遺構



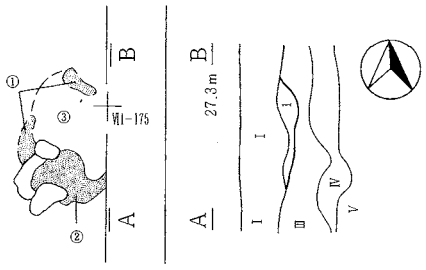
第13号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2
第2層 黒褐色土　10YR3／1 焼土粒中量含む。
第3層 褐 色 土　7.5YR7／6 焼土。
第4層 暗褐色土　7.5YR3／4 焼土多量含む。
第5層 黒褐色土　10YR3／1

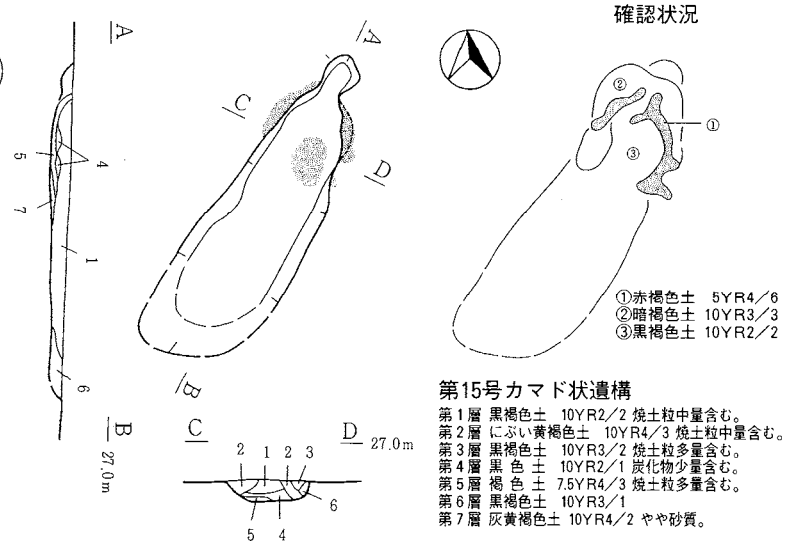
第13号カマド状遺構確認状況



第14号カマド状遺構



第15号カマド状遺構



第15号カマド状遺構

第1層 黒褐色土　10YR2／2 焼土粒中量含む。
第2層 にぶい黄褐色土　10YR4／3 焼土粒中量含む。
第3層 黒褐色土　10YR3／2 焼土粒多量含む。
第4層 黒 色 土　10YR2／1 炭化物少量含む。
第5層 褐 色 土　7.5YR4／3 焼土粒多量含む。
第6層 黒褐色土　10YR3／1
第7層 灰黄褐色土 10YR4／2 やや砂質。

S＝1／50
0　2m

図17　第11号～第15号カマド状遺構

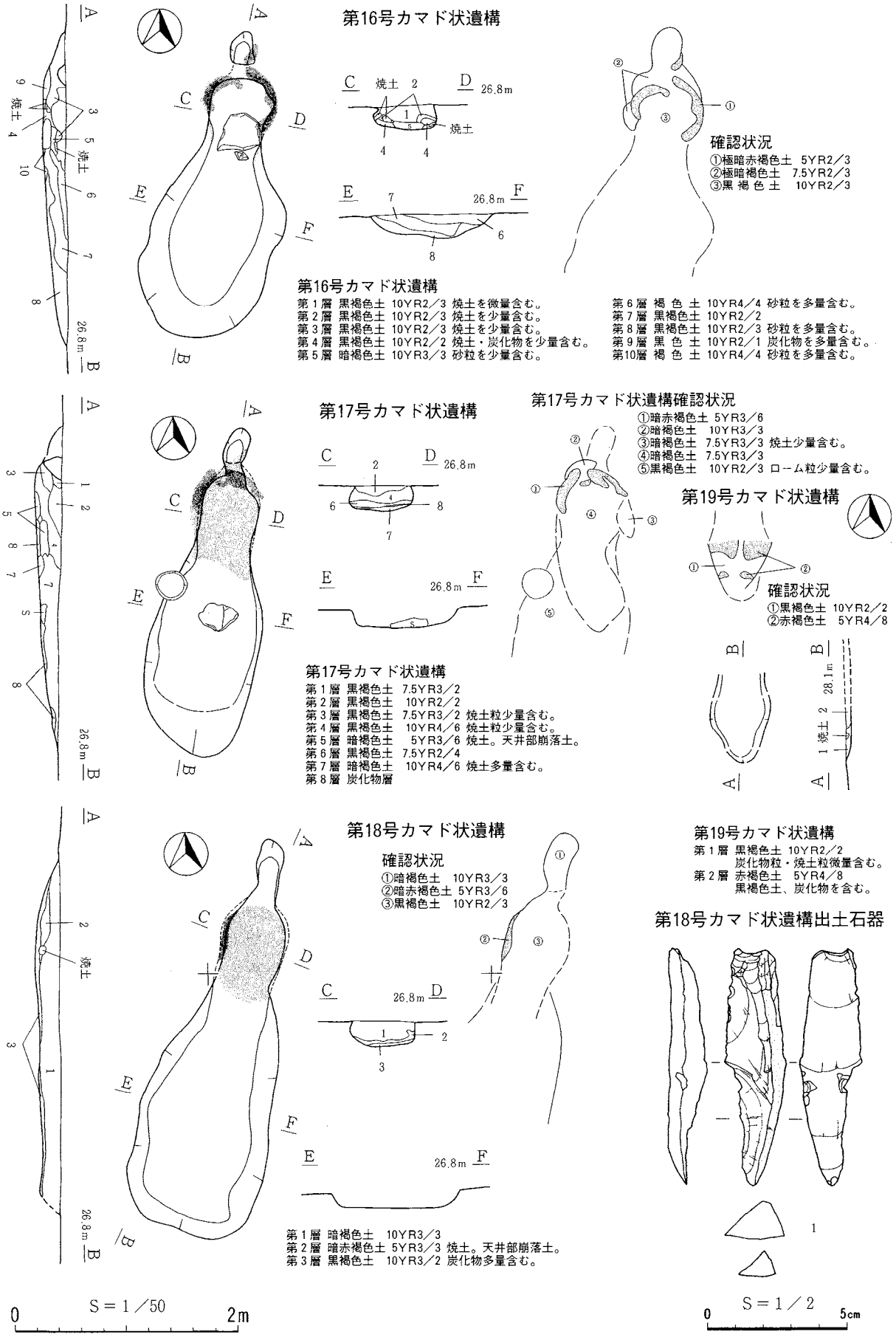


図18　第16号～第19号カマド状遺構

（4）溝　跡（図19）

第1号溝跡（ＳＤ－1）

位置：D区の西側ⅣＨ～Ｍ－171～172グリッドに位置し、ほぼ南北に延びている。

重複：第2号土坑、第3号土坑及び周辺に検出した小ピットと重複している。本遺構は、第3号土坑より新しいが、第2号土坑と小ピットよりも古い。また、第2号溝跡とは同時存在であり、ⅣＩ－171グリッドで合流し、一条の溝となる。

規模：第2号溝との合流地点より北側では幅50cm前後、深さ55cmであるが、合流地点より南側では幅80cm、深さ70cmで、溝跡の短軸断面はＵ字状を呈している。長さ20ｍ以上で、水は北から南に流れる。

堆積土：上から順に黒褐色土、暗褐色土、黒色土の堆積が見られた。

出土遺物：なし。

第2号溝跡（ＳＤ－2）

位置：D区の西側ⅣＪ・Ｋ－170・171グリッドに位置し、北西から南東方向に延び、第1号溝跡に合流する。

規模：幅60～80cm、深さ40cmで、短軸断面は逆台形状を呈している。長さ15ｍ以上で、水は北から南に流れ、第1号溝と合流する。

堆積土：黒褐色土の堆積が見られたが、下部には砂質ローム粒が含まれている。

出土遺物：なし。

（畠山　昇）

（5）小ピット群（図19）

D区西側のⅣＨ～Ｌ－170～173グリッドで46個、D区東側のⅣＩ～ⅣＫ－175～177グリッドで57個の柱穴状の小ピットを密集して検出した。小ピットの平面形には、円形、楕円形、隅丸方形のものがあるが、楕円形のものが多く見られる。規模は直径20～40cm前後で、深さには15～50cmのものがあるが、30～40cm前後のものが多い。ピットからの出土遺物はない。

これらの小ピットには、規則的な配列が認められるものがなく、建物跡は確認できなかった。また、小ピット同士の重複が見られるものや、他の遺構と重複している小ピットもあり、後者には以下の例がある。

・第17号カマド状遺構と重複し、これよりも新しい。
・第6号井戸跡と重複し、これよりも新しい。
・第2号土坑と重複し、これよりも新しい。
・第1号溝跡と重複し、これよりも新しいものと古いものがある。

以上のことから、すべての小ピットが同一時期の所産ということは断定できず、また重複関係にある遺構の構築時期が不明であることからも、これらの小ピットの時期を特定することはできなかった。

（畠山　昇）

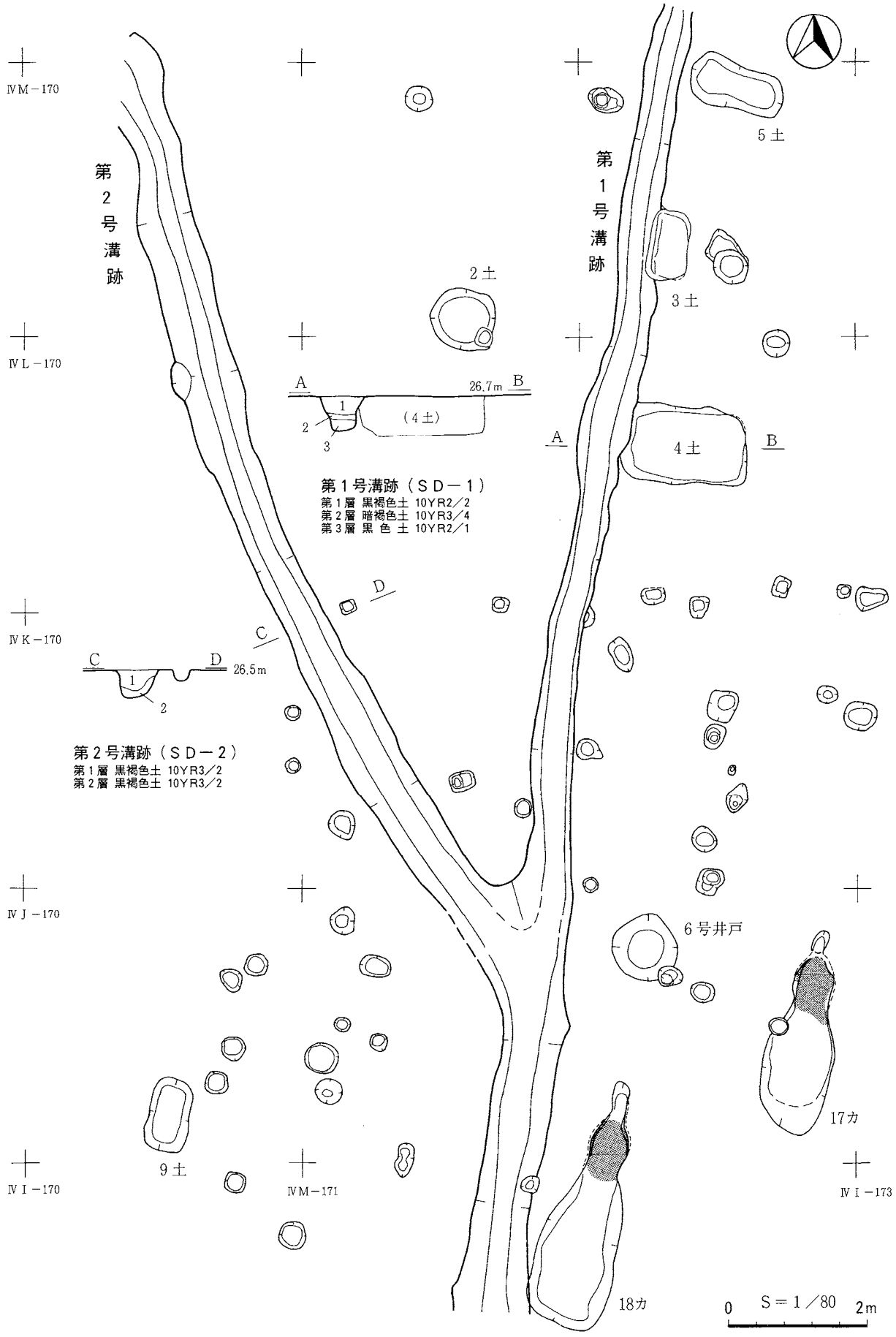


図19　溝跡と小ピット群

第2節　遺構外出土遺物

1　縄文時代の遺物

（1）土　器

C区からは、縄文時代後期前葉の遺物が多く出土しており、ＶＩ－184～185グリッドにかけては、遺物集中域と粘土が下半分に充填された土器埋設遺構が検出されている。C区出土土器報告書掲載遺物は143の円筒土器1点を除き、すべて縄文時代後期前葉に用いられた土器である。大きく、平坦口縁の装飾深鉢、波状口縁の装飾深鉢、地文のみが施される深鉢、装飾壷、小型装飾壷が見られた。該期の土器は、輪積みの接合部で破損している破片が多く、外傾接合の個体が多い。

D区では、縄文時代中期の円筒土器・後期前葉の土器の出土が見られる他、中世の珠洲焼が出土しておりカマド状遺構等の時期不明とした遺構の帰属年代を示唆する可能性がある。

『C区出土土器』

ア.土器集中域（ＶＩ－184・185）[図20～23]（38～50）

ＶＩ－184～185グリッドを中心として、縄文時代後期前葉の土器群が散乱した状態で出土した。同区では土器埋設遺構も検出され、埋設土器中の有文土器片から縄文時代後期前葉であることが確認されている。

[壷形土器]38・39・40は同一個体となる大型の壷形土器で推定胴部最大径50cm・推定底部径26cmとなる。器表面外面はにぶい燈色をなし、文様は全体を楕円文を用いて構成する。縦位・横位共に2列で構成される直線的な区画用楕円文で器面を区画分割し、その区画帯中は楕円文ベースの文様で充填する。区画用楕円文をまたいで対応する半円モチーフを構成し、この半円モチーフが各区画帯内の上下左右に配置される。最上部と最下部を除き、半円モチーフはすべて対応する半円を有し、2個1セットで楕円形を呈する。全体の構成が観察できる部分は少ないが、区画用楕円文を左右にまたぐものと上下にまたぐ楕円形モチーフ共に、上下の対称形ではなく左右の線対称の構成となるようである。4単位と考えられる橋状把手にはその形状に沿って、縦位の沈線が4本施される。沈線は2～3mm幅であるが、所々細く深くなる部分が存在し、同一施文工具の当て方による違いと考えられる。

41と42は、4単位の橋状把手を有する壷形土器で、口径21.5cm・現存部の最大径は36cm・現存部高さ29cmである。4単位を基本に文様が施されており、橋状把手から下方に2列一組の縦方向の区画用楕円文が伸び、体部上半に一列の横方向の区画用楕円文が施されている。全部で8区画の文様区画が考えられよう。上半部の文様区画内には渦巻状または入り組み状文様が施される区画と三角形状の文様が施される区画が交互に並ぶ。下半部の区画は、そのほとんどを欠損するが、僅かに残存する部位から推測すると、上半部同様に円と三角をイメージする文様が施されるようである。

橋状把手の剥落跡には、把手の取り付け位置を示すと思われる下描きの短沈線が認められる。

43と44は、おそらく5単位の橋状把手を有する同一個体の壷である。口縁部径30cm・頸部径23.4cmとなる。口縁部には横位の楕円文が施されるが、一部上下の楕円文同士が流水文化している部分も認められる。沈線幅5mm程度の深く太いものである。横線部の断面は半円形で、縦線部の断面は深くＶ字形と異なるが沈線内に途切れは見られず、同一施文工具を用いたものと思われる。C字形又はＪ字形の入り組み状文様が橋状把手下の頸部に施される。橋状把手の上面にはこの入組み状文が、下面に

は楕円文が施される。頸部の接合部は外傾接合となる。

45～50は集中区出土の壷形土器片である。47は横位の楕円文が連続する壷頸部である。

[深鉢形土器]（図23　51～57）

51～57は有文深鉢の口縁部である。51は口縁部に横位の、頸部に斜位の楕円文が施される波状口縁となる。52・53は口頸部に横位の楕円文が施される。54は無文の深鉢であるが、器表面の摩滅が著しい。僅かに残る器表面からは内外面共にミガキが施されていることが解る。粘土帯の接合部からの割れが多く見られ、粘土帯上下幅は２㎝以下となる。55・56は波状口縁であり、56と57は口縁形態に沿った沿口沈線＋楕円文、55は口縁部に楕円文が施される。56は隆帯部にRL縄文が充填される。

イ.土器集中域以外の土器

[平坦口縁の有文深鉢形土器](図23　58～62、67～68)

58～62は、口縁部またはそれ以下にも楕円文が施されるものである。すべて頸部で緩やかに外反し口縁部付近に最大径を有するものである。58は沈線幅4㎜程の太い沈線によって、上下幅1.5㎝程の狭い楕円文と上下幅3.5㎝程の幅広の楕円文が施される。細い方は、楕円文間に一辺2㎝程の隅丸方形の文様が配置される。沈線の断面形は半円形となる部分が多いが、縦方向の沈線には施文工具の細長い先端部を、工具長軸方向に動かして断面V字形となった部分もある。横線部はすべて沈線断面形半円形となり、同一施文工具の持ち方・器面への当て方の違いによって断面形が異なるものと考えられる。内外面共に丁寧なミガキがなされ焼成も良いが、一部器表面が摩滅している部分が見られ砂粒を多く含む様子が確認される。器厚8㎜程の厚手の土器である。59は口縁部から体部上半まで横長の4段の楕円文が約2㎜幅の細い沈線で施されるが、体部下半は無文となり丁寧なミガキがなされる。口縁部は折返し状に肥厚しており、その幅に合わせて横幅5㎝の楕円文が横位に一列巡るが、二つおきに直径1㎝の円形文様が配置される。58同様に横線と縦線の沈線断面形が若干異なり、縦線の方がやや深くV字形となる。内外面とも丁寧なミガキがなされる。推定口径22㎝、現存部高さ11㎝である。60～62は楕円文外にLR斜行縄文が施される。

[波状口縁の有文深鉢形土器](図23・24　65～66、69～93)

波状口縁の有文深鉢を一括したが、波頂部は大型の丸みを持った山形状を呈するものが多い。波状口縁となる有文深鉢も、平坦口縁の有文深鉢同様に、頸部で緩やかに外反するものが多い。楕円文間に縄文が充填されるものと丁寧にミガキがなされるものがある。文様構成は、口縁部に沿った沈線や楕円文が施されるものがほとんどである。口縁波頂部直下の文様の配置で、口縁部の装飾がいくつか分けられる。

(１)口縁波頂部直下に短楕円文が配置されるもの(69・70・71・72・84)

69は器厚は7㎜程であり、大型の深鉢の破片である。70は該期の当遺跡出土土器群に見られるように、縦沈線には深く断面V字形のものが見られる。72・84は同一個体であり、器厚は4㎜程であり推定される土器の大きさから考えると非常に薄いものである。器表面は摩滅部が多く見られ、口縁部に沿った楕円文が施される。

(２)口縁波頂部直下で左右の楕円文が向かい合うもの(76・77・79～81)

(３)波状の口縁部に沿った沈線が１～２条施されるもの(73・74・75・78・82・83・86・87・88・89)

73・74は同一個体であり、沿口沈線が2本施された下に異なる形の楕円文が横に並び、残存部だけ観

察するとあたかも口縁波頂部から右曲がりの沈線が垂下しているようにみえる。明褐灰色の薄い器表面が摩滅し、暗灰色の内部が外面でも内面でも見られる。断面の色調は所謂サンドイッチ状となる。75は沿口沈線下隆線部にLR縄文が充填される。頸部の楕円文沈線幅は1～2㎜であり、沿口沈線幅が5㎜と大きく異なる。76～77・79～90は口縁部に口縁部に沿った沈線や楕円文が施されるものである。82・83は別個体であるが、その口縁部の文様構成は類似する。口縁波頂部下の1本の沿口沈線下に短楕円文が配置されるもので、(1)のタイプと類似する。

(4)その他(85・90・91・92・93)

その他としたものは、主に口縁波頂部が残存せず、分類不明であるものである。85は器面内外に丁寧なミガキがなされ、口縁直下の隆線部にRL縄文が施される、非常に丁寧なつくりの土器である。

[有文深鉢体部](94～103)

楕円文で、文様が構成される有文土器体部破片である。

[楕円文以外が施されるものやその他の深鉢形土器](図25　104～107)

104は、波状口縁の深鉢と考えられるが、口縁波頂部下に隆帯が付され肥厚し、頸部で強く外反する。4㎜幅ほどの沈線で、頸部に波状文が施されている。また頸部下の接合面の割れ口から外傾接合であることが観察される。105は、全体の文様構成は不明であるが、2㎜程の細い沈線で左右対称の円形を中心にした文様が施される。やや内彎しながら口頸部が立ち上がる。107は、器表面外側が摩滅している無文の土器であり、内面に丁寧なミガキ調整がなされる。調整により目立たないが、割れ口から折返し口縁であることが観察でき、口頸部の調整によって折返し口縁下端部に明瞭な稜を有する。

[地文のみが施される深鉢形土器](図25　108～121)

縄文のみが施されるもの、縄文と網目状撚糸文が施されるもの、網目状撚糸文のみが施されるもの、撚糸文のみが施されるものがみられる。折返し口縁となるものも多い。111のみ折返し口縁部と体部の境に1本の横走沈線が施される。縄文のみが施されるもの(108～111)は、108～110が同一である。108も111も、LR斜行縄文を施すが、108・111ともに口縁部は原体横回転であるが、108の体部では縦回転、111の体部では頸部下の縄文施文幅2段目までは横回転であるが、それ以下では縦回転もしくは左上⇔右下の回転方向で施される。

網目状撚糸文のみが施されるもの(112～121)は、112～115はL、116～120はRが用いられる。115と119は口縁部が横方向の施文、体部が縦方向の施文となる。120は口縁部にLR縄文が、体部に網目状撚糸文が施される。

[壷形土器](図26・27　123～162)

123～125・148は4個の橋状把手が付される壷形土器の同一個体である。VK－180～181グリッドでまとまって出土した。口縁部・頸部・体部のそれぞれの復元となり、接合しない。口縁部から体部下半まで横位に連続する楕円文列が施される。頸部に橋状把手が4個付され、それに楕円文が施されるが、そのまま橋状把手以下の体部の縦方向の楕円文列に繋がり、それによって体部は4区画に分割され、さらにそれぞれ縦方向に2等分され、全部で縦方向に8単位の区画帯に分割される。その間を上下幅1㎝程の狭い楕円文列と上下幅3～4㎝の広い楕円文列が横位に交互に配置される。縦方向の楕円区画列と横方向の楕円文列の交点には、体部1周に4個の直径約1.5㎝の円形文様が配される。橋状把手側面にも沈線が施されており、把手の上位と下位の楕円状文と繋がり、縦に連続する流水状の文様

を構成している。把手や隆線部の剥落跡には把手付設部や隆帯貼り付け部の割付用の下描き沈線が見られ、頸部(124)の実測図中に黒塗りの沈線部として表現している。粘土帯幅は約2cmであり、外傾接合となる。体部下半から底部にかけては無文になるものと思われる。

126～137も楕円文が施される壷形土器破片である。胎土・焼成とも共通するものが多く、ほぼ同一個体と考えられるが、131のみ斜線が施され別個体の可能性もある。

138～146は楕円文と三角形状文様と斜沈線が施される壷形土器の同一個体である。隆帯部または区画内部にはRL斜行縄文が施される。口径約15cm、頸部径約11.5cmとなり、最大径は体部下半に位置すると考えられる。口縁部に平行沈線と隆帯部にRL縄文を施し、頸部は無文となる。肩部に上下幅約1.5cmの楕円文列が3段、それ以下体部には3～4条の三角形状文、体部下半付近では再び上下幅約1.5cmの楕円文列が3段以上施されるものと考えた。肩部の楕円文列では楕円文外の隆帯部にRL縄文が施されるのに対し、体部下半と考えた楕円文列では楕円文内にRL縄文が施されるので、別の部位と考えたい。

147は器表面の摩滅が著しい口縁部破片で、123同様に横方向の楕円文列が施される。149～152は厚手の口縁破片である。153は器厚約5mmの薄手の壷口頸部である。口縁部に施される2本の沈線は、幅3mm程度で深く施文され、断面はV字形となる。

154～162は壷形土器の体部破片である。154～113は比較的厚手の破片であるが、158～162は薄手の土器であり、沈線も繊細なもので小型壷と考えられる。157は楕円文が施文される橋状把手である。155は楕円文間の隆帯部にRL縄文が施され、その後に直径5mm程度の刺突が加えられる頸部破片である。158は隆線部に径1～2mmの刺突が横位に連続し、その隆線下の横走沈線から沈線文が垂下する。

[鉢・浅鉢形土器](図23　63～64、図27　163～164)

63～64は非常に薄手の土器で、63は上部の平行沈線と下部の斜線を、3本一単位の弧状の沈線で結び弧状沈線間に楕円文が残る。64は口縁部に楕円文、体部上半部に渦巻状の沈線文が施される。共に沈線幅は2mmと非常に細い土器である。

164は器厚の薄さや胎土・焼成ともに当遺跡出土の縄文時代後期前葉の土器群と共通する鉢形土器である。163は器厚15mm程度の非常に厚い浅鉢形土器と考えられ、内外面とも丁寧なミガキがなされる。口縁部からほぼ底部付近までの破片と思われるが、この器壁の厚さは、当土器群とは異質である。

[縄文時代中期の土器]

122は口頸部にLR原体の側面圧痕、体部にLR斜行縄文が施される円筒上層a式と考えられる破片であり、繊維を含む。円筒土器は、当遺跡の試掘調査域・D区で少数ではあるが確認されている。C区では1点のみの出土である。

『D区出土土器』

当区では、縄文時代中期円筒上層d式・縄文時代後期初頭・前葉の土器・中世の珠洲焼が出土している。

165～172までは縄文時代中期の土器であり、165は人面状装飾と幅5～6mmの隆線と沈線文が施される。概ね他の破片も隆線も細い。165と167は中央部がやや窪む径1.2cm程のボタン状貼瘤・突起が付される。

173～177は、後期初頭の土器で173～175が同一個体で、楕円文中に平行沈線や楕円文が多重化している。178～183は縄文時代後期前葉の土器である。

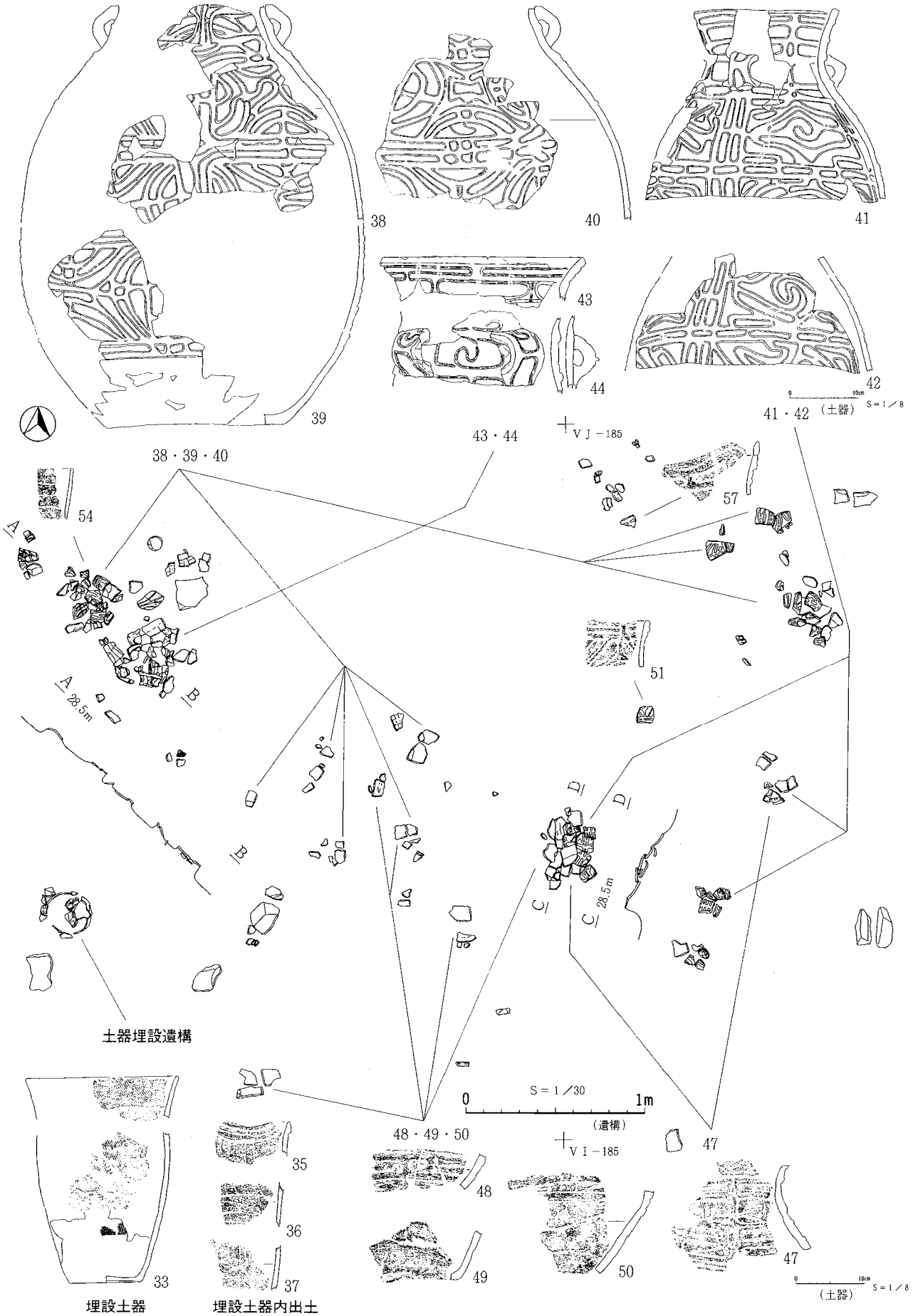


図20　山下遺跡Ｃ区遺物出土状況

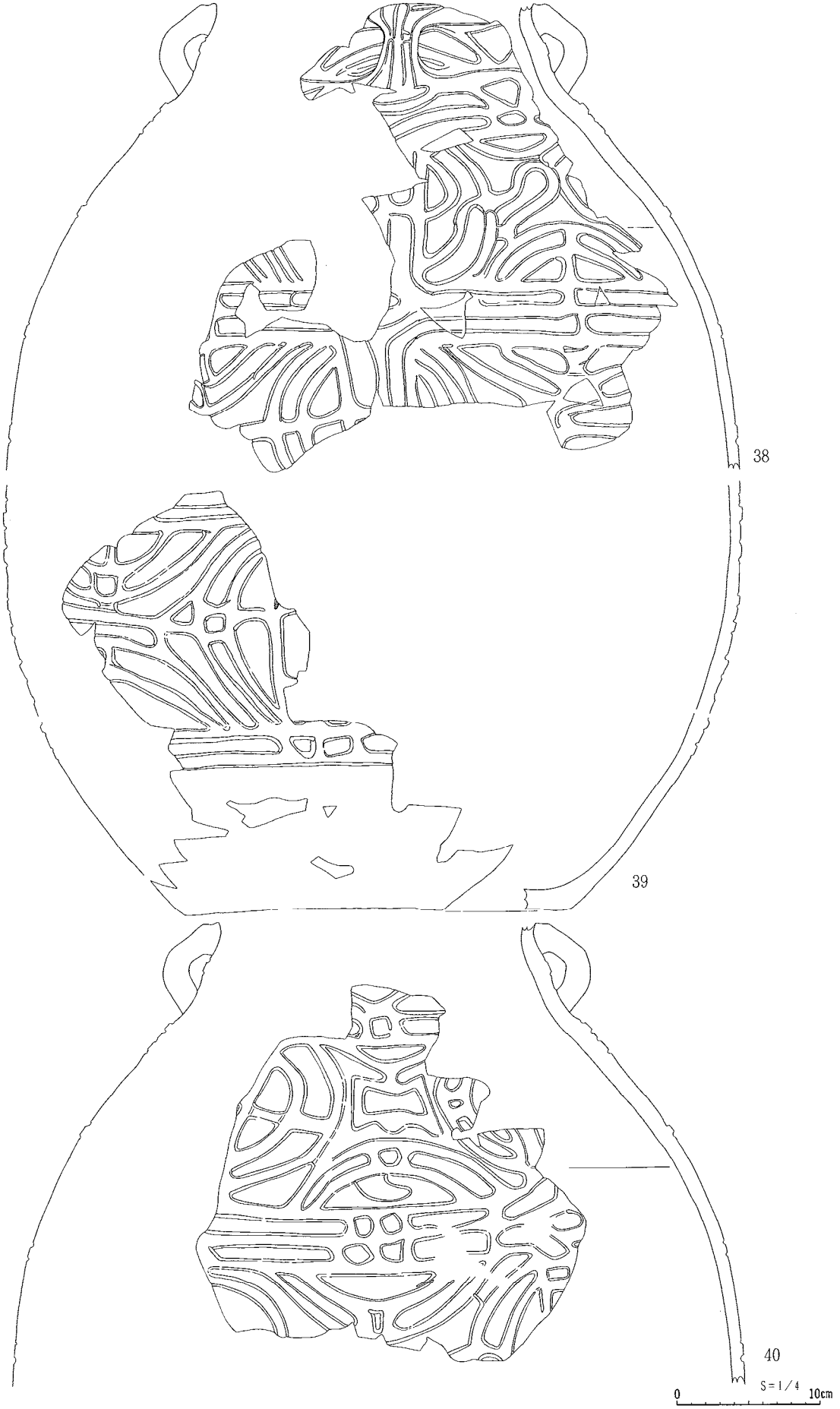


図21　山下遺跡Ｃ区出土土器１

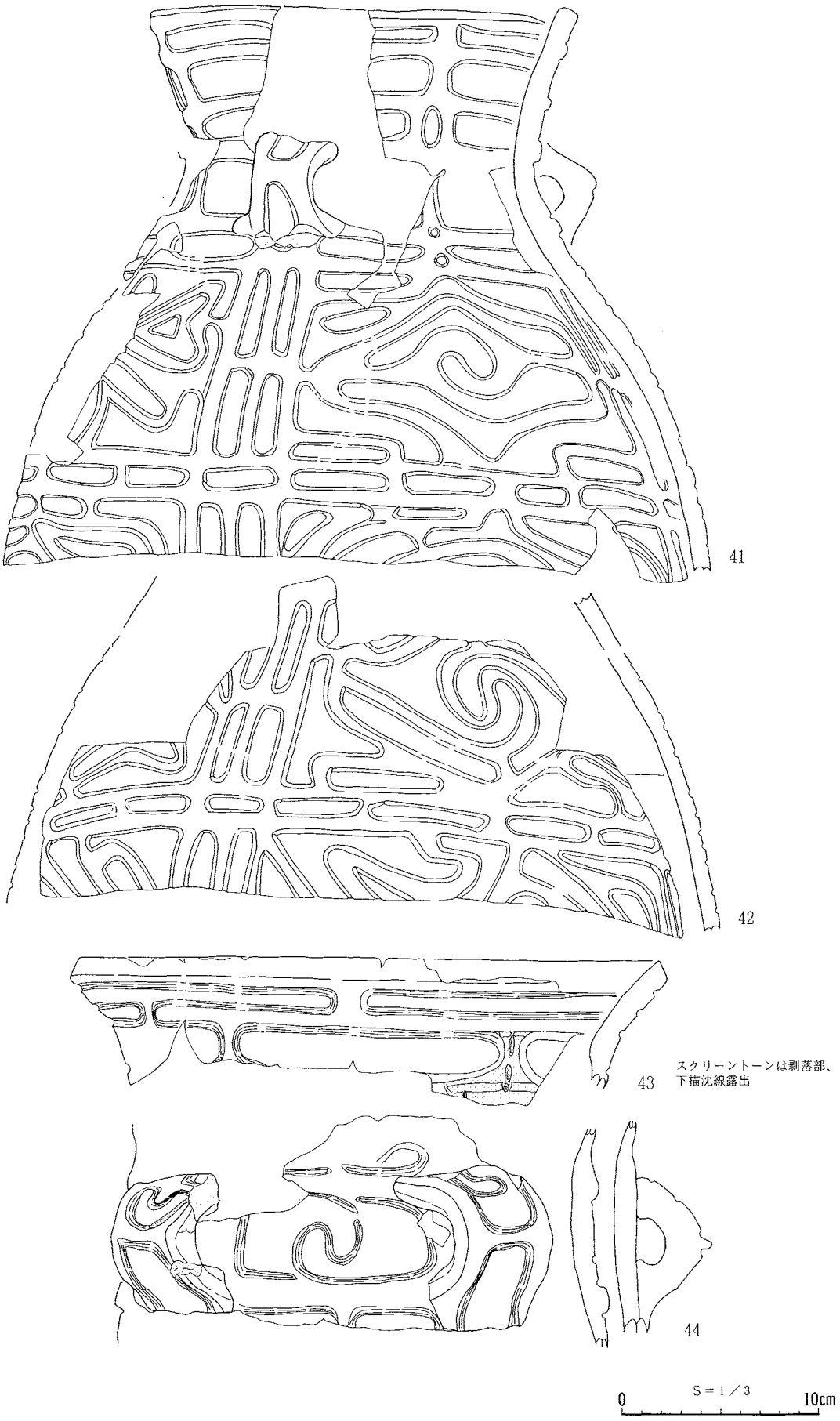


図22　山下遺跡C区出土土器2

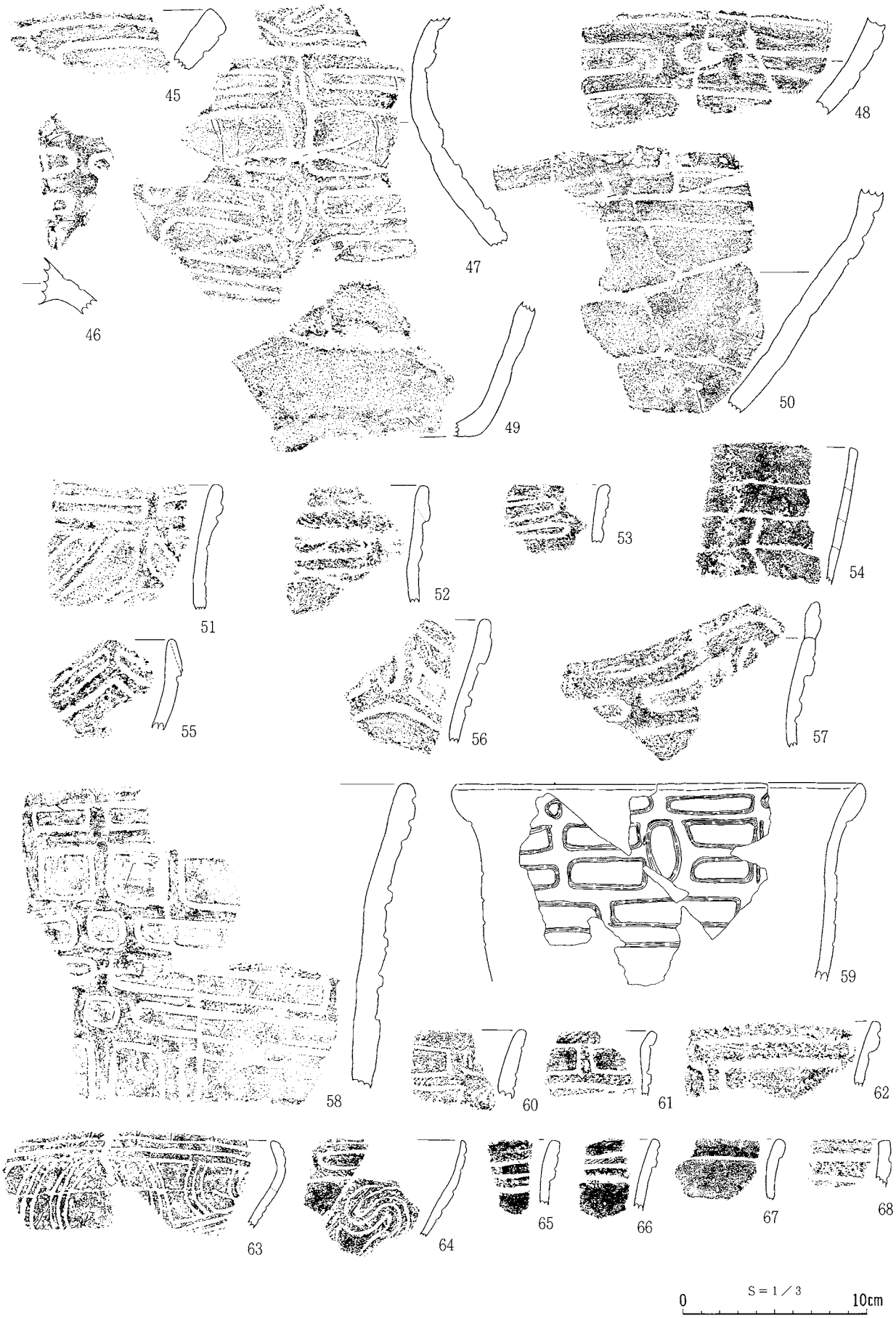


図23　山下遺跡Ｃ区出土土器３

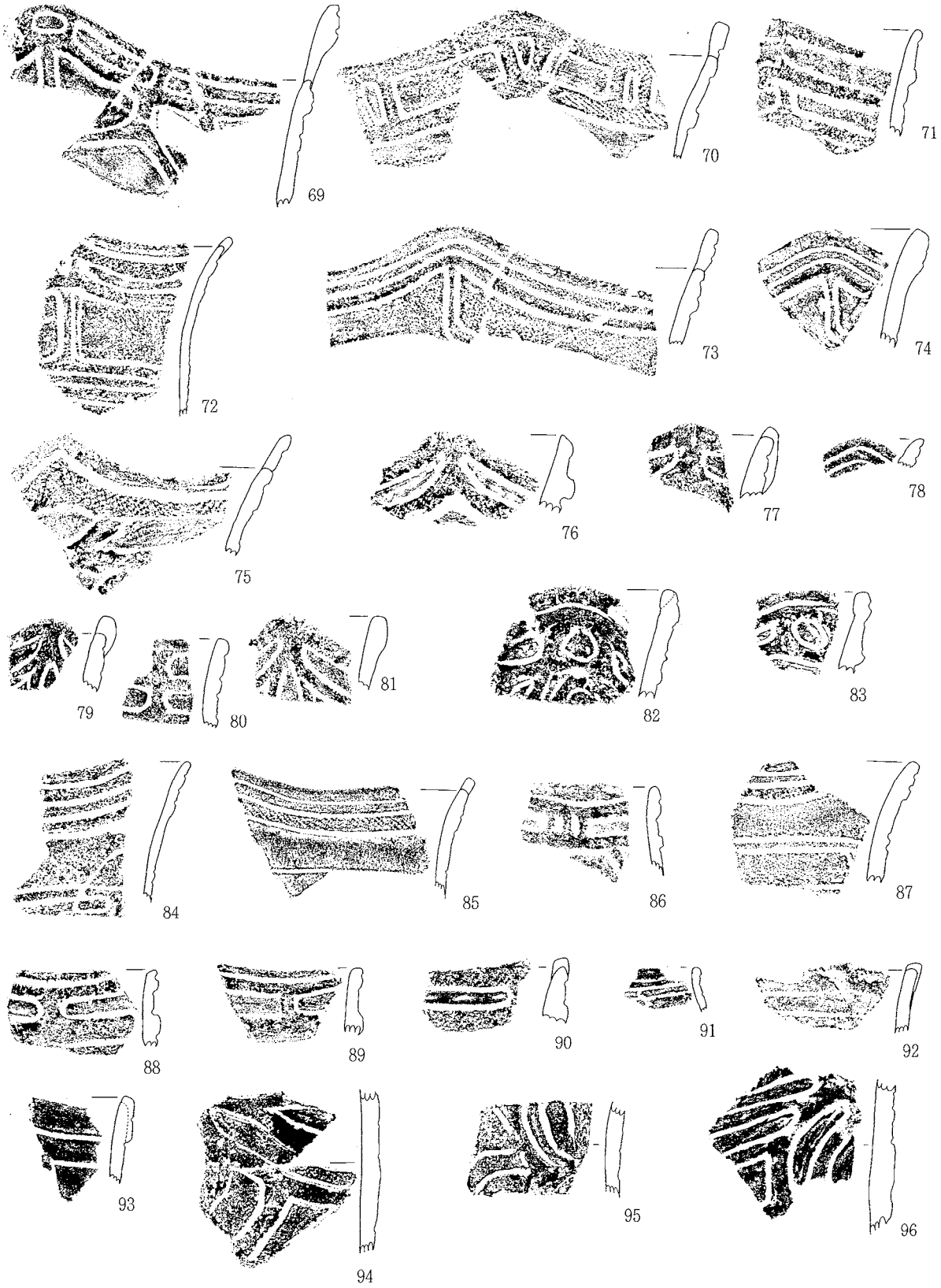


図24　山下遺跡Ｃ区出土土器４

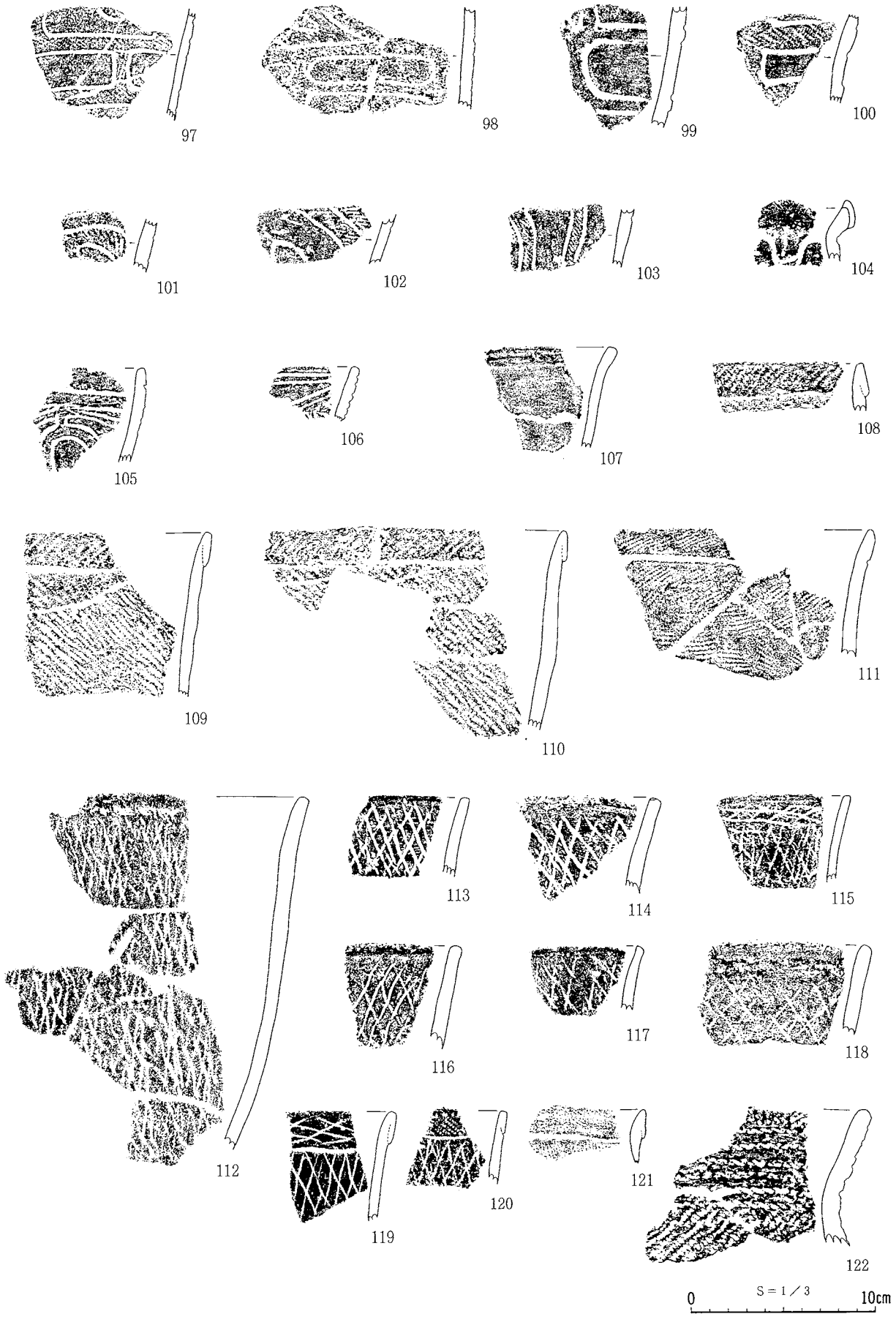


図25　山下遺跡Ｃ区出土土器５

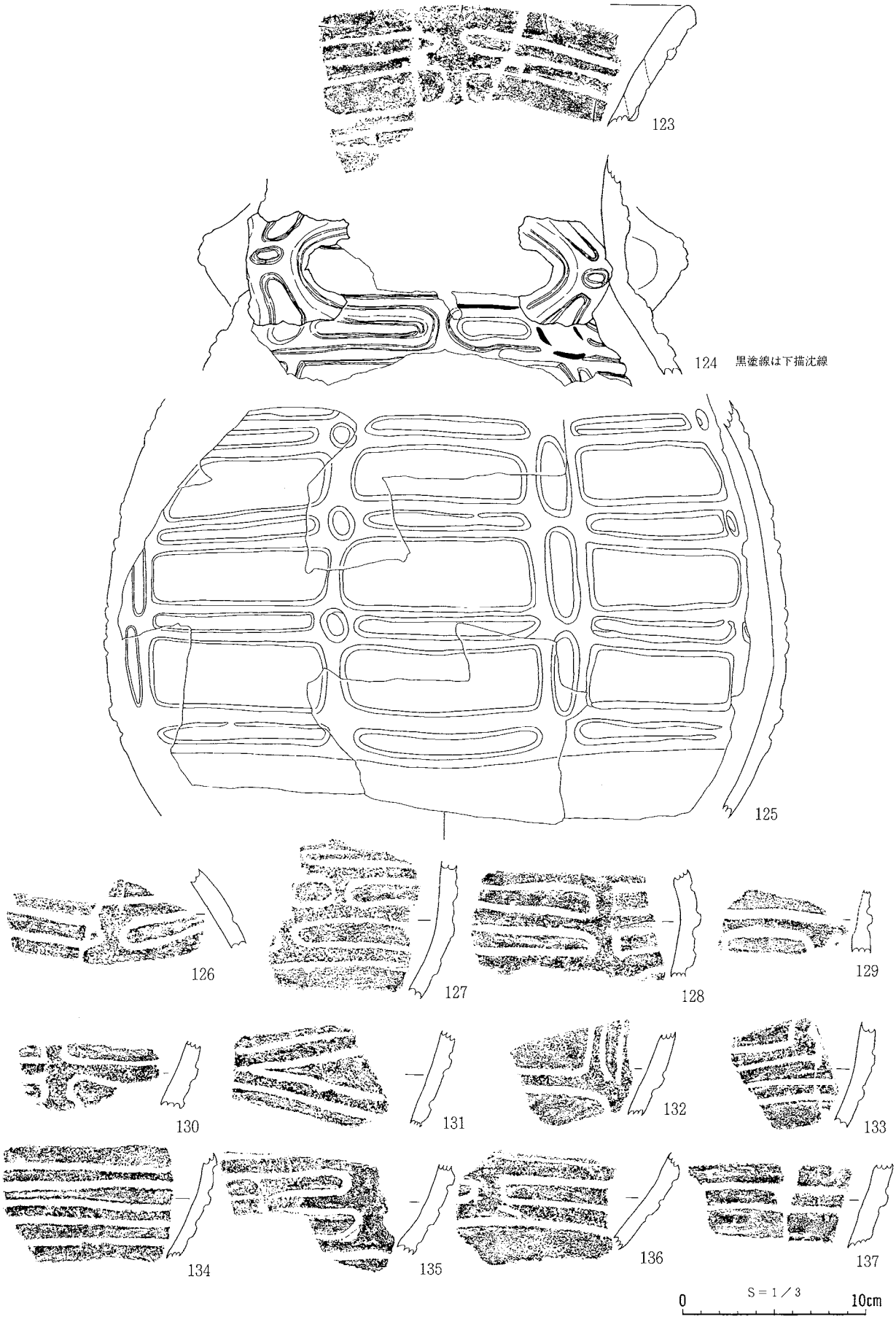


図26　山下遺跡C区出土土器6

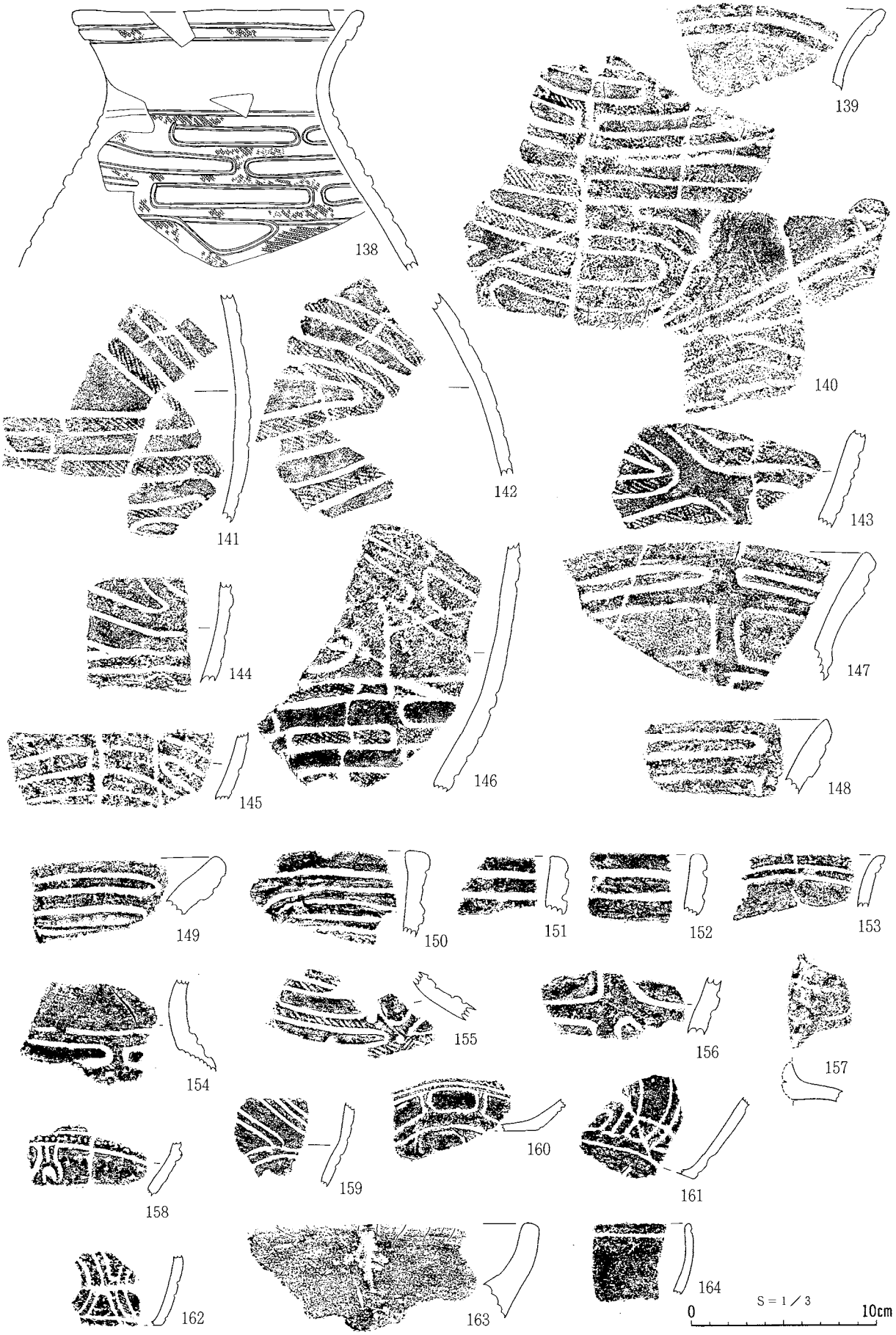


図27　山下遺跡Ｃ区出土土器７

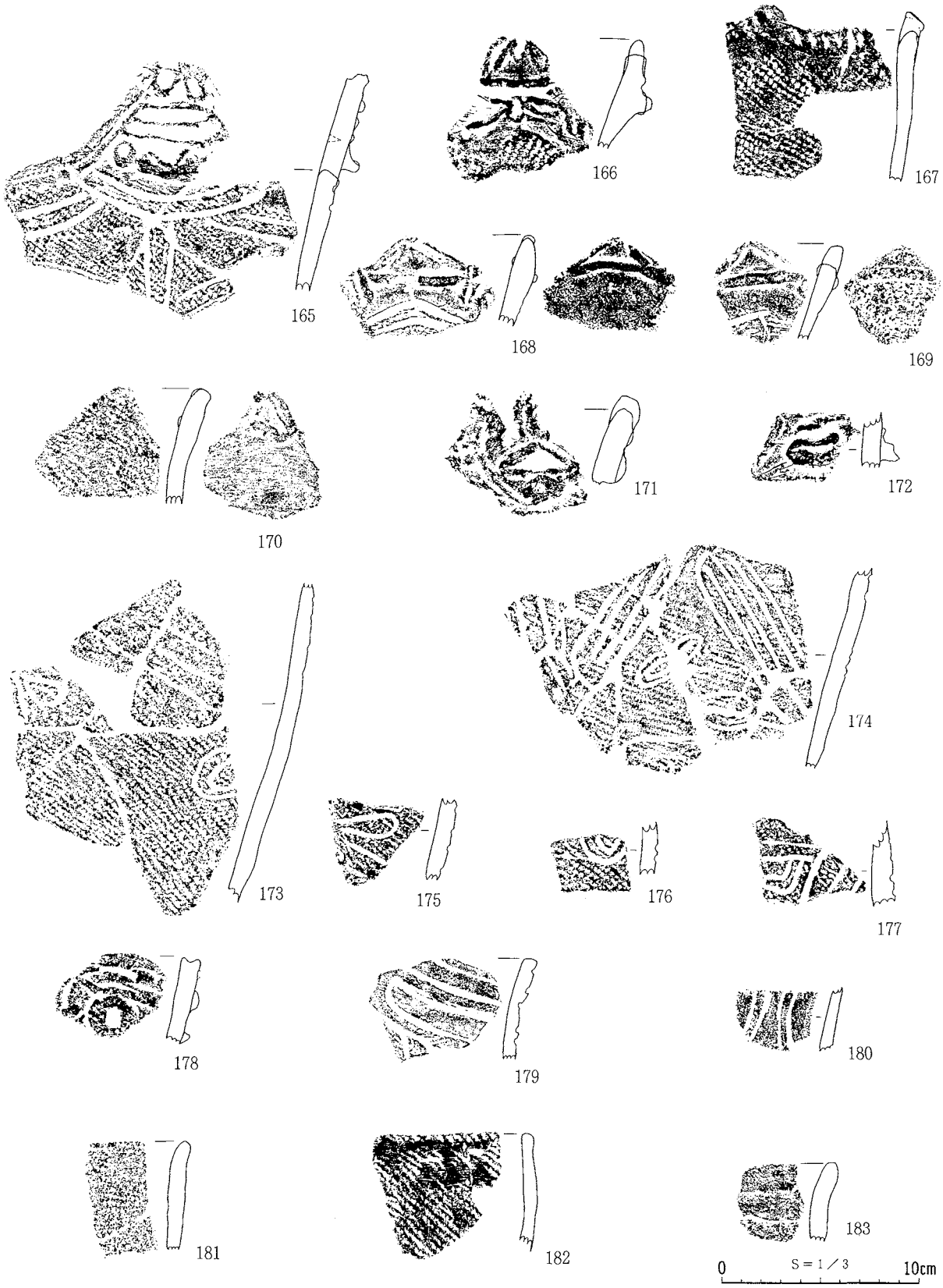


図28　山下遺跡Ｄ区出土土器

（２）石　器

Ｃ区出土の石器

Ｃ区からは、石錐１点、石匙１点、石篦１点、スクレイパー７点、Ｕフレイク３点、フレイク31点、磨製石斧１点、敲磨器８点、台石２点、その他１点出土した。

石錐（図30－１）棒状錐であり、薄く作出されている。

石匙（図30－２）やや幅広である。両面に主要剥離面を広く残し、特に裏面の周縁に集中して加工を施している。

石篦（図30－４）基部を欠損している。両面加工で、刃部の一部に摩耗痕が見られる。

スクレイパー（図30－３、５～８）端部に急斜度調整が施されているものが３点ある。３は弧刃であり、丁寧な調整が施されている。７は、一見粗雑に見えるが、末端には丁寧な調整が施されている。８は左右と末端に調整が施されているが、特に末端の刃部調整は直角に近く、直刃である。５は大型剥片の片側縁に連続した調整が施されている。６は剥片の周縁に小さな調整が連続して施されている。

Ｕフレイク（図30－９）縦長剥片の側縁の一部に、微細剥離痕が見られる。

磨製石斧（図31－１）乳棒状の石斧で、刃部は蛤刃である。石質は砂岩である。

敲磨器　（図31－２～７）敲石１点、磨石２点、凹石５点がある。３は、磨製石斧の基部片を敲石に転用したもので、割れ面を利用している。表面には被熱による火ハジケが見られる。２は球状磨石で、器面全体が滑らかに整形されている。４は、扁平磨石の平坦面に複数の深い凹みが見られるものである。両側面に幅広の機能面を持ち、そこには敲打痕が見られる。また、両端部にも敲打痕が見られる。

凹石には、棒状礫を利用したもの（６）や扁平な楕円礫を利用したもの（５、７）とがある。５には両平坦面と片側面に複数の深い凹みが連なっている。凹みは敲打によるものが主体であるが、スリによるものも見られ、部分的に溝状を呈しているところやすり鉢状を呈しているところも見られる。

台石（図31－８）扁平な礫を利用したもので、器面は平滑である。

その他（図32－８）流紋岩の角柱状の礫を素材としたものである。全体に丁寧に整形され、丸みを帯びている。器面には、線条痕が見られる。

Ｄ区出土の石器

Ｄ区からは、石匙１点、Ｒフレイク２点、Ｕフレイク２点、フレイク37点、磨製石斧１点、敲磨器６点、台石１点出土した。

石匙（図32－１）横型で、背面の末端に調整を加え、刃部を作出している。また、バルブのある厚い部分につまみ部を作出しており、一部にアスファルト状の物質が付着している。

Ｕフレイク（図19－１）遺構外から１点、第18号カマド状遺構覆土から１点出土している。

磨製石斧（図 32－２）基部を欠損している。両刃で刃部に対し斜めに線条痕が観察される。緑色細粒凝灰岩製。

敲磨器（図32－３～７）磨石が６点出土し、球状磨石１点と扁平磨石５点がある。３はやや楕円礫を素材とした磨石で、器面全体が滑らかである。４～７は扁平磨石で、片側面に機能面を持つものである。機能面には程度の差はあるもののおおむね敲打痕が観察されている。また、７の両端部には敲打痕も見られる。　（畠山　昇）

表3　山下遺跡出土石器一覧表

	石鏃	石錐	石匙	石篦	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	磨製石斧	敲磨器	石皿・台石	その他	計
試掘区	1		1	1	7	10	7	60		3	2		92
C　区		1	1	1	7		3	31	1	8	2	1	56
D　区			1			2	2	37	1	6	1		50
計	1	1	3	2	14	12	12	128	2	17	5	1	198

（3）石製品（図30－10）

C区ＶＩ－181グリッドから、大型の三角型岩版が1点出土した。角を欠いているが、全体が丁寧に整形されている。無文である。

（畠山　昇）

2　縄文時代以外の遺物

珠洲焼（図29　183～189）

D区においてが珠洲焼の破片が数片出土した。184と185は擂鉢の破片であり、ともにろくろ使用である。卸し目は184が約6本／cmの細いもの、185が3本／cmの太いものとなる。186もろくろ使用であるが、器種は不明である。187～189は甕の体部破片であり、外面に叩き目痕、内面に指や手による押さえ痕が残る。

（永嶋　豊）

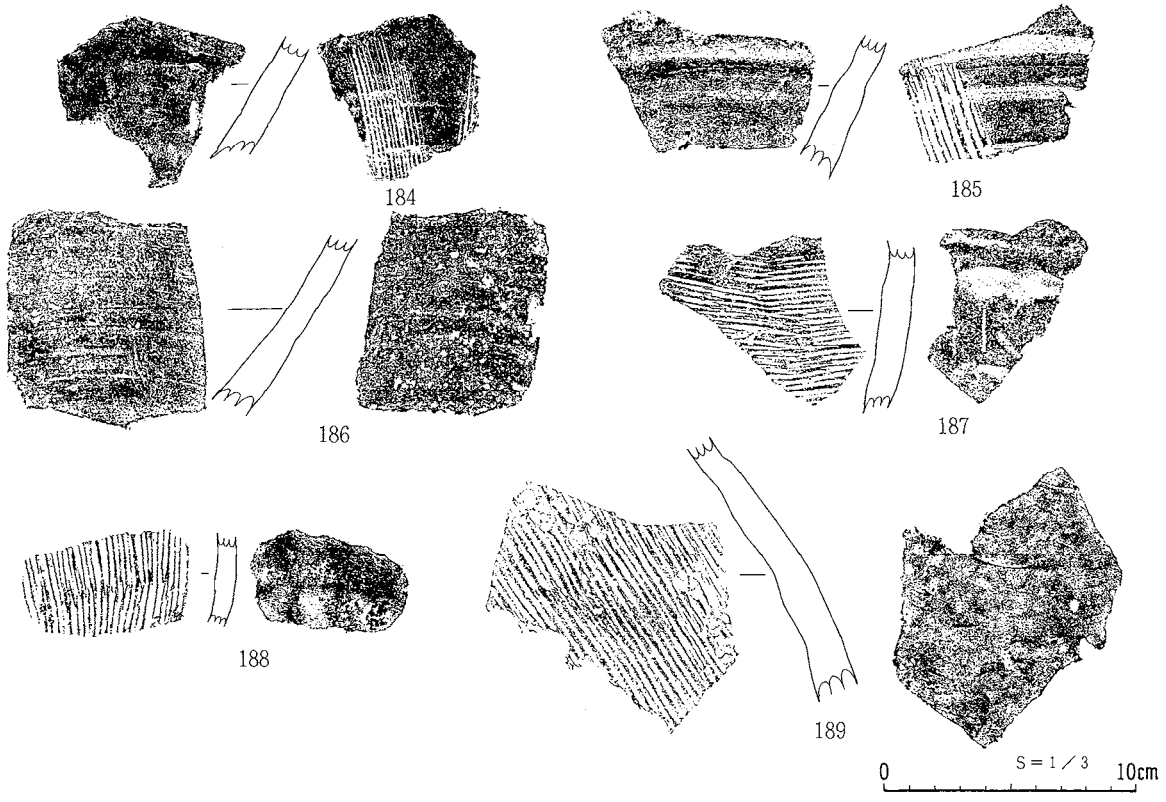


図29　山下遺跡出土珠洲焼

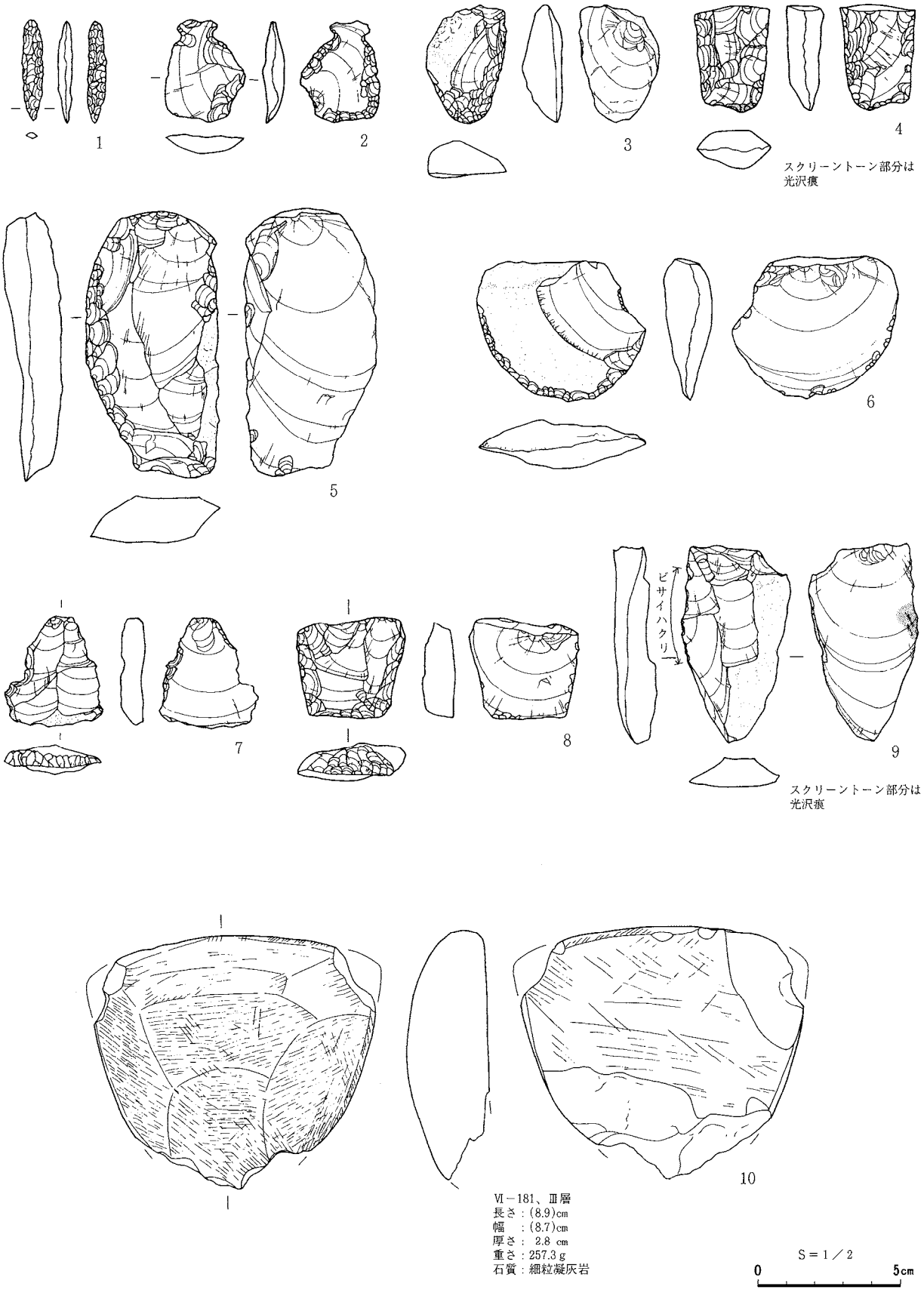


図30　山下遺跡Ｃ区出土石器１、石製品

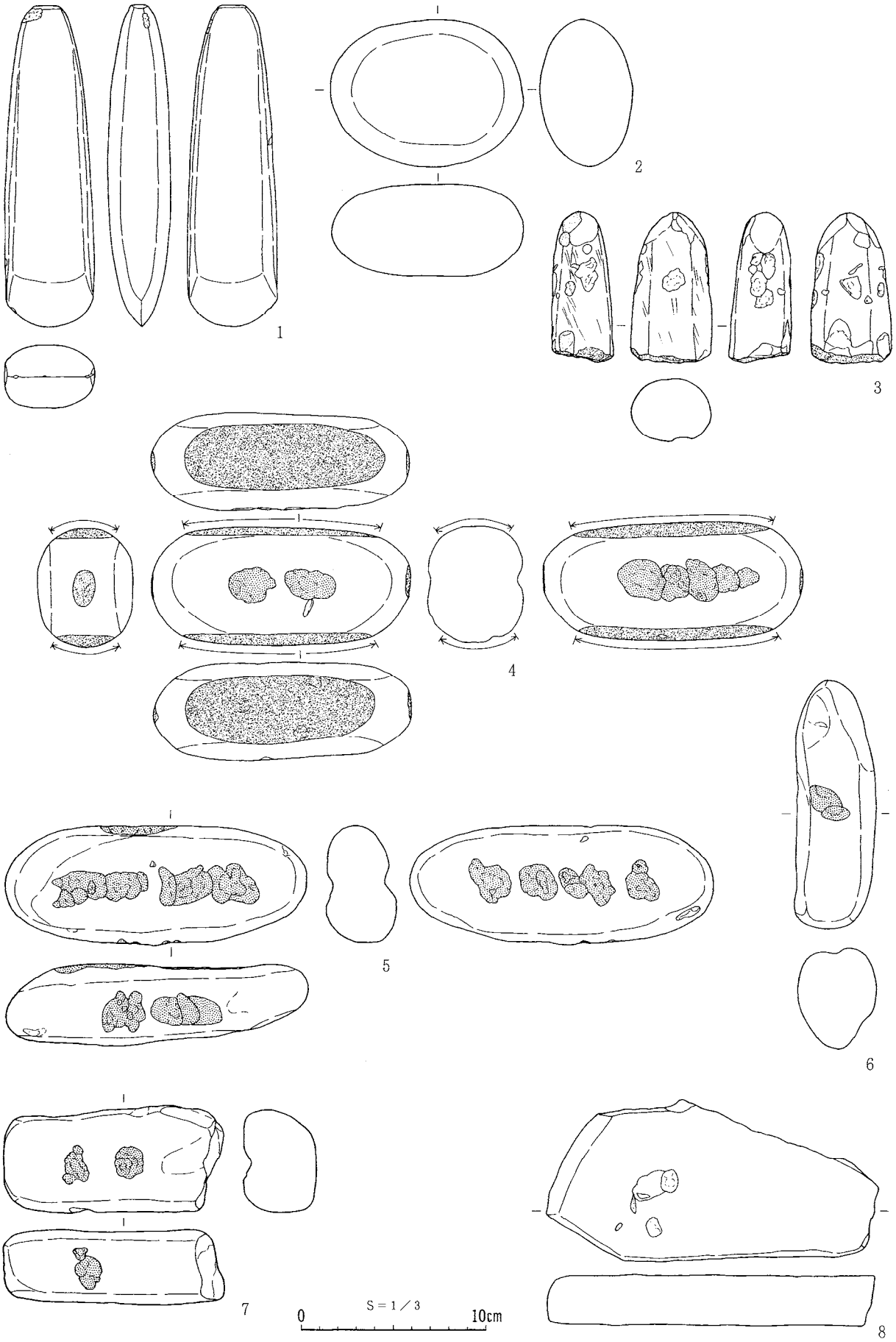


図31　山下遺跡C区出土石器2

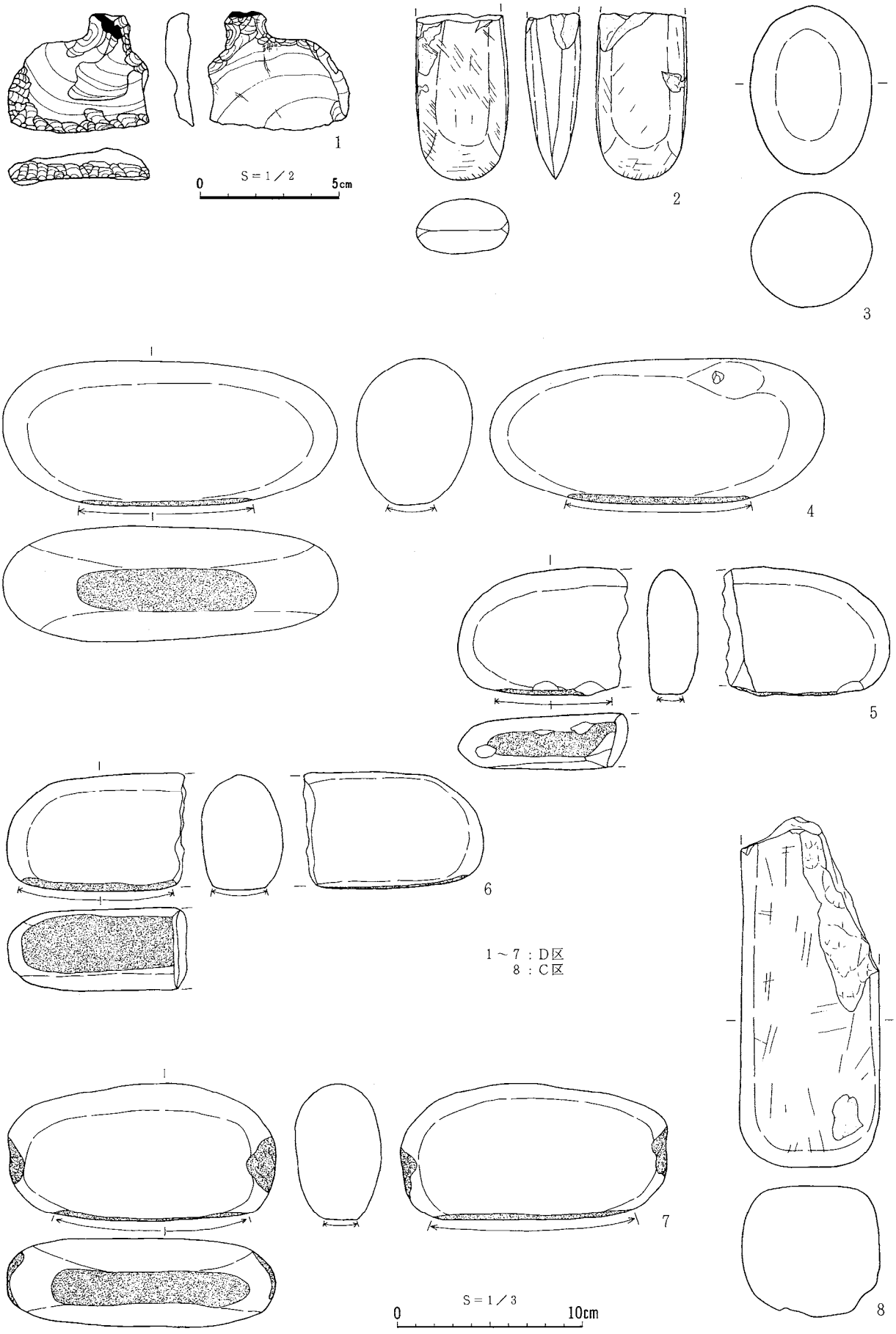


図32　山下遺跡Ｃ区・Ｄ区出土石器

第3章　学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

2000年　3月　1日

青森県埋蔵文化財調査センター
所長　　中島　邦夫　殿

1999年12月2日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

表示したＢＰ年代は、1950年から何年前かの年数で、^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限の年代値（記号＞）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下の時には、Modernと表示してあります。

表示した同位体比は標準値からのずれをパーミルで表した値です。$\delta^{14}C$の値は、放射線の測定で求めた試料炭素中の^{14}C濃度Ａと現在の炭素の標準の濃度Ａ´（std）を用いて、

$\delta^{14}C=[(A-A(std))/A(std)]\times1000$　によって算出された値です。$\delta^{13}C$の値は、試料炭素の$^{13}C/^{12}C$原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値です。

$\triangle^{14}C$は試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$パーミルであったときの^{14}C濃度を計算した値です。この濃度を用いて表記のＢＰ年代値が算出されています。したがって、表記の年代値は同位体効果による測定誤差を補正した年代値となっています。

記

Code　No.	試料	ＢＰ年代と炭素の同位体比
GaK－20455	炭化材　from　山下遺跡	1040 ± 60
	第5号井戸跡（遺構確認面より30cm 下部）	$\delta^{14}C=-124.6\pm6.5$
		$\delta^{13}C=-26.7$
		$\triangle^{14}C=-121.6\pm6.5$

以上

木越　邦彦

第4章 まとめ

今回の調査において、縄文時代の土器埋設遺構1基、土坑2基のほか、時期不明の土坑7基、カマド状遺構19基、井戸跡6基、溝跡2条、小ピット群2カ所が検出された。

時期不明な遺構の中では、C区で検出した第10・11号土坑の2基は縄文時代の可能性もあるが、他はすべて中世以降と考えられる。そのうち、もっとも多く検出されたカマド状遺構は、弘前市境関館遺跡から多数の検出例が報告され、三浦圭介氏により「中世型かまど」(三浦：1986)とされたものである。このような屋外に厨房施設としてのカマド状遺構がつくられるのは、中世に入ってからの現象と見られている。今回の調査では、出土遺物や年代のわかる遺構との重複している遺構がないため、構築時期を特定することが出来なかったが、周辺から中世の珠洲焼破片が出土していることから、これに近い年代が考えられるかもしれない。

なお、カマド状遺構は平成9年度の調査でもA区で3基検出されているほか、今回の確認調査や米山(2)遺跡の確認調査でも多数確認されている。したがって、周辺には、まだかなりの数の遺構が広範囲に存在しているものと想定され、後日の発掘調査によって、その構築時期や構造上の特徴など、より具体的な事実が得られるものと期待される。

C区で検出された第5号井戸跡は木組方形縦板組隅柱横桟型の井戸枠を有し、浪岡町波岡城(波岡町教育委員会　1982他)、川内町高野川(2)遺跡(青森県教育委員会　1992)で、同様の形態の井戸枠が検出されている。当第5号井戸跡は放射性炭素年代測定法(→p60)により、1040±60年BP値が得られているが、その諸特徴により周辺に多数確認されたカマド状遺構同様に中世の遺構と考えられ、当第5号井戸跡は、井戸枠の構造において高野川(2)遺跡例との類似性が認められるが、異なる点は、高野川(2)遺跡例では隅柱・横桟ともに加工された角材を用い、当第5号井戸跡では隅柱と横桟の一部に丸材が用いられることである。高野川(2)遺跡例は、隣接して掘建柱建物跡やカマド状遺構が検出されており、井戸内からは曲げ物、箸、15世紀後半とされる珠洲焼片が出土している。井戸枠材はヒノキアスナロと同定され、井戸は年輪年代法より1325年以降の室町時代の構築と説明されている。

(畠山、永嶋)

第3編　米山（2）遺跡

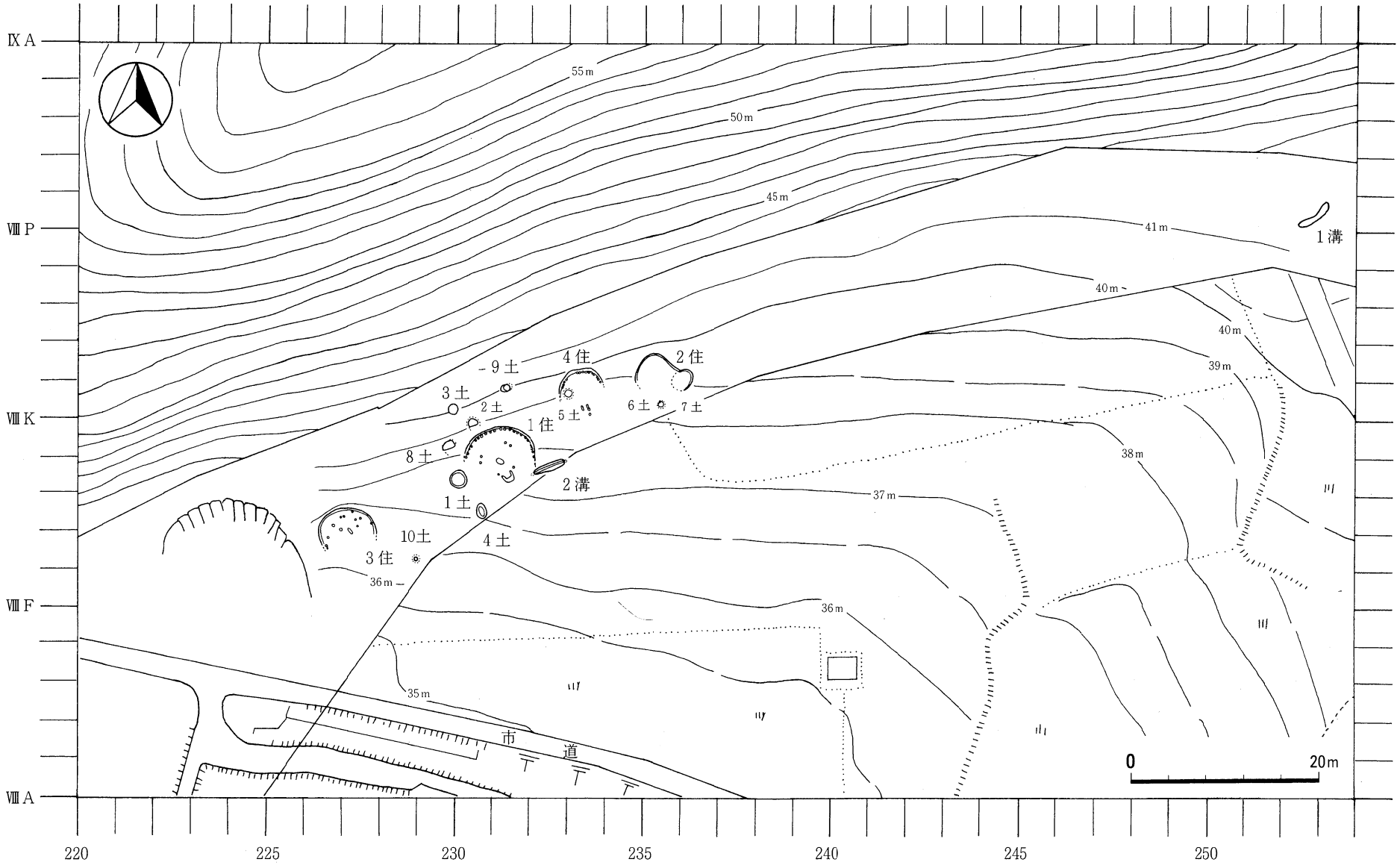


図33　米山(2)遺跡Ａ区遺構配置図

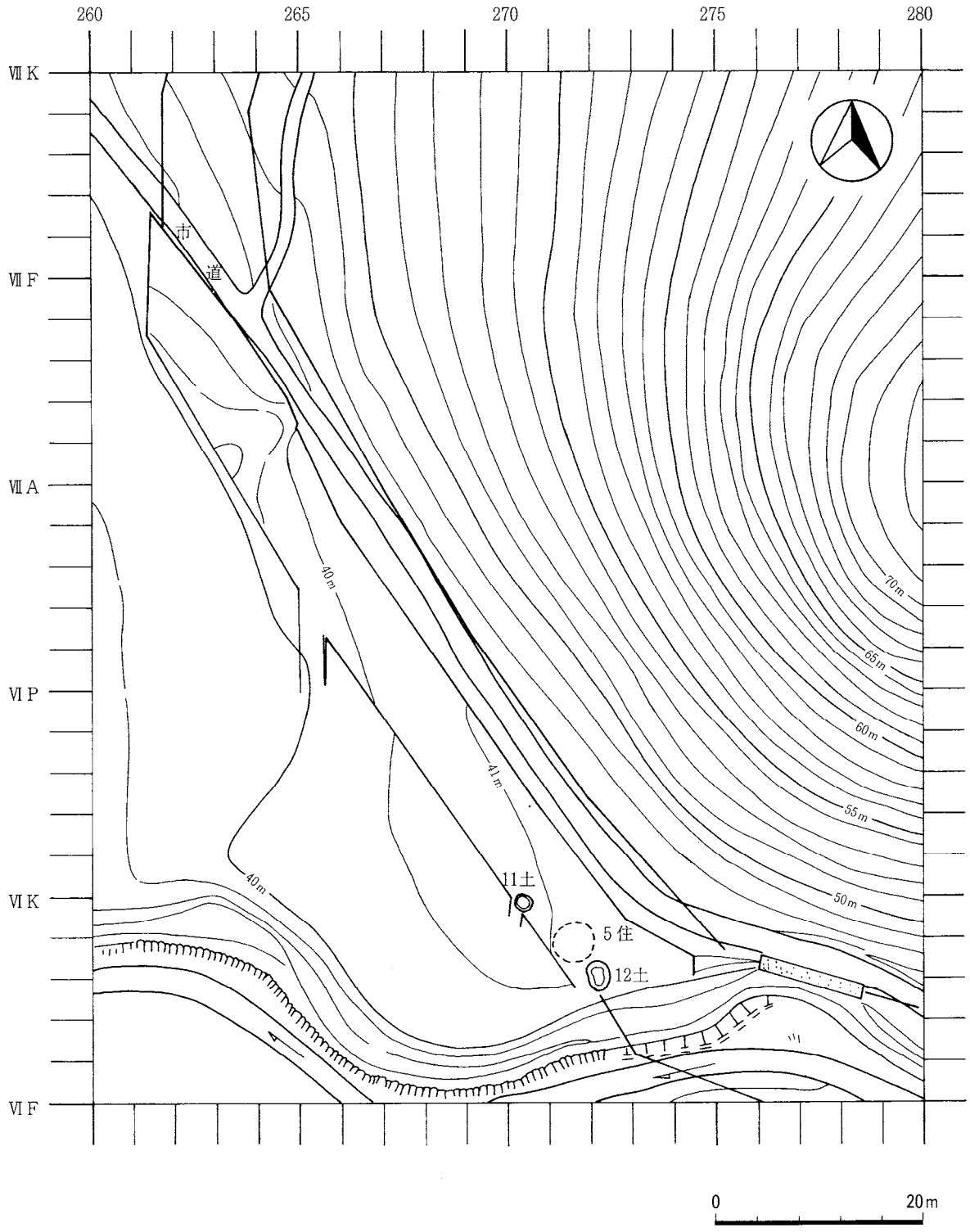


図34　米山(2)遺跡Ｂ区遺構配置図

第１章　検出遺構と出土遺物

米山（２）遺跡は、標高20～25ｍの水田地帯から遺跡北側に突き出た舌状丘陵裾部までの広大な遺跡である。今回の調査は、遺跡北側の標高35～40ｍの丘陵裾部の東西に離れた場所が調査対象となり、西側をＡ区、東側をＢ区と呼称して調査した。

検出した遺構は、Ａ区で竪穴住居跡４軒、土坑９基、溝状土坑２基、Ｂ区で竪穴住居跡１軒、土坑２基である。以下、遺構ごとに記述する。

第１節　竪穴住居跡

第１号住居跡(SI－１)　(図35、36)

位置：Ａ区ⅧＩ－230～ⅧＪ－232グリッドにおいて、第１号土坑および第２号溝状土坑に隣接する。尾根状地形の南側裾部の斜面と平坦地との傾斜の変換部に位置するが、近年の耕作の為、斜面下側の削平によって平坦面が確保されたものと考えられ、住居構築時には現状よりはやや緩やかな傾斜地を選択し、住居を構築をしたものと考えられる。隣接する他のＡ地区内住居跡(SI－2･SI－3･SI－4)も同様の選地が行われている。

確認：第Ⅱ･Ⅲ層除去後に第Ⅳ層上面において黒色または黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認した。

重複：東南部床面が一部第２号溝状土坑と重複する可能性あるが、当住居跡の南半部消滅のため、不明である。

平面形･規模：斜面下側(南側)の壁･床面が残存しない楕円形の竪穴住居跡であり、出入り口部と考えられる施設と炉跡を結んだ線を主軸(短軸)とし、その中軸と炉跡で直角に交わる線を長軸とした。その場合主軸長約6.8ｍ、直交軸長約８ｍの横長の楕円形となる。直交軸長は、ほぼ実際の数値に近いと考えられるが、主軸長は出入り口側の壁の推定位置によって異なってくる。主軸方向はＮ－28°－Ｗとなり、第４号住居跡の主軸方向と類似する。

堆積土：黒色または暗褐色のシルト層が多く、11層に分層した。北側斜面上方からの土流入による自然堆積と考えられる。

壁：北壁･東壁のみ壁の立ち上がりを確認できた。北～北東側部分は、基本層序Ⅵ層が壁面となり、東側では基本層序Ⅳ層(千曳浮石層)が壁面となる。壁面は、北側の最も残りの良いところで80㎝程度、東側では40㎝程度残存し、ほぼ直角に立ち上がる。

床面：住居跡の南側が残存しない状態であり、床面と考えられる硬化面は、炉跡以南では確認不能であった。総じて平坦な床面であるが、南側ほど床面レベルが下がる傾向にある。壁面と同じく、北～北東側は基本層序Ⅵ層が床面となり、一部しか残存していないが南側半分では、基本層序Ⅳ層(千曳浮石層)が床面となっている。また住居内東南部に床面のように硬化した千曳浮石層が２×４ｍ程の範囲で凹凸状に堆積していたが、他の床面との比高差が最も高い部分で20㎝程度と大きい。除去後に出入り口施設と小ピットが検出されたため、住居廃絶後の堆積土と考えた。

炉：住居内ほぼ中央に、90cm×60cmの規模の地床炉が確認された。楕円形を呈し、深さは10cm程度である。①～③層に分層でき、③層は焼土層となる。

柱穴：主柱穴6本、壁柱穴21本を検出した。主柱穴はpit1～6と考えられ、ほぼ台形状に配され、pit3･4は出入り口施設の住居跡中央部寄りに配置されている。pit1と2、pit5と6は近接しており、この主柱穴の配置は、岩手県二戸郡一戸町椛の木遺跡SI04住居跡の柱穴配置に類似している。主柱穴のpit1･2･5･6は底面径約30cm弱で一致し、出入り口施設付近のpit3･4は底面径約25cmとやや細くなっている。なおpit3･4は出入り口施設に伴う可能性もある。壁柱穴は直径約8cm～20cm程のものが見られるが、10～15cmのものが多く、ほぼ40～50cm間隔で壁際に並ぶ。住居の1／4にあたる床面北東部には10個ほどの壁柱穴が見られる。

施設：住居内南側部分に『コ』字状の出入り口施設と考えられる溝跡が検出された。溝は、住居跡中心(炉)方向に向けて開口する形となり、幅30～40cmであり、当遺構の左右(直交軸平行)幅･前後(主軸平行)幅共に約120cm、溝の深さは約30cmとなる。出入り口方向はＳ－28°－Ｅを向き、第４号住居跡例と類似する。

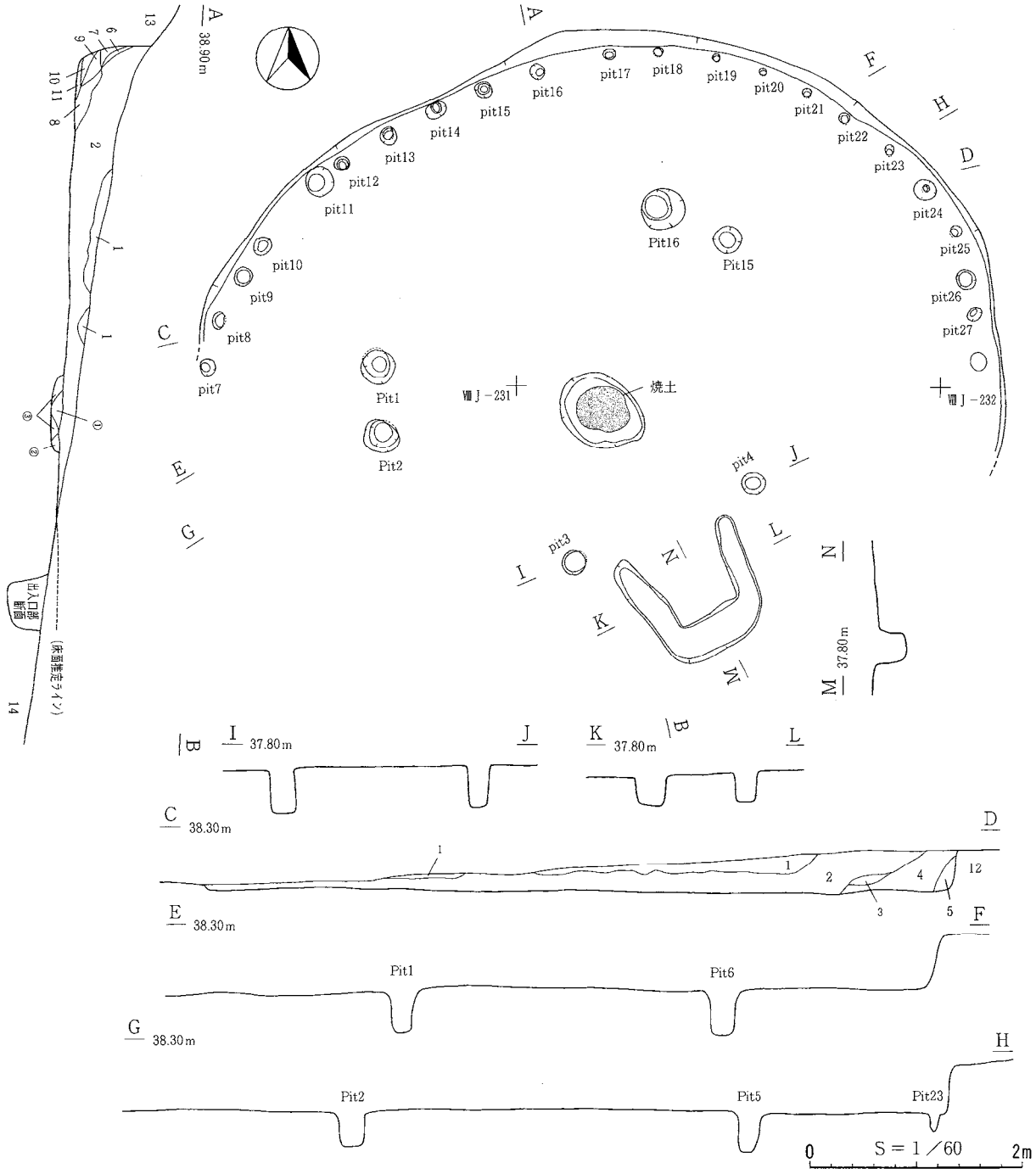
出土遺物：遺物出土は非常に少なく、土器も時期不明の小破片が数点出土したのみで、図示できたものは、土器３点、石器１点のみであった。

土器：１は十腰内Ⅰ式期の鉢または浅鉢形土器の台部破片である。幅2mm程の沈線で横位の楕円文列が施され、台部外面と下面には丁寧なミガキがなされる。2層から出土しているが、当遺構が形態により縄文時代後期中葉～後葉の住居跡と考えられるため、この台部破片は住居廃絶後の埋没過程において入り込んだものと考えられる。２も１と同様で、後期前葉の破片の流れ込みと考えられる。３も同様の胎土･焼成を示し、流れ込みと考えられる。

石器はスクレイパーが1点、石皿または台石の小破片１点が出土している。

小結：縄文時代後期中葉～後葉の住居跡の検出は、津軽地方では金木町神明町遺跡があげられるが、青森県八戸地方、岩手県北部に検出例が多く、炉を住居跡の中心または出入口寄りに据えて、円形または楕円形となるものが多い。炉を住居跡の中心として推定した場合は、出入り口は住居跡内に入り込む形となる。他遺跡の住居跡では、出入り口の多くは壁面に接した状態で検出されているため、当住居跡も同様である可能性は高い。また少数ではあるが、出入り口部付近の壁が内側に彎曲する例が、八戸市風張(1)遺跡第４号･第６号住居跡、椛の木遺跡SI01･SI04住居跡、軽米町大日向Ⅱ遺跡ＳA63･64住居跡等でみられる。風張(1)遺跡第６号住居跡･椛の木遺跡SI04住居跡は、出入り口近くに小ピットが位置することも類似している。

柱穴の配置・出入り口施設を有すること等の遺構形態の特徴や隣接する第３号住居跡が縄文時代後期後葉十腰内Ⅴ式期のものであることから、当住居跡も縄文時代後期後葉に属するものと考えられる。北東に位置する第４号住居跡とは主軸･出入り口の方向が類似し、第１･３･４号住居跡は同時期と考えられる。また平坦面西隣には第１号土坑、北側斜面には第２・３・８・９号土坑が位置するが、第１･３号土坑は、ほぼ完形の縄文時代晩期の土器を出土しており、これらの土坑群と住居跡群は若干時期を異にするものと考えられる。　　（遺構･土器は永嶋、石器は畠山）



No.	深さ	No	深さ	No.	深さ	No	深さ	No	深さ	No	深さ
pit 1	44.4cm	pit 6	45.6cm	pit11	25.0cm	pit16	25.0cm	pit21	13.5cm	pit26	25.6cm
pit 2	32.8cm	pit 7	17.7cm	pit12	24.5cm	pit17	20.8cm	pit22	19.8cm	pit27	19.6cm
pit 3	38.6cm	pit 8	21.3cm	pit13	26.8cm	pit18	18.5cm	pit23	15.8cm		
pit 4	40.3cm	pit 9	17.1cm	pit14	25.0cm	pit19	16.5cm	pit24	19.5cm		
pit 5	38.3cm	pit10	20.7cm	pit15	24.7cm	pit20	14.1cm	pit25	18.1cm		

層	色相	土色	土性	しまり	粘性	混入物など
1	10YR1.7/1	黒　色	シルト	弱	弱	φ2mm以下の黄褐色粒子を多く含む
2	10YR3/1	黒褐色	シルト	中	中	φ5mm以下の黄褐色粒子を非常に多く含む
3	10YR3/1	黒褐色	シルト	弱	中	褐色（10YR4/ 6）の土層をブロック状に含む
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	中	中	6層が混入
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	中	中	6層が4層より多く混入
6	10YR3/3	暗褐色	シルト	弱	弱	
7	10YR3/3	暗褐色	シルト	弱	弱	にぶい黄橙色（10YR6/3）の土層混入
8	10YR4/4	褐　色	シルト	中	中	黄橙色（10YR5/6）の土層混入
9	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質粘土	強	中	
10	10YR6/6	明黄褐色	粘土質シルト	強	弱	北側壁（14層）の崩落土
11	10YR3/2	黒褐色	シルト	中	中	φ2mm程度の黄褐色粒子を少量含む
12	7.5YR5/6	明褐色	シルト	中	弱	住居跡の東部～南東部の壁を構成
13	10YR6/4	にぶい黄褐	シルト質粘土	強	弱	北側の壁面
14	10YR5/6	黄褐色	シルト	中	中	黒褐色（10YR3/2）の土層が斑に混じる。千曳浮石層と考えられる。

層	色相	土色	土性	しまり	粘性	混入物など
①	10YR3/2	黒褐色	シルト	中	弱	φ2mm程度の炭化物含む φ5mm以下の黄褐色粒子を多く含む φ10mm以下の小礫も含む
②	10YR3/3	暗褐色	シルト	中	中	φ3mm以下の焼土粒と黄褐色粒子を含む
③	7.5YR4/6	褐　色	シルト	弱	中	焼土層。φ10mm程度の炭化物を含む φ10mm以下の黄褐色粒子を多く含む

図35　第１号住居跡１

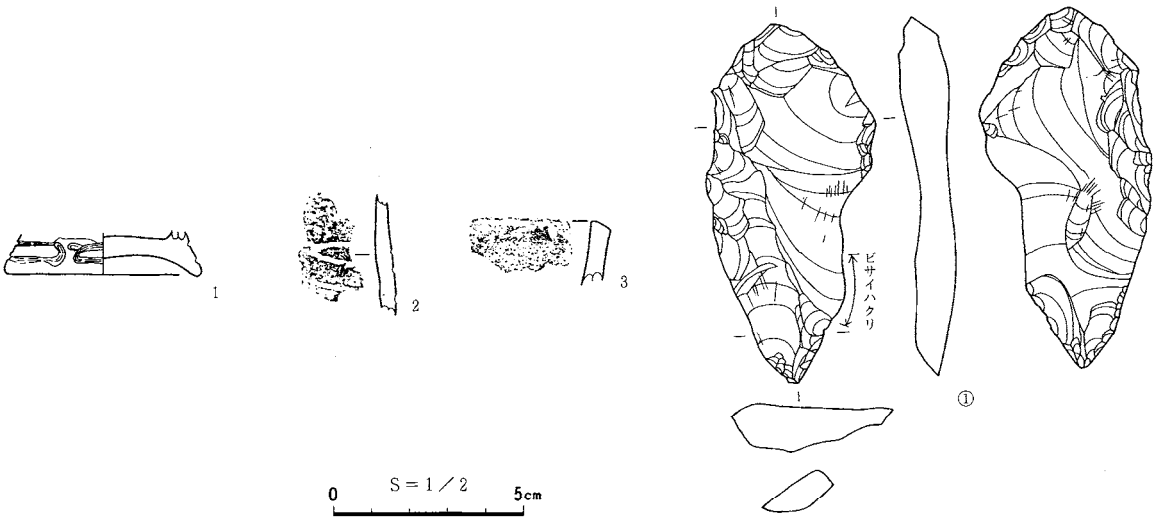


図36　第１号住居跡２

第２号住居跡　（ＳＩ－２）（図37）

位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－234～235・Ⅷ Ｌ－234～235グリッドに位置し、第７号土坑の西側・第６号土坑の北側に隣接する。選地は他の第１・３・４号住居跡と共通する。

確認：第Ⅱ・Ⅲ層除去後に、第Ⅳ・Ⅵ層上面において黒色・黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認。

重複：第7号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形・規模：斜面下側(南側)が残存しない円形または楕円形の竪穴住居跡である。東西幅4.50ｍで、南北幅は不明である。

堆積土：14層に分層された。北側斜面上方からの流れ込みによる自然堆積と考えられる。

壁：北側・東側・西側で壁の立ち上がりを確認した。最も残りの良い北側で約45cmの高さとなり、にほぼ垂直に立ち上がる。東側では約20cm外側に開きながら、西側ではほとんど残っていない。基本層序Ⅵ層で構成される。

床面：床面は北側を基本層序Ⅵ層、南側を基本層序Ⅳ層で構成する。

炉：検出されなかった

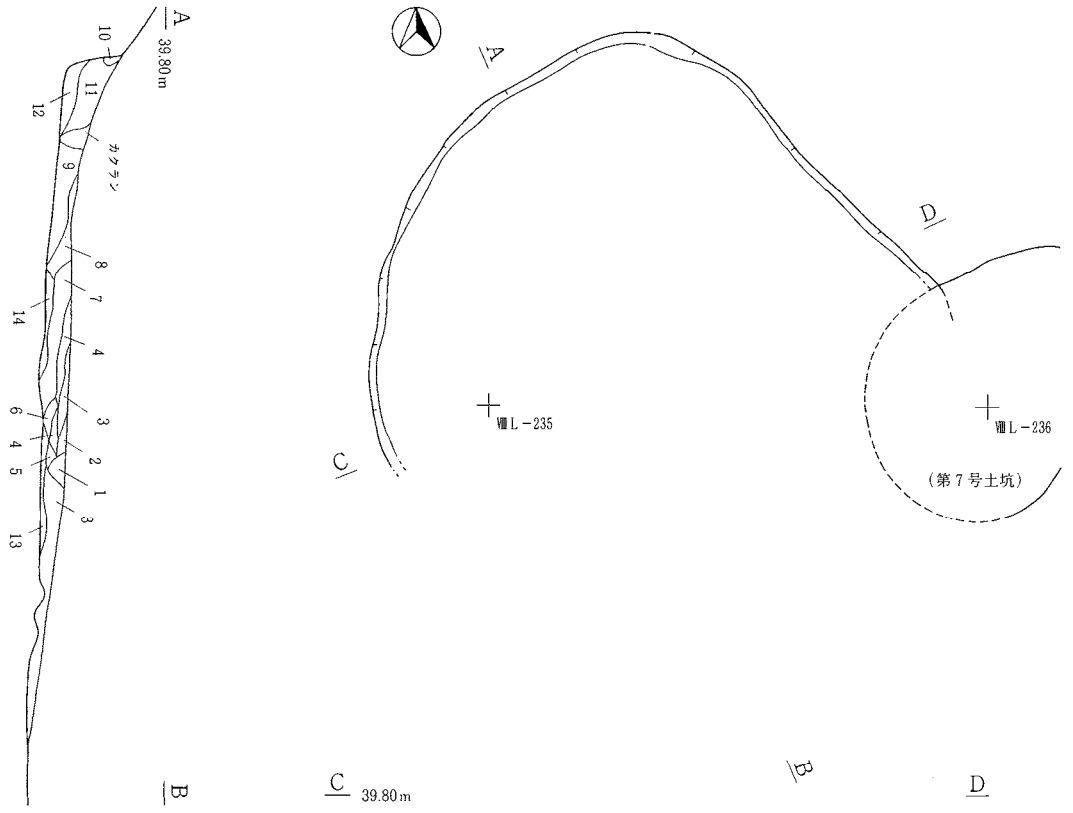
柱穴：検出されなかった

施設：検出されなかった

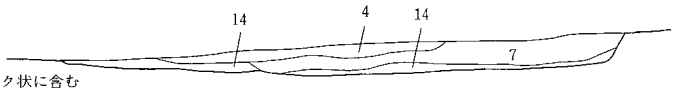
出土遺物：床面南側に、縄文時代後期後葉の注口形土器または壷形土器の体部破片が散在していた。球状の体部と考えられ、上下に幅2～3mmの浅い沈線を引くことで生じる1.5mm程の細隆線(微隆起線)を用いて文様を描いている。全体の文様モチーフの詳細は不明であるが、左上がりの入組み文が上下2段に展開するものと考えられる。縄文は施されず、体部外面には丁寧なミガキが施され、その上に鮮やかな赤色(10Ｒ5／8)顔料が塗布されている。体部下半内面には横方向の丁寧なナデ痕が見られる。また５はRL縄文を上下方向に施す深鉢形土器の口縁部破片である。同一個体の体部破片も覆土１層から出土しているが、流れ込みによるものと考えられる。

石器は石匙１点、スクレイパー（石鏃？）１点、Ｕフレイク２点、大型の台石１点が出土した。

時期：床面出土の細隆線で入組み文を施す注口(壷)形土器は、縄文時代後期後葉十腰内Ｖ式期土器と考える。　（遺構・土器は永嶋、石器は畠山）



層	色相	土色	しまり	礎	混入物など
1	10YR1.7/1	黒　色	中	弱	炭化物微量含む
2	10YR2/1	黒　色	弱	中	褐色土を少量含む
3	10YR2/1	黒　色	中	弱	炭化物微量・黄褐色土をブロック状に含む
4	10YR1.7/1	黒　色	やや強	中	炭化物微量混入
5	10YR5/8	黄褐色	弱	弱	10YR6/6(明黄褐色)の粒子を多量に含む
6	10YR3/1	黒褐色	やや強	中	赤色顔料残存土器出土
7	10YR3/1	黒褐色	やや強	やや強	φ3～5mmの粒子を微量含む
8	10YR2/2	黒褐色	弱	弱	根多し
9	10YR3/1	黒褐色	弱	弱	褐色土・にぶい黄褐色土をブロック状に含む
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	やや強	弱	壁面の崩落土
11	10YR3/1	黒褐色	中	中	
12	10YR2/1	黒　色	弱	中	φ2mm程度の炭化物微量に含む
13	10YR4/6	褐　色	やや強	弱	
14	10YR2/1	黒　色	強	弱	床面の土に7層が混じった土層



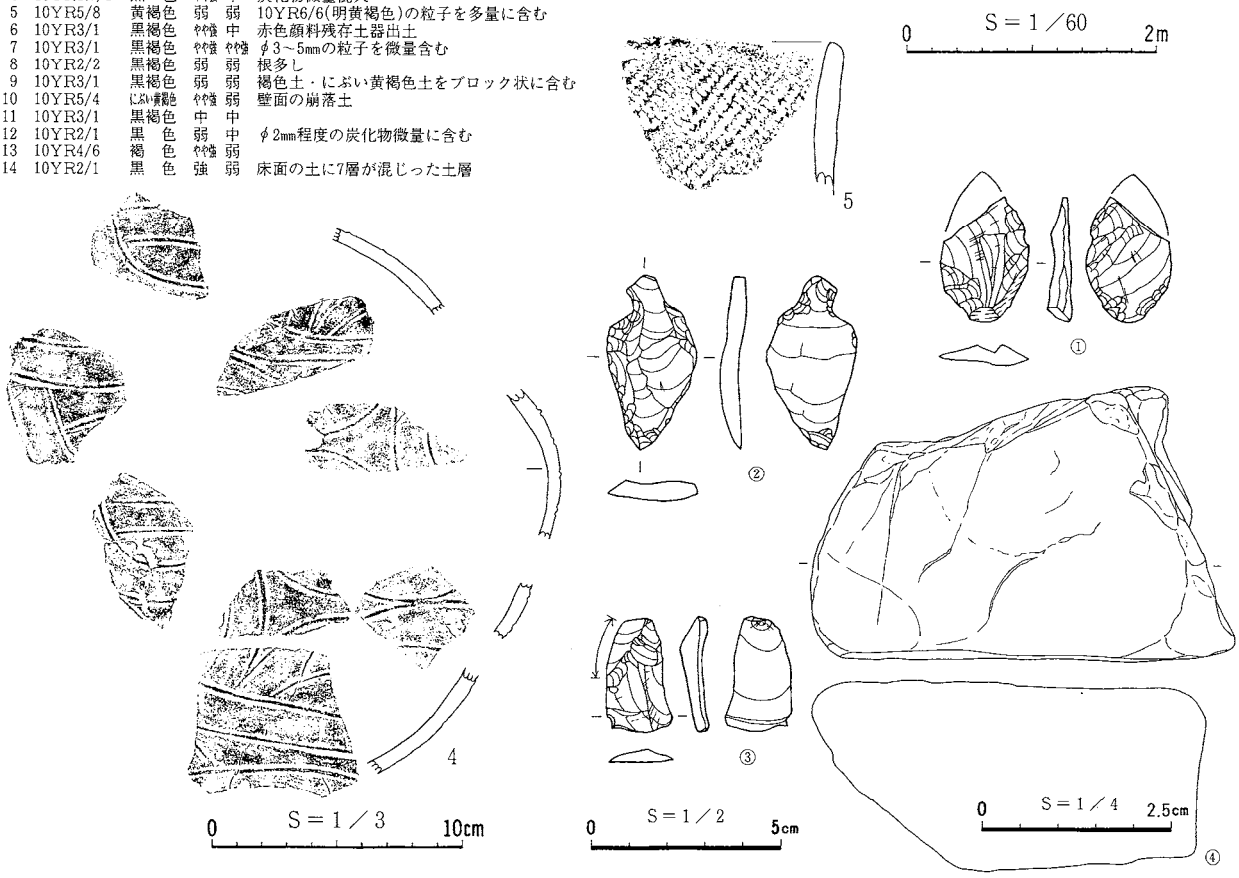


図37　第２号住居跡

第３号住居跡（ＳＩ－３）（図38～41）

位置：A区ⅧＧ－226～227・ⅧＨ－226～227グリッドに位置する。

確認：第Ⅱ・Ⅲ層除去後、第Ⅳ・Ⅵ層上面において黒色・黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認した。

重複：なし。床面南東部において一部風倒木による撹乱がみられる。

平面形・規模：斜面下側（南側）の壁・床面が残存していない竪穴住居跡であり、南北幅は不明、東西幅は5.9ｍの円形の竪穴住居跡と考えられる。床の硬化面は北壁から南へ3.8ｍ付近までである。

堆積土：覆土は11層に分層した。炭化物や焼土粒を含む層が多いことが特徴である。北壁近くの床面に深鉢・鉢形土器が２点倒立状態で設置されており、またもう1点完形に復元できる鉢形土器も近くにみられ、床面に設置後に人為的に住居跡が埋め戻された可能性が非常に高い。

壁：北側で45㎝、西側と東側で30㎝やや外側に傾斜しながら立ち上がる。

床面：南側を風倒木や後世の削平で失い、北半に硬化面が良好に残存する。東西方向はほぼ平坦であるが、南北方向では南側ほど床面レベルが下がる傾向にある。北側の一部は基本層序Ⅵ層であるが、大部分が基本層序Ⅳ層である。

炉：住居跡中央付近で20×30㎝の楕円形の赤褐色（7.5YR4／6）焼土ブロックを検出した。付近にも小さな焼土ブロックがみられ、明確な地床炉は検出されなかったが、焼土から北西約80㎝に位置するpit3としたものは、深さ5㎝程と柱穴にしては浅く地床炉であった可能性も考えられる。

柱穴：主柱穴と考えられるものは２個検出した。pit1は深さ40㎝、pit2は深さ20㎝となる。壁柱穴は第1・４号住居跡のように縄文時代後期中葉～後葉の住居跡に多く見られるが、検出した3個の小pitは、木の根の穴等の誤認の可能性もある。また図示していないが９の土器の下には直径30㎝の円形で深さ10㎝程の落込みが確認された。住居内南側には主柱穴、壁柱穴ともに検出されなかった。

施設：確認できなかった。またpit1とpit3の間を通る浅い溝状の窪みが見られたが性格不明である。また住居内東側に東西幅約2.5ｍの広く浅い窪みを検出したが性格不明である。

出土遺物：床面に倒立状態で１点の鉢・１点の有文の深鉢形土器が設置されていた。またその近くにもう1点設置後に土圧で潰れたと考えられる復元可能な鉢形土器が1点見られた。北～北西側の壁面から15～30㎝程離れたところに、100㎝弱の間隔で西から無文の鉢（８）、縄文のみ施された鉢（９）、羽状の縄文帯で入組み文が構成される有文の深鉢形土器(10)と並ぶ。８は口径20㎝・底径6.7㎝・高さ16.7㎝の上げ底となる無文の鉢形土器である。口縁部は僅かに内側に肥厚する部分も見られるが顕著ではない。外面全面には幅４㎜の工具痕を残す雑な篦ミガキが施され、器表面には凹凸が多く見られる。外面のミガキは、口縁部付近では横方向、体部上半では左上⇔右下方向、体部下半では上⇔下方向に施される。口唇部は雑なミガキによって波状気味になる部分もある。内面にも４㎜幅の工具痕を残す篦ミガキが口縁部～体部上半までは横方向、体部下半では左下⇔右上方向に施される。内外面に炭化物の付着が著しく、外面は体部下半に光沢を有するタール状の炭化物、内面は体部上半に焦げ付きが明瞭に残る。体部下半は炭化物が全く付着せず、それより上位と明瞭に区別できる。炭化物の付着パターンは９の土器も同様であり、この法量をほぼ同じくする２点の鉢形土器は煮沸においても同様の使用であったと思われる。９は口径22㎝・底径7.2㎜・高さ16.5㎝の0段多条の単節羽状縄文が横回転で施される鉢形土器である。縄文原体の長さは約1.3㎝程で、口縁部～底部直上まで14～15段の横方向の施文がなされている。外面底部付近のみ無文となり、８と同様のミガキが施され、口唇部の

ミガキ調整も同様であり、製作技法において強い共通性を有する。口唇部内面側はやや肥厚する所も見られるが顕著ではない。

10の土器は口径29.5cm・胴部最大径25.5cm、底径7.5cm・器高約26cm。口縁部から頸部にかけて平行沈線によって上下を区画された縄文帯が３段施される。上位より、１・２段目までは0段多条のLR・RLの羽状縄文であるが、３段目は両原体を用いて、狭い文様帯を斜行縄文で充填する。底部から３～４cm上までは主に0段多条RL縄文が施される。頸部と底部付近の縄文帯の間には、羽状縄文が充填されるやや複雑化した入組み文が５単位施される。すべて沈線区画の縄文帯で文様が描かれるが、施文順位は①口縁～頸部・底部付近の縄文帯施文、②割付に応じて基本となる入組み文の左側部分を体部中位～底部付近縄文帯まで施文、③②と対応する入組み文右側部分を頸部縄文帯～体部中位まで施文、④②の入組み文左側部分から底部付近縄文帯に垂下する縦位の弧状縄文帯を施文、⑤④の弧状縄文帯から横位に伸びる弧状縄文帯で右隣の入組み文と接続する。しかし５単位中２単位においてこの横位の弧状縄文帯は見られない。縄文帯間の無文部には工具痕を明瞭に残すミガキを施す。口唇部には内面側に肥厚する８単位の山形突起が施される。内面は体部下半と口縁部付近に、外面は口縁部から体部上半にかけて炭化物が明瞭に付着する。８・９・10のいずれも明瞭に炭化物が内外面の一定の部位に明瞭に付着しており、被熱によって器面の赤化・焼けはじけが見られ、繰り返しの煮沸目的の使用が考えられる。生活用具として使用されていた土器が、住居を廃絶するときに意図的に北側壁付近に逆さに設置したものと考えるのが自然であろう。６は床面出土の大きな波状口縁を有する鉢形土器の口縁部破片である。口縁部には波頂部両端に向かい合う山形突起、谷部には内面側が肥厚する山形突起が付され、おそらく４単位の波状口縁となり、波状文となる沿口沈線２条間にキザミを充填する。波頂部直下には縄文帯が垂下し、その間の谷部を中心とした部分に木葉状の羽状縄文帯が配置される。内面は調整痕が明瞭なミガキが施される。10の土器よりやや古手の要素を有している。

石器はスクレイパー４点、Ｒフレイク３点、Ｕフレイク1点、磨石３点、凹石２点が出土している。

時期：床面設置の有文深鉢形土器のやや複雑化した入組み文から縄文時代後期後葉の竪穴住居跡である。

（遺構･土器は永嶋、石器は畠山）

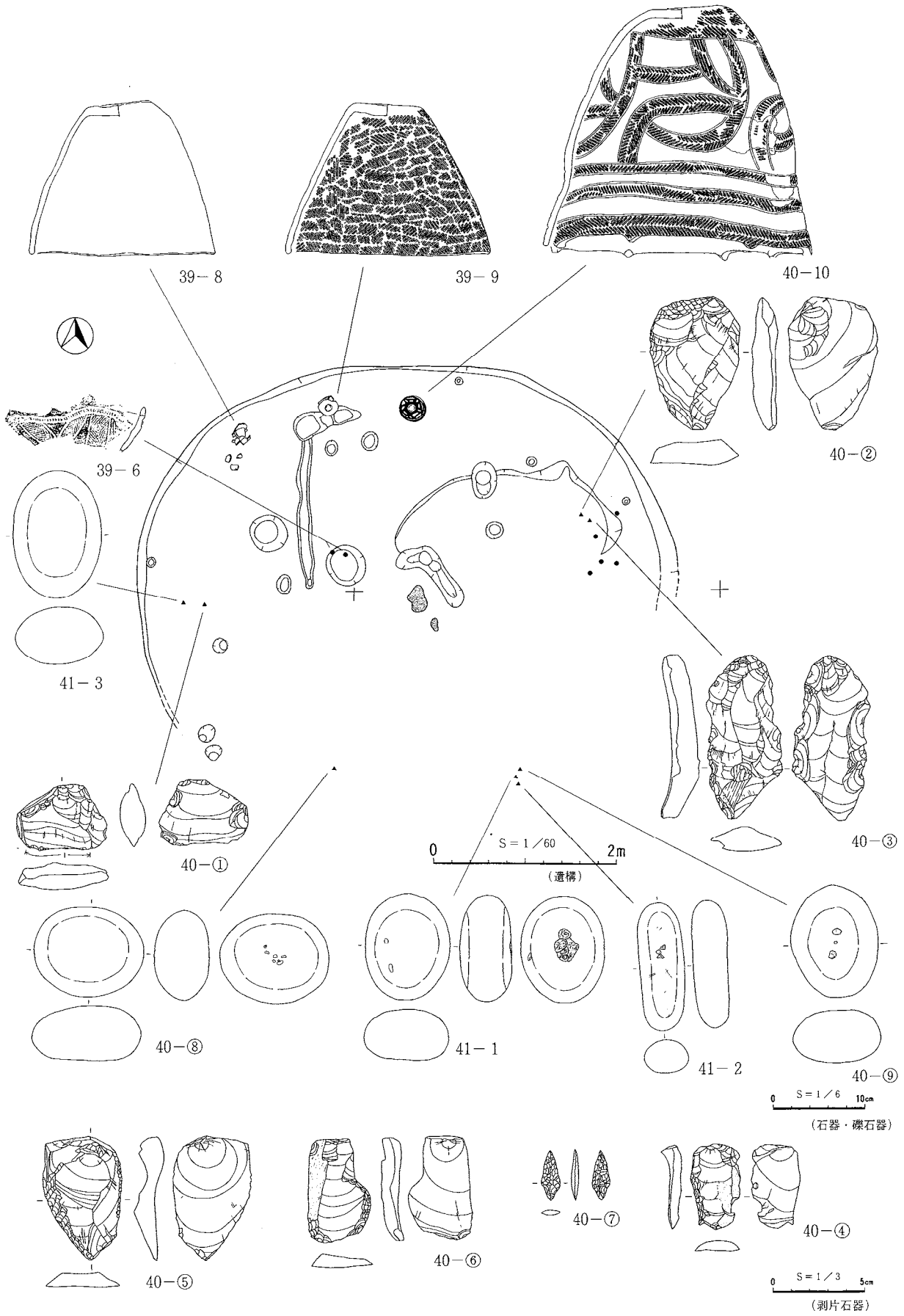
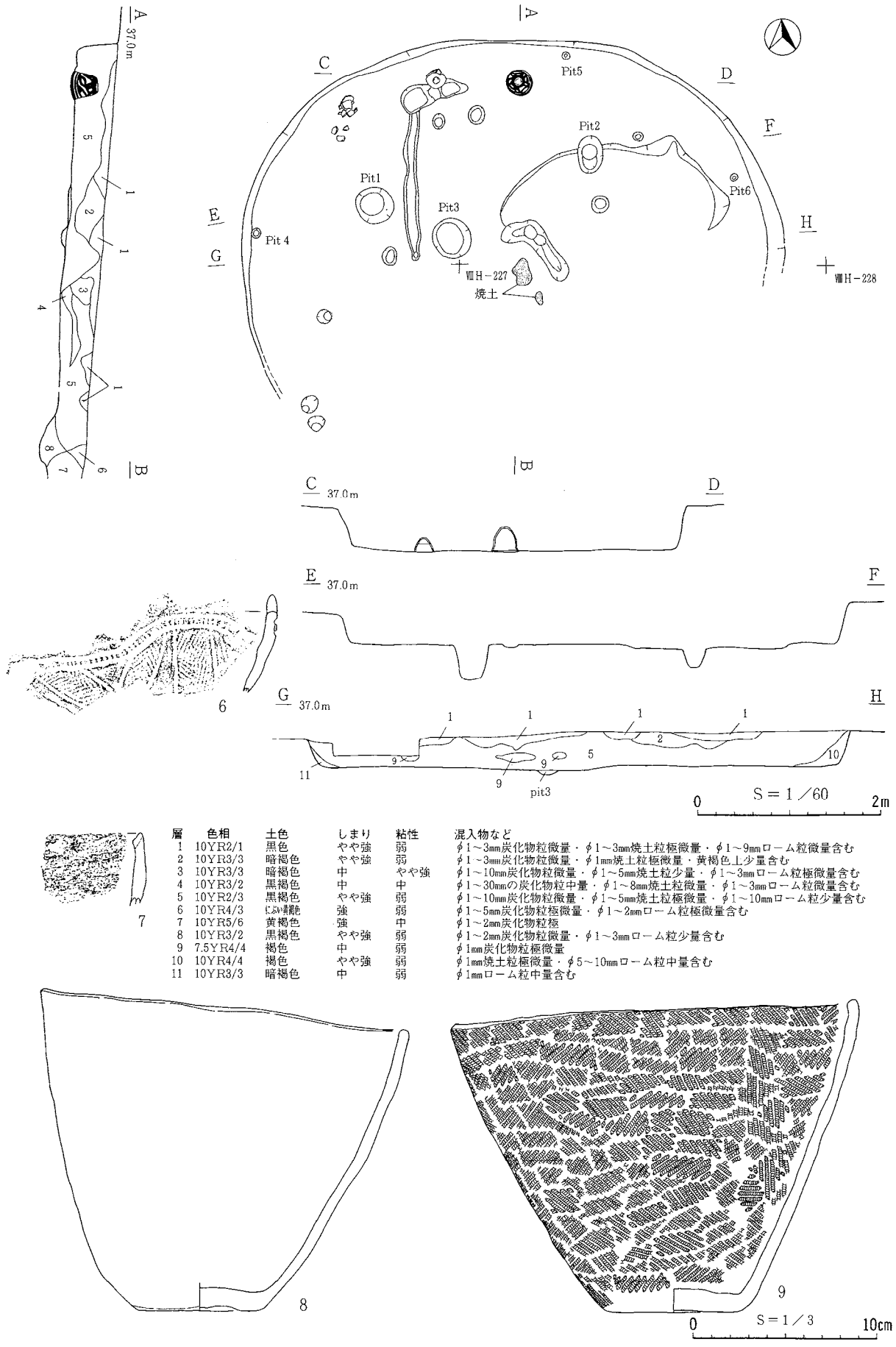


図38　第３号住居跡１　遺物の出土状況



層	色相	土色	しまり	粘性	混入物など
1	10YR2/1	黒色	やや強	弱	φ1～3㎜炭化物粒微量・φ1～3㎜焼土粒極微量・φ1～9㎜ローム粒微量含む
2	10YR3/3	暗褐色	やや強	弱	φ1～3㎜炭化物粒微量・φ1㎜焼土粒極微量・黄褐色土少量含む
3	10YR3/3	暗褐色	中	やや強	φ1～10㎜炭化物粒微量・φ1～5㎜焼土粒少量・φ1～3㎜ローム粒極微量含む
4	10YR3/2	黒褐色	中	中	φ1～30㎜の炭化物粒中量・φ1～8㎜焼土粒微量・φ1～3㎜ローム粒微量含む
5	10YR2/3	黒褐色	やや強	弱	φ1～10㎜炭化物粒微量・φ1～5㎜焼土粒極微量・φ1～10㎜ローム粒少量含む
6	10YR4/3	にぶい黄褐	強	弱	φ1～5㎜炭化物粒極微量・φ1～2㎜ローム粒極微量含む
7	10YR5/6	黄褐色	強	中	φ1～2㎜炭化物粒極
8	10YR3/2	黒褐色	やや強	弱	φ1～2㎜炭化物粒微量・φ1～3㎜ローム粒少量含む
9	7.5YR4/4	褐色	中	弱	φ1㎜炭化物粒極微量
10	10YR4/4	褐色	やや強	弱	φ1㎜焼土粒極微量・φ5～10㎜ローム粒中量含む
11	10YR3/3	暗褐色	中	弱	φ1㎜ローム粒中量含む

図39　第３号住居跡２

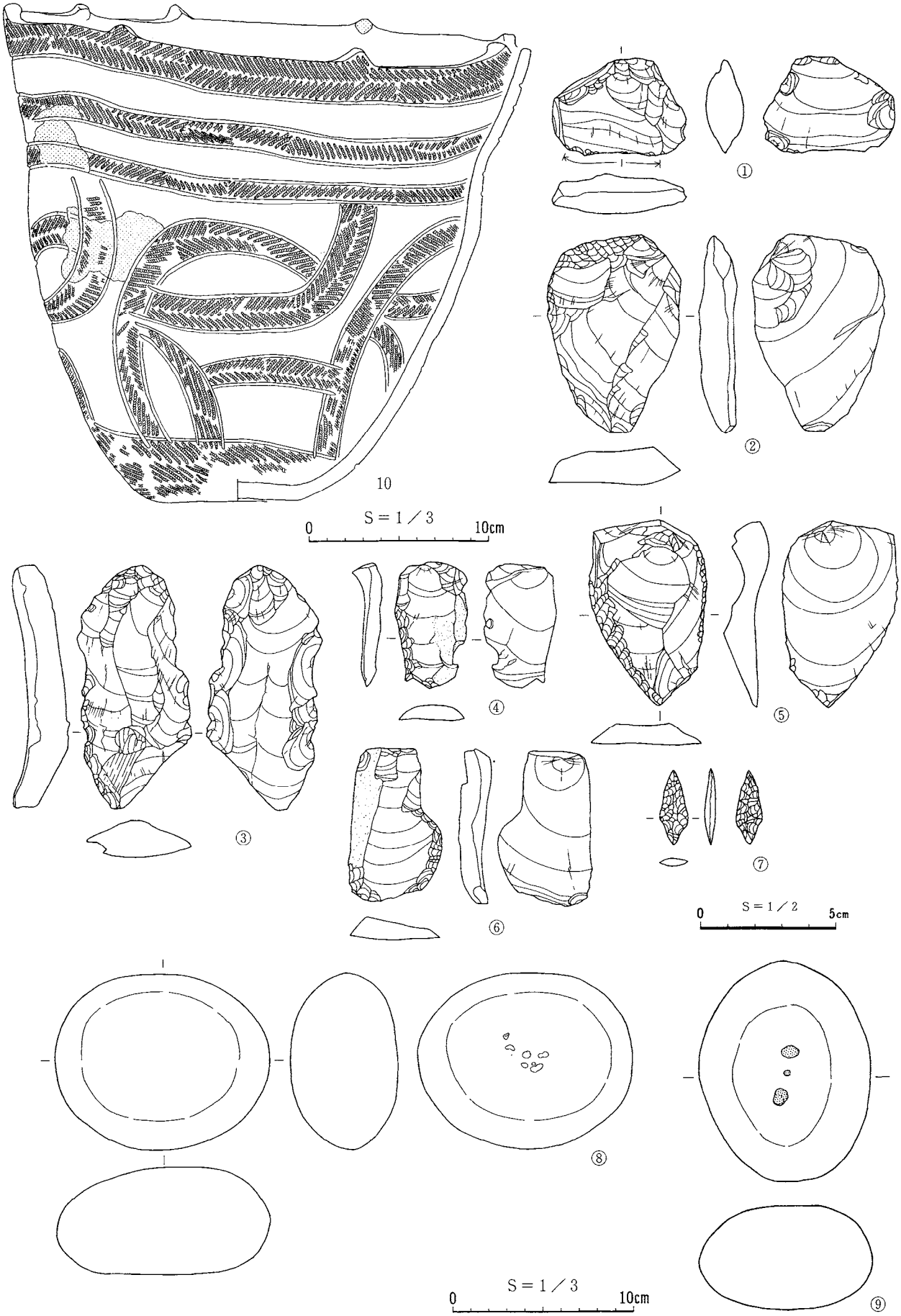


図40　第３号住居跡３

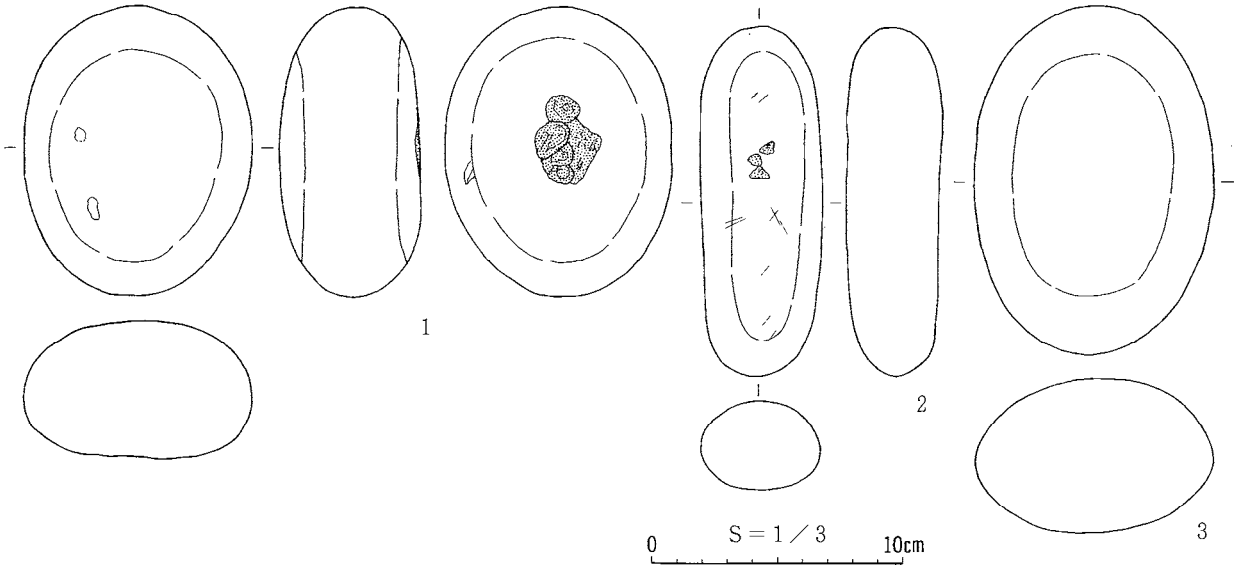


図41　第３号住居跡４

第４号住居跡（ＳＩ－４）　（図42・43）

位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－232～233、Ⅷ Ｌ－232～233グリッドに位置する。

確認：第Ⅱ層除去後、第Ⅳ・Ⅵ層上面において黒色･黒褐色の楕円形の落ち込みとして確認。

重複：住居内西壁寄りで第５号土坑と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形･規模：斜面下側(南側)の壁・床面が残存しない竪穴住居跡である。平行する短溝として検出した出入り口跡中間を通る線を主軸と考えた。出入り口施設の外側を壁が周ると考えられる。主軸長4.2cm、直交長4.7cmの楕円形を呈すると推定される。主軸方向はＮ－28°－Ｗを向き、西南に位置する第１号住居跡例と類似する。

堆積土：第5号土坑の覆土をあわせて12層に分層された。黒色・黒褐色の土が多く見られ、斜面上側からの土砂流入による自然堆積と考えられる。

壁：北側斜面で60～80cm残り、やや外側に傾斜して立ち上がる。北側壁はすべて基本層序Ⅵ層で構成され、低い東西壁は基本層序Ⅳ層で構成される。

床面：東西方向では平坦であるが、南北方向にやや傾斜し南側に下がる。

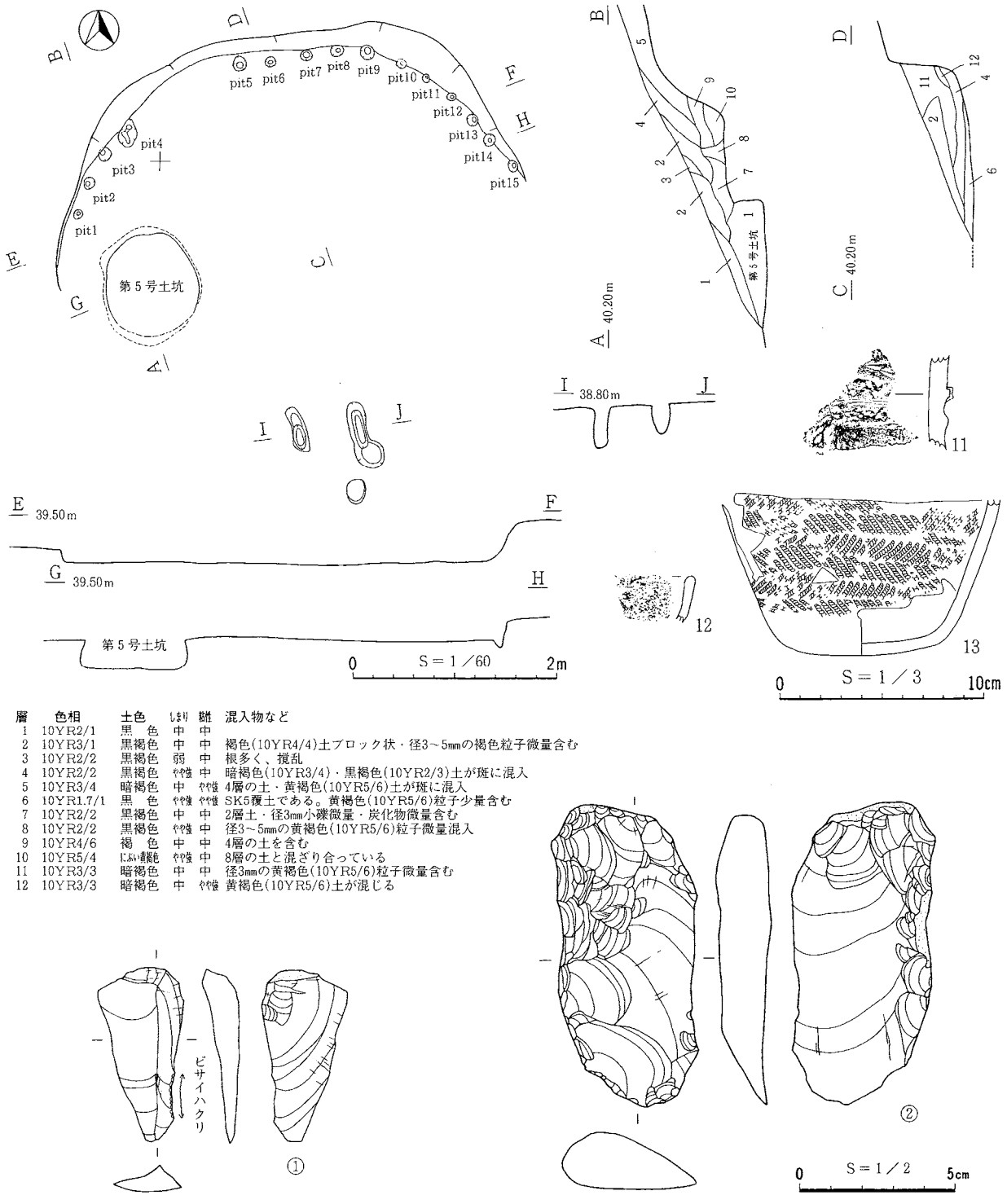
炉：検出されなかった。

柱穴：壁柱穴のみ15個確認された。深さはpit1(5.4cm)・pit2(5.6cm)・pit3(4.9cm)・pit4(8.0cm)・pit5(5.0cm)・pit6(4.5cm)・pit7(7.0cm)・pit8(7.7cm)・pit9(10.5cm)・pit10(17.7cm)・pit11(6.7cm)・pit12(9.5cm)・pit13(9.4cm)・pit14(7.7cm)・pit15(9.6cm)であり、平均約8cmである。

施設：出入り口施設とされる長さ約45cm・底面幅約8cmの溝を2条平行する状態で検出した。深さは西側の溝が40cm・東側の溝が30cmとなる。出入り口方向はＳ－28°－Ｅを向き、第１号住居跡例と類似する。

出土遺物：11は縄文時代後期初頭の深鉢形土器の破片と考えられ、5mm前後の隆帯に縄文が施される。12は無文のミニチュア土器の口縁部と考えられる。13は床面から出土した羽状縄文が施される鉢または深鉢形土器の体部下半であり、底径8cmの丸底気味となる。底部の端部は調整によって丸みを帯び、工具痕を明瞭に残すミガキなど、第３号住居跡出土の３点の完形土器の底部端部のつくりと共通する。縄文原体の幅は1.3cm程度と9と共通する。接合面で割れ、上位の部位を欠する。

石器はスクレイパー２点、Ｒフレイク１点、Ｕフレイク１点、凹石３点、台石１点が出土した。
時期：13の土器は第３号住居跡出土の３点の完形土器とその製作技法において共通し、ほぼ同時期の縄文時代後期後葉の住居跡と考えられる。また第１号住居跡と主軸･出入り口施設の方向が一致していることから、第１・３・４号住居跡はほぼ同時期と考えられる。（遺構･土器は永嶋、石器は畠山）



層	色相	土色	しまり	粘	混入物など
1	10YR2/1	黒　色	中	中	
2	10YR3/1	黒褐色	中	中	褐色(10YR4/4)土ブロック状・径3～5㎜の褐色粒子微量含む
3	10YR2/2	黒褐色	弱	中	根多く、撹乱
4	10YR2/2	黒褐色	やや強	中	暗褐色(10YR3/4)・黒褐色(10YR2/3)土が斑に混入
5	10YR3/4	暗褐色	中	やや強	4層の土・黄褐色(10YR5/6)土が斑に混入
6	10YR1.7/1	黒　色	やや強	やや強	SK5覆土である。黄褐色(10YR5/6)粒子少量含む
7	10YR2/2	黒褐色	中	中	2層土・径3㎜小礫微量・炭化物微量含む
8	10YR2/2	黒褐色	やや強	中	径3～5㎜の黄褐色(10YR5/6)粒子微量混入
9	10YR4/6	褐　色	中	中	4層の土を含む
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	やや強	中	8層の土と混ざり合っている
11	10YR3/3	暗褐色	中	中	径3㎜の黄褐色(10YR5/6)粒子微量含む
12	10YR3/3	暗褐色	中	やや強	黄褐色(10YR5/6)土が混じる

図42　第４号住居跡１

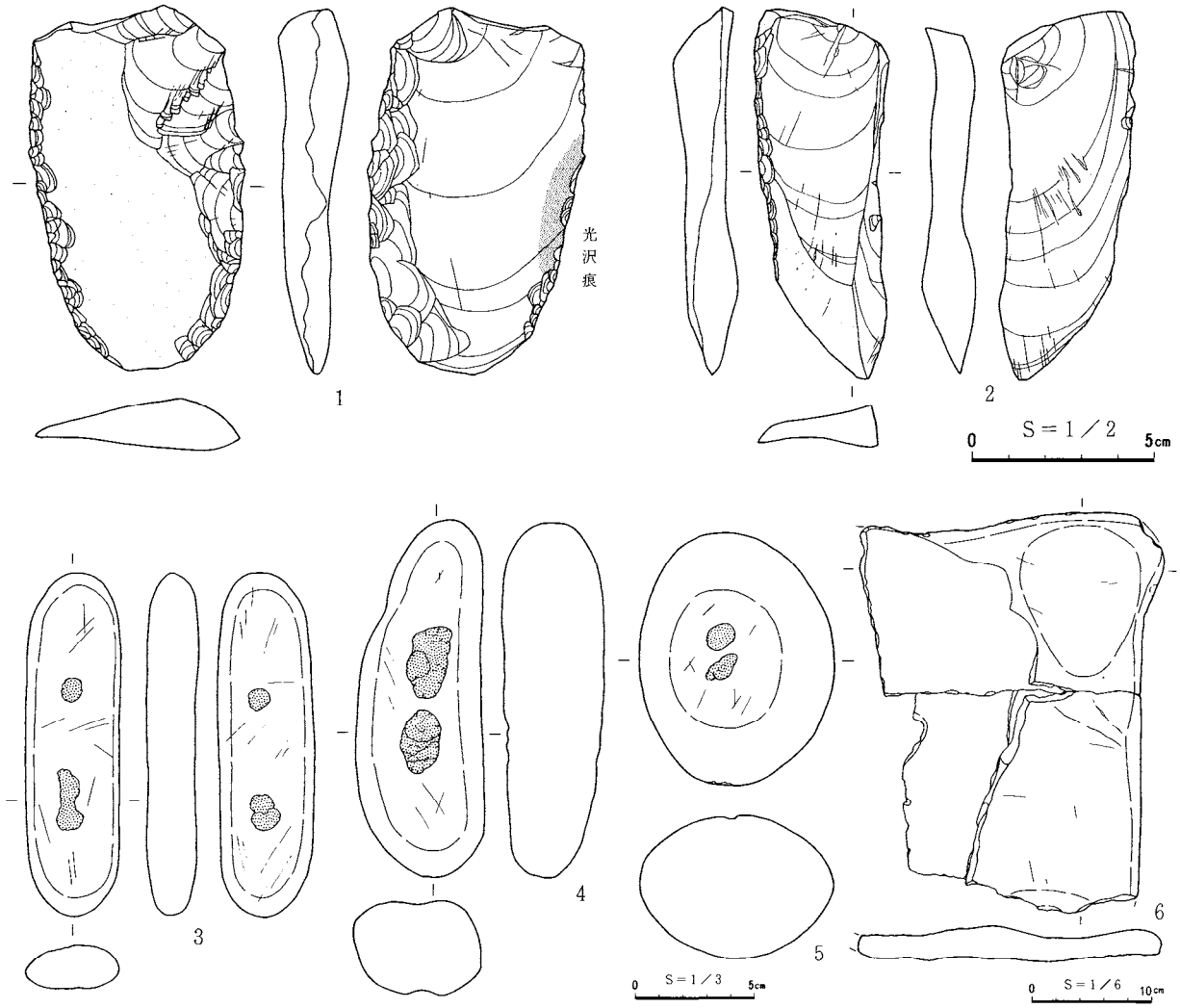


図43　第４号住居跡２

第５号住居跡（ＳＩ－５）（図44・45）

位置と確認：Ｂ区ⅣＩ・ⅣＪ－271グリッドに位置している。削平が激しく、床面の一部分と石囲炉を確認しただけで、全容は不明である。なお、床面は石囲炉周辺まで連続していないため、これらが同時存在を示すものか時間差を示すものか断定できない。

平面形・規模：不明である。

壁・床面：壁は確認できなかった。床面は一部分を検出しただけである。

炉：南東部で石囲炉を検出した。かなり壊されているため全体の形状は不明であるが、原位置を保っている炉石から方形ないしは「コ」の字状を呈するものと思われる。なお、炉石が出土した辺りには、２個の浅い楕円形のpit（pit６、７）を検出したが、これと炉の完形は不明である。なお、pit６は55×70cm・深さ11cm、pit７は75×90cm・深さ16cmの規模である。

周溝：検出できなかった。

柱穴：本住居跡に伴うと思われる柱穴を５個検出した。

堆積土：ほとんどが削平され、確認できなかった。

出土遺物：14～16は床面出土の土器である。14は4単位の波状口縁となる縄文時代中期末の有文深鉢である。全体をRLR複節縄文が縦走し、幅3cm程の無文帯で文様が構成される。無文帯部が文様を表

現しており、縄文部が文様を表現する段階よりは新しい大木10式期と考えられよう。土器のプロポーションも中期的器形を脱し、後期的器形を呈する。波頂部下に楕円形の文様が配され、それが無文帯で隣の楕円形文と連結し、無文帯で全ての波頂部下の楕円形文が横に繋がる。楕円形文頂部に1点、下部の無文帯との交差部に２点のヒレ状突起が付される。また波頂部内面には5㎜ほどの隆帯が垂下し、二又に分かれて隣の波頂部の垂下隆帯と繋がる。15は厚手の深鉢形土器であり、体部下半に焦げ付きと考えられる炭化物が付着する。16は1㎜幅の細沈線間に凹部を有するボタン状貼瘤が付される。

17～21は炉覆土内から出土した。17は垂下した沈線が渦巻状を呈する。18は網代痕を有し、LR縄文が施される底部である。19～21は同一個体の大木10式期の平坦口縁の深鉢形土器である。

22～24はpit7内出土である。22･23は口縁部が無文となり、単節LR縦回転の深鉢形土器である。25～34は覆土内出土である。25は文様となる縄文帯中に刺突が施される深鉢であるが、内面に炭化物付着が著しい。26･28は後期初頭の深鉢形土器。29～31は縄文の単節RL左上⇔右下回転の深鉢形土器の口縁部同一個体である。32は網代痕とLR縄文が施される。33は単節LR縄文と結節文が縦方向に施される。34は無文の底部である。

石器は、床面から石皿、砥石、床面直上から磨製石斧、炉からスクレイパー、覆土からＲフレイクが出土している。

時期：出土土器から、大木10式併行と考えられる。　　（土器は永嶋、遺構・石器は畠山）

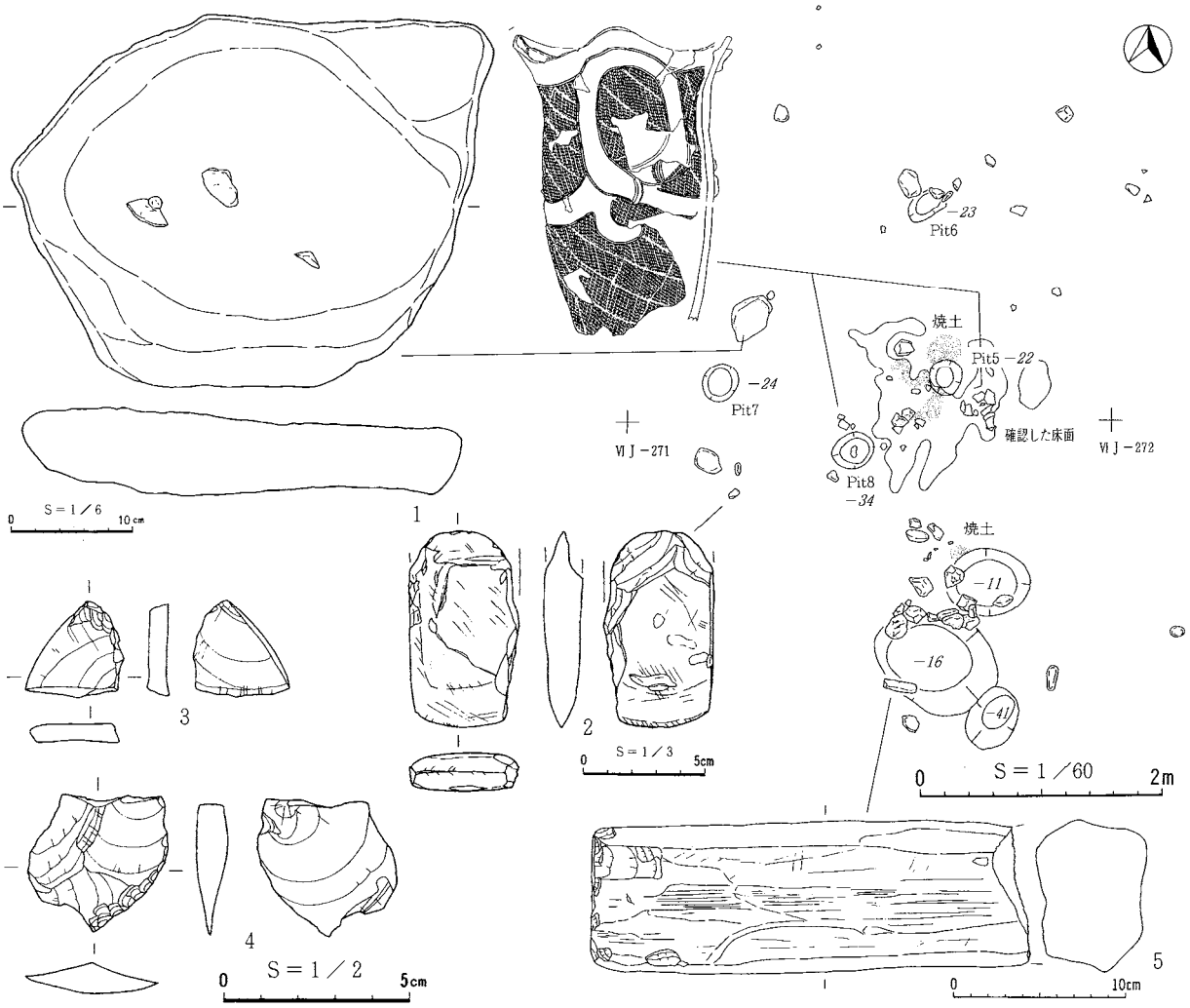


図44　第５号住居跡１

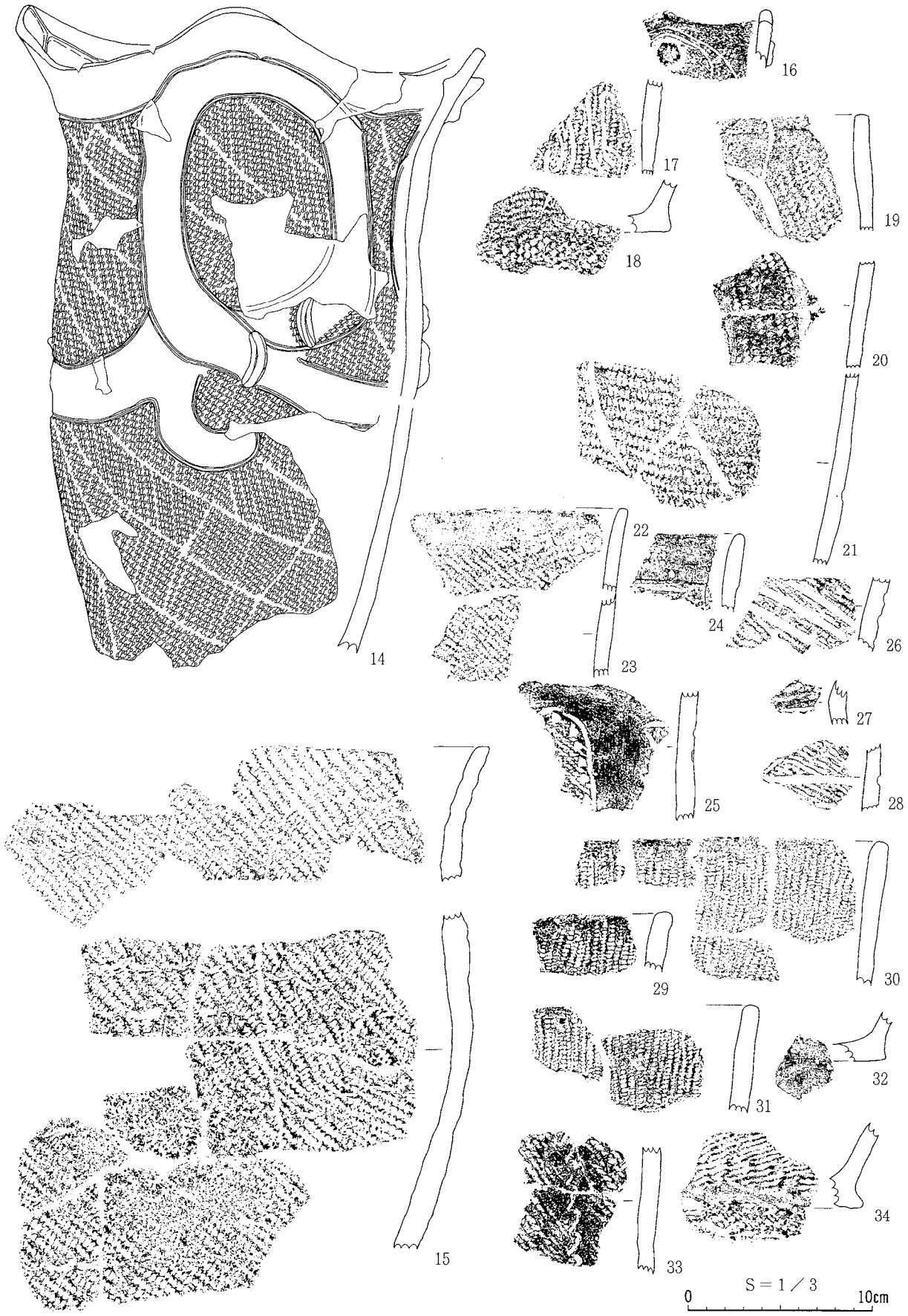

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
S＝1／3
0
10cm

図45　第５号住居跡２

第２節　土　坑

第１号土坑（ＳＫ－１）（図46）

位置：Ａ区Ⅷ Ｉ －229・230グリッドの平坦地に位置する。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底面とも円形を呈している。確認面での規模は、直径1ｍ80㎝、深さ17㎝の浅い土坑である。

壁・底面：壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土：締まりのある黒褐色土のみが見られ、人為堆積と思われる。

出土遺物：北西壁の付近の底面から10㎝ほどの高さのところで、深鉢形土器と台付鉢形土器が出土した。

第２号土坑（ＳＫ－２）（図46）

位置：Ａ区Ⅷ Ｊ・Ｋ－230グリッドの斜面上に位置し、第１号住居跡の北側に隣接している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底面とも円形を呈している。規模は確認面で直径1ｍ37㎝、底面では直径1ｍ47㎝である。深さは、北壁で最大46㎝である。

壁・底面：南壁は検出できなかったが、断面はフラスコ状である。底面は、ほぼ平坦である。

堆積土：３層に分けられ、黒褐色土と黄褐色土とに大別できるが、大半は黄褐色土である。

出土遺物：覆土から、縄文時代後期の土器片が１点出土した。

第３号土坑（ＳＫ－３）（図46）

位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－229グリッドの斜面上に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は確認面、底部とも直径92～97㎝前後のほぼ円形を呈している。深さは、北壁で最大66㎝である。

壁・底面：壁の上部は崩落しているものと思われるが、断面はフラスコ状である。また、土器が出土した部分の壁は、さらに外側へ掘り込まれ、オーバーハングの度合いが強い。底面には若干の凹凸が見られるものの、ほぼ平坦である。

堆積土：５層に分けられた。壁際に褐色土が見られるものの、大半は黒色土で占められている。

出土遺物：底面から、粗製の深鉢形土器と台石と思われる石器が出土した。深鉢形土器は、底面に密着して、倒立した状態で出土した。

第４号土坑（ＳＫ－４）（図47）

位置：Ａ区Ⅷ Ｈ－230グリッドの平坦地に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面・底面ともに楕円形を呈している。確認面における規模は短軸１ｍ

11cm、長軸1ｍ53cmで、深さ20cmである。
壁・底面：断面がすり鉢状で、底面から壁にかけて緩く立ち上がっている。そのため、壁と底面との境界がはっきりしない。底面には、やや凹凸が見られる。
堆積土：暗褐色土と黒褐色土の２層に分けられた。自然堆積と思われる。
出土遺物：なし。

第５号土坑（ＳＫ－５）（図47）
位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－230グリッドの緩傾斜地にあり、第４号住居跡内の西壁寄りに位置している。
重複：第４号住居跡と重複し、本土坑の方が新しい。
平面形・規模：南側が不明であるが、確認面、底部ともに楕円形を呈している。規模は、確認面では短軸90cm、長軸1ｍ、底部では短軸1ｍ、長軸1ｍ17cmである。深さは、北壁で最大30cmである。
壁・底面：底面は平坦である。
堆積土：締まりのある黒色土のみの堆積が見られた。
出土遺物：覆土から、フレイク１点が出土した。

第６号土坑（ＳＫ－６）（図47）
位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－235グリッドの平坦地にあり、第２号住居跡の南側に隣接した場所に位置している。
重複：北側を柱穴状の小ピット（時期不明）に切られている。
平面形・規模：確認面、底部ともに楕円形を呈している。規模は、確認面で短軸73cm、長軸82cm、底部では短軸90cm、長軸110cmである。深さ45cmである。
壁・底面：底面は平坦である。
堆積土：締まりのある黒色土のみが見られた。人為堆積と考えられる。
出土遺物：なし。

第７号土坑（ＳＫ－７）（図47）
位置：Ａ区Ⅷ Ｋ・Ｌ－235・236グリッドの平坦地にあり、第２号住居跡東壁と重複した場所に位置している。
重複：第２号住居跡と重複している。新旧関係を把握できなかったが、本土坑の方が新しい可能性がある。
平面形・規模：西側の部分が不明であるが、短軸1ｍ80cm前後、長軸2ｍ40cm前後の不整な楕円形を呈すると思われる。深さは22cmである。
壁・底面：壁は垂直に近く外側へ立ち上がる。底面には凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。
堆積土：やや締まりのある黒色土や黒褐色土がほとんどで、底面近くに褐色土が見られるところもある。
出土遺物：なし。

第８号土坑（ＳＫ－８）（図47）

位置：Ａ区Ⅷ Ｊ－229グリッドの斜面上にあり、第１号住居跡の西側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：南側が検出できなかったが、平面形は、確認面、底面ともに円形を呈するものと考えられる。確認面における規模は、ほぼ直径1ｍ40㎝で、深さは、北壁で最大53㎝である。

壁・底面：断面はフラスコ状を呈しているが、オーバーハングの度合いは弱い。底面は平坦である。

堆積土：３層に分けられたが、大半は黒褐色土で占められている。第１・２層は壁の崩落土であろう。

出土遺物：なし。

第９号土坑（ＳＫ－９）（図47）

位置：Ａ区Ⅷ Ｋ－231グリッドの斜面上にあり、第１号住居跡の北側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面とも楕円形を呈している。確認面における規模は、短軸74㎝、長軸95㎝で、深さは、38㎝である。

壁・底面：壁は垂直に近く外側へ向かって立ち上がるが、北東壁の一部がややオーバーハングしている。底面には、幾分凹凸が見られる。

堆積土：５層に分けられたが、大半が暗褐色土で占められている。

出土遺物：なし。

第10号土坑（ＳＫ－10）（図47）

位置：Ａ区Ⅷ Ｇ－228グリッドの平坦地に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに円形を呈している。規模は、確認面で直径55㎝、底部で直径90㎝である。深さは、最大で67㎝である。

壁・底面：壁の断面はフラスコ状を呈している。底面は平坦である。

堆積土：締まりのある黒色土が観察された。

出土遺物：覆土中央から、柳葉形石鏃が１点出土した。両面に丁寧な調整が施されており、薄く作出されている。

第11号土坑（ＳＫ－11）（図47）

位置：Ｂ区Ⅵ Ｊ－270グリッドの平坦地にあり、第５号住居跡の北西に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに円形を呈している。確認面における規模は、直径が1ｍ50㎝～1ｍ57㎝であり、深さ15㎝である。

壁・底面：壁は外側へ向かって急に立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：３層に分けられたが、黒褐色土が主体である。

出土遺物：覆土から、縄文時代中期円筒上層ｂ式の土器片が出土した。

第12号土坑（ＳＫ－12）（図47）

位置：Ｂ区ⅥＨ・Ｉ－272グリッドの平坦地にあり、第５号住居跡の南側に隣接した場所に位置している。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は、確認面、底面ともに不整な楕円形を呈している。確認面における規模は短軸1ｍ06㎝、長軸1ｍ37㎝で、深さは27㎝である。

壁・底面：壁は緩く外側へ向かって立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土：４層に分けられたが、黒褐色土が主体である。

出土遺物：なし。

（畠山　昇）

第３節　溝状土坑

第１号溝状土坑（ＳＶ－１）（図48）

位置：Ａ区Ⅷ－252・253グリッドに位置する。

重複：なし。

平面形・規模：平面形は溝状を呈しているが、北側に向かって湾曲し、弧状を呈している。規模は確認面で短軸40～58㎝、長軸3ｍ90㎝、底面では短軸15～20㎝、長軸4ｍ08㎝である。深さは、最大65㎝である。

壁・底面：壁は、短軸では垂直に近い立ち上がりで、長軸の両端では袋状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であるが、西から東側にかけて若干傾斜している。

堆積土：５層に分けられたが、締まりのない黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土等の堆積が見られた。人為堆積と考えられる。

出土遺物：なし。

第２号溝状土坑（ＳＶ－２）（図48）

位置：Ａ区ⅧＩ－232グリッドに位置する。

重複：西端が第１号住居跡と重複しているように見える位置に検出したが、重複関係は確認できなかった。

平面形・規模：確認面では短軸73㎝、長軸3ｍ28㎝、底面では短軸15㎝、長さ3ｍ57㎝の溝状を呈している。深さは、最大で1ｍ28㎝である。

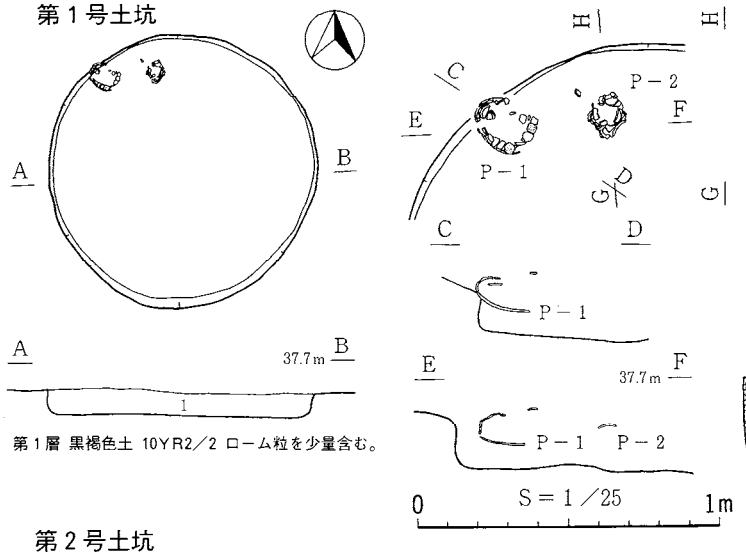
壁・底面：短軸における壁は、底面から垂直に近い立ち上がりで、確認面から50㎝ほど下の辺りからラッパ状に外側へ広がり、全体にＹ字状の断面となっている。長軸の両端では袋状にオーバーハングして掘り込まれている。底面には凹凸が見られ、西側が浅く、東側に向けて徐々に深くなっている。

堆積土：９層に分けられたが、黒褐色土と黄褐色土とに大別でき、人為堆積の様相を見せている。

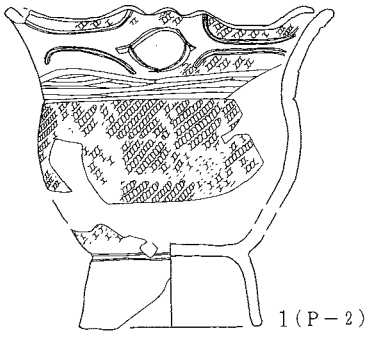
出土遺物：なし。

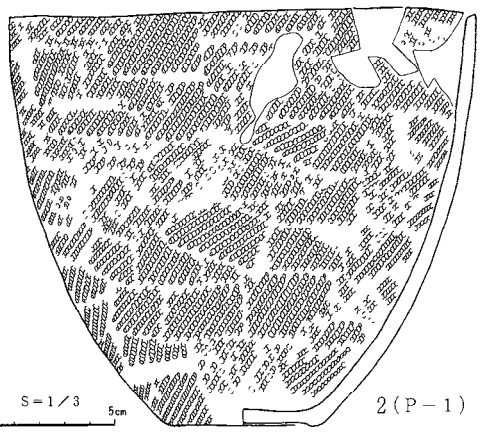
（畠山　昇）

第１号土坑



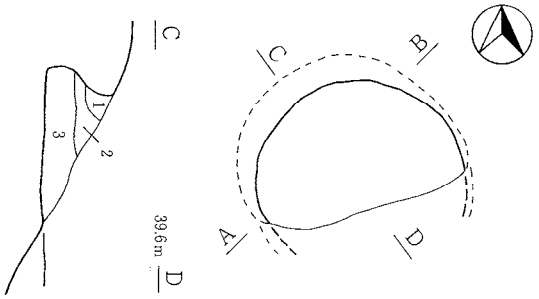
第１層 黒褐色土 10YR2／2 ローム粒を少量含む。


1（P－2）



2（P－1）

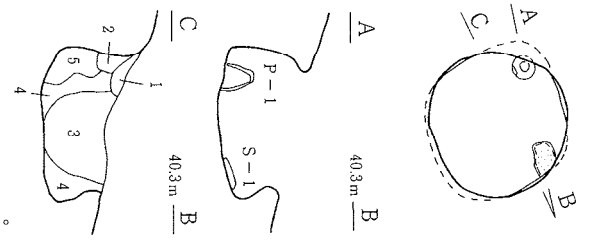
第２号土坑



3

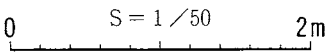
第１層 黄褐色土 10YR5／6
第２層 にぶい黄褐色土 10YR4／3 ローム粒を少量含む。
第３層 黒褐色土 10YR2／2 ローム粒を微量含む。

第３号土坑

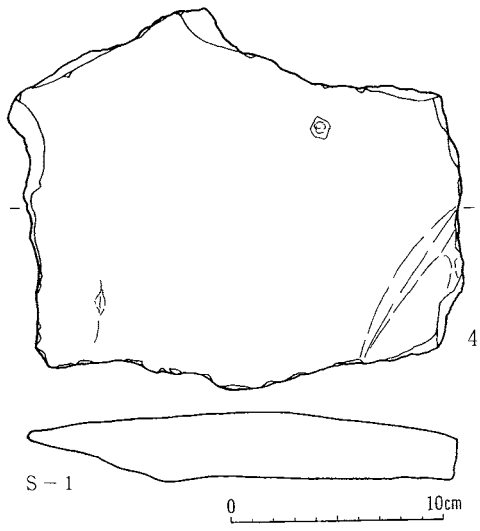


第１層 暗褐色土 10YR3／3 ローム粒を少量含む。
第２層 褐　色　土 10YR4／6
第３層 黒　色　土 10YR2／1
第４層 黒　色　土 10YR2／1
第５層 暗褐色土 10YR3／3　ロームブロックを少量含む。

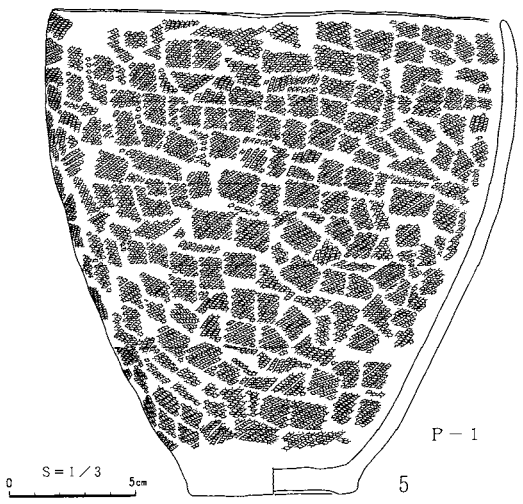
WMK－230



第３号土坑出土遺物

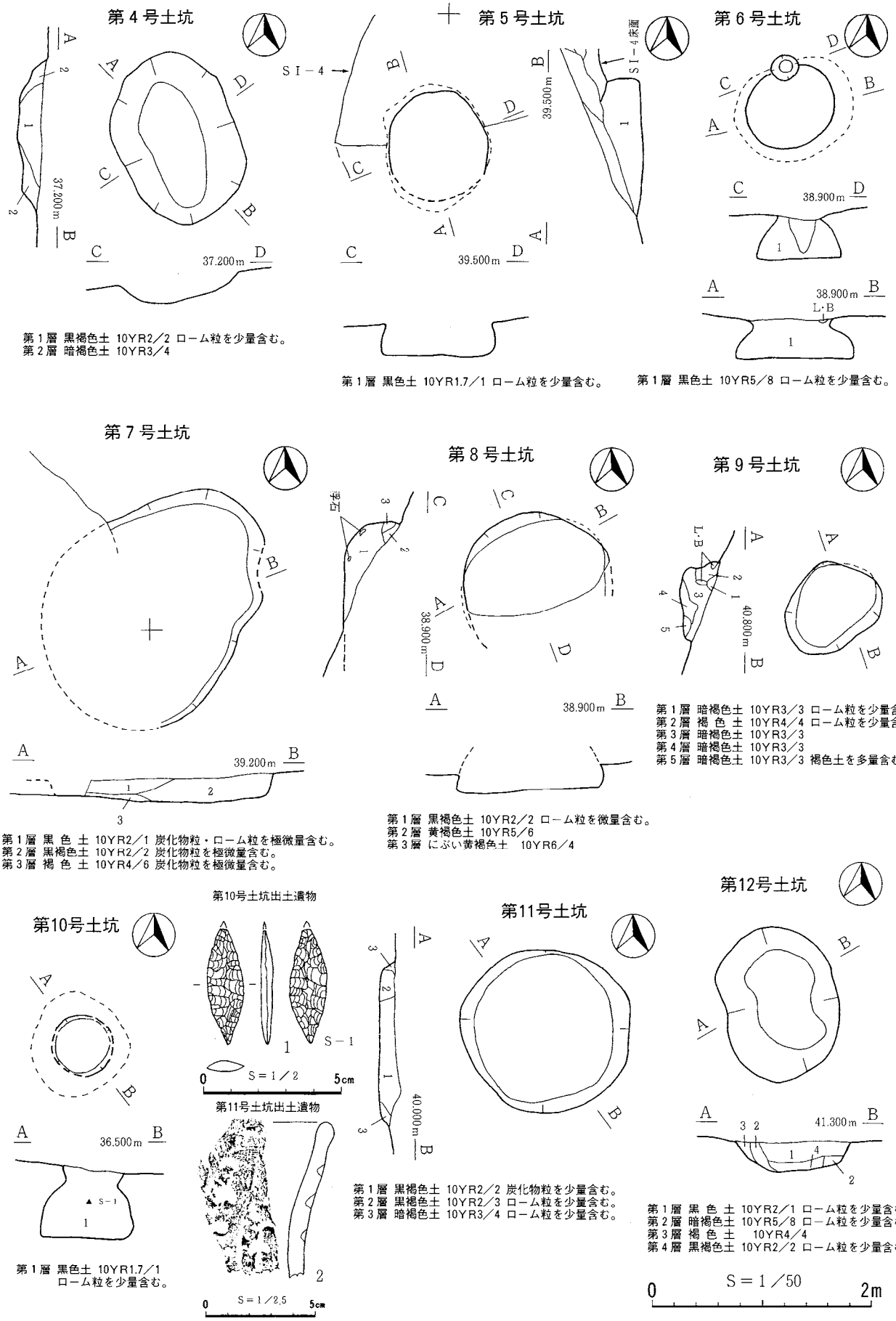


4



5

図46　第１号～第３号土坑



第１層 黒褐色土 10YR2／2 ローム粒を少量含む。
第２層 暗褐色土 10YR3／4

第１層 黒色土 10YR1.7／1 ローム粒を少量含む。

第１層 黒色土 10YR5／8 ローム粒を少量含む。

第１層 黒 色 土 10YR2／1 炭化物粒・ローム粒を極微量含む。
第２層 黒褐色土 10YR2／2 炭化物粒を極微量含む。
第３層 褐 色 土 10YR4／6 炭化物粒を極微量含む。

第１層 黒褐色土 10YR2／2 ローム粒を微量含む。
第２層 黄褐色土 10YR5／6
第３層 にぶい黄褐色土 10YR6／4

第１層 暗褐色土 10YR3／3 ローム粒を少量含む。
第２層 褐 色 土 10YR4／4 ローム粒を少量含む。
第３層 暗褐色土 10YR3／3
第４層 暗褐色土 10YR3／3
第５層 暗褐色土 10YR3／3 褐色土を多量含む。

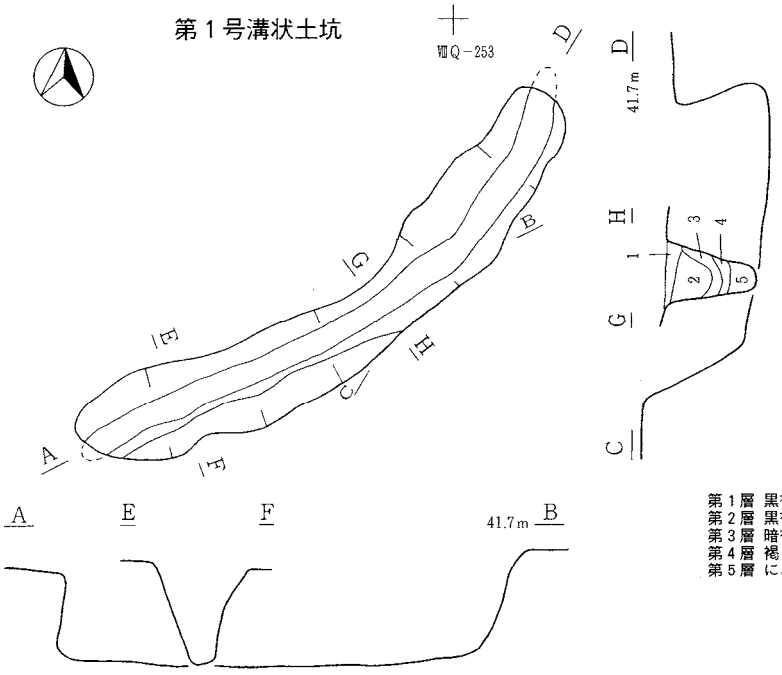
第１層 黒色土 10YR1.7／1
ローム粒を少量含む。

第１層 黒褐色土 10YR2／2 炭化物粒を少量含む。
第２層 黒褐色土 10YR2／3 ローム粒を少量含む。
第３層 暗褐色土 10YR3／4 ローム粒を少量含む。

第１層 黒 色 土 10YR2／1 ローム粒を少量含む。
第２層 暗褐色土 10YR5／8 ローム粒を少量含む。
第３層 褐 色 土　10YR4／4
第４層 黒褐色土 10YR2／2 ローム粒を少量含む。

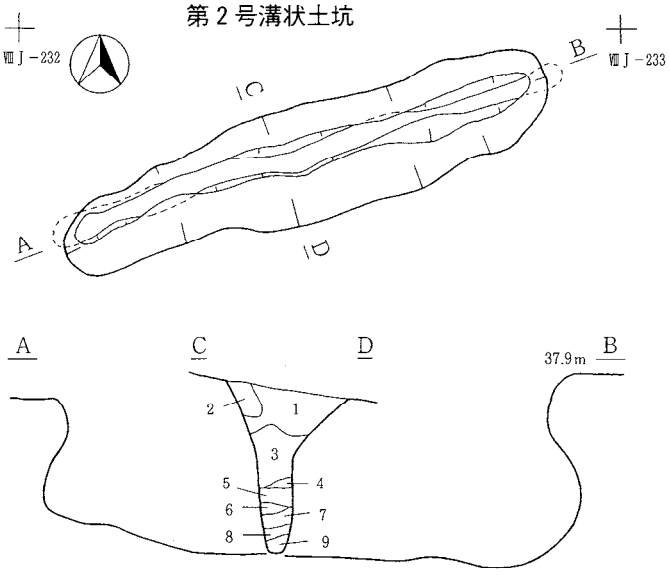
図47　第４号～第12号土坑

第１号溝状土坑



第１層　黒褐色土　10YR2／2
第２層　黒褐色土　10YR3／2　褐色土を少量含む。
第３層　暗褐色土　10YR3／3　褐色土を中量含む。
第４層　褐　色　土　10YR4／4　暗褐色土を多量含む。
第５層　にぶい黄褐色土　10YR5／4

第２号溝状土坑



第１層　黒褐色土　7.5YR3／1　ローム粒を微量含む。
第２層　黄褐色土　10YR5／6
第３層　黒褐色土　10YR3／1　ローム粒を少量含む。
第４層　黒褐色土　10YR2／2　炭化物を少量含む。
第５層　黒褐色土　10YR3／2　ローム中量含む。
第６層　にぶい黄褐色土　10YR4／3
第７層　灰黄褐色土　10YR4／2　ローム粒を少量含む。
第８層　にぶい黄褐色土　10YR5／3　炭化物を多量、ローム粒を中量含む。
第９層　黒褐色土　10YR3／2　炭化物を多量に含む。

S＝1／50
0　2m

図48　溝　状　土　坑

第２章　出土遺物

第１節　土　器

１　Ａ区出土土器

【縄文時代中期終末～後期初頭の土器群】（図49－35～42・44）

［地文のみが施される深鉢形土器］（図49－35～39・44）

35・36は、口頸部で緩やかに外反するものである。35～39・44は単節縄文または(網目状)撚糸文が施されるが、すべて地文原体は縦方向の回転による。39・44は底部に網代痕が認められる。10は口縁部押圧により波状気味の口縁となる。

［隆線上に縄文が施文される深鉢形土器］（図49－40～42）

40は器表面に沈線文が施され、単節RL縄文が充填される。第４号住居跡出土の42－11と同一個体である。41は単節RLが施される隆線が上下対象のモチーフを構成する。42は(推定)口径7.0cm・(推定)底径4.0cm・器厚7.7cmの小型深鉢である。口頸部は無文で、幅7mmほどの頸部突帯には単節RL原体の側面圧痕、体部には単節RLが縦回転によって施される。

【縄文時代後期中葉～後葉の土器群】（図49･50－43・45～61）

［地文のみが施されるものまたは無文の深鉢形土器］（図49－43・45～47）

45は底部の端部を丸みをもって作り出すことや底部内面中央がやや盛りあがる点に、第３・４号住居跡出土の8・9・10・13と共通性を見出せるために後期中～後葉と考えた。46は無文であり、第３号住居出土の8と内外面の粗雑な調整で類似している。

［地文のみが施されるものまたは無文の鉢形土器］（図49･50－48～49・59）

48も第３号出土土器群と同様に、内外面に粗雑なミガキが施される。59は口径8.8cm・頸部径6.4cm・底径3.0cm・器高7.2cm・頸屈曲部径3.5cmの口頸部が器高の約半分を占める袖珍土器と考えられる。胴部が上げ底の底部から丸みをもって立ち上がり稜を持って短く内傾し器高中位付近で外反する。

［有文の深鉢・鉢形土器］（図50－50～58・60～61、61は97年度試掘時出土の参考資料）

50・51は口縁部または頸部に刻目帯が施された鉢であり、第３号住居跡と同一または隣接グリッドからの出土である。50の器面調整は丁寧なミガキであり、内面に炭化物が付着している。54・55・56は同一個体であり、口縁部と体部下半のみの残存である。0段多条の異種の原体による羽状縄文帯で木葉文が施されるものと考えられる。61は97年度の試掘調査において、ⅥP－218 グリッドから出土したもので、0段多条異種原体の羽状縄文帯で口縁部にクランク状文、体部に鍵状入組文が施される。波状口縁の谷部と体部の鍵状入組文の交差部に瘤が貼付され、その頂部はキザミによって２分される。

【縄文時代晩期・時期不明の土器】（図50-－62～63）

62は無文帯に幅2mm程の沈線で、体部上半に斜位の平行沈線または四角？のモチーフが施され、文様帯の下部に左右２条ずつの段違いの沈線が施される。外面に炭化物が付着しており、煮沸用の甕・深鉢と考えられるが、時期不明である。63は砲弾形を呈する晩期の深鉢形土器と考えられる。

２　Ｂ区出土土器

【縄文時代中期の土器群】（図51･52－64～89）

［円筒上層ｂ式期の特徴を有する土器群］（図51－64～71）

64～70は口頸部に貼り付けられた隆帯間に、縄文原体を用いてＣ字形の圧痕を施した土器である。64・65は同一個体で、扇状突起の上部中央が径１㎝の円形に貫通しており、その下に横長楕円に隆帯が貼付される。66は扇状突起部に縄文原体側面圧痕が見られる。70の縄文原体によるＣ字形圧痕は他に比べて浅く、また隆帯もやや細く、器厚もやや薄い。

［円筒上層ｂ～ｃ式期の特徴を有する土器群］（図51－72～77）

72・73は扇状突起に波状の隆線が貼付され、隆線間に無節Ｌ・Ｒの側面圧痕が施され、竹管状の工具で半月形の刺突列が施される。74～76も無節Ｌ・Ｒの側面圧痕が施されるが刺突は四角形である。

［円筒上層ｃ式期の特徴を有する土器群］（図51･52－78～89）

78・79は隆帯間に四角形の刺突列が施される。78は器厚６㎜と薄く比較的作りが良く、79は器厚・隆線幅も大きい。80は径5㎜の丸形の刺突列が施される。82はボタン状の貼瘤が、扇形突起の中央部に貼付される。64・65の穿孔と対照的である。83～86は口縁部に波状を意識した隆線が貼付されるもので、85・86の隆線は幅3～5㎜と薄く、隆線上には縄文は施されない。

【縄文時代中期末（大木10式期）の土器群】（図52･53－90～114）

［有文またはヒレ状突起が施される深鉢形土器］（図52･53－90～101）

90は口頸部と沈線区画内は丁寧なミガキが施されて無文部となる。93は沈線区画内に縄文施文後、幅5㎜ほどの四角形の刺突列が施される。94・95・98～100は、主に口縁部内面上端にヒレ状突起を有する深鉢である。

［地文のみが施される深鉢形土器］（図53－102～114）

102・107～112は同一個体であり、第５号住居跡出土土器にも同一個体片が見られるために大木10式期に含めているが、同住居跡には後期初頭の土器も見られ中期末～後期初頭に位置づけられる土器と考えたい。114は肩部で膨らみ、結束羽状縄文が施されるものである。

【縄文時代後期初頭の土器群】（図54･55－115～135）

［隆線で文様が構成される深鉢形土器］（図54－115～119）

115は綾杉状のモチーフが幅４～５㎜の隆線で構成される。平行する縦隆線を軸に左右対称に斜位の隆線が貼付されている。所謂、狩猟文土器の１要素である「樹木文」（福田友之　1988）が施された深鉢片である。隆線間はナデ゛調整が施されるが工具痕が明瞭に残る。116・117は同一個体であり、これも他遺跡の狩猟文土器と同様に、横線と縦線が見られる。

［袖珍土器］（図54－120～121）

120は上下３条の連弧文が波頂部下で横位に連続し、底部直上にも１条の横走沈線が施される小型の鉢形土器である。121は外面が無文、器高8.2㎝程度の筒形の土器である。

［沈線により文様が施される深鉢形土器］（図54･55－122～135）

122～126は同一個体で、口頸部がキャリパー状を呈し、頸部～体部上半にかけて三角形状文・渦巻状文が施される。器表面に砂粒が目立つ。127～131は渦巻状文または円形文が施されるものである。124は口縁部に単節LR、頸部に単節RLが施され、２条の平行沈線が施される。

[沈線内に線状痕が残る土器群](図54･55－132～135)

133～135 は、沿口沈線・三角形状文・渦巻状文が施される土器であるが、沈線内に施文工具痕が、平行線状に明瞭に残る。施文工具は断面が丸い植物の茎状のものと考えられる。

【縄文時代後期中葉～後葉の土器群】(図56～58－136 ～174)

[地文のみが施される深鉢形土器](図56－136～145)

口唇部が肥厚するもの(136・138・139・140・141)がみられ、縄文は0段多条RL・単節LR・異種原体による羽状縄文が施される。143は櫛歯状工具による条線が縦走し、144は無文である。

[地文のみが施される鉢形土器](図56－146～148)

単節LR(146)・異種原体羽状(147)・同原体羽状(148)の縄文が施される。

[無文の鉢形土器](図56･57－149～155)

149～151は同一個体で、波状口縁波頂部が内外面側に肥厚し、150のみ上位から楕円形の刺突が加えられる。152・153は無文の波状口縁が肥厚するものである。154は口縁部が肥厚し、内外面にミガキが施される。台形状器形を呈するものであろうか。

[有文の深鉢・鉢形土器](図57－156・158～166)

口頸部に刻目帯(列)を有するものが多くみられ、158は上下の平行沈線を弧状の短沈線で結ぶもの、164は縄文帯による木葉文、166は口縁部の刻目列の下位に3本一単位の縦横の沈線で文様が構成される。概ね後期中葉のものと考えられる。

[壷形土器・注口土器](図57･58－167～174)

壷は0段多条の縄文帯間に横位の無文帯がみられるものが多い(167～170)。172・173は頸部の縄文帯交差部・肩部の鍵状入組文に瘤が貼付され、注口である可能性もある。

【縄文時代晩期の土器群】(図57～59－157・175～197)

[深鉢形土器](図57・58－157・175～186)

178・179・182～186は頸部に3条の平行沈線が施されたもので、178は口唇部にB突起が付され、188 は口縁部に結節沈線が見られる。157は魚眼状三叉文が施され晩期初頭の様相を示す。

[鉢・浅鉢形土器](図58･59－187～189・192)

187は口唇部に刻みが頸部に3条の横走沈線が施される煮沸用の(深)鉢形土器である。188・189はいずれも口唇部にB突起が施され頸部は凹線または無文である。188は内面に炭化物が付着している。192は変形工字文が施されるもので晩期最終末大洞A'式古段階と考えられる。

[台付深鉢形土器](図59－190～191)

190は刻みを有する突起が付され、頸部の横走沈線間に列点文が施され単節LR縄文が施される。台部が無文の大型のもので、台部・体部下半が被熱により赤化しており煮沸用と考えられる。

[壷形土器](図59－193～197)

193・197は、隣接するグリッドから出土し、晩期後半段階のものと考えられる。193は肩部の上位と体部中位最大部に横位の工字状の文様、その中間にZ字状の入組文が、横位に展開する。渡島半島南部の聖山式土器に特徴的な横位連続工字文と連繋入組文が一個体中に施されるものである。

【弥生時代前期の土器】(図59－198～199)

198は連結型変形工字文、199は波状工字文が施される煮沸用の鉢または台付鉢と考えられる。

(永嶋　豊)

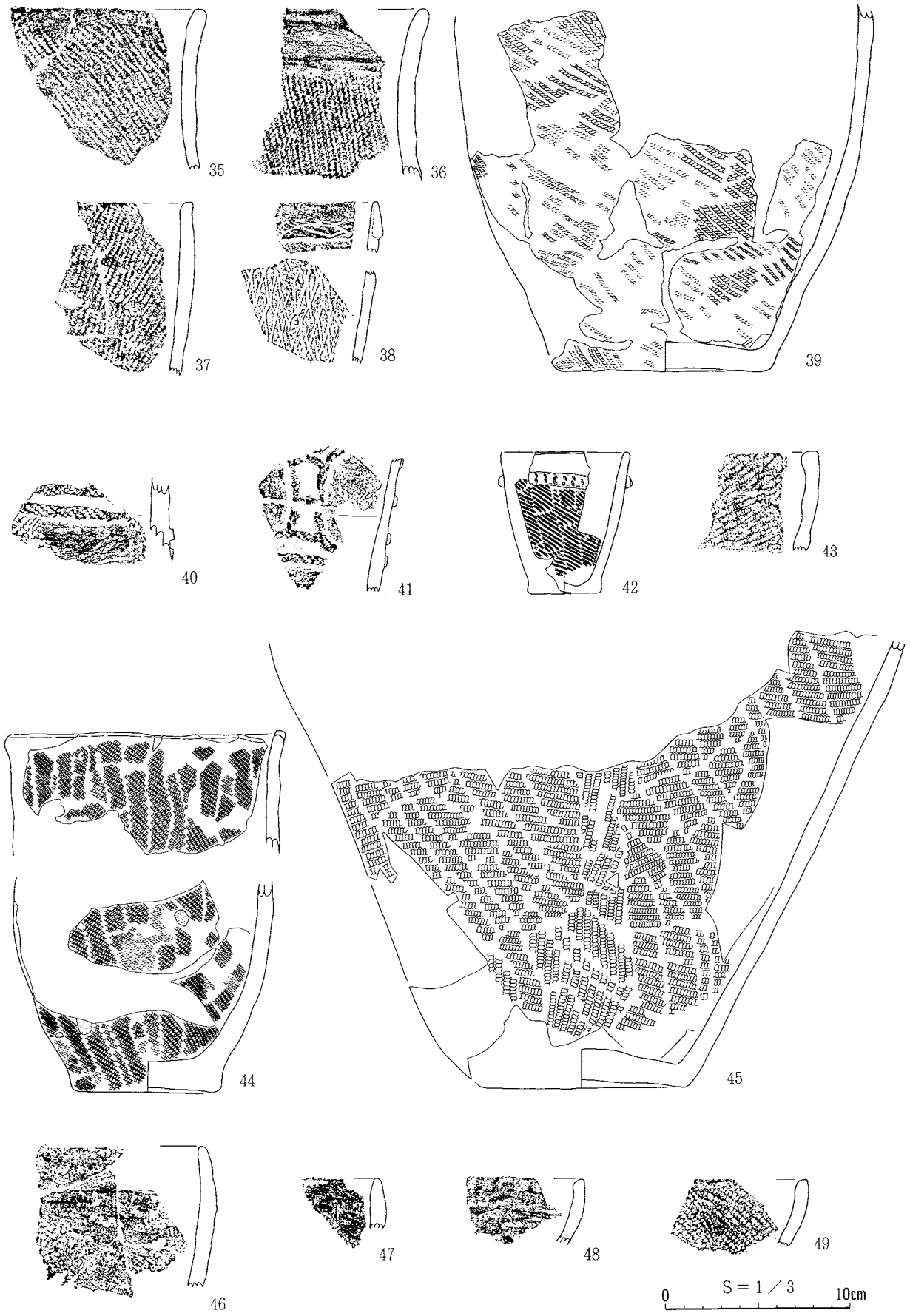


図49　米山(2)遺跡Ａ区遺構外土器１

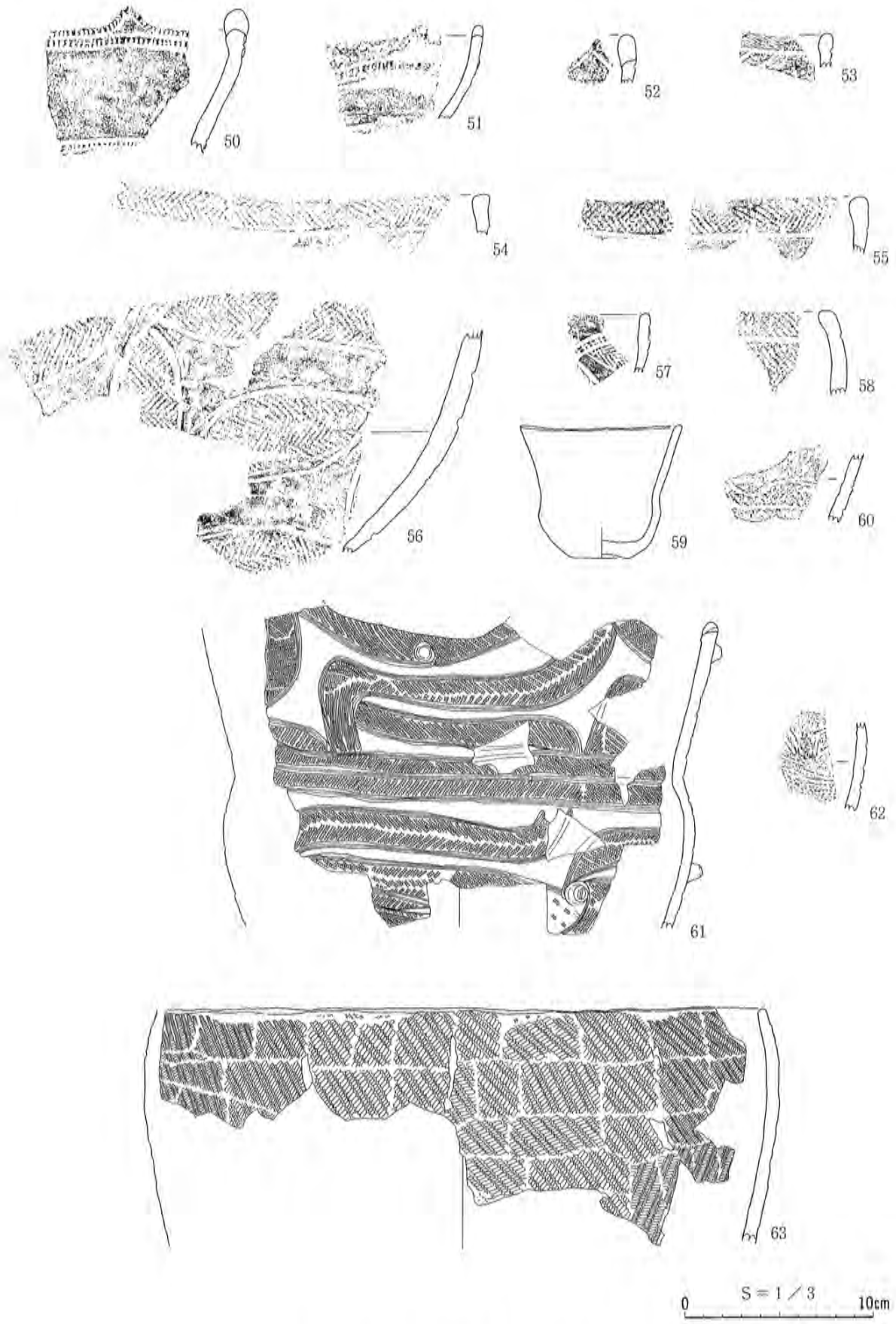


図50　米山(2)遺跡Ａ区遺構外土器２

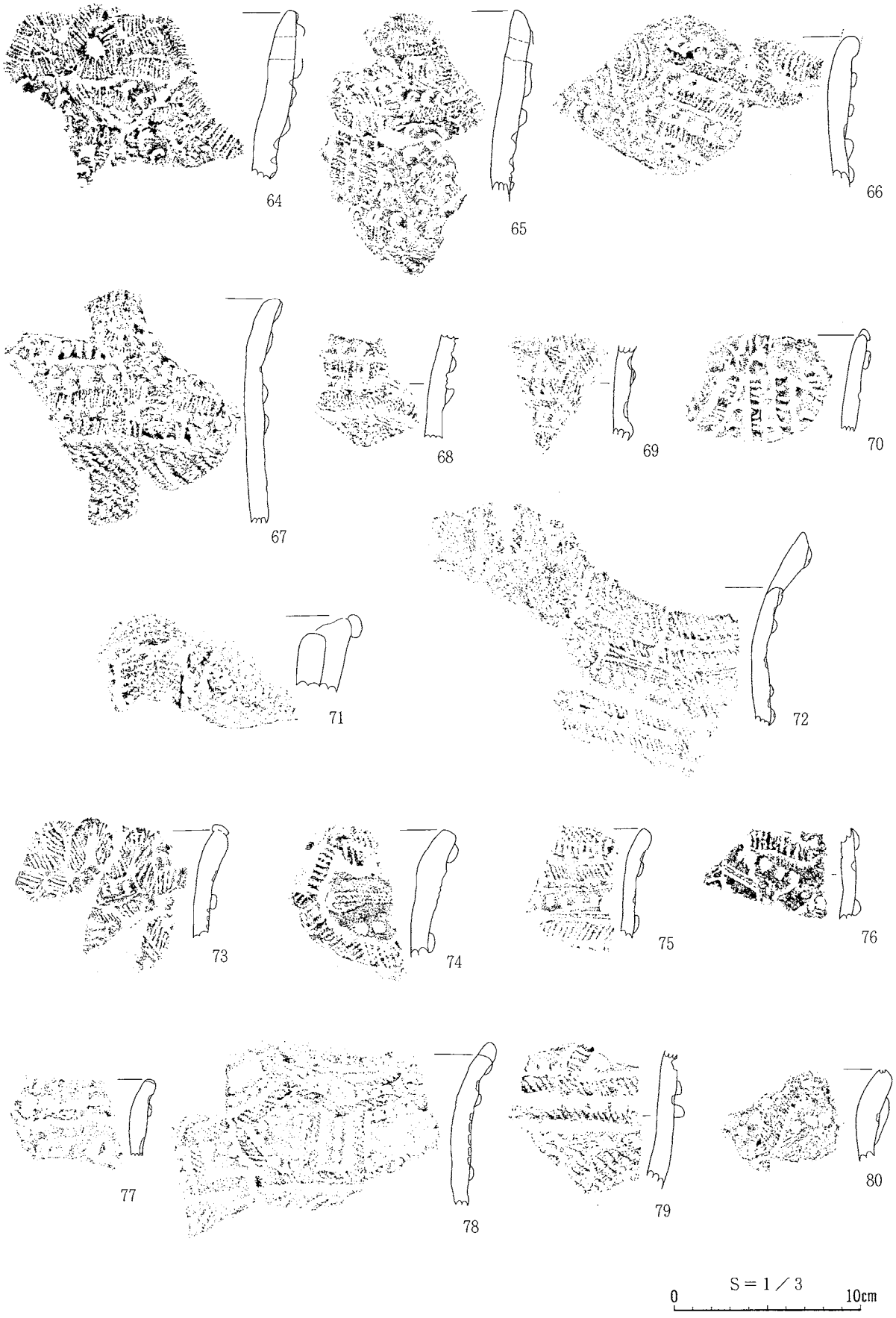


図51　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器１

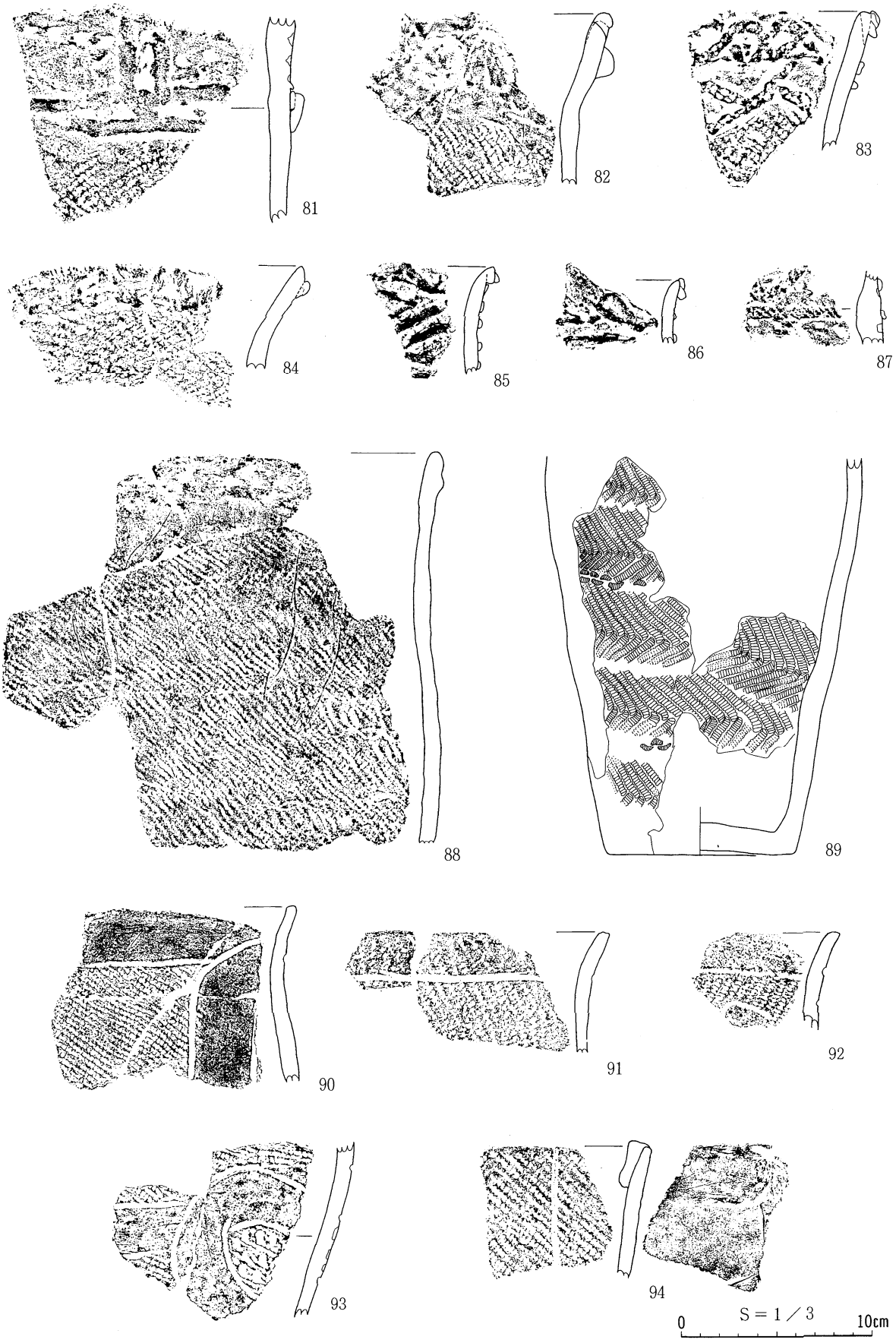


図52　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器２

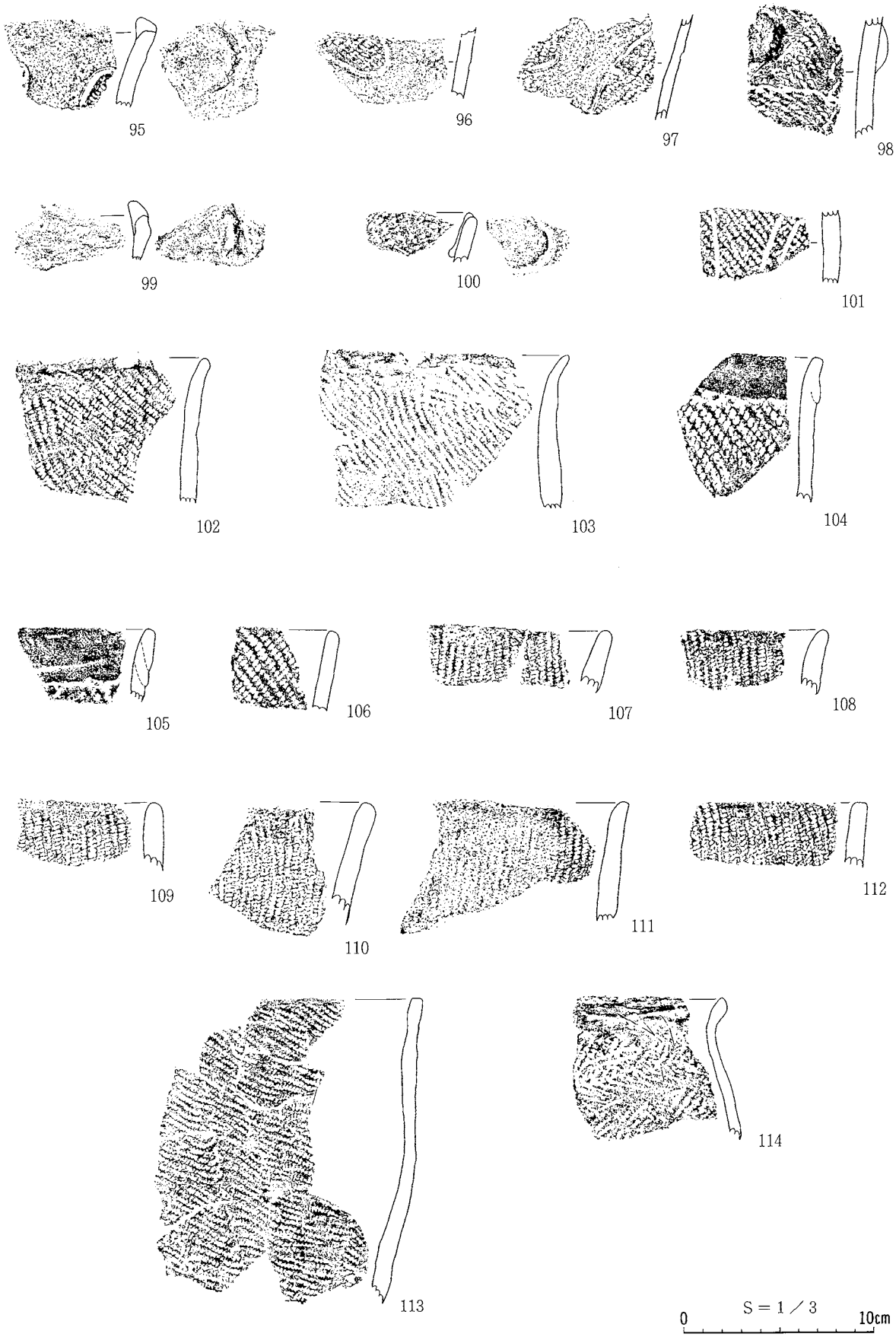


図53　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器３

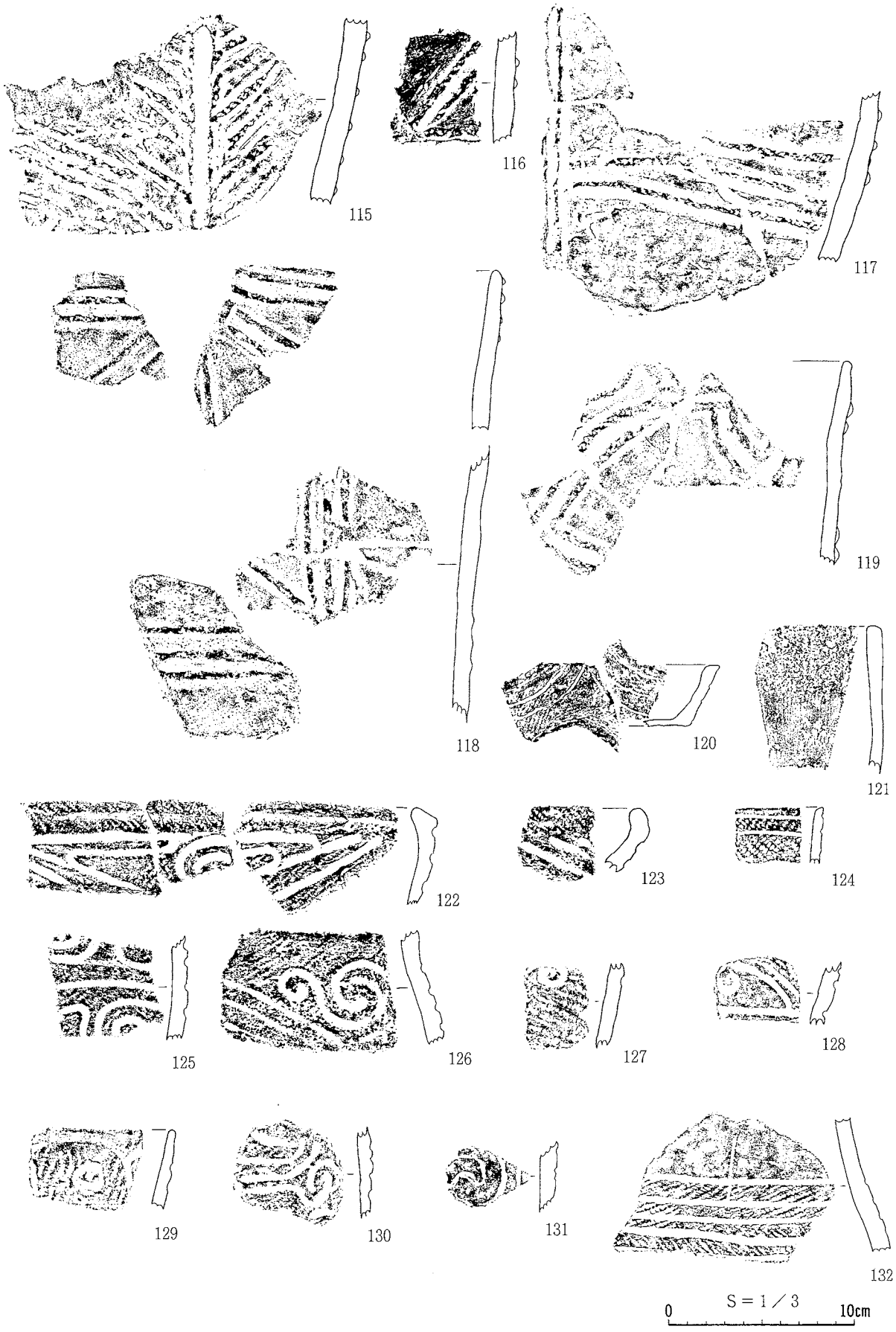


図54　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器４

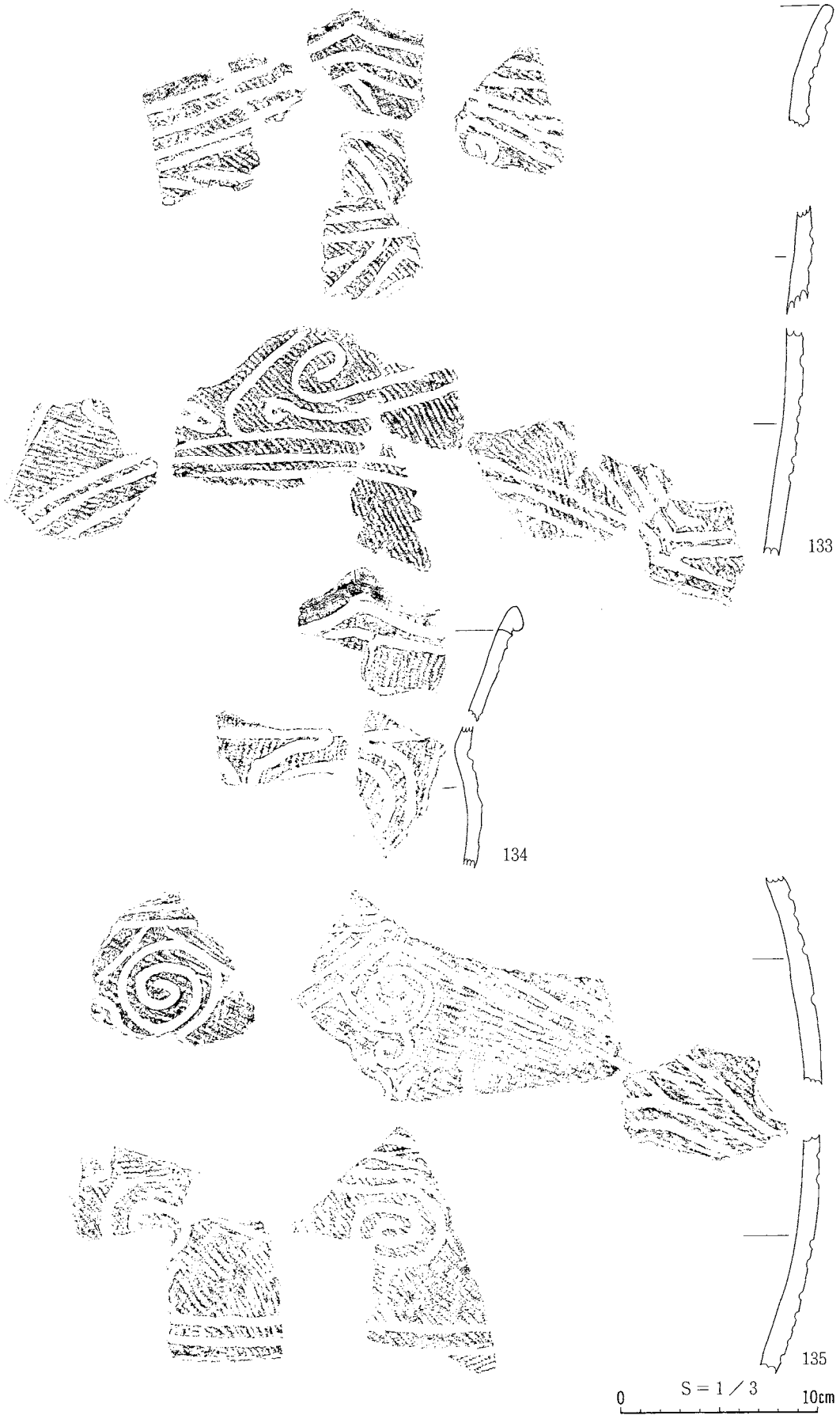


図55　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器５

図56　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器６

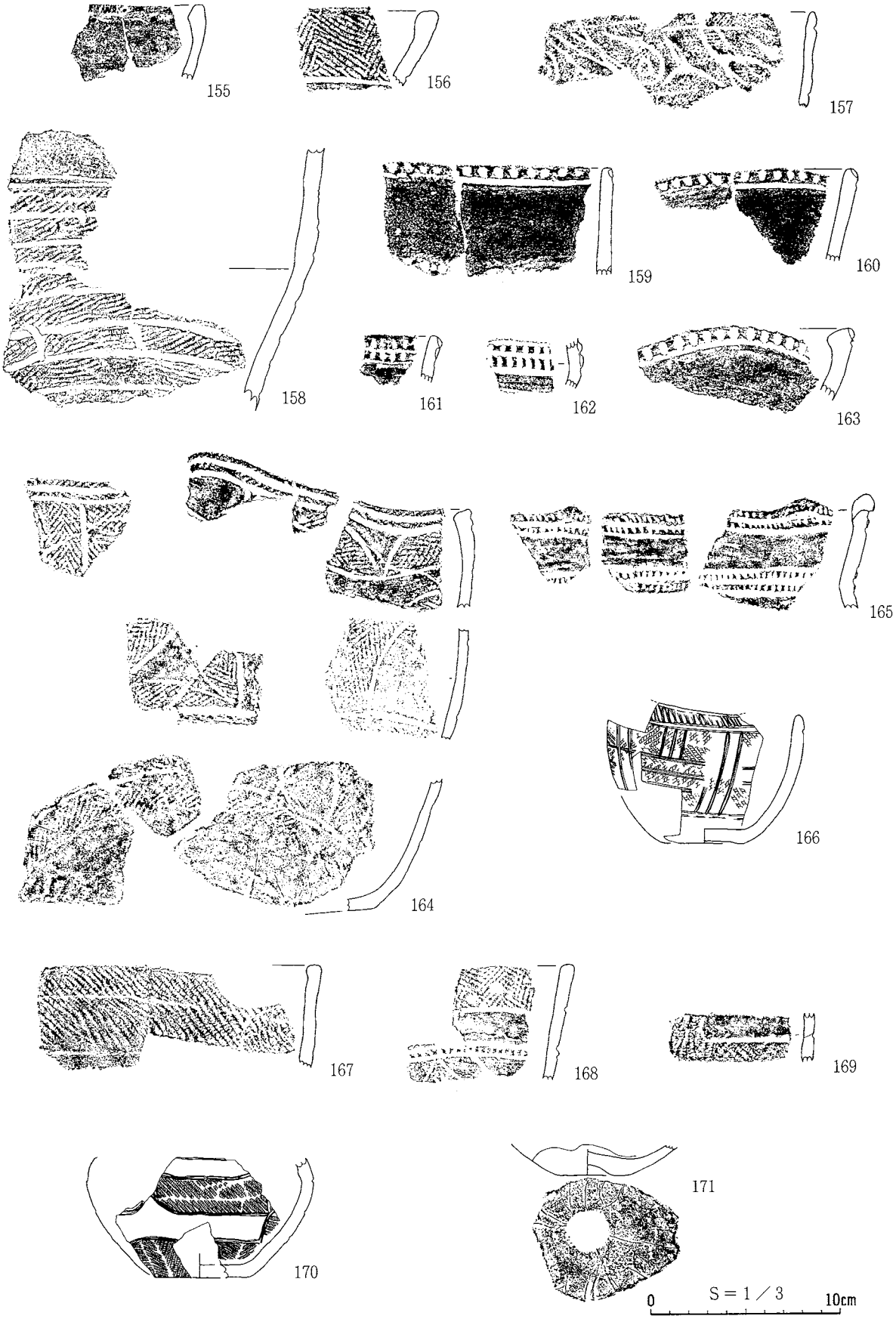


図57　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器７

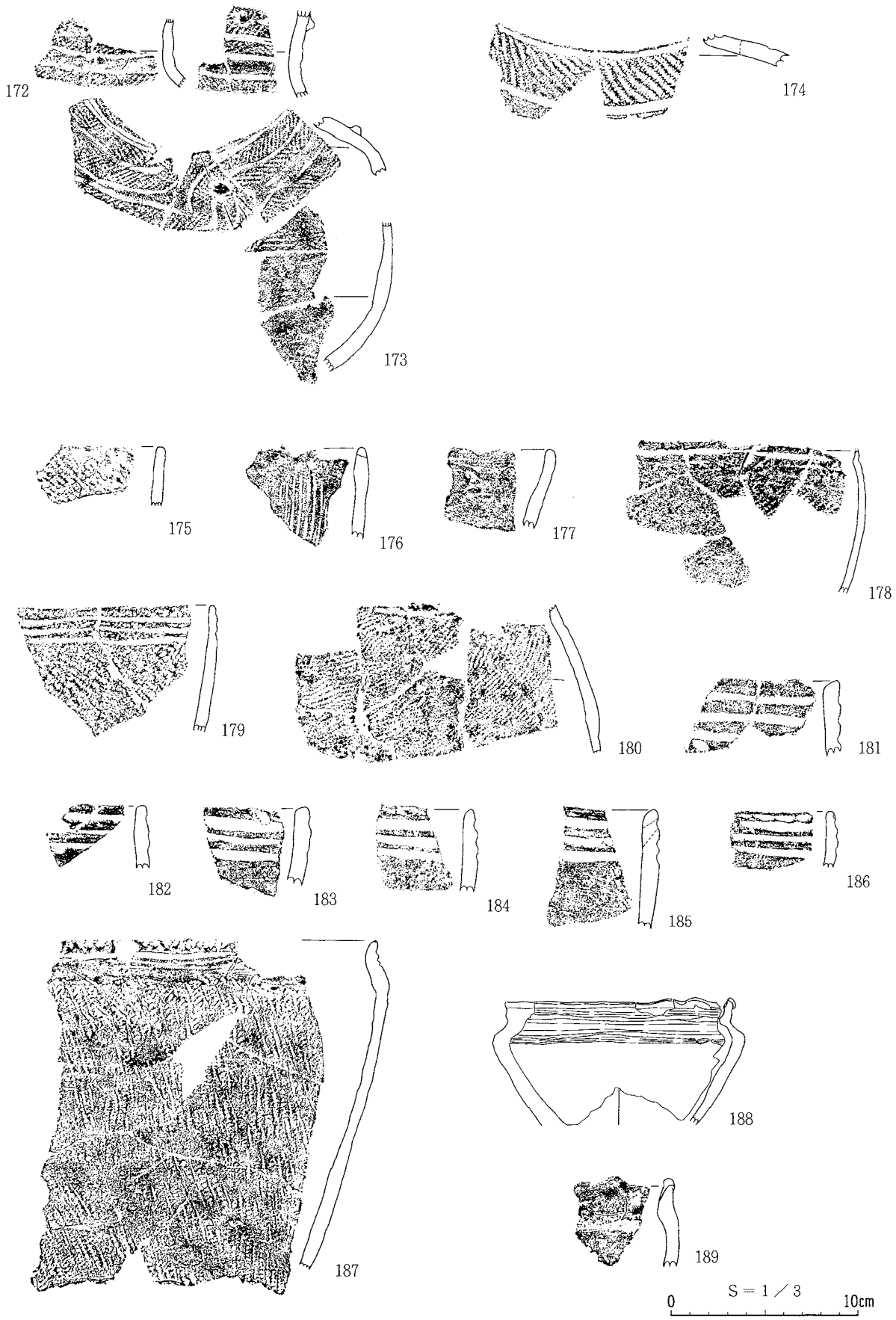


図58　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器８

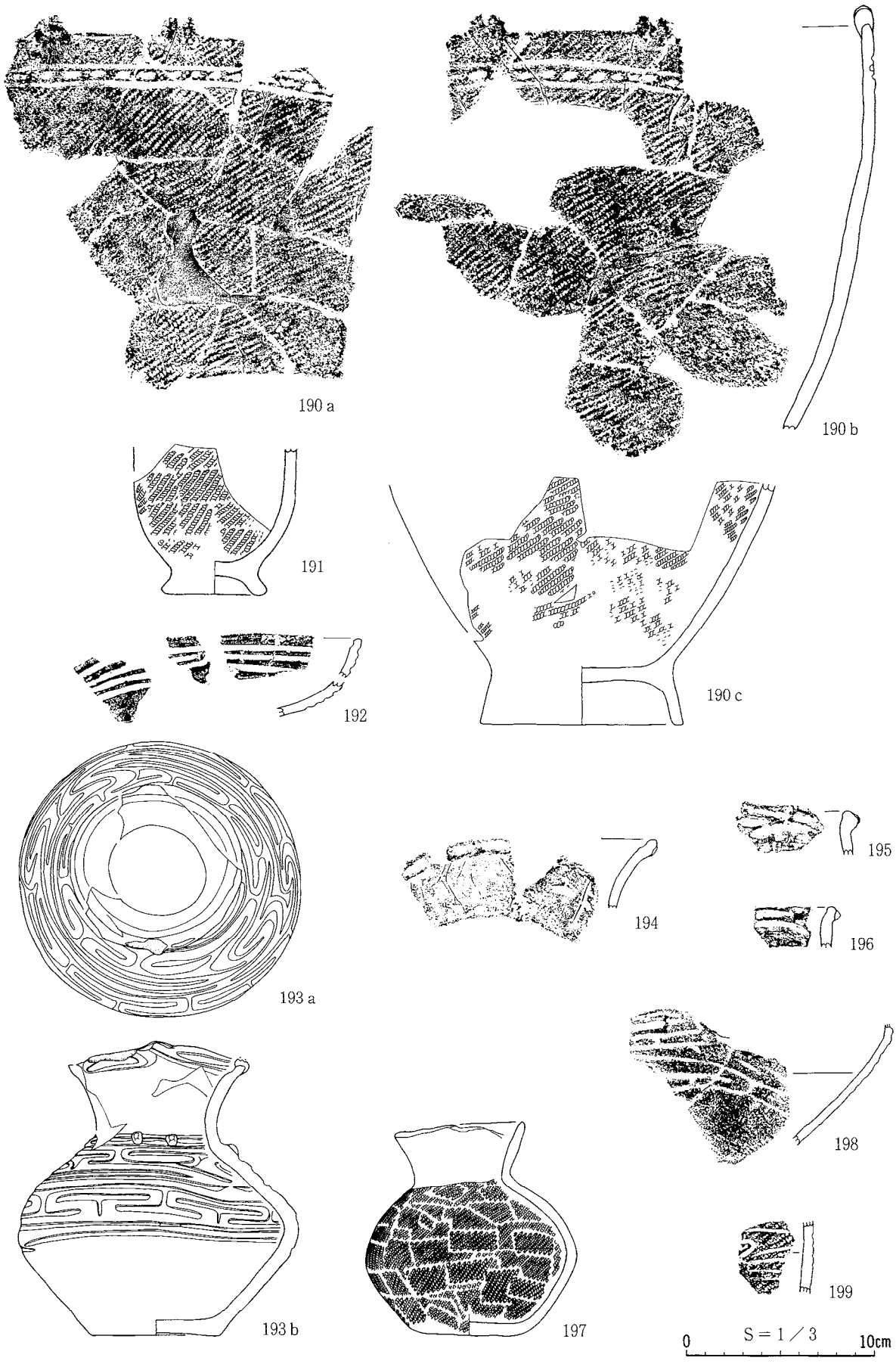


図59　米山(2)遺跡Ｂ区遺構外土器９

第２節　石　器

ここでは遺構内外から出土した石器について記述する。また、平成９年度の試掘調査のうち今回の調査区の付近から出土した石器もここで取り扱った。

表４　米山（２）遺跡出土石器一覧表

		石鏃	石錐	石匙	楔形石器	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク・コア	磨製石斧	敲磨器	石皿・台石	砥石	その他	小計
A区	遺構外			1	1	2	3	2	22	1	2	1			36
	遺構内	2		1		8	4	5	23		8	4			54
B区	遺構外	8	2	1		11	7	8	128	1	16	7	1	2	192
	遺構内					1	1		5	1		1	1		5
小計		10	2	3	1	22	15	15	178	3	26	13	2	2	292

１　A区出土の石器

A区では、遺構内から54点、遺構外から34点の石器が出土した。その内訳は、表４に示したとおりである。その中で、剥片を除いて最も多く出土したのは敲磨器とスクレイパーである。

石鏃（図40－⑦、図47－１）

第３号住居跡から小型の凸基有茎鏃１点（図40－⑦）と第10号土坑から柳葉形石鏃が１点（図47－１）出土した。

石匙（図37－②、図61－１）

第２号住居跡から１点（図37－②）、遺構外から１点（図61－１）出土した。２点とも、縦形の石匙である。図37－②は、先端部が尖頭状に作出されている。図61－１は先端部が厚く、調整も粗雑である。

楔形石器（図61－４）

遺構外から１点出土した。平面形は台形状を呈し、右側面に表皮を残している。

スクレイパー（図36－①、図37－①、図40－③～⑥、図42－②、図43－１、図61－２・３）

第１号・第２号住居跡から各１点（図36－①、図37－①）、第３号住居跡から４点（図40－③～⑥）、第４号住居跡から２点（図42－②、図43－１）、遺構外から２点出土した。図36－①は刃部が尖頭状に作出されている。図40－③も刃部が尖頭状に作出されているが、この部分には急斜度調整が施されている。図43－１は剥片の縁辺部に調整を施しているもので、裏面の右側縁には光沢痕が観察される。図37－①は本類に含めたものの、石鏃の可能性も考えられる。

Ｒフレイク（図40－①・②、図43－２、図61－５）

第３号住居跡から３点（図40－①・②）、第４号住居跡から１点（図43－２）、遺構外から４点（図61－５）が出土した。

Ｕフレイク（図37－３、図42－１、図61－６）

第２号住居跡から２点（図37－３）、第３号住居跡から１点、第４号住居跡から１点（図42－１）、

遺構外から２点（図61－６）出土した。

磨製石斧（図61－７）

遺構外から１点が出土した。刃部には潰れた痕跡が見られる。

敲磨器（図40－⑧・⑨、図41－１～３、図43－３～５）

第３号住居跡から磨石３点（図40－⑧・⑨、図41－３）、凹石２点（図41－１・２）、第４号住居跡から凹石３点（図43－３～５）、遺構外から凹石１点、敲石１点が出土した。

第３号住居跡出土の磨石は、３点とも楕円球状のものである。図41－３は閃緑岩を石材とし、全体が滑らかでツルツルしいる。図40－⑧・⑨もこれに似るが、安山岩を石材としているためかそれほどでもない。このうち⑨はやや扁平であるが、片面が滑らかで、その面には凹みに似た敲打痕が見られる。また、凹石とした図41－１も器面全体が滑らかであり、とくにＬ面に顕著である。また反対側の面には凹みが見られる。図41－２は小型の柱状礫を素材とし、全体に丸みを持つ。片面には浅い凹みが見られる。

第４号住居跡から出土した凹石は、３点とも器面は滑らかである。図43－５は楕円球状礫の片面に、図43－３・４は扁平な棒状礫の両面に凹みが見られる。

石皿・台石（図37－④、図43－６、図46－４）

第１号住居跡から１点、第２号住居跡から１点（図37－④）、第４号住居跡から（図43－６）、第３号土坑から１点（図46－４）出土した。第１号住居跡から出土したものは、石皿か台石の小破片であるため掲載していない。第２号住居跡から出土したものは、やや大型の台石である。第４号住居跡と第３号土坑から出土したものは、板状の礫を素材とした台石である。

有孔石製品（図61－８）

遺構外（Ⅷ Ｊ－232、Ⅰ層）から出土した。多孔質の凝灰岩を石材としている。

２　Ｂ区出土の石器

Ｂ区では、遺構内から９点、遺構外から192点の石器が出土した。その内訳は、表４に示したとおりである。

石鏃（図62－１～８）

遺構外から８点出土した。基部形態によって凸基有茎鏃５点、平基有茎鏃１点、円基鏃２点に分けられる。このうち凸基有茎鏃には、関の形態によって平基に近いものや尖基に近い形状のものもある。８は石鏃に含めたが、幅広であるため尖頭器と分類されるものに近い。

石錐（図62－９・10）

遺構外から２点出土した。２点とも剥片の一端に調整を加えたものである。

石匙（図62－11）

遺構外から１点出土した。幅の広い縦形の石匙で、バルブの部分につまみ部を作出している。体部の刃部調整はあまり行われていない。

スクレイパー（図44－４、図62－12～16）

第５号住居跡から１点、遺構外から11点出土した。形状には様々なものがある。図62－14は、末端が尖頭状に作出され、急斜度の調整が施されている。図62－13は、周縁に微細な調整が連続して施さ

れているもので、裏面左側縁には光沢痕が見られる。

Ｒフレイク（図44－３、図62－18）

第５号住居跡から１点、遺構外から７点出土した。図62－18は、黒曜石を素材としたものである。

Ｕフレイク（図62－17）

遺構外から８点出土した。

磨製石斧（図44－２、図62－19）

第５号住居跡から１点、遺構外から１点出土した。図44－２は基部を欠損している。刃部に見られる擦痕は研磨痕と思われ、石質は頁岩である。図62－19は刃部に対して直交する使用痕が見られることから、横斧と考えられる。石質は、緑色細粒質凝灰岩である。

敲磨器（図63－１～６、図64－１～７）

遺構外から磨石８点、凹石６点、敲石２点が出土した。図63－１は上下の両側面に磨痕が見られるが、上側面のそれは弱い。また、片方の端部には打痕が見られる。図63－２・５は楕円球状礫を素材としているもので、器面全体が滑らかである。特に２の片面はやや平坦気味となっており、ツルツルと滑らかになっている。３では下側面には敲打痕が見られる。４・６は磨石に凹みが見られるもので、ともにやや肉厚の楕円礫を素材としている。４は片方の側面に弱い敲打痕が見られ、片面には浅い凹みが見られる。６も片側面には敲打痕が見られ、両方の平坦面に凹みが見られ、片方の平坦面（Ｌ面）は特に滑らかである。

図64－１・３～６は凹みのみが見られるものである。６は台石か石皿の破片を再利用したもので、両面に凹みが見られる。一方の面には敲打による凹みが、もう一方の面にはスリによる凹みと溝を形成した磨痕が見られる。３は三角柱状の礫を素材とし、三面に深い凹みが見られる。凹みのほとんどは敲打によるものであるが、１個だけスリによるものと思われるものがある。５はやや扁平な棒状の礫を素材とし、両面に浅い凹みが見られる。１は両面に深い凹みが見られ、平坦面はやや平滑である。４は片面にスリによる凹みが見られ、平坦面は平滑である。

図64－２・７は敲石である。２は扁平な棒状礫の端部と両側面の一部に敲打痕が見られる。７は、拳大の礫の一端に敲打痕が見られる。

石皿・台石（図44－１、図65－２～５）

第５号住居跡から１点、遺構外から７点出土した。図44－１は板状の無加工の大礫を利用したもので、中央部が若干窪んでいる。図65－３・５も両面が利用されており、両面とも若干窪んでいる。図65－４は、片面を利用したもので、表面は大きく窪んでいる。裏面は割れ面のままで加工されていない。図65－２は、周縁に高さ約３cmの縁を巡らしているもので、表面は多少ざらつくものの、滑らかである。

砥石（図44－５、図65－１）

第５号住居跡から１点、遺構外から１点出土した。図44－５は流紋岩の角柱状の礫を素材としたもので、器面全体に擦痕が見られる。擦痕は器体の長軸方向に沿って見られるものが多く、一部浅い溝を形成している部分がある。図65－１は扁平礫を素材とし、台石とも思われるものである。擦痕は両面に見られる。器面は滑らかであり、特に表面が顕著である。

その他（図64－８・９）

遺構外から２点出土した。２点とも流紋岩の柱状礫を素材とするもので、８は小型、９は大型であ

り、器面全体が滑らかに整形されている。このうち、８と同様の素材、形状、大きさを持つ石器の中には、敲石や凹石に利用されている場合が多いが、凹みが見られないことから、敲石の欠損品であるかもしれない。

石器の石質について

剥片石器の石質は、大部分が珪質頁岩であり、わずかに玉髄質珪質頁岩、黒曜石（フレイクを含めても２点）がある。なお、黒曜石はその諸特徴から本県域産のものではなく、他県域から当遺跡に持ち込まれたものである（未分析）。

磨製石斧の石質には、緑色細粒凝灰岩、頁岩、閃緑岩のものが、それぞれ１点ずつある。

礫石器の石質には、安山岩、流紋岩、凝灰岩、細粒凝灰岩、緑色細粒凝灰岩、閃緑岩、輝緑岩の種類がある。最も多いのが安山岩の24点（55.8%）で、次いで流紋岩８点（18.6%）と凝灰岩７点（16.3%）である。この三種類で、全体の９割を占め、敲磨器や石皿・台石など各種の石器に用いられている。　（畠山　昇）

第３節　古銭

Ｂ区から、寛永通宝が２枚出土している。銭貨の大きさや、「寛永通宝」のそれぞれの字体にも違いが認められる。１は古寛永と言われるものである。　（畠山　昇）

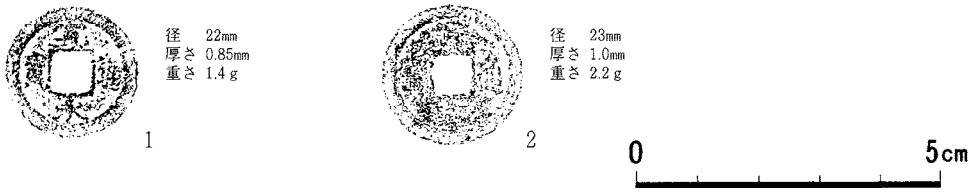


図60　古　　銭

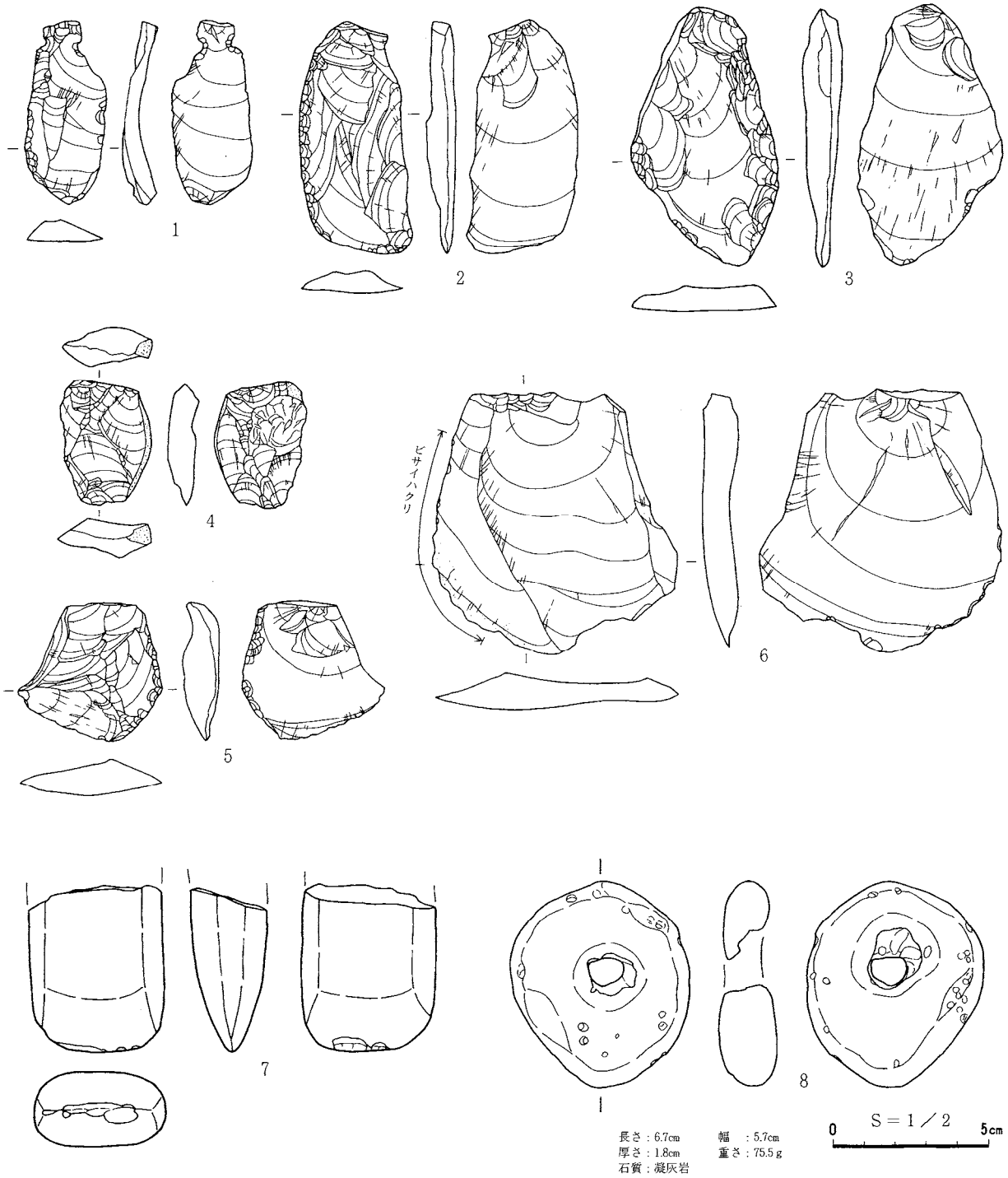


図61　米山(2)遺跡Ａ区出土石器

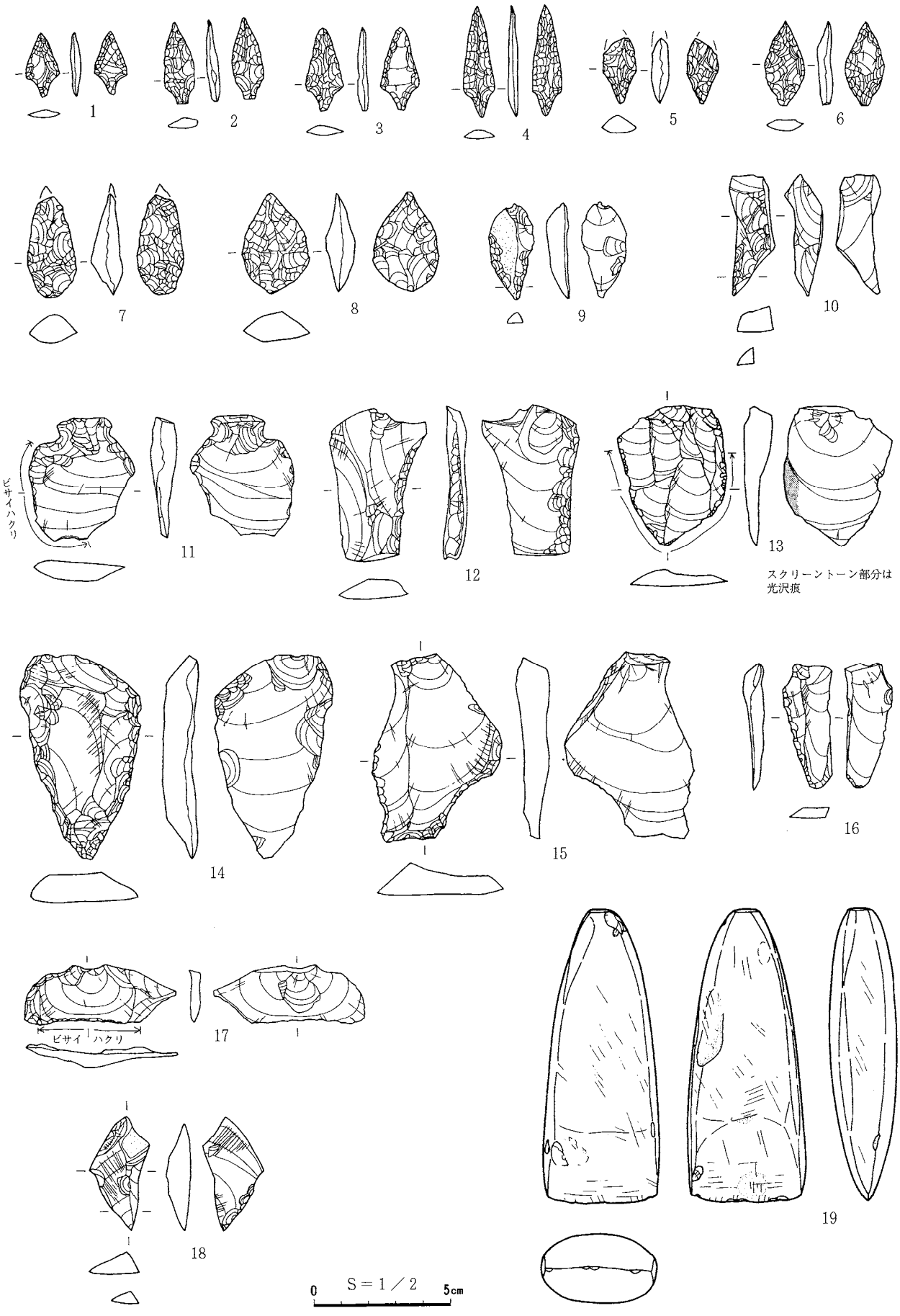


図62　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器１

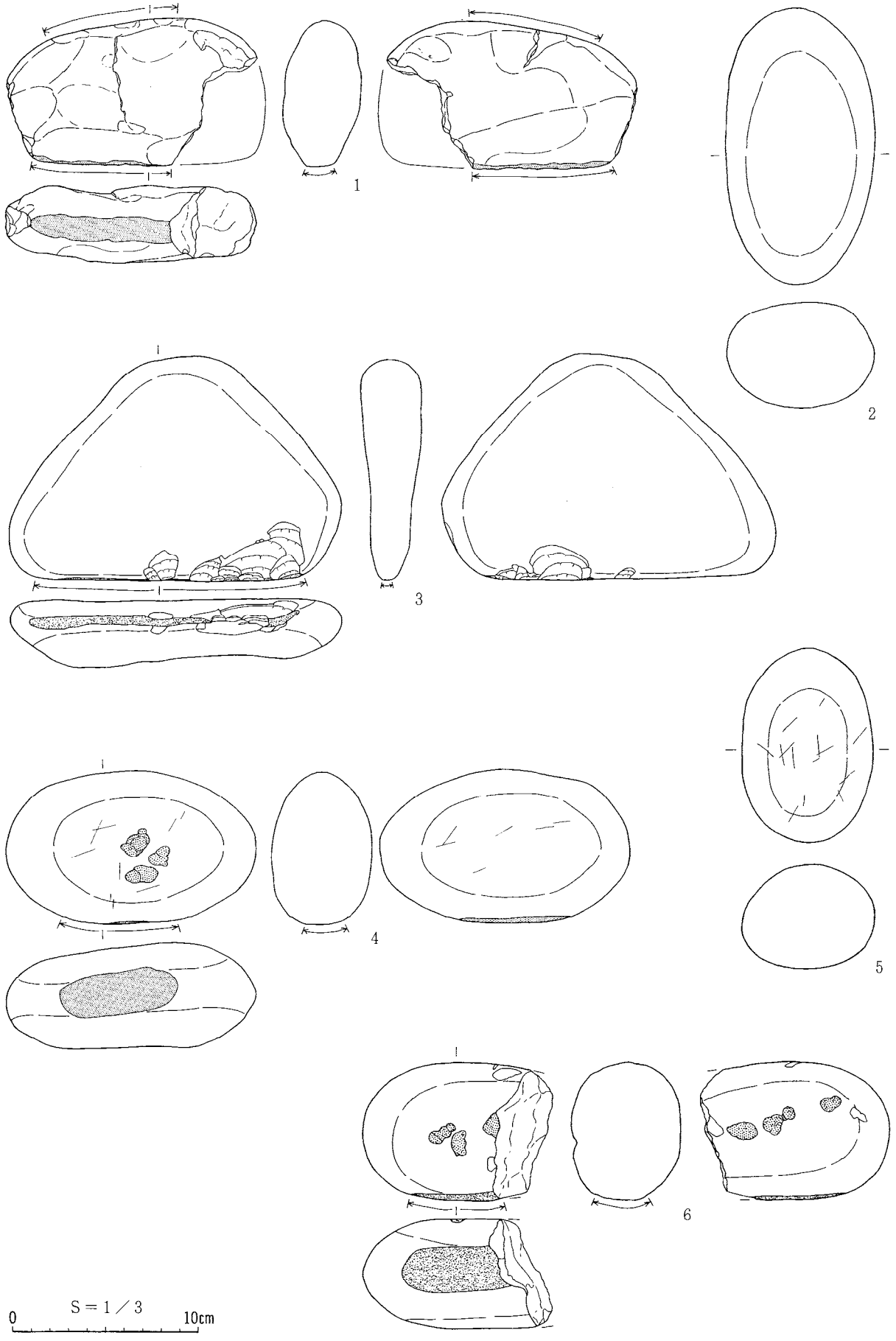


図63　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器２

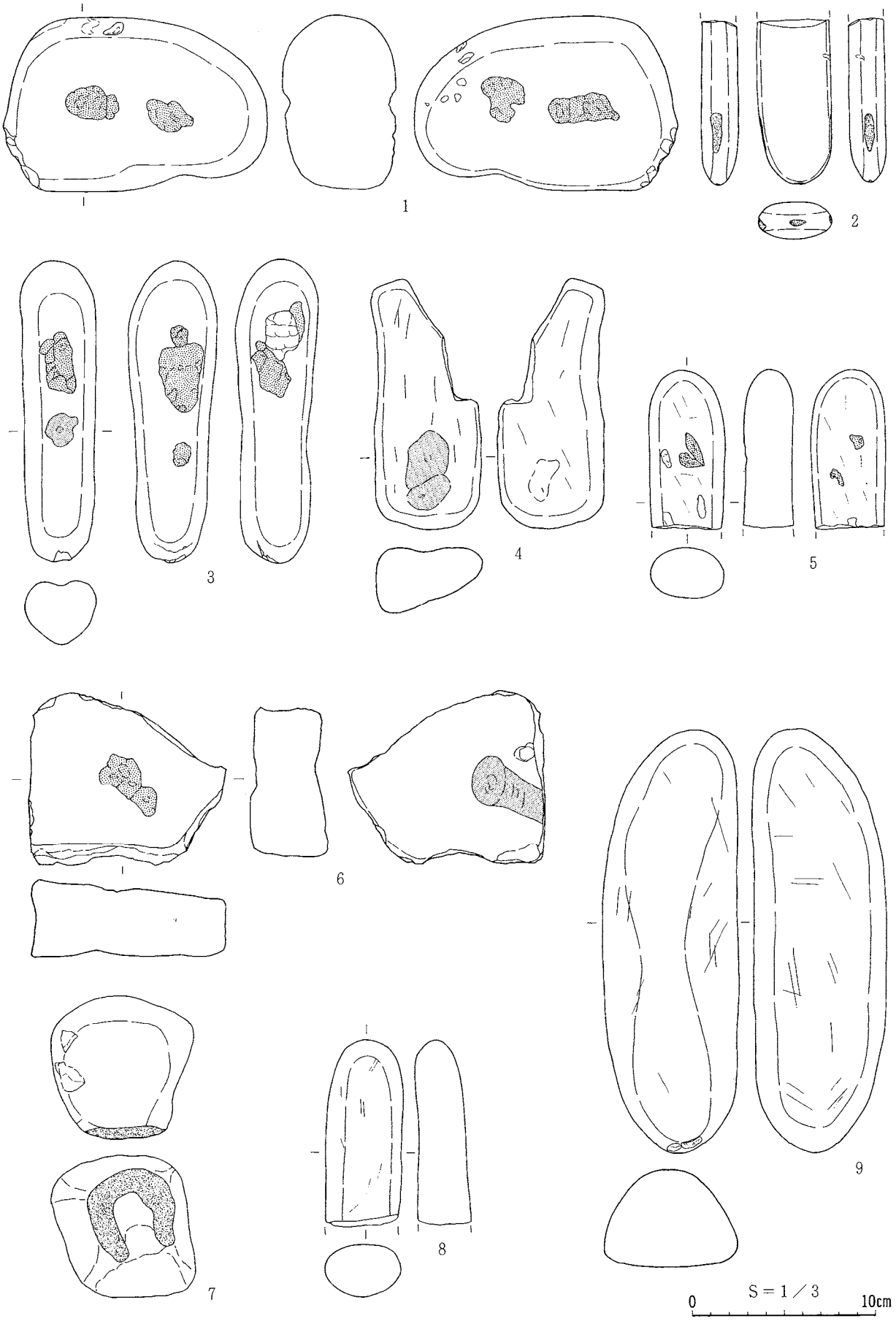


図64　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器3

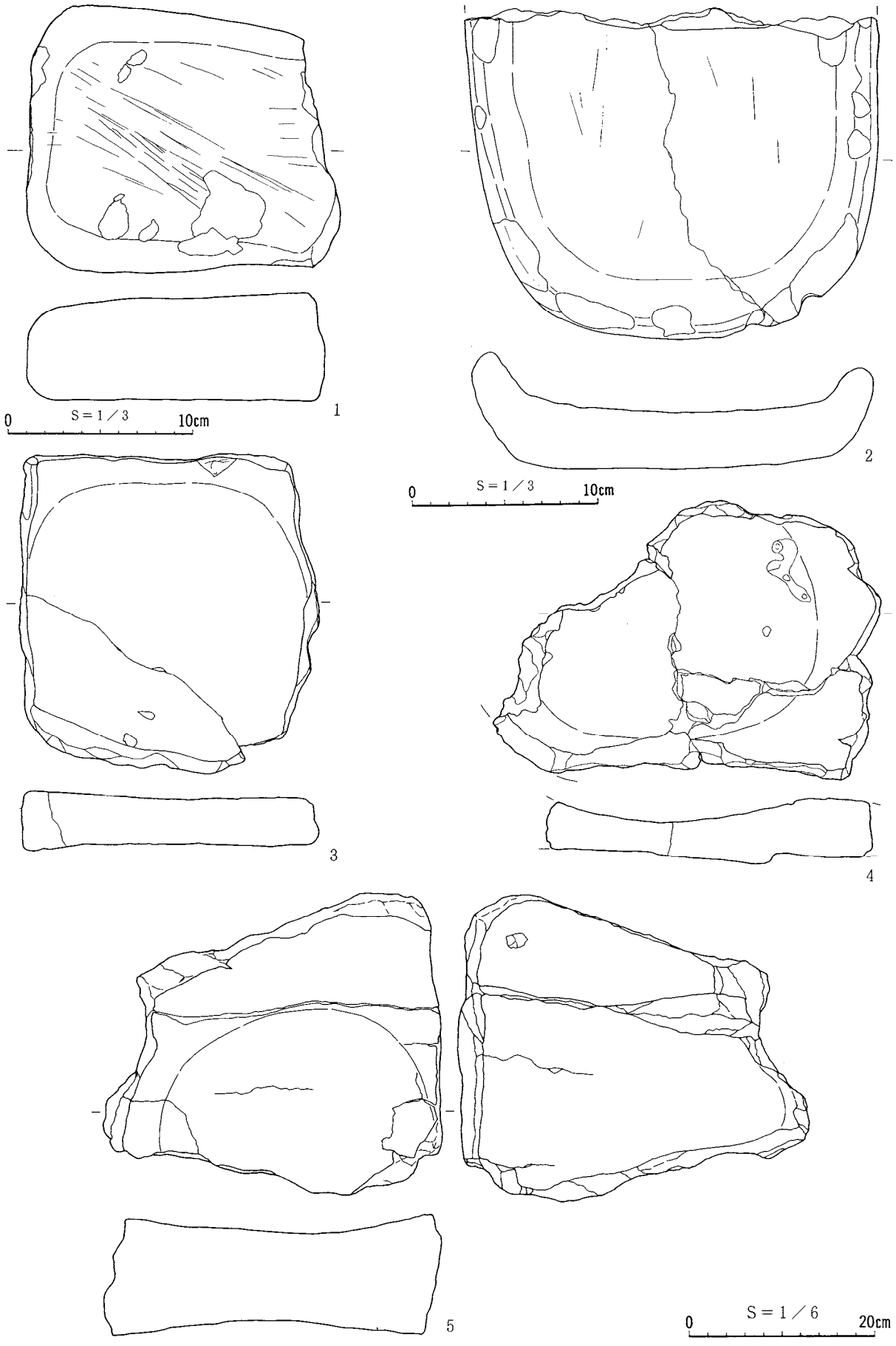


図65　米山(2)遺跡Ｂ区出土石器４

第3章　まとめ

第1節　検出遺構

A区で竪穴住居跡4軒、土坑9基、溝状土坑2基、B区で竪穴住居跡1軒、土坑2基が検出されたが、ここではA区検出の縄文時代後期中葉～後葉と考えられる竪穴住居跡について考えてみたい。A区検出の4軒の竪穴住居跡は3号住居跡出土の床面倒立設置土器から縄文時代後期後葉段階の集落跡と捉えることができよう。該期の竪穴住居跡は、主に八戸地方から岩手県北部地方において数多く検出されており、出入口施設とされる対になる柱穴・平行する縦溝・「コ」字形をした溝が付設されるものが見られる。米山(2)遺跡A地区第1号住居と第4号住居跡にもそれぞれ「コ」字型と縦溝型の出入口施設が見られる。また小径の壁柱穴が密に見られる場合も多い。この出入口施設と炉を結んだ線を主軸としてその左右が線対称の構造をとるものが見られ、出入口の場所・方向が住居の構造や規模に影響する為に、住居跡構築における選地段階から主軸すなわち出入り口の方向を意識していたものと考えられる。

1　岩手県・青森県の出入口施設検出例

東北地方北部の縄文時代後期の竪穴住居跡の出入口施設については、岩手県では三浦謙一が都南村湯沢遺跡の調査において炉跡に近い壁際に礫2個を平行させ埋置させたものなどを「出入口」状施設を呼称している(岩手埋文　1978)。同様の施設跡を二戸市寺久保遺跡で調査した金子昭彦は、礫を利用した施設を二戸市上村遺跡例もあわせて馬淵川中流域～北上川中流域に用いられた形態であるとし、韮窪遺跡の15号・17号住居跡検出の対になる土坑を馬淵川下流域にみられる別系統の出入口施設で、後期中葉に盛行する出入口状施設に繋がるものであると述べている。後期初頭～前葉とされる安代町の扇畑Ⅱ遺跡では、平行する縦溝に接して、住居外側に平石による敷石が検出されており、敷石部と床面がスロープ状をなし、関東地方に多い柄鏡型住居との共通性が指摘され、敷石部の出入口機能を想定している。後期前葉以降の出入口施設は滝沢村卯遠坂遺跡・岩手町川口Ⅱ遺跡・西根村上斗内Ⅲ遺跡・一戸町椛の木遺跡・軽米町馬場野Ⅱ遺跡・大日向Ⅱ遺跡・和当地Ⅰ遺跡・叺屋敷Ⅰa遺跡・北上市八天遺跡(文献未入手)でも検出されている。青森県では中期末とされるものが丹後谷地遺跡等で検出されている他、後期初頭とされるものが八戸市丹後平遺跡・韮窪遺跡・牛ヶ窪遺跡から検出されている。後期前葉では六ヶ所村大石平遺跡・上尾駮(2)遺跡・八戸市丹後谷地遺跡等から、後期中葉以降は大畑町水木沢遺跡・八戸市丹後谷地遺跡・風張(1)遺跡・平舘村尻高(4)遺跡・金木町神明町・弘前市砂沢遺跡等で検出されている。後期中葉以降になると類例も増加し、住居構造のひとつに出入口が明らかに組み込まれている。秋田県では鹿角市赤坂A遺跡(後期中葉)・B遺跡(晩期)・虫内Ⅰ遺跡(晩期)等で検出例がみられる。

2　出入り口施設の形態別分類

縄文時代後期の出入口施設を①2本柱穴型、②平行する縦溝型、③横溝型、④「コ」字型、⑤逆「コ」字型、⑥「H」字型、⑦「八」字型、⑧向かい合うL字型、⑨その他の9類型に分類する。(註1)

【縄文時代中期末～後期初頭】縄文時代中期の出入口施設に関しては、その炉との位置関係より複式炉との関連が指摘されている(酒井　1987)。また青森県では明確な出入口施設の検出は乏しいが、壁

際の2本柱穴や柱穴が途切れる部分等に出入り口の存在を想定しているものが多い。丹後谷地42号住居跡は2本柱穴型または縦溝型が付設され、中期末に既に縦溝型が構築されている。丹後谷地30号住居跡では横溝型が検出されており、その両側が柱穴状となる。

【後期初頭】八戸地方では2本柱穴・縦溝型の他に牛ヶ窪遺跡で張出部に２個の礫が組み合わされるものも見られる。湯沢遺跡・寺久保遺跡の礫を利用したタイプ゜との関連が想定される。また安代町扇畑Ⅱ遺跡の出入口部敷石の住居はその系統が注目される。

【後期前葉】青森県での検出例が多いが2本柱穴型・縦溝型・横溝型に加え逆「コ」字型も現れ、上尾駮(2)遺跡では張出部に2本柱穴が組み合わされるもの、丹後谷地遺跡では横溝の４隅に柱穴が掘られたものが見られる。

【後期中葉～後葉】中葉以降には、「コ」字型と「H」字型も多く見られるようになり、壁柱穴も非常に密になり、主柱配置は4本柱を基本とする入り口側が狭くなる台形状を呈するものが多くみられるようになる。下北半島の大畑町水木沢遺跡だけは門道と考えられる張出部に2本の柱穴が組み合わされるものが検出されており、溝状の施設構造はみられない。

3　後期中後葉の出入口施設構造と上屋構造の復元の手掛かりについて

後期前葉段階の関東地方では住居外部にのびる溝状の施設が認められ、中期～後期にかけての柄鏡型住居址の張出部からの変化が、また後期中葉には出入口施設は東北地方同様に住居プラン内側に位置し対状の溝となることが説明されている(山本　1993)。

小宮恒雄は、縄文時代から平安時代までの住居跡の出入口遺構について論じており、逆「コ」字型のものについて神奈川県三浦市赤坂遺跡の長軸15mの弥生時代中期の大型の住居例をあげ、住居内の「壁溝に接した平行する2本の溝を先端近くでつないだコの字形のもので、溝内にはさらにいくつかの小ピットが認められる。他に平行する2本の溝だけの例もあるが、いずれも中期の大型住居に限られる。これらはおそらく階段状の施設であろう。」と述べている(小宮　1990)。

溝状の出入口施設の構造復元については、いくつかの事例が手掛かりになるものと思われるので列挙したい。縦溝型の溝内柱穴の位置が、壁際や住居中心側に偏る例が多く見られること。「コ」字型や「H」字型のものでは縦溝が横溝よりも深いこと。丹後谷地遺跡56号住居跡の縦溝中に河原石が据えられていること。数本の柱を並べて打ちつけた結果、溝状形態を呈すると考えられるものが存在すること。「コ」字型・「H」字型の場合、住居内側に出入口に付帯すると考えられる小柱穴や溝が見られること(風張(1)６住、米山(２)１住)。叭屋敷Ⅰa遺跡では出入口施設に伴うスロープ゜が検出されていること。丹後平遺跡５号住居跡の「H」字型出入口跡から板状の炭化材が検出されていること。出入口部外側が僅かであるが階段状をとどめているものがあること等である。これらの事例より、階段またはスロープ゜から続くステップ゜状の構造物の施設を想定したいが、梯子状施設の存在も考えられ東北地方北部のさらなる類例、北海道・東北地方南部・関東地方といった他地域の類例、研究結果を検討することによって明らかになるものと考えている。

東北地方北部の後期中後葉の竪穴住居跡の上屋構造は、出入口と炉跡を結んだ線を主軸とし主柱穴が線対称に配されること、入り口側が狭くなる台形状に主柱穴が配されるものが多いこと、小径の壁柱穴が密に配されること、炉跡が住居中心または出入口側によること、主軸上に炉跡を挟んで間隔120～150cmで深い柱穴が見られること(丹後平5住・8住、風張(1)9住・37住、砂沢1住)、主軸上の住居

東北地方北部　縄文時代後期　出入口施設を有する住居跡属性表

掲載No	県名	町名	遺跡名	住居跡名	時期	出入り口タイプ	中心間幅	方向	壁柱穴	炉跡	形態	主軸長	直交軸長	主柱	備考
66-01	青森	八戸市	丹後谷地	35住	中期末（大木9）	2本柱穴	90	南東		土器埋設・石囲	楕円	7.6	3.8	5本多角形	炉2点確認
66-02	青森	八戸市	丹後谷地	30住	中期末（大木9）	横溝型	60	北西		複式炉	円形	3.4	3.3	4本正方形	
66-03	青森	八戸市	丹後谷地	42住	中期末	縦溝型	84	東	有	石囲	楕円	4.9	5.6	2個一対5組の多角形	
66-04	青森	八戸市	丹後谷地	56住	後期前葉以前	縦溝型	50	南	有	石囲	楕円	4.5	4.8	5本多角形	出入口溝に河原石が捉えられている
66-05	岩手	軽米町	馬場野Ⅱ	LⅢ－03	後期初頭	縦溝or2本柱穴	60	南東	多	地床？	楕円	3.8	4.1	4本台形	壁柱穴は部分的に集中する
66-06	岩手	安代町	扇畑Ⅱ	ⅠⅡc6	後期初～前葉	平行線型＋敷石	60	北	多数	地床炉	円形	5.0m	4.8m	4本台形	出入口施設外側に敷石部有り
66-07	岩手	二戸市	寺久保	9号住	後期初頭	礫2点を平行して立てたもの	50	北		石囲	円形？	3.5	3.5		礫間は貼床で堅く踏みしめられている
66-08	岩手	二戸市	寺久保	4号住	後期初頭	扁平礫2点を平行して立てたもの	80	北西		石囲？	円形？	4.4	4.4		礫間は堅く踏まれている
66-09	青森	六ヶ所村	大石平	8住	前葉(十Ⅰ)	逆「コ」字型	60	南東	有		楕円				
66-10	青森	六ヶ所村	上尾駮(2)	CJ－102	前葉(十Ⅰ)	縦溝型	60	南	有					主柱・壁柱兼用	主軸上に柱穴
66-11	青森	八戸市	丹後谷地	36住	後期前葉	横溝の周囲に4本の柱穴	60	南東	有	地床	楕円	2.9	3.4	4本台形	出入口部の4本柱より横溝が深い
66-12	青森	八戸市	丹後谷地	34住	後期中葉以前	「H」字型	48	南東	多	地床	円形	3.9	3.7	4本	広く浅い掘り方が南東部(出入口部)を除きめぐる
66-13	青森	八戸市	丹後谷地	28住	後期前葉（十腰内Ⅰ）	逆「コ」字型	54	東	有	地床	円形？				
66-14	青森	八戸市	丹後谷地	32住	後期中葉以前	「H」字型	90	南東	多	地床	楕円	4.5	5.2	7本多角形	出入口の南北溝は深さ30cmに対して東西溝は10cmと浅い
66-15	青森	八戸市	丹後谷地	24住	後期中葉（十腰内Ⅱ）	「H」字型	60～96	南東	多	地床	楕円	5.7	6.3	4本台形	建替え有り
66-16	青森	八戸市	丹後谷地	22住	後期中葉	「コ」字型	80	東	多	地床	円形	6.2	6.2	4本台形	建替え有り
66-17	青森	八戸市	丹後谷地	20住	後期中葉	変形逆「コ」字型	120	南東	多	地床	不整円形	6.3	6.8	6本台形	
66-18	青森	八戸市	丹後谷地	23住	後期中葉	変形「コ」字型	70	東	多	地床	円形	5.3	5.3	4本台形	
66-19	青森	八戸市	丹後平	5住	後期中葉	「H」字型	70～90	南東	多	地床	楕円	4	4.3	4本台形	炉をはさんで主軸上に柱穴(120cm幅)・出入口から板状炭化材を検出
66-20	青森	八戸市	丹後谷地	49住	後期後葉以前	逆「コ」字型	50	南	有	地床	楕円	2.4	2.7	4本台形	
66-21	青森	八戸市	丹後谷地	48住	後期後葉以前	「コ」字型	90	東	多	地床	楕円	4.5	5.6	4本台形	建替え有り
66-22	青森	八戸市	丹後谷地	46住	後期後葉	縦溝型	70	東	多	地床	楕円	5.4	5.9	6本多角形	
66-23	青森	八戸市	風張(1)	6住	後期中～後	変形「コ」字型	80	南西	多	地床	一部内湾	5.8	7.2	4本台形	出入口付近に付帯する小pitと溝検出
66-24	青森	八戸市	風張(1)	4住	後期中～後	「コ」字型	70	西	多	地床	一部内湾	6.1	5.5	4本長方形	
66-25	青森	八戸市	風張(1)	50住	後期後葉	「コ」の字型	80	南東	多	地床	円形	5	5.1	4本台形	
67-26	青森	八戸市	風張(1)	15住	後期後葉	「H」字型	70～90	南	多	地床	楕円	4.9	6.2	4～5本台形	出入口縦溝壁際に柱穴有・合掌土偶出土
67-27	青森	南郷村	水吉	4住	後期中～後葉	張出部＋縦溝	70	南	有	地床or石囲	隅丸方形	3.3	3.2	4本台形	出入口に張り出し部有り
67-28	岩手	軽米町	大日向Ⅱ	SA63住	後期中葉	縦溝型	70	南東	多	地床	一部内湾	4.6	5.6		主軸状に棟持ち柱？
67-29	岩手	軽米町	大日向Ⅱ	HI－4住	後期後葉	縦溝型	70	東	多	地床	楕円	4.5	4.9	複合台形？	桜の木SI04と柱穴配置類似・出入口付属pit有・棟持ち柱？
67-30	岩手	軽米町	大日向Ⅱ	HI－8c住	後期後葉	横溝型・2本柱穴	70～80	東		地床	楕円	3.6	4.2	4本台形	棟持ち柱？
67-31	岩手	軽米町	大日向Ⅱ	SA64住	後期中葉	縦溝型	90	南	多	地床	一部内湾	4	4.7		主軸状に棟持ち柱？
67-32	岩手	一戸町	桜の木	SI04住	後期後葉	「コ」字型	70～80	南東		地床	一部内湾	4.8	5.5	6本又は8本の変則台形	大日向HI－4と柱穴配置類似
67-33	岩手	岩手町	川口Ⅱ	BD2住	後期中葉	逆「コ」字型	80	南	多	地床炉	楕円	4.8	5.4		
67-34	青森	大畑町	水木沢	5住	後期後葉	張出部＋2本柱穴	100	東		石囲	不整楕円	5.5	6.4	4本台形	
67-35	青森	六ヶ所村	上尾駮(2)	1住	後期後葉	縦溝型	40	南	有	地床	楕円	2.8	3.2	主柱・壁柱兼用	
67-36	青森	平館村	尻高(4)	2住	後期（十腰内Ⅳ）	「コ」字型	60	南	少	地床炉	楕円	4.4	5.4	4本台形	
67-37	青森	弘前市	砂沢	1住	後期後葉	「コ」字型	60	南東	多	地床		4.5		4本台形	炉をはさむ主軸上の柱穴・主軸の出入口反対側の壁外に2本の柱穴・出入口縦溝壁際に柱穴
67-38	青森	青森市	米山(2)	1住	後期後葉	「コ」字型	80～110	南東	多	地床	楕円	5.9	7.6	6本変則台形	
67-39	青森	青森市	米山(2)	4住	後期後葉	縦溝型	60	南東	多		円形	4.1	4.6		
67-40	青森	金木町	明神町	5住	後期中葉	「コ」の字型	80	東		地床	楕円	5.4	6.1	4本台形	
67-41	秋田	鹿角市	赤坂A	106住	後期中葉	縦溝型	70	南		地床炉	円形	4.3			
67-42	秋田	小坂町	白長根Ⅰ	SI06住	後期中～後葉	縦溝型	60	北東	多	地床	円形	3.3	3.6	4本	
67-43	岩手	軽米町	馬場野Ⅱ	MV－01	後期中葉	縦溝型(作り替え有)	60	南東	有	地床	楕円	4.7	5.2		
67-44	岩手	軽米町	馬場野Ⅱ	LⅢ－01	後期末葉	縦溝型→「L」字型	80	南東	多	地床	楕円・円形	6	6.3	6本長方形？	排水用？の溝床面に有り
67-45	青森	南郷村	右エ門次郎窪	3住	後期中葉	「八」字型	60	南東	多数	地床炉？	不整隅丸方形	2.6	2.9	4本台形	建替え2回
67-46	秋田	鹿角市	赤坂B	103住	晩期前葉	縦溝型→「八」字型	75	南	多数	石囲炉	円形	5.4	5.4		住居内溝基点には40cm四方の偏平な石が立てられている。

（註）住居の主軸、直交軸、出入り口中心幅の計測には報告書中の図面（多くが1／60）を用いた。主軸、直交軸規模の計測には竪穴下部の床面を用いた。

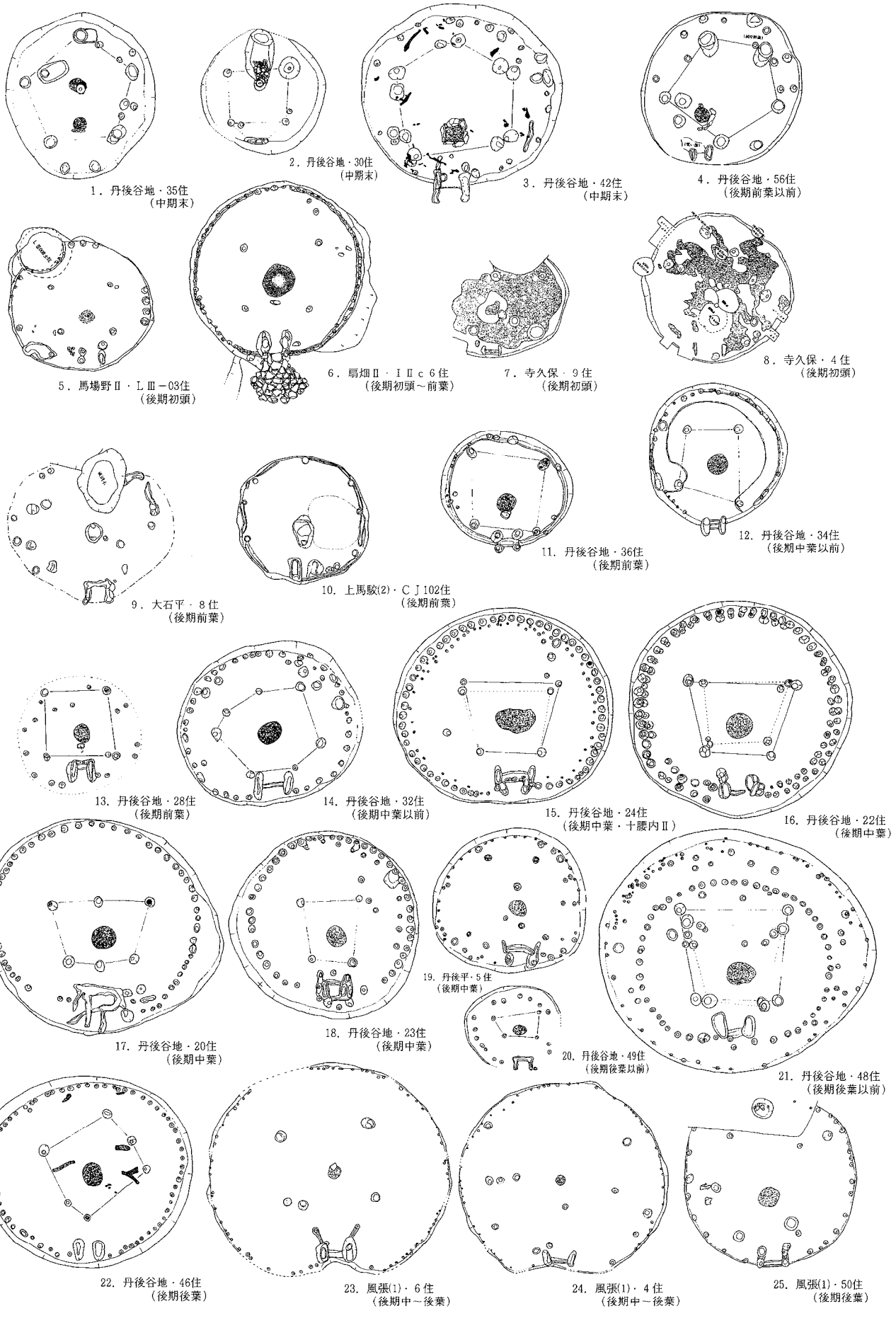


図66　東北地方北部出入口施設を有する竪穴住居跡①（縄文時代後期中心）（Ｓ＝１／160）

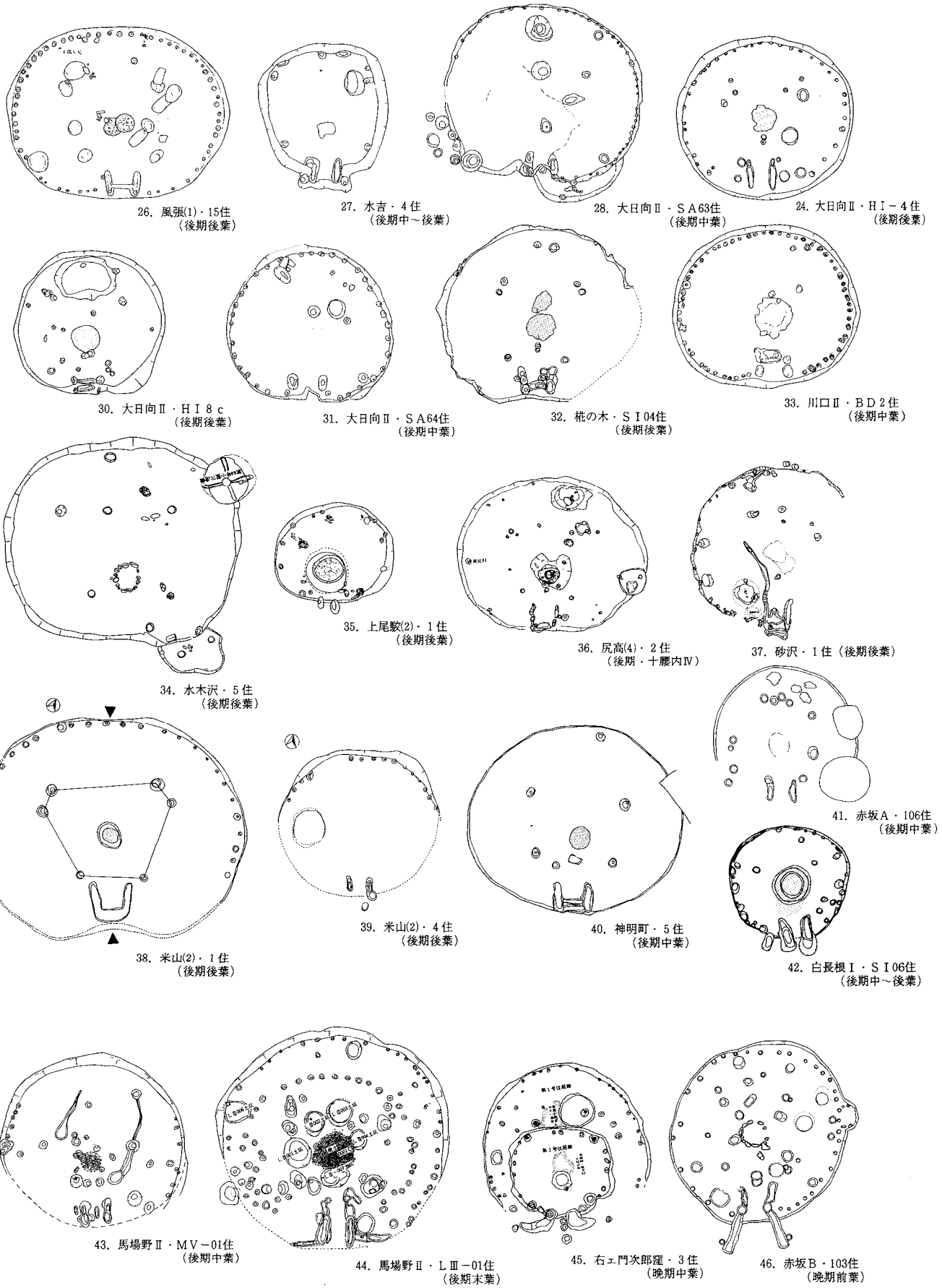


図67　東北地方北部出入口施設を有する竪穴住居跡②（縄文時代後期中心）（S＝1／160）

奥側または住居外に柱穴をもつものが見られることなどが手掛かりとなろう。
(註1)各類型の事例については住居跡属性表において記してある。
(註)米山(2)遺跡第1号住居跡の南側のプラン復元には、当住居跡の東側の壁柱穴の延長による推定を試みたが、その場合出入り口施設が大きく住居プランの内側に入り込むこととなり、建替えの跡も見られない事から、他遺跡の類例(風張(1)遺跡4住・6住、桂の木遺跡SI04住)を参考に出入口部の壁面を内側に湾曲させる形態と考えた。

第２節　各時期の概観

１　縄文時代中期

円筒上層ｂ式から円筒上層ｃ式期の土器が、Ｂ区の北西部に集中して出土している。扇形突起に縄文圧痕が施される幅広の隆帯が付され、隆帯間に縄文原体側面圧痕によるＣ字形の押圧列が施されるものと四角形や円形の刺突が施されるものがみられた。一般に「Ｃ字形押圧列」→「工具による刺突列」へと時間的に変化するものとされている。また円筒上層ｂ式期にはＣ字形押圧列の他に隆帯間に縄文の側面圧痕が施されると理解されている。当遺跡ではこれらの特徴を有するものの他に、隆帯間の側面圧痕(ｂ式的要素)と工具による刺突列(ｃ式的要素)が組み合わせられるものが存在している(72～76)。

２　縄文時代中期末(大木10式期)

Ｂ地区南東部の尾根地形から沖積中位面への移行部に位置するⅦＩ－271グリッドにおいて、大木10式期の竪穴住居跡が確認されている．床面から出土した14の土器は文様帯が上半部に限られること・その為に文様が横方向に展開すること・無文部が文様を構成することから大木10式第二段階(丹羽 1989、松本　1999)のものと考えられ、同様の土器は山崎遺跡・泉山遺跡でもみられる。同時期の遺物は第５号住居跡付近の他に、Ｂ区北西部でも出土している。

３　縄文時代後期初頭

大木10式と十腰内Ｉ式の間に位置する後期初頭には３段階程の時期の介在が想定されており、当遺跡の南西6.25ｋｍに位置する螢沢遺跡を標識遺跡とする「螢沢式」の捉え方によって大きく異なる２つの編年案が示されている(成田　1981･1989　本間　1985･1987･1988)。本間が「螢沢式」にみられる方形区画文系統(螢沢第３群)と三角形区画文系統(螢沢第1群・第２群)の装飾を別系統同時存在ととらえるのに対し、成田は両者を時期差ととらえ、「螢沢式」を「沖附(2)式」(螢沢第３群)と「弥栄平(2)式」(螢沢第１群・第２群)に細別し前者から後者への変遷を考えている。

螢沢式期の土器がＡ区の南西部、Ｂ区の南半部主に第５号住居跡周辺で少量出土しており、Ｂ区のものは螢沢第１群を主とし、磨消縄文を伴う第２群・第３群は見られない。ただ122～126は器面の磨耗が著しいため、判別が困難であるが磨消縄文が施される可能性もある。

当遺跡では、隆線により文様が構成される土器が少数であるが検出されており、ⅦＪ－271出土の115は狩猟文土器の一要素である上方に向かって開く綾杉状の樹木様モチーフが断面三角形と台形の２種の隆線で構成されている。両者の使い分けは意図的のようで、樹木の幹にあたる部分には左右2本の隆線上面が狭い断面三角形のものを選択し、そこから斜め上方に伸びる枝と考えられる部分には台形状のものを選択し、またその上面に縄文を転がすことによって葉が生い茂る様を表現しているよう

にも思われる。縄文も絵画要素の一部であって、無意味に施文されているのではないと考えたい。土器片の左下に部分に、先端の尖った横向きのラグビーボール形の隆線内にさらに隆線が施されるモチーフがみられるが、これは樹木以外のものを表現しているために縄文を施す必要も無く、断面三角形の隆線が選択されている。螢沢式とほぼ同じ出土分布を示す。

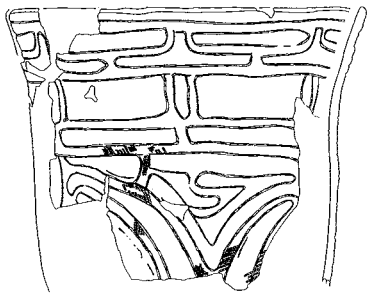
4　縄文時代後期中葉～後葉

A区で後期中葉～後葉の竪穴住居跡が4軒検出されている。第3号住居跡からは意図的に設置されたまま埋納されたと考えられる、倒立状態の深鉢・鉢形土器が3点検出されている。B区ではほぼ全域から土器片の出土がみられるが、主に後期中葉にあたるものが主体を占める。

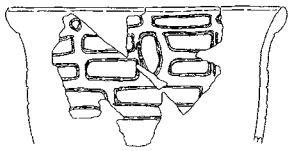
5　縄文時代晩期・弥生時代

A地区で、後期中葉～後葉の住居跡近辺から土坑が検出されている。第1号土坑からは小型有文台付鉢(図46－1)と小型粗製深鉢(図46－2)が底面より10cm程上位で検出された。台付鉢は三又の突起が4単位付され、波頂部に円の両端が横に引っ張られたようなモチーフを配し、その間を上下の弧状沈線で埋めている。弧状沈線以下の頸部は横位の箆ナデによって無文となり、体部は単節LRが斜行し、台部は無文となる。小型ではあるが、内面には炭化物の付着が見られる。この小型台付鉢の装飾は、口頸部文様は縄文時代後期終末に見られるような構成であり、玉抱き三叉文の祖形またはバリエーションとも考えられよう。円の両端の引っ張りと上下の弧線が合体し三叉文化することによって玉抱き三叉文化する。上下の弧状沈線は後期後葉の(木葉状)縄文帯の区画線の名残とも考えられよう。また後期後葉にみられる肩部に貼瘤が付され、貼瘤間を弧状沈線で結ぶ小型壷・小型台付鉢や突起下に円形モチーフを配しその間を縄文帯の一部をなす上下の弧線が埋める有文深鉢の文様モチーフに系統が辿れよう。突起部は後期後葉に盛行した内外面に肥厚するものとは異なり、器厚と同程度である。文様構成は後期的、突起は晩期的、器形は縄文時代晩期初頭に見られるものであり、編年的位置付けに苦慮する。共伴した小型深鉢は単節LR斜行縄文が施され、底部は若干の上げ底となり、口縁部の肥厚は認められない。土器の諸特徴より、第1号土坑の帰属時期は、縄文時代後期終末～晩期初頭としておく。東北北部の後期後葉の土器群の実態と大洞B式期後半段階の土器群を明らかにすると共に、近年、須藤隆・関根達人らによって明らかにされつつある北上川流域の縄文時代後期終末～晩期初頭の土器型式変化の様相を踏まえた上で、津軽地方の後期末葉～大洞B式期前半の様相が追及されるべきである。第3号土坑でも底部の作りが第1号土坑出土土器と類似し、節が非常に細かい単節LR斜行縄文が施される縄文時代晩期前葉と考えられる小型深鉢が出土している。B区のⅦK－270・271では、完形品の小型壷が2点(193・197)出土した。193は胴部文様帯の上下に横位連続工字文風の文様を描き、その中間にZ字型の構成をとる入組文が描かれる。その文様要素は渡島半島南部から青森県に分布するとされる晩期中葉後半～後葉前半段階の聖山式にみられるものである。

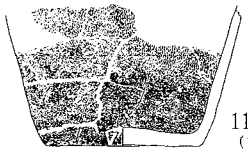
(永嶋　豊)



11－28
（第６号土坑）



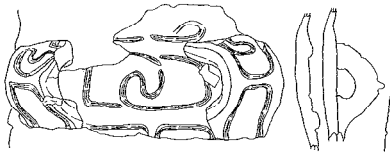
23－59



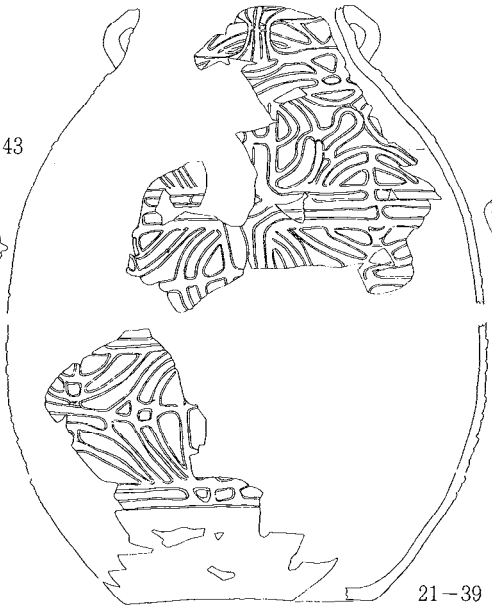
11－32
（第７号土坑）

12－33
（埋設土器）

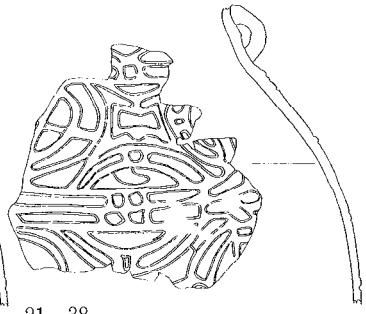
22－43



22－44

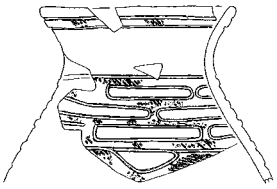


21－39

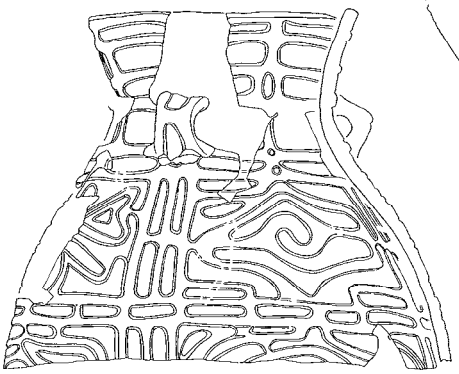


21－38

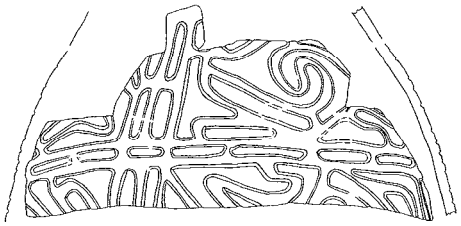
21－40



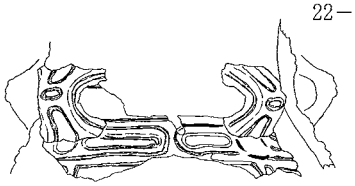
27－138



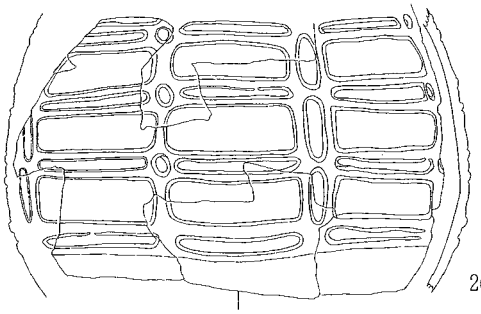
22－41



22－42



26－124



26－125

図68　山下遺跡出土土器集成図（Ｓ＝１／６）

図69　米山(2)遺跡出土土器集成図（S＝1／6）

『山下・米山（２）遺跡　参考文献』

青森市螢沢遺跡発掘調査団　1979　『螢沢遺跡』
青森県教育委員会　1977　『水木沢遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
青森県教育委員会　1980　『永野遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
青森県教育委員会　1980　『金木町　神明町遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
青森県教育委員会　1982　『馬場瀬遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
青森県教育委員会　1983　『鴨平(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
青森県教育委員会　1984　『弥栄平遺跡(2)』　青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
青森県教育委員会　1984　『韮窪遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
青森県教育委員会　1984　『尻高(2)・(3)・(4)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
青森県教育委員会　1985　『大石平遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
青森県教育委員会　1986　『沖附(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第100集
青森県教育委員会　1986　『沖附(2)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
青森県教育委員会　1988　『上尾駮(2)遺跡(Ⅰ)』　青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
青森県教育委員会　1988　『上尾駮(2)遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
青森県教育委員会　1989　『二ッ石遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
青森県教育委員会　1989　『館野遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
青森県教育委員会　1998　『水吉遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第245集
青森県教育委員会　1999　『山下遺跡・上野尻遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第258集
青森県教育委員会　1999　『十腰内(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
秋田県教育委員会　1998　『虫内Ⅰ遺跡』　秋田県文化財調査報告書第274集
秋田県教育委員会　1984「白長根館Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅡ』秋田県文化財調査報告書120集
浅川滋男編　1998　『先史日本の住居とその周辺』　奈良国立文化財研究所シンポジウム報告　同成社
岩手県埋蔵文化財センター　1978　『都南村　湯沢遺跡』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第２集
岩手県教育委員会1979「卯遠坂遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告書31集
岩手県埋蔵文化財センター　1982『扇畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第39集
岩手県埋蔵文化財センター　1983『呉屋敷Ⅰa遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第61集
岩手県埋蔵文化財センター1984『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書71集
岩手県埋蔵文化財センター　1986『駒坂遺跡発掘調査報告書』　岩手県埋文センター文化財調査報告書第98集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986　『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋蔵文調査報告第 99集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986　『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文調査報告第 99集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文調査報告第100集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調査－』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第225集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996　『寺久保遺跡発掘調査報告書』岩手埋文調査報告第239集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997　『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文調査報告第259集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997　『桃の木遺跡発掘調査報告書』　岩手埋文調査報告第263集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998　『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第6次～第8次調査－』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第273集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999　『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　岩手埋文調査報告第306集
鹿角市教育委員会　1993　『赤坂Ｂ遺跡』　鹿角市文化財調査資料　48
鹿角市教育委員会　1995　『赤坂Ａ遺跡』　鹿角市文化財調査資料　53
金子昭彦　1994　「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器－新山権現社遺跡Ⅲ群1～3類土器－」
『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要ⅩⅣ』
金子昭彦　1994　「十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界－東北地方北半部における縄文時代後期中葉から後葉への土器変遷－」
『岩手考古学』第6号

金子昭彦　1995　「十腰内Ⅰ式と大湯式における型式としての諸問題－細分、組成、併行型式の問題－」
『岩手考古学』第7号
金子昭彦　1996「十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方－新しい部分と最も新しい部分の分離」『岩手考古学』第8号
金子昭彦　1997　「十腰内Ⅰ式と「大湯式」における壷形土器の変遷」　『岩手考古学』第9号
小宮恒雄　1990　「住まいの入口」　『季刊　考古学』第32号
酒井宗之　1987　「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡」　『岩手埋文センター紀要Ⅶ』
笹森健一　1990　「住まいのかたち」　『季刊　考古学』第32号
札幌市教育委員会　1995　『H317遺跡』　札幌市文化財調査報告書46
札幌市教育委員会　1997　『K39遺跡　長谷工地点』　札幌市文化財調査報告書55
鈴木克彦　1989　「亀ヶ岡式土器」　『縄文文化の研究4』
鈴木克彦　1998　「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)(下)－十腰内3，4，5式土器の研究－」
『考古学雑誌』83－2・3
成田滋彦　1981　「後期の土器　青森県の土器」　『縄文文化の研究4』
成田滋彦　1989　「入江・十腰内土器様式」　『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』
丹羽　茂　1981　「大木式土器」　『縄文文化の研究4』
八戸市教育委員会　1984　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書－牛ヶ窪遺跡－』八戸埋文調査報告13集
八戸市教育委員会　1986『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－丹後谷地遺跡』八戸埋文調査報告書15集
八戸市教育委員会　1988　『八幡遺跡発掘調査報告書』　八戸市埋蔵文化財調査報告書26集
八戸市教育委員会　1988　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』八戸市埋蔵文化財調査報告書27集
八戸市教育委員会　1991　『風張(1)遺跡Ⅰ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
八戸市教育委員会　1991　『風張(1)遺跡Ⅱ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
八戸市教育委員会　1995　『八戸市内遺跡発掘調査報告書7－坂中遺跡－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
弘前市教育委員会　1988・1991　『砂沢遺跡発掘調査報告書－図版編・本文編－』
本間　宏　1985　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号
本間　宏　1987・1988「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)(2)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第3・4号
宮城県教育委員会　1986　『田柄貝塚』　宮城県文化財調査報告書第111集
村田文夫　1985　『縄文集落』　考古学ライブラリー36　ニュー・サイエンス社
山本暉久　1993　「住居論」　『季刊　考古学』　第44号

山下遺跡出土土器観察表１

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口縁	口　頸　部	胴　部	地文	内面調整	沈線幅	備　考	同一
1	試掘区	ⅡＪ187		Ⅲ					不明	ナデ		底面に２㎜の沈線状の圧痕有	
2	試掘区	ⅡＮ187		Ⅰ						ナデ		器表面磨耗　砂粒多	
3	試掘区	ⅡＱ195			深鉢			不明＋地文	ＲＬ斜行	ナデ		底面原体痕有	
4	試掘区	ＶＡ177		Ⅱ	壷	平坦	原体圧痕（Ｒ）	原体圧痕（Ｒ）	Ｒ	不明		波頂部から１条の隆帯垂下する円筒下層ｄ２式	
5	試掘区	ⅢＮ194		Ⅰ	深鉢	波状	原体圧痕（Ｒ）内面に隆線有		Ｒ	ナデ			
6	試掘区	ＶＤ182		Ⅲ	深鉢	波状	原体圧痕（Ｌ）	原体圧痕（Ｌ）	Ｌ	不明		口唇外側にもＬの側面圧痕	
7	試掘区	Ⅳ186		Ⅱ	深鉢			縄文・平行沈線	ＲＬ斜行	不明	4		
8	試掘区	ⅣＰ175		Ⅰ	深鉢	平坦	楕円文		ＲＬ斜行	ミガキ	4		
9	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	楕円文	無	不明	4		
10	試掘区	ＶＢ184		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文・縄文		ＲＬ斜行	不明	2	沈線断面Ｖ字形でシャープな線、内面沈線有	
11	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	楕円文	ＬＲ斜行	不明	2～3	器厚４～６㎜と薄手	
12	試掘区	ＶＪ175		Ⅱ	深鉢	平坦	平行沈線	沈線文・縄文	ＬＲ斜行	不明	3	充填縄文	
13	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	平坦	口唇直下に横走沈線１本。その下は横方向の条線		条痕	不明	2	砂粒多	
14	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線＋刺突			不明	3	刺突径３㎜	
15	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		ＲＬ斜行	ミガキ	2		
16	試掘区	ＶＥ174～175		Ⅰ	深鉢	波状	沿口沈線		不明	ナデ	3	内面口唇肥厚外側沈線粗雑	
17	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線	楕円文	ＬＲ斜行	ナデ	2		
18	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線		ＲＬ斜行	ミガキ	3	口縁部隆帯上に縄文施文	
19	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175			壷	平坦	縄文	縄文	無	ナデ	4	口唇部等に刺突	
20	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	壷	平坦	楕円文	楕円文	無	ナデ	4		19･21･22･23･24
21	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	壷	平坦		楕円文	無	ナデ	4		
22	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	壷			楕円文	無	ナデ	4	横型橋状把手に楕円文	
23	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	壷			楕円文＋三角状文	無	ナデ			
24	試掘区	ＶＡ～Ｆ174～175		Ⅲ	壷			楕円文	無	ナデ	4	横型橋状把手に楕円文	
25	試掘区	ＶＥ174～175		Ⅰ	深鉢		波状文風モチーフ･充填縄文		ＲＬ斜行	ミガキ	3		
26	試掘区	ＶＤ182		Ⅲ	深鉢	平坦	無文	無文	ＬＲ斜行	ナデ		充填縄文	
27	試掘区	ＶＣ174		Ⅱ	深鉢	平坦	平行沈線	縄文	ＲＬ斜行	ナデ	1	内面炭化物付着	
28	Ｃ区	ＶＫ183	６号土坑		深鉢	平坦	平行沈線・楕円文	上半楕円文・下半三角状モチーフ	ＲＬ斜行	ミガキ	2～3	体部外面に炭化物付着	
29	Ｃ区	ＶＫ183	６号土坑	覆土									28
30	Ｃ区	ＶＫ183	６号土坑	覆土									28
31	Ｃ区	ＶＫ183	７号土坑	覆土	深鉢			網目状撚糸文（Ｒ）	網目撚糸	ナデ			
32	Ｃ区	ＶＫ183	７号土坑		深鉢			底部から６～７㎝の無文部に丁寧なミガキ	多軸絡状体(無節R)	ミガキ			
33	Ｃ区	ＶＩ184	埋設土器		深鉢	平坦	縄文	縄文	ＲＬ斜行	ミガキ		埋設土器本体	
34	Ｃ区	ＶＩ184	埋設土器	1	深鉢			無文	無	ミガキ		埋設土器粘土蓋	
35	Ｃ区	ＶＩ184	埋設土器	1	深鉢		楕円文		無	ミガキ	2･4	埋設土器粘土蓋	
36	Ｃ区	ＶＩ184	埋設土器	1	深鉢			楕円文	ＬＲ斜行	ミガキ		埋設土器粘土蓋	34
37	Ｃ区	ＶＩ184	埋設土器	1	深鉢			楕円文	ＬＲ斜行	ミガキ	2	埋設土器粘土蓋	34
38	Ｃ区	ＶＩ184					橋状把手	縦横区画内に円形モチーフを構成しその間に他文様充填	無	ミガキ	3	器厚７㎜	39･40
39	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷			楕円文で構成される円形モチーフ	無	ミガキ	2～3		38
40	Ｃ区	ＶＩ184・ＶＩ185		Ⅲ	壷			円形モチーフ間を他の文様で充填	無	ミガキ	2～3	外傾または水平の粘土帯積上げ	38
41	Ｃ区	ＶＩ184 ＶＩ185		Ⅲ	壷	平坦	楕円文	楕円文区画中に入組状文と三角状モチーフ	無	ミガキ	3		
42	Ｃ区	ＶＩ185		Ⅲ	壷			楕円文区画中に入組状文と三角状モチーフ	無	ミガキ	3		41
43	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷	平坦	楕円文・一部流水文化		無	ミガキ	4	隆線剥落部、下描き沈線表出	
44	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷		把手装飾は、上面側が入組状文･下面側が楕円文状モチーフ	楕円文＋入組み状文	無	ミガキ	4	橋状把手５単位	
45	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷	平坦	楕円文		無	ナデ	4		
46	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷			楕円文	無		4	橋状把手	
47	Ｃ区	ＶＩ185		Ⅲ	壷		楕円文	楕円文	無	ミガキ	3		
48	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷			楕円文	無	ナデ	4		
49	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷				無	ナデ		底部付近無文	
50	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	壷			楕円文	無	ナデ	4		
51	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文	楕円文	無	不明	3	沈線断面Ｖ字形	
52	Ｃ区	ＶＩ185		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		無	ナデ	4		
53	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		無	ミガキ	3	沈線断面Ｖ字形	
54	Ｃ区	ＶＩ184		Ⅲ	深鉢	平坦	無文	無文	無	ミガキ		粘土帯２㎝以下	

山下遺跡出土土器観察表 2

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口縁	口頸部	胴部	地文	内面調整	沈線幅	備考	同一
55	C区	V I 184		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	不明	3		
56	C区	V I 184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文	沈線	無	ミガキ	3~4		
57	C区	V I 185		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文		無	ナデ	4	器表面摩滅	
58	C区	V K181		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	楕円文	無	ミガキ			
59	C区	V J 187		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	無文？	無	ミガキ		外面体部下半丁寧なミガキ	
60	C区	V K180		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		無	ナデ	2		
61	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	楕円文	LR斜行	ナデ	2		
62	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	平行沈線・楕円文		無	不明	4		
63	C区	V L186		Ⅲ	深鉢	平坦	平行沈線	楕円文	無	ミガキ	2		
64	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文	渦巻状文	無	ミガキ	2		
65	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		RL斜行	ミガキ	2~3		
66	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		LR斜行	ミガキ	3		
67	C区	V K180		Ⅲ	深鉢	平坦	平行沈線		無	ナデ	2		
68	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	平坦	平行沈線			ミガキ	5		
69	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文	楕円文	無	ミガキ	3		
70	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文	篦状工具で深く施文	RL斜行	ミガキ	3		
71	C区	V H181		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	不明	4	器表面摩滅	
72	C区	V K184		Ⅲ	浅鉢	波状	楕円文		無	ミガキ	3		
73	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線	楕円文	無	ミガキ	4		
74	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線	楕円文	無	ミガキ	3		
75	C区	V G181		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文	隆帯	LR斜行	ミガキ	2~5		
76	C区	V J 185		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線		無	不明	4		
77	C区	V K186		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	ナデ	3	波頂部下に凝の隆帯	
78	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		不明	ミガキ	3		
79	C区	V L183		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	ナデ	3		
80	C区	V L183		Ⅲ	深鉢	平坦	楕円文		無	ナデ	3		79
81	C区	V L183		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	ナデ	3		79
82	C区	V F182		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文		無	ナデ	3	内面沈線	
83	C区	V E182		Ⅲ	深鉢	4	沿口沈線・楕円文		無	ナデ	3	内面側に口縁部折返し	
84	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線		無	不明	3		
85	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線	沈線文	RL斜行	ミガキ	2	外面丁寧なミガキ	
86	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文間に篦状工具による刺突		無	ミガキ	3		
87	C区	V G184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線	楕円文	無	ミガキ	3		
88	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		無	ナデ	3		
89	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文		無	ミガキ	3		
90	C区	V G184		Ⅲ	深鉢	波状	楕円文		RL斜行		3		
91	C区	V L186		Ⅲ	深鉢	4	沿口沈線		無	ナデ	2		
92	C区	V F183		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線		無	ミガキ	2		
93	C区	V J 185		Ⅲ	深鉢	波状	沿口沈線・楕円文		無	不明	3		
94	C区	V E182		Ⅲ	深鉢			楕円文	無	ナデ	3		
95	C区	V E182		Ⅲ	深鉢			楕円文	無	ナデ	3		
96	C区	V E182		Ⅲ	深鉢			楕円文	無	ナデ	3		
97	C区	V M185		Ⅲ	深鉢			楕円文	RL斜行	ミガキ	3	充填縄文	
98	C区	V I 186		Ⅲ	深鉢			楕円文	無	ミガキ	2	器表面摩滅	
99	C区	V K181		Ⅲ	深鉢			楕円文	無	ナデ	3		
100	C区	V M185		Ⅲ	深鉢			楕円文	RL斜行	ナデ	4	充填縄文	
101	C区	V H185		Ⅲ	深鉢				RL斜行	ナデ	3	充填縄文	
102	C区	V M185		Ⅲ	深鉢				LR斜行	ナデ	3	充填縄文	
103	C区	V M185		Ⅲ	深鉢				LR斜行	ミガキ	2~3	充填縄文	
104	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	波状	波状文？			不明	4	突起下口縁肥厚	
105	C区	V E184		I	深鉢	平坦	楕円文？		無	ミガキ	3	左右対象の文様	
106	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	沈線文	沈線文	無	ナデ	2		
107	C区	V K186		Ⅲ	深鉢	平坦	無文	無文	無	ミガキ		口唇部肥厚	
108	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文	縄文	LR斜行	ナデ		地文原体口縁部横回転	
109	C区	V K184		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文	縄文	LR斜行	ナデ			108
110	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文	縄文	LR斜行	ナデ			108
111	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文・平行沈線	縄文	LR斜行	ナデ	3	器表面剥落	
112	C区	V K186		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（L）	網目状撚糸文（L）	網目撚糸	ミガキ			
113	C区	V K186		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（L）	網目状撚糸文（L）	網目撚糸	ミガキ		口唇部平坦	
114	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（L）	網目状撚糸文（L）	網目撚糸	ミガキ		口唇部にも撚糸文	
115	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（L）	網目状撚糸文（L）	網目撚糸	ミガキ		地文原体口縁部横回転	
116	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（R）	網目状撚糸文（R）	網目撚糸	ナデ			
117	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（R）	網目状撚糸文（R）	網目撚糸	ミガキ		口唇部平坦	
118	C区	V L183		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（R）	網目状撚糸文（R）	網目撚糸	不明		砂粒多	
119	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	網目状撚糸文（R）	網目状撚糸文（R）	網目撚糸	ミガキ		折返し口縁	
120	C区	V M185		Ⅲ	深鉢	平坦	縄文	網目状撚糸文（R）	RL斜行 網目撚糸	ミガキ		折返し口縁部のみ縄文施文	
121	C区	V I 180		Ⅲ	深鉢	平坦	無文	撚糸文（R）	R	ナデ		折返し口縁	
122	C区	V E184		I	深鉢	9	側面圧痕（LR）	LR斜行	LR斜行	ナデ		繊維混入・円筒上層a式？	
123	C区	V K180		Ⅲ	壺		楕円文		無	不明	4		147
124	C区	V K181		Ⅲ	壺		橋状把手装飾楕円文	楕円文＋隆帯と把手剥落部下描き沈線表出	無	ミガキ	4	橋状把手4単位	
125	C区	V K181		Ⅲ	壺			楕円文	無	ミガキ	4		
126	C区	V K183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		136
127	C区	V L183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		136
128	C区	V K183		Ⅲ	壺			楕円文	無	ナデ	4		
129	C区	V K183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		136

山下遺跡出土土器観察表 3

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口縁	口頸部	胴部	地文	内面調整	沈線幅	備考	同一
130	C区	VL183		Ⅲ	壺			楕円文	無	ナデ	3~4		136
131	C区	VK183		Ⅲ	壺			三角状モチーフ	無	不明	3~4		136
132	C区	VK183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		
133	C区	VK183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		136
134	C区	VL183		Ⅲ	壺			平行沈線	無	不明	3~4		136
135	C区	VK183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		136
136	C区	VK183		Ⅲ	壺			楕円文	無	不明	3~4		
137	C区	VK188		Ⅲ	壺			平行沈線	無	不明	3~4		136
138	C区	VI184		Ⅲ	壺	平坦	平行沈線・頸部無文	上半楕円文・下半三角状モチーフ	RL斜行	ミガキ	4		
139	C区	VI181		Ⅲ	壺	平坦	平行沈線		無	ミガキ	5		
140	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文+三角状モチーフ	RL斜行	ミガキ	4~5		138
141	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文・三角状文	RL斜行	ナデ	3		138
142	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文・三角状文	RL斜行	ナデ	3		138
143	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文・三角状文	RL斜行	ナデ	3		138
144	C区	VI181		Ⅲ	壺			三角状文	RL斜行	ナデ	3		138
145	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文		ナデ	3		138
146	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文・三角状文	RL斜行	ナデ	3		138
147	C区	VK183		Ⅲ	壺	平坦	楕円文		無	不明	4	器表面摩滅	
148	C区	VK181		Ⅲ	壺	平坦	楕円文		無	ミガキ	3		
149	C区	VL183		Ⅲ	壺	平坦	楕円文		無	ナデ	4		
150	C区	VL184		Ⅲ	壺	平坦	不明		無	ミガキ	2・4	口唇平坦	
151	C区	VK181		Ⅲ	壺	平坦	楕円文		無	ミガキ	5		152
152	C区	VG184		Ⅲ	壺	平坦	楕円文		無	ミガキ	5		
153	C区	VK186		Ⅲ	壺	平坦	縄文		無	ナデ	2~3	沈線断面V字形	
154	C区	VI181		Ⅲ	壺			楕円文	無	ナデ		沈線途切れる	
155	C区	VK184		Ⅲ	壺			楕円文・刺突（径4㎜）	LR斜行	不明	3		
156	C区	VK183		Ⅲ	壺			楕円文	無	ナデ	4		
157	C区	VK181		Ⅲ	壺			楕円文	無		2	橋状把手	
158	C区	V181		Ⅲ	壺			横線から垂下するS字形モチーフ+刺突	無	ミガキ	2	沈線断面V字形	
159	C区	VK186		Ⅲ	壺			楕円文？	無	不明	3		
160	C区	VG184		Ⅲ	浅鉢・壺			楕円文	無	ナデ	2	底面にも沈線有	
161	C区	VK186		Ⅲ	壺			楕円文？	無	ミガキ	2		
162	C区	VK180		Ⅲ	壺			楕円文？	LR斜行	ナデ	3	充填縄文	
163	C区	VL184		Ⅲ	浅鉢	波状	無文		無	ミガキ		器厚15㎜	
164	C区	VL183		Ⅲ	鉢	平坦	平行沈線	無文	無	ミガキ	2	器厚4㎜程度の薄手	
165	D区	ⅣI173		Ⅱ	深鉢	平坦	波状隆線+円形と楕円形貼瘤	横方向の弧状+縦に垂下する2本一単位の沈線文	RL斜行	ナデ	3	円筒上層d式。口唇に沿ってLR押圧	
166	D区	ⅣJ176		Ⅰ	深鉢	波状	頂部二又の山形突起+原体圧痕（L）+隆線	縄文	LR斜行	ナデ		円筒上層d式？ 口唇にLR押圧	
167	D区	ⅣI175		Ⅱ	深鉢	波状	縄文		RL斜行	ナデ		凹部を有する円形突起	
168	D区	ⅣJ176		Ⅰ	深鉢	波状	隆線・内面に隆線有	三角状文	RL斜行	ミガキ	4		
169	D区	ⅣJ175		Ⅰ	深鉢	波状	隆帯	沈線文	無	不明	4		168
170	D区	ⅣJ176		Ⅰ	深鉢	波状	縄文	平行沈線	RL斜行	ナデ			
171	D区	ⅣI173		Ⅱ	深鉢	波状	三角形の隆線			不明		突起上に小突起。その内面にLR押圧	
172	D区	ⅣI173		Ⅱ	深鉢	波状	平面楕円形の張瘤+隆線		LR斜行	ナデ			
173	D区	ⅣK175		Ⅰ	深鉢			三角状文	RL斜行	ナデ	3	三角状モチーフと楕円文の内側に横走沈線または楕円文が入る	
174	D区	ⅣK175		Ⅱ	深鉢				RL斜行	ナデ	3		173
175	D区	ⅣK175		Ⅱ	深鉢			沈線文	RL斜行	ナデ	3		173
176	D区	ⅣJ175		Ⅱ	深鉢			渦巻状文	RL斜行	ナデ	3		
177	D区	ⅣJ175		Ⅱ	深鉢			沈線文	不明	ナデ	3	沈線断面四角形	
178	D区	ⅣI174		Ⅲ	深鉢	波状		沿口沈線+円形隆線	無	不明		口唇部に沈線	
179	D区	ⅣH172		Ⅲ	深鉢	波状	縄文	楕円文	LR斜行	ナデ	3		
180	D区	ⅣH172		Ⅲ	深鉢			楕円文？	無	ミガキ	3		
181	D区	ⅣJ176		Ⅱ	深鉢	平坦	縄文	縄文	LR斜行	ナデ			
182	D区	ⅣJ175		Ⅰ	深鉢	平坦	縄文	縄文	RL斜行	ナデ		口唇部にも縄文施文	
183	D区	ⅣI176		Ⅰ	深鉢	平坦	無文		無	ナデ			
184	D区	ⅣH172		Ⅲ	擂鉢			内面卸し目（6条/cm）				珠洲焼・灰色	
185	D区	ⅣI175		Ⅰ	擂鉢			内面卸し目（3条/cm）				珠洲焼・褐灰色	
186	D区	ⅣF175		Ⅰ								珠洲焼・黄灰色	
187	D区	ⅣF175		Ⅰ	甕			外面叩き目（4目/cm）				珠洲焼・黄灰色	
188	D区	ⅣF175		Ⅰ	甕			外面叩き目（4目/cm）				珠洲焼・黄灰色	
189	D区	ⅣF175		Ⅰ	甕			外面叩き目（4目/cm）				珠洲焼・灰色、自然釉・暗灰色	

米山(2)遺跡出土土器観察表 1

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口頸部	胴部	地文	内面調整	沈線幅	備考	同一
1	A区		1住		鉢・浅鉢		楕円文	無	ミガキ	2		
2	A区		1住	2	不明		楕円文	無	ミガキ	1.5		
3	A区		1住	3	深鉢	無文		無	ミガキ			
4	A区	ⅧK235	2住	床直	注口？		細隆線によって左上がりの入組文が施される	無	丁寧なナデ	2	赤色顔料付着	
5	A区	ⅧK235	2住	Ⅰ	深鉢	縄文	縄文	LR斜行	ミガキ		RL縦回転	
6	A区	ⅧH226	3住	床直	鉢	沿口沈線間に縦キザミ	木葉状縄文帯・LR縄文	同原羽状	ミガキ	2・3	谷部突起。内面側肥厚	

米山(2)遺跡出土土器観察表 2

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口　頸　部	胴　部	地文	内面調整	沈線幅	備　考	同一
7	A区		3住	覆土	鉢	無文		無	ナデ		口唇部内傾する平坦面となる	
8	A区		3住	床	深鉢	無文・雑なミガキ	無文・雑なミガキ	無	ミガキ		床面に倒立埋納	
9	A区		3住	床	深鉢	縄文	縄文	異原羽状	ミガキ		床面に倒立埋納	
10	A区		3住	床	深鉢	突起7単位・3条の縄文帯	複雑化した縄文帯入組文	異原羽状	ミガキ	3	床面に倒立埋納	
11	A区	Ⅷ K 233	4住pit		深鉢		幅5～7㎜の隆帯上にRL斜行	RL斜行	ミガキ			
12	A区		4住		深鉢	無文		無	ナデ			
13	A区		4住	床	深鉢		0多異原羽状	←	ミガキ		丸底気味	
14	B区		5住	床	深鉢	大木10式系文様	大木10式系文様	RLR複節	ナデ	3	ヒレ状突起を文様上端と交差部に貼付	
15	B区		5住	床	深鉢	縄文	縄文	RL斜行	ナデ			
16	B区		5住	床面	深鉢	楕円状文。ボタン状貼瘤		RL縦走？	ミガキ	2		
17	B区		5住	床面	深鉢		垂下して渦巻状になる	RL斜行	ナデ	3		
18	B区		5住	炉	深鉢			LR斜行	ナデ		底部網代痕	
19	B区		5住	炉	深鉢	大木10式系文様		RL縦走	ナデ	7	波状口縁	
20	A区		5住	炉	深鉢		大木10式系文様	RL縦走	ナデ	7		
21	B区		5住	炉	深鉢		大木10式系文様	RL縦走	ナデ	7		
22	B区		5住pit 7	1	深鉢	無文。横方向の明瞭なナデ痕	縄文	LR斜行	ミガキ		内面炭化物付着・LR縦回転	
23	B区		5住pit 7	1	深鉢		縄文	LR斜行	ミガキ		内面炭化物付着・LR縦回転	
24	B区		5住pit 7	1	深鉢	無文＋1条の横走沈線	縄文	LR縦走	ミガキ	4	LR縦回転	
25	B区		5住		深鉢		縄文帯中に刺突	RL斜行	ナデ	4		
26	B区	Ⅵ J 271	5住	1	深鉢		三角形状文	LR斜行	ナデ	5	LR縦回転	135
27	B区		5住				沈線文	無	ミガキ	5		
28			5住		深鉢		三角形状文	LR縦走	ナデ	5		
29	B区		5住		深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ		RL原体左上⇔右下	
30	B区	Ⅵ J 271	5住		深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ		RL原体左上⇔右下	
31	B区		5住		深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ		RL原体左上⇔右下	
32	B区		5住		深鉢		無文	無	ナデ		推定底径5.4cm	
33	B区		5住		深鉢		LR斜行・結節回転文	LR斜行	ナデ		炭化物明瞭に付着	
34	B区		5住		深鉢		縄文	LR斜行	ナデ		底部網代痕	
35	A区	Ⅷ G 227		Ⅰ	深鉢	縄文	縄文	LR	ナデ		原体縦回転	
36	A区	Ⅷ O 248		Ⅱ	深鉢	無文	単軸絡条体第1類（L）	L撚糸	ナデ			
37	A区	Ⅷ I 229		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL斜行	ナデ		口縁部肥厚・原体縦回転	
38	A区	Ⅷ G 228		Ⅱ	深鉢	網目状撚糸文（横回転）	網目状撚糸文（縦回転）	網撚	ナデ		折返し口縁	
39	A区	Ⅷ N 241		Ⅱ	深鉢		縄文	LR	ナデ		原体縦回転	
40	A区	Ⅷ L 233		Ⅱ	深鉢		幅7㎜の隆帯上にRL斜行。沈線文	RL斜行	ミガキ	2		11
41	A区	Ⅷ L 223		Ⅱ	深鉢		幅5㎜の隆線上にRL斜行	RL	ナデ		調整丁寧	
42	A区	Ⅷ I 232		Ⅰ	深鉢	無文部下の7㎜幅の隆帯上に縄文側面圧痕又はキザミ	縄文	LR斜行	ミガキ		ミニチュア？原体縦回転	
43	A区	Ⅷ G 229		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	0段多条	ミガキ		口唇肥厚	
44	A区	Ⅷ F・G 227		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LR斜行	ナデ		原体縦回転・網代痕有	
45	A区	Ⅷ F・G 227		Ⅱ	深鉢		LR横走であるが一部のみ幅2.5cmにRL縦走帯存在	LR横走 RL縦走	ミガキ		底部内面盛り上る	
46	A区	Ⅷ G 227		Ⅰ	鉢	無文	無文	無	雑なミガキ		外面ケズリ後ナデとミガキ	
47	A区	Ⅷ F 227		Ⅰ	鉢	無文	無文	LR斜行				
48	A区	Ⅷ K 235		Ⅰ	鉢	無文。雑なミガキ	無文。雑なミガキ	無	ミガキ		口唇肥厚	
49	A区	Ⅷ M 239		Ⅱ	鉢	縄文	縄文	RL斜行	ミガキ		口縁内面肥厚	
50	A区	Ⅷ G 227		Ⅱ	鉢	2条の刻目帯丁寧なミガキ	刻目帯	無	ミガキ		内面に焦付き痕有。煮沸用。	
51	A区	Ⅷ G 228		Ⅱ	鉢	剥落の為不明。	1条の刻目帯。沈線文	無	ミガキ	2	若干肥厚	
52	A区	Ⅷ K 235		Ⅰ	鉢	内面側に肥厚する突起。沿口沈線。		無	ナデ	3		
53	A区	Ⅷ G 228		Ⅱ	鉢	RL単節＋沈線文		RL横走	ナデ	3	口唇内面側に肥厚	
54	A区	Ⅷ F 227		Ⅱ	深鉢	縄文		0段多条異原体羽状	ケズリ・ミガキ		口唇内面側に肥厚	55・56
55	A区	Ⅷ F 227		Ⅱ	深鉢							54・56
56	A区	Ⅷ F 227		Ⅱ	深鉢		木葉状縄文帯	0段多条異原体羽状	ミガキ	5		54・55
57	A区	Ⅷ G 227		Ⅰ	鉢	刻目帯・縄文帯		異原羽状	ミガキ	2		
58	A区	Ⅷ F 227		Ⅱ	鉢	異原羽状横走沈線	異原羽状横走沈線	0多異原羽状	ミガキ		口唇肥厚	
59	A区	Ⅷ L 238		Ⅰ	鉢	無文	無文・丁寧なミガキ	無	ナデ		完形品・上げ底・口唇やや肥厚	
60	A区	Ⅷ I 232		Ⅰ	深鉢		沈線間RL斜行・ミガキ	RL斜行	ナデ	2		
61	試掘区	Ⅵ P 218		Ⅱ	深鉢	縄文帯によるクランク状文	縄文帯による鍵状入組文	0多異原羽状	ミガキ	4	径1～1.2cmの貼瘤の頂部にキザミ	
62	A区	Ⅷ L 237		Ⅰ	鉢		左右段違いの沈線・モチーフ不明の沈線文	RL斜行	ナデ	2	外面に炭化物付着	
63	A区	Ⅷ L 237		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL斜行	ナデ		縄文1条おきに深い。	
64	B区	Ⅶ G 262		Ⅱ	深鉢	口唇・隆帯上L・R押圧	原体C圧	←	ミガキ		突起部に穿孔文	65
65	B区	Ⅶ G 262		Ⅱ	深鉢	口唇・隆帯上L・R押圧	原体C圧	←	ミガキ		突起部に穿孔文	64
66	B区	Ⅶ G 261	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯上R押圧。	L押圧文様。原体C字形圧痕	←				

米山(2)遺跡出土土器観察表3

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口　頸　部	胴　部	地文	内面調整	沈線幅	備　考	同一
67	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢	口唇・隆帯R押圧	RL斜行	←				68
68	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢		隆帯上R押圧。 L・R押圧。原体C圧	←	ナデ			67
69	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 原体C圧			ナデ			
70	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 原体C圧		←	ナデ			
71	B区	ⅦO263		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧		L	ナデ			
72	B区	ⅦE261		Ⅱ	深鉢	扇状突起。 隆帯上にL押圧。	L・R押圧。 竹管状刺突	←	不明			
73	B区	ⅦF261		Ⅱ	深鉢	突起部波状隆帯L押圧	L・R押圧。 竹管状刺突	←	ナデ			298
74	B区	ⅦG261		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 角押文列。L・R押圧			ナデ			
75	B区	ⅦE261		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 角押文列。L・R押圧		←	ナデ			
76	B区	ⅦG260	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 角押文列。L・R押圧		←	ナデ			
77	B区	ⅦD261		Ⅱ	深鉢	口唇・隆帯上L押圧。 木目状？刺突		←	ナデ			
78	B区	ⅦG261		Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧。 円又は角押文列	RL斜行縄文	←	ナデ			
79	B区	ⅦG261	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧・ 角押文列	0多RL斜行・結節回転文	←	ナデ			
80	B区	ⅦG260	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧・ 円押文列	L押圧	L	ミガキ			
81	B区	ⅦG261	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯。 竹管状工具刺突	縄文	LR斜行	ナデ			
82	B区	ⅦG260	風倒木	Ⅱ	深鉢	ボタン状貼瘤	縄文	RL斜行	ミガキ		口唇部隆帯貼付	
83	B区	ⅦE263		Ⅰ	深鉢	メガネ状隆線上LR斜行	隆線上RL斜行。 RL斜行	RL斜行	ナデ			
84	B区	ⅦF262	風倒木	Ⅱ	深鉢	波状隆帯上L押圧	縄文	RL斜行	ナデ			
85	B区	ⅦF263		Ⅰ	深鉢	幅4～5㎜の隆線	縄文	LR斜行	ナデ			
86	B区	ⅦG260		Ⅱ	深鉢	幅4㎜の隆線			ナデ			
87	B区	ⅦG260	風倒木	Ⅱ	深鉢	隆帯上L押圧・ 角押文列		←	ナデ			
88	B区	ⅦE261		Ⅱ	深鉢	横位隆帯の剥落痕	結束縄文・結節回転文	RL結束	ナデ			
89	B区	ⅦH261		Ⅱ	深鉢		0多結束第1種横回転・ 結節横回転	←	ナデ		炭化物付着明瞭	
90	B区	ⅦG262		Ⅰ	深鉢	無文・横走沈線	楕円状文・LR斜行	LR斜行	ミガキ	4	原体縦回転	
91	B区	ⅦF262	風倒木	Ⅱ	深鉢	RL縦走気味。 横走沈線		RL縦走		5		
92	B区	ⅦE263		Ⅰ	深鉢	無文・1条横走沈線	RL横走気味	RL斜行	ミガキ	3	RL左上⇔右下	
93	B区	ⅦG260	風倒木	Ⅱ	深鉢		無文帯内側に LRタテ回転＋刺突	LR斜行	ナデ	3	LRタテ回転	
94	B区	ⅦF262	風倒木	Ⅱ	深鉢	沈線文・縄文	沈線文・縄文	RL斜行	ミガキ	4	口縁内面ヒレ状突起	
95	B区	ⅦG262		Ⅰ	深鉢	楕円文内にRL縄文		RL斜行	ミガキ	5	口縁内面にヒレ状突起	
96	B区	ⅦF262		Ⅱ	深鉢		楕円文内にRL縄文	RL斜行	ミガキ	5		
97	B区	ⅦF263		Ⅰ	深鉢		楕円文内にRL縄文	RL斜行	ミガキ	4		
98	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢		ヒレ状突起・LR縄文・結節回転文	LR斜行	ナデ		炭化物明瞭に付着	
99	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢	無文		無	ナデ		口縁内面ヒレ状突起	
100	B区	ⅦF263		Ⅰ	深鉢	縄文		RL斜行	ナデ		口縁内面ヒレ状突起	
101	B区	ⅥK272		Ⅱ	深鉢		縄文・沈線文	RL斜行	ナデ	3		
102	B区	ⅦF262	風倒木	Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL	ミガキ		RL縦回転	
103	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	RL斜行	RL縦走	RL	ミガキ			
104	B区	ⅥJ～K 271～272		Ⅱ	深鉢	口縁部無文	縄文	RL斜行	ナデ		折返し口縁	
105	B区	ⅥJ272		Ⅰ	深鉢	口縁部無文	縄文	RL縦走	ナデ		折返し口縁	
106	B区	ⅦG262		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL斜行	ナデ		外面炭化物付着	
107	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
108	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
109	B区	ⅥJ271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
110	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
111	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
112	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	RL縦走	ミガキ			30
113	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LRL 複節	ナデ		内面胴部縦方向の幅 2㎜の調整工具痕	
114	B区	ⅥK270		Ⅲ	深鉢	口頸部無文	縄文	結束第 1種？	ナデ		複合口縁	
115	B区	ⅥJ271		Ⅱ	深鉢		隆線による綾杉文。 隆線上RL斜行・ミガキ	RL斜行	ミガキ		綾杉文左に、他のモチーフ有り	
116	B区	ⅥM268		表採	深鉢							117
117	B区	ⅥM268		Ⅱ	深鉢		RL斜行が施される縦・横・ 斜めの隆線・ミガキ	RL斜行	ミガキ			116
118	B区	ⅥQ266		Ⅱ	深鉢	隆線上RL斜行（口縁破片）	横走隆線	RL斜行	ナデ		砂粒混和非常に多い	
119	B区	ⅥR265		Ⅱ	深鉢	隆線上RL斜行		RL斜行	ナデ		砂粒混和非常に多い	
120	B区	ⅥM268		Ⅱ	鉢	沿口沈線	2条の弧状沈線・底部付近にも1条の横走沈線	無	ナデ	2	砂粒多・内面調整雑	
121	B区	ⅦE262		Ⅰ	深鉢	無文	無文	無文	ナデ		外面縦方向ナデ・ 筒形袖珍土器	

米山(2)遺跡出土土器観察表 4

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口頸部	胴部	地文	内面調整	沈線幅	備考	同一
122	B区	ⅥO268		Ⅰ	深鉢	渦巻状文・三角形状文		RL斜行	ナデ	5	口縁凹線状	123・125・126
123	B区	ⅥO268		Ⅰ	深鉢		渦巻状文	RL斜行	ナデ	5	原体縦回転	122・125・126
124	B区	ⅥO268		Ⅰ	深鉢		渦巻状文・三角形状文	RL斜行	ナデ	5	原体縦回転	
125	B区	ⅥO268		Ⅱ	深鉢	斜線文		RL斜行	ナデ	6		122・123・126
126	B区	ⅥJ271		Ⅰ	深鉢	RL斜行施文後に沈線2条		RL斜行	ミガキ	3		
127	B区	ⅥI273		Ⅰ	深鉢		渦巻状文	LR斜行	ナデ	4	原体縦回転	128
128	B区	ⅥI273		Ⅰ	深鉢		渦巻状文		ナデ	4		127
129	B区	ⅦF262		Ⅱ	深鉢	円形文	沈線文・縄文	RL縦走	ミガキ	5	原体左上⇔右下	
130	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢		渦巻状文	RL斜行	ナデ	4		
131	B区	ⅥK271		Ⅱ	深鉢		渦巻状文・ミガキ	無	ミガキ	4		
132	B区	ⅥJ～M 269～272		表採	深鉢	頸部無文	平行沈線＋LR単節羽状	RL斜行	ミガキ	4		
133	B区	ⅥJ273		Ⅱ	深鉢	沿口沈線・渦巻状文	渦巻状文	0多LR	ミガキ	4	0多LR縦回転	
134	B区	ⅥJ271		Ⅱ	深鉢	作りの丁寧な山形突起・沿口沈線	渦巻状文	RL縦走	ミガキ	6		
135	B区	ⅥJ272		Ⅰ	深鉢		渦巻状文・三角形状文	0多LR・LR縦回転	ミガキ	5	原体縦回転	
136	B区	ⅥO268		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	0多RL	ナデ		口唇部若干肥厚	
137	B区	ⅦD263		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	異原羽状	ナデ			
138	B区	ⅥO268		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LR縦走	ナデ		LR左下⇔右上。口縁肥厚	
139	B区	ⅦG261		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LR	ナデ		口縁部肥厚。LR縦回転	
140	B区	ⅥJ274		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LR斜横	ミガキ		口唇肥厚	
141	B区	ⅥO268		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	0多RL	ナデ		口唇部肥厚	
142	B区	ⅥJ272		Ⅰ	深鉢	縄文	縄文	LR斜行	ミガキ			
143	B区	ⅥK272		Ⅱ	深鉢	櫛歯状条線	櫛歯状条線	←	ナデ			
144	B区	ⅦD263		Ⅱ	深鉢	無文	無文	無	ナデ		粘土帯接合部明瞭	
145	B区	ⅦE262		Ⅱ	深鉢	無文・ミガキ	沈線文	無	ミガキ			
146	B区	ⅦC262		Ⅱ	鉢	縄文	縄文	RL斜行	ナデ		口縁肥厚、	
147	B区	ⅥJ273		Ⅱ	鉢	縄文	縄文	異原羽状	ナデ			
148	B区	ⅥP267		Ⅱ	鉢	縄文	縄文	同原羽状	ナデ			
149	B区	ⅥJ272		Ⅰ	鉢	突起上に円形刺突		無	ミガキ		口縁突起部肥厚	150・151
150	B区	ⅥJ271		Ⅰ	鉢			無	ミガキ			149・151
151	B区	ⅥK271		Ⅱ	鉢	大型波状口縁・ミガキ		無	ミガキ		口縁突起部肥厚	149・150
152	B区	ⅥP267		Ⅱ	鉢	丸く肥厚・無文		無	ナデ			
153	B区	ⅥP267		Ⅱ	鉢	丸く肥厚・無文		無	ナデ			
154	B区	ⅦG262		Ⅱ	鉢	無文	無文	無	ミガキ		口縁肥厚	
155	B区	ⅥJ273		Ⅱ	鉢	無文	無文	無	ナデ		口縁内面下側肥厚	
156	B区	ⅥO268		Ⅱ	鉢	縦回転・異原羽状	横走沈線	異原羽状	ミガキ	3	口縁内面肥厚	
157	B区	ⅦD263		Ⅱ	深鉢	玉抱き三叉文		LR斜行	ナデ	2	器厚4㎜と非常に薄い。	
158	B区	ⅦG262		Ⅱ	鉢		縦位の短弧線文で上下の平行沈線を結ぶ	0多LR	ミガキ	5		
159	B区	ⅥO268		Ⅰ	深鉢	刻目帯・ミガキ	刻目帯	無	ミガキ	4		
160	B区	ⅥO267		Ⅰ	鉢	口唇外面に縦方向のキザミ・沿口沈線		無	ミガキ	3	口縁突起部肥厚	
161	B区	ⅥO267		Ⅰ	鉢	2条の刻目帯・下のキザミは先端の鋭い工具による		無	ナデ	3		
162	B区	ⅥO267		Ⅰ	鉢		刻目帯2条	無	ナデ	4		
163	B区	ⅥO268		Ⅰ	鉢	口縁部に縦方向のキザミ・沿口沈線		無	ミガキ	4	大型波状口縁肥厚	
164	B区	ⅥR～ⅦA 264～266		Ⅱ	鉢	大きな波状口縁・沿口沈線	異原羽状・木目状縄文帯	0多LR	ミガキ	4	内面側に口唇肥厚	
165	B区	ⅦC262		Ⅰ	鉢	口縁内面側に肥厚、刻目帯2条	頸部に刻目帯2条	無	ナデ	3	口唇部、内側に向かって傾斜	
166	B区	ⅦC262		Ⅰ	鉢		3本1単位の縦横の沈線・羽状縄文	羽状	ナデ	3		
167	B区	ⅥO268		Ⅰ	4	0多RL傾行	無文帯	RL斜行	ミガキ	3	口縁内面肥厚、僅かに沈線らしい部分有	
168	B区	ⅥO268		Ⅰ	4	0段多条RLの同原体羽状。	無文帯・刻目帯・区画内縄文	0多RL	ミガキ	3		
169	B区	ⅥJ273		Ⅱ	4		RL斜行、区画内無文	RL斜行	ナデ	4		
170	B区	ⅥK270		Ⅱ	壷		鍵状入組文？同原羽状	0多	ナデ	3		
171	B区	ⅦE262		Ⅱ	4		底部下面押圧による上げ底状	無	ナデ			
172	B区	ⅦE262		Ⅱ	注口					3		173
173	B区	ⅦE262		Ⅱ	注口	頸部縄文帯交差部に瘤貼付	肩部鍵状入組文に瘤貼付	異原羽状	ナデ	3	粘土帯ほぼ水平に接合	172
174	B区	ⅥO268		Ⅰ	4		肩部平行沈線間に0多RL斜行	0多RL	ケズリナデ	5		
175	B区	ⅥJ274		Ⅱ	深鉢	縄文	縄文	LR斜行			原体縦回転	
176	B区	ⅥI273		Ⅰ	深鉢	押圧波状・縦条線	縦条線	条線	ミガキ			
177	B区	ⅦC262		Ⅱ	深鉢	押圧波状口縁。無文	無文	無	ナデ			
178	B区	ⅦB263		Ⅱ	鉢	平行沈線4条	縄文	LR斜行	ミガキ	4	内面に炭化物付着	
179	B区	ⅥM268		Ⅱ	深鉢	平行沈線	縄文	RL斜行	ミガキ	4		
180	B区	ⅦE263		Ⅰ	深鉢		縄文	LR斜行	ナデ		頸部で外反	
181	B区	ⅥO268		Ⅱ	深鉢	平行沈線	渦巻状文	無	ナデ	6		
182	B区	ⅥJ273		Ⅱ	深鉢	平行沈線3条		無	ナデ	5		183・184・185

米山(2)遺跡出土土器観察表5

No.	出土区	出土地	遺構	層	器種	口頸部	胴部	地文	内面調整	沈線幅	備考	同一
183	B区	ⅥJ273		Ⅰ	深鉢	平行沈線3条	無文	無	ナデ	5		182・184・185
184	B区	ⅥJ273		Ⅱ	深鉢	沈線3条		無	ミガキ	5		182・183・185
185	B区	ⅥJ273		Ⅰ	深鉢	平行沈線3条	無文	無	ミガキ	5	口唇内側に傾斜	182・183・184
186	B区	ⅥJ～K271～272		Ⅱ	深鉢	メガネ状沈線紋・平行沈線	無文	無	ナデ	5		
187	B区	ⅥL271		Ⅱ	深鉢	口唇3個/cmのキザミ・3条の平行沈線	縄文	RL＋L撚糸	ケズリ・ナデ	3		
188	B区	ⅥK271		Ⅱ	鉢	向かい合う突起・口縁～肩部に凹状沈線	無文	無	ミガキ	4	内外面に炭化物付着	
189	B区	ⅥJ271			鉢	二又の突起	無文	無	ナデ		口縁内側肥厚	
190	B区	ⅥI273		Ⅰ	台付鉢	B突起・平行沈線間1個/cmの刺突。	縄文・台部無文	LR斜行	ナデ	4	突起上幅4mmのキザミ	
191	B区	ⅥL270		Ⅱ	台付鉢		縄文・底部無文	RL斜行	ミガキ			
192	B区	ⅥL270		Ⅰ	浅鉢	変形工字文	無文	無	ミガキ	3		
193	B区	ⅥK271		Ⅱ	4	隆線貼付	平行工字文・流水状工字文・入組文4単位	無	不明	4		
194	B区	ⅥS266		Ⅱ	4	平行工字文・粘土粒貼付		無	ミガキ	5	内面沈線	
195	B区	ⅥJ272		Ⅰ	4	隆線貼付		無	ミガキ	3	内面沈線1条	
196	B区	ⅥJ～K271～272			4	粘土粒を伴う平行工字文		無	ナデ	4	内面沈線1条	
197	B区	ⅥK270		Ⅱ	4	口頸部無文	縄文	LR斜行	ミガキ		完形品	
198	B区	ⅥM268		Ⅱ	鉢	連結型変形工字文	無文	RL斜行	ミガキ	4	内外面炭化物付着	
199	B区	ⅥM268		Ⅱ	鉢		波状工字文	LR斜行	ナデ	3		
46-1	A		1号土坑	覆土	台付鉢	波頂部下に玉状モチーフを配しその間を上下の弧状沈線で埋める	頸部との境に、1条沈線・以下はLR斜行・台部無文	LR斜行	ミガキ	3	4単位の三又波状口縁・文様後期的・器形晩期的	
46-2	A		1号土坑	覆土	深鉢	縄文	縄文	LR斜行	ナデ		有文台付鉢と共伴	
46-5	A		3号土坑	底	深鉢	縄文	縄文	LR斜行	ナデ		節10個/cmの密な縄文。土坑底に倒立埋納	

山下遺跡石器観察表

図番号	出土区	出土地	層	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
8－3	試掘区	ＶＥ－174	Ⅲ	Ｒフレイク	1.7	3.0	0.8	4.5	珪質頁岩	一部に急斜度調整	22
	試掘区	ⅢＯ－190	Ⅰ	Ｒフレイク	3.0	1.4	0.7	3.7	珪質頁岩		21
	試掘区	ⅢＨ－179	Ⅰ	Ｒフレイク	2.2	3.4	1.7	11.9	珪質頁岩		23
	試掘区	ＩＳ－180	Ⅰ	Ｒフレイク	3.1	3.3	0.4	3.9	珪質頁岩		25
	試掘区	ⅢＫ－190	Ⅰ	Ｒフレイク	6.2	3.5	0.9	19.4	珪質頁岩		31
	試掘区	ⅡＲ－195	Ⅰ	Ｒフレイク	4.2	5.3	1.2	33.4	珪質頁岩		33
	試掘区	ⅡＮ－185	Ⅰ	Ｒフレイク	4.4	4.7	1.4	32.8	珪質頁岩		34
	試掘区	ⅡＴ－195	Ⅰ	Ｒフレイク	5.3	4.2	1.3	26.5	珪質頁岩		36
	試掘区	ＶＥ－174	Ⅰ	Ｒフレイク	4.2	3.8	1.8	33.4	珪質頁岩		37
	試掘区	ⅡＫ－201	Ⅰ	Ｒフレイク	8.0	5.0	1.3	47.0	珪質頁岩		38
	試掘区	ⅡＰ－195	Ⅰ	Ｕフレイク	3.8	2.7	1.0	10.8	珪質頁岩	楔？	26
	試掘区	ＶＡ～ＶＦ－174・175	Ⅰ	Ｕフレイク	4.6	2.6	1.5	14.4	珪質頁岩		28
	試掘区	ⅡＴ－195	Ⅰ	Ｕフレイク	5.0	3.2	1.2	19.8	珪質頁岩		30
	試掘区	ⅢＯ－190	Ⅰ	Ｕフレイク	3.8	4.2	1.0	13.5	珪質頁岩		40
	試掘区	ＶＡ～ＶＦ－174・175	Ⅰ	Ｕフレイク	3.0	2.9	0.8	7.3	珪質頁岩		43
	試掘区	ＶＨ－190	Ⅱ	Ｕフレイク	8.3	7.1	1.5	80.9	珪質頁岩		44
	試掘区	ⅣＩ－180	Ⅲ	Ｕフレイク	7.8	3.0	1.0	25.4	珪質頁岩		41
8－10	試掘区	ⅢＯ－190	Ⅰ	石皿	27.5	26.2	6.0	7116	流紋岩		46
8－2	試掘区	ＶＣ－175	Ⅲ	石篦	4.8	2.2	1.5	16.4	玉髄質珪質頁岩	両面加工。	10
8－8	試掘区	ⅣＦ－175	Ⅱ	凹石	(12.1)	6.1	2.8	(244)	凝灰岩		58
	試掘区	ＶＤ－174	Ⅲ	凹石	(8.1)	4.6	3.3	(180)	流紋岩		64
8－1	試掘区	ⅡＫ－201	Ⅰ	石鏃	(3.8)	2.0	0.8	(4.3)	珪質頁岩	凹基。先端欠損。	1
8－5	試掘区	ⅣＰ－175	Ⅰ	石匙	7.5	3.3	0.8	26.1	珪質頁岩	縦型	5
8－11	試掘区	ＶＡ～ＶＦ－174・175	Ⅰ	台石	19.4	15.5	6.1	2972.2	凝灰岩		69
8－9	試掘区	表採		敲石	20.2	4.9	4.8	726.3	流紋岩		65
8－4	試掘区	ⅣＦ－175	Ⅱ	スクレイパー	2.9	2.1	0.9	5.4	玉髄質珪質頁岩	半割素材	47
8－7	試掘区	ⅢＯ－194	Ⅰ	スクレイパー	4.7	2.0	0.9	7.4	珪質頁岩		7
	試掘区	ＶＯ－175	Ⅱ	スクレイパー	(3.4)	(2.5)	1.6	(11.8)	珪質頁岩		11
8－6	試掘区	ＶＡ～ＶＦ－174・175	Ⅰ	スクレイパー	6.3	2.6	1.4	27.5	珪質頁岩	全体に粗雑で大きな調整	13
	試掘区	ＩＮ－185	Ⅰ	スクレイパー	3.8	5.1	1.0	21.4	珪質頁岩		14
	試掘区	ⅢＯ－195	Ⅰ	スクレイパー	4.6	4.4	1.4	28.4	珪質頁岩		15
	試掘区	ＶＧ－177	Ⅰ	スクレイパー	4.8	5.2	2.5	76.2	珪質頁岩		19
	Ｃ区	ＶＥ－184	Ⅰ	Ｕフレイク	2.2	2.4	0.7	2.5	玉髄質珪質頁岩		39
	Ｃ区	ＶＨ－181	Ⅲ	Ｕフレイク	4.4	5.2	1.3	28.5	珪質頁岩		42
30－9	Ｃ区	ＶＬ－182	Ⅲ	Ｕフレイク	6.9	3.7	1.4	30.8	珪質頁岩		35
	Ｃ区	ＶＦ－182	Ⅲ	石皿	－	－	－	－	安山岩	破片	66
30－4	Ｃ区	ＶＥ－183	Ⅲ	石篦	(3.8)	(2.6)	(1.3)	(14.1)	珪質頁岩	基部破片。両面加工	6
32－8	Ｃ区	ＶＧ－184	Ⅲ	その他	(18.8)	7.5	7.1	(1660)	流紋岩		67
31－5	Ｃ区	ＶＩ－181	Ⅲ	凹石	16.3	6.5	4.1	548.6	凝灰岩		61
31－6	Ｃ区	ＶＩ－181	Ⅲ	凹石	13.6	5.4	4.3	373.3	凝灰岩		62
	Ｃ区	ＶＩ－181	Ⅲ	凹石	15.1	7.7	3.3	470.4	凝灰岩		57
31－4	Ｃ区	ＶＩ－181	Ⅲ	凹石	13.8	6.4	5.2	692.9	安山岩		59
31－7	Ｃ区	ＶＫ－184	Ⅲ	凹石	11.8	5.5	4.0	239.1	凝灰岩		60
30－1	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	石錐	3.5	0.7	0.4	1.1	玉髄質珪質頁岩	棒状錐	2
30－2	Ｃ区	ＶＩ－183	Ⅲ	石匙	3.6	2.9	0.7	6.0	珪質頁岩	縦型	3
31－8	Ｃ区	ＶＩ－180	Ⅲ	台石	17.7	8.5	2.8	785.9	凝灰岩		68
30－7	Ｃ区	ＶＩ－185	Ⅲ	スクレイパー	3.8	3.3	0.9	10.6	珪質頁岩	末端に急斜度調整	27
	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	スクレイパー	2.8	3.5	0.7	5.9	珪質頁岩		8
30－8	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	スクレイパー	3.7	3.8	1.0	18.5	珪質頁岩	末端部には急斜度調整	9
30－3	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	スクレイパー	2.7	4.2	1.3	15.8	珪質頁岩	末端に急斜度調整	12
30－6	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	スクレイパー	4.9	5.1	1.6	44.5	珪質頁岩	縁辺部に浅型調整	16
	Ｃ区	ＶＫ－181	Ⅲ	スクレイパー	5.7	3.2	1.4	27.2	珪質頁岩		18
30－5	Ｃ区	ＶＬ－184	Ⅲ	スクレイパー	9.4	4.6	1.7	83.2	珪質頁岩	左側縁から末端に調整	20
31－3	Ｃ区	ＶＩ－183	Ⅲ	敲石	8.0	4.4	3.3	176.1	凝灰岩	磨製石斧の基部片を再利用。	48
	Ｃ区	ＶＩ－181	Ⅲ	磨石	15.3	10.3	4.7	785.6	凝灰岩		63
31－2	Ｃ区	ＶＩ－184	Ⅲ	磨石	10.5	7.9	5.0	657.1	閃緑岩		56
31－1	Ｃ区	ＶＩ－182	Ⅲ	磨製石斧	17.4	4.8	3.4	469.5	砂岩		72

このほかに剥片　31点

図番号	出土区	出土地	層	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
	Ｄ区	ⅣＧ－177	Ⅰ	Ｒフレイク	3.4	1.7	0.5	2.0	珪質頁岩		24
	Ｄ区	ⅣＪ－176	Ⅰ	Ｒフレイク	4.0	4.7	0.5	8.5	珪質頁岩		32
	Ｄ区	ⅣＩ－172	Ⅲ	Ｕフレイク	3.8	5.6	1.1	19	珪質頁岩		29
	Ｄ区	ＳＮ－18	覆土	Ｕフレイク	8.5	2.1	1.1	19.1	珪質頁岩		17
32－1	Ｄ区	ⅣＨ－174	Ⅲ	石匙	4.2	5.0	0.9	21.9	珪質頁岩	横型	4
	Ｄ区	ⅣＪ－175	Ⅱ	台石	23.0	20.6	9.6	7779.6	安山岩		70
	Ｄ区	ＳＮ－16	覆土	搬入礫	(10.1)	5.0	4.9		流紋岩		71
32－2	Ｄ区	ⅣＩ－173	Ⅱ	磨製石斧	(9.0)	5.0	(2.9)	(222)	緑色細粒凝灰岩		45
32－5	Ｄ区	ⅣＩ－175	Ⅱ	磨石	(8.9)	7.0	3.0	(267)	安山岩		52

図番号	出土区	出土地	層	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
	D区	ⅣI－175	Ⅱ	磨石	(7.5)	7.3	4.9	(322)	安山岩		53
32－3	D区	ⅣI－175	Ⅰ	磨石	9.3	6.7	6.4	478	流紋岩		55
32－6	D区	ⅣH－172	Ⅲ	磨石	(9.4)	6.5	4.5	(420)	安山岩		51
32－4	D区	ⅣJ－176	Ⅰ	磨石	18.0	7.8	6.2	1272	安山岩		54
32－7	D区	ⅣK－175	Ⅰ	磨石	14.4	7.4	4.8	737.7	安山岩		49

このほかに剥片　37点

米山(2)遺跡Ａ区石器観察表

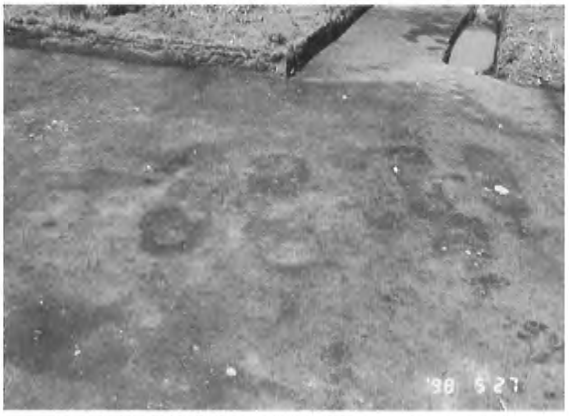
図番号	出土地	層	器類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
	1号住居	2	台石	－	－	－	(102)	凝灰岩	破片	74
36－①	1号住居	2	スクレイパー	9.6	4.4	1.4	53.3	珪質頁岩		46
37－①	2号住居	床直	スクレイパー	3.3	2.3	0.7	3.4	珪質頁岩	S－10。石鏃？	48
	2号住居	1	Uフレイク	4.3	3.2	1.0	9.3	珪質頁岩	S－3	49
37－③	2号住居	床直	Uフレイク	3.0	1.8	0.6	2.6	珪質頁岩	S－12	50
37－②	2号住居	1	石匙	4.7	2.4	0.5	5.4	珪質頁岩	S－2	47
37－④	2号住居	1	台石	(9.8)	4.1	2.8	4957.5	安山岩	S－4	88
	3号住居	覆土	Rフレイク	4.9	5.0	1.0	22.3	珪質頁岩		58
40－①	3号住居	床直	Rフレイク	3.6	4.9	1.3	23.1	珪質頁岩	S－7	52
40－②	3号住居	床面	Rフレイク	5.5	7.1	1.3	50.5	珪質頁岩	S－9	53
	3号住居	覆土	Uフレイク	5.7	3.5	1.3	19.1	珪質頁岩		59
41－2	3号住居	床直	凹石	14.0	4.9	3.8	367	凝灰岩	S－2。片面に浅凹孔。全体に丸みをもって整形	76
41－1	3号住居	床直	凹石	11.6	9.2	5.6	839	安山岩	S－3。両面はツルツルの磨痕。片面に凹孔。	77
40－⑦	3号住居	覆土	石鏃	2.7	1.0	0.4	0.7	珪質頁岩		54
40－⑥	3号住居	覆土	スクレイパー	5.7	3.4	1.0	19.4	珪質頁岩		55
40－④	3号住居	覆土	スクレイパー	4.6	2.7	0.8	9.5	玉髄質珪質頁岩		56
40－⑤	3号住居	覆土	スクレイパー	6.7	4.3	1.4	41.6	珪質頁岩		57
40－③	3号住居	床面	スクレイパー	8.9	4.1	1.5	55.4	珪質頁岩	S－8	51
41－3	3号住居	床直	磨石	14.1	9.6	6.2	1334.4	閃緑岩	S－6。全面磨痕。全面ツルツルとしている。	78
40－⑨	3号住居	床直	磨石	12.2	9.4	5.8	937.9	安山岩	S－4	108
40－⑧	3号住居	床面	磨石	11.8	9.7	6.1	1021.4	安山岩	S－5。全面磨痕。	75
43－2	4号住居	床面	Rフレイク	9.4	3.8	1.4	40.3	珪質頁岩	S－8	61
43－5	4号住居	覆土	凹石	10.5	8.1	6.0	589.3	安山岩	S－1。楕円球状礫の片面に敲打による凹孔。	79
43－3	4号住居	床直	凹石	14.3	3.9	2.2	183.7	流紋岩	S－9。両面に浅い凹孔。全体に丁寧に整形。	80
43－4	4号住居	床面	凹石	14.9	5.3	4.2	425.4	安山岩	S－4。両面に凹孔。器面はスリ整形。	81
43－6	4号住居	床面	台石	33.4	25.2	4.0	3555.2	安山岩	S－5＋S－6。	82、83
42－②	4号住居	覆土	スクレイパー	9.8	4.5	1.9	92.8	珪質頁岩	S－3	63
42－①	4号住居	床面	Uフレイク	5.3	2.7	1.0	8.5	珪質頁岩	S－7	62
43－1	4号住居	床面	スクレイパー	9.6	5.8	1.5	95	珪質頁岩	S－10	60
46－4	3号土坑	底面	台石	20.5	17	3.2	1613	安山岩	S－1。無加工。	84
47－1	10号土坑	1	石鏃	4.2	1.4	0.4	2.1	珪質頁岩	S－1	66
61－6	ⅧI－229	Ⅴ	Uフレイク	8.4	7.7	1.1	70.1	珪質頁岩		4
61－7	ⅧI－232	Ⅰ	磨製石斧	(4.9)	(4.4)	(2.4)	(84)	閃緑岩	刃部片	11
61－1	ⅧF－228	Ⅱ	石匙	5.9	2.4	0.7	8.0	珪質頁岩		10
	ⅧJ－232	Ⅰ	Rフレイク	3.0	2.8	1.0	9.6	珪質頁岩		5
61－2	ⅧJ－232	Ⅰ	スクレイパー	7.6	3.4	0.9	21.7	珪質頁岩		2
	ⅧK－236	Ⅰ	Uフレイク	4.5	4.0	0.7	15.2	珪質頁岩		9
61－5	ⅧL－231	Ⅱ	Rフレイク	4.4	4.1	1.2	20.9	珪質頁岩		6
61－4	ⅧL－233	Ⅱ	楔型石器	4.1	2.9	1.0	13.3	玉髄質珪質頁岩		3
	ⅧM－235	Ⅰ	Uフレイク	5.5	6.5	1.7	59.4	珪質頁岩		8
	ⅧM－235	Ⅱ	コア	7.2	5.5	5.0	197.2	珪質頁岩		12
	ⅧM－239	Ⅱ	台石	29.7	19.2	6.0	3189.6	緑色細粒凝灰岩		87
	ⅧN－237	Ⅱ	Rフレイク	5.5	5.2	1.2	27	珪質頁岩		7
	ⅧO－246	Ⅱ	凹石	13.8	9.1	6.6	1264.7	安山岩		85
	ⅧO－246	Ⅱ	敲石	11.4	4.2	2.2	136.9	凝灰岩		86
61－3	ⅧO－250	Ⅱ	スクレイパー	8.3	4.6	1.2	41.6	珪質頁岩		1

米山(2)遺跡Ｂ区石器観察表

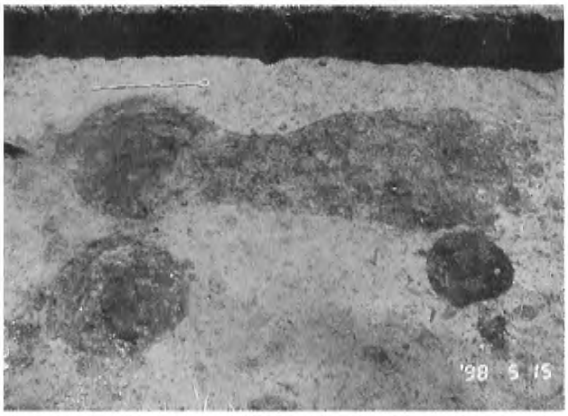
図番号	出土地	層	器類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
44－3	5号住居	覆土	Rフレイク	2.6	2.4	0.5	4.8	珪質頁岩		65
44－1	5号住居	底面	石皿	30.7	35.7	7.0	12400	安山岩	S－8。無加工。中央部がやや窪む。	115
44－5	5号住居		砥石	25.1	8.5	6.2	2427.2	流紋岩	S－28。器面全体に線条痕、一部溝状の部分あり。	114
44－4	5号住居	炉	スクレイパー	3.7	3.8	0.9	10.1	珪質頁岩		64
44－2	5号住居	床直	磨製石斧	8.0	4.5	1.6	102.7	頁岩	S－19。	44
62－5	ⅦE－262	Ⅱ	石鏃	(2.5)	1.2	0.6	(1.6)	珪質頁岩	先端欠損。	18
62－6	ⅦC－262	Ⅰ	石鏃	3.1	1.4	0.5	2.1	玉髄質珪質頁岩		13
62－1	ⅥK－270	Ⅱ	石鏃	2.4	1.2	0.4	0.8	珪質頁岩		14
62－4	表採		石鏃	4.1	1.1	0.4	1.4	珪質頁岩		15
62－2	ⅥN－268	Ⅱ	石鏃	3.0	1.1	0.4	1.2	珪質頁岩		16
62－3	ⅥN－268	Ⅱ	石鏃	3.1	1.4	0.4	1.3	珪質頁岩		17
62－8	ⅥO－267	Ⅰ	石鏃	3.5	2.4	1.0	6.9	珪質頁岩		20
62－7	ⅥO－267	Ⅰ	石鏃	3.7	1.8	1.1	6.0	珪質頁岩		21
62－10	ⅥQ－267	Ⅱ	石錐	4.6	1.5	1.3	8.4	珪質頁岩		37
62－9	ⅦE－262	Ⅱ	石錐	3.4	1.6	0.8	3.7	玉髄質珪質頁岩		19
62－11	ⅦE－261	Ⅱ	石匙	4.6	3.8	0.9	13.5	珪質頁岩		22

図番号	出土地	層	器類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	備考	整理番号
62－15	ⅥD－267	Ⅱ	スクレイパー	6.8	4.7	1.1	32.9	珪質頁岩		23
	ⅥJ－271	Ⅰ	スクレイパー	8.3	3.8	1.7	49.8	珪質頁岩		24
	ⅥJ－273	Ⅰ	スクレイパー	3.8	4.1	1.3	19.8	珪質頁岩		25
	ⅥJ～ⅥM－269～272	Ⅰ	スクレイパー	6.0	6.4	1.3	37.2	珪質頁岩		26
62－13	ⅥJ～ⅥM－269～272	Ⅰ	スクレイパー	5.2	3.8	1.0	13.6	珪質頁岩		27
62－12	ⅥK－270	Ⅱ	スクレイパー	5.4	3.6	0.7	13.9	珪質頁岩		28
	ⅥO－267	Ⅰ	スクレイパー	4.3	4.8	1.0	15.0	珪質頁岩		29
	ⅥO－268	Ⅰ	スクレイパー	5.3	4.3	0.8	19.2	珪質頁岩		30
62－17	ⅥO－268	Ⅱ	Uフレイク	2.1	5.5	0.4	5.1	珪質頁岩		31
62－14	ⅥO－268	Ⅰ	スクレイパー	7.2	4.5	1.2	40.8	珪質頁岩		32
	ⅥO－268	Ⅰ	スクレイパー	4.4	7.8	0.9	26.9	珪質頁岩		33
62－16	ⅦF－261	Ⅱ	スクレイパー	4.3	1.7	0.6	4.8	珪質頁岩		34
	ⅥO－267	Ⅰ	Rフレイク	2.9	2.4	0.8	6.5	珪質頁岩		35
	ⅥQ－266	Ⅱ	Rフレイク	4.5	2.5	1.1	9.2	玉髄質珪質頁岩		36
	ⅦE－262	Ⅰ	Rフレイク	3.2	5.1	0.8	11.3	珪質頁岩		38
	ⅥR～ⅦA－264～266	Ⅱ	Rフレイク	3.6	3.0	0.8	7.4	珪質頁岩		40
62－18	ⅥJ－271	Ⅰ	Rフレイク	1.7	2.4	0.8	4.7	黒曜石		41
	ⅥO－267	Ⅰ	Uフレイク	4.8	3.3	1.2	19.2	珪質頁岩		73
	ⅥJ－271	Ⅱ	Uフレイク	4.8	3.3	1.1	16.4	玉髄質珪質頁岩		39
	ⅥR～ⅦA－264～266	Ⅱ	Uフレイク	2.6	3.5	0.7	6.0	珪質頁岩		42
	ⅥO－268	Ⅰ	Uフレイク	3.9	5.8	1.3	26.5	珪質頁岩		43
63－1	ⅦF－262	Ⅱ	磨石	(13.5)	7.9	4.3	551.1	安山岩	偏平磨石。上下側面に弱い磨痕。端部に打痕。	99
63－3	ⅦF－262	Ⅰ	磨石	17.9	12.3	3.5	958	細粒凝灰岩	偏平磨石。上下側面に弱い磨痕。端部に打痕。	104
63－5	ⅦC－263	Ⅰ	磨石	10.5	7.2	5.7	634.5	安山岩	全面磨痕。	97
63－2	ⅦC－263	Ⅰ	磨石	14.9	8.0	6.3	1021.4	安山岩	全体が滑らかだが、特に平坦面が顕著。	96
63－6	ⅥN－268	Ⅱ	磨石	(9.7)	7.5	6.0	574.7	安山岩	＋両面に凹孔。左平坦面は滑らか。下側面に打痕	107
63－4	ⅦC－263	Ⅰ	磨石	13.3	8.4	5.6	753.5	安山岩	＋凹孔。平坦面は平滑。下側面に弱い打痕。	95
	ⅦC－264	Ⅱ	磨石	9.3	7.1	4.7	464.4	安山岩		94
	ⅦG－261	Ⅰ	磨石	11.1	7.3	3.4	315.9	安山岩		109
64－2	ⅦG－262	Ⅱ	敲石	(8.9)	4.1	2.0	114.6	輝緑岩	長軸端部と側面に一部に打痕	89
64－7	ⅥJ－271	Ⅰ	敲石	7.9	7.4	7.4	587.6	凝灰岩	端部に打痕	100
64－5	ⅦE－261	Ⅱ	凹石	(8.6)	4.1	2.7	160.2	流紋岩	両面に敲打による浅凹孔	91
64－1	ⅦD－261	Ⅱ	凹石	14.2	9.7	6.2	1092.9	安山岩	両面に敲打による浅凹孔	98
64－3	ⅦC－264	Ⅱ	凹石	16.5	4.8	4.3	439.4	安山岩	三角柱状の礫の三面に敲打による深い凹孔。1ヵ所はスリによる深い凹孔。	92
64－4	ⅦC－262	Ⅱ	凹石	13.7	5.8	3.5	338.9	安山岩	片面にスリによる凹孔。平坦面は平滑。	101
64－6	ⅦA－263	Ⅱ	凹石	10.7	9.4	4.1	577.1	安山岩	石皿片利用。片面には敲打による凹孔、裏面にはスリによる凹孔と溝状の凹孔。	103
	ⅦC－264	Ⅱ	凹石	13.8	5.1	3.8	469.2	流紋岩		93
	ⅦA－263	Ⅱ	台石	(11.0)	(6.1)	(8.0)	833.6	凝灰岩	破片	102
	ⅥN－269	Ⅱ	台石	20.6	16.3	4.8	2522	凝灰岩		111
65－3	ⅥK－271	Ⅱ	石皿	33.2	32.2	6.0	9370.6	安山岩	両面とも窪んでいる。	113
65－5	ⅥJ－273	Ⅱ	石皿	32.0	37.1	12.5	17200	流紋岩	両面とも窪んでいる。	116
65－4	ⅥM－269	Ⅱ	石皿	28.5	34.7	6.4	9906	流紋岩	四片が接合。表面は窪んでいる。裏面は打割面のまま。	117
65－2	ⅦB－263	Ⅱ	石皿	(18.3)	(20.2)	2.8	2006.4	凝灰岩	高さ5.1cm。縁が付く。	105
65－1	ⅥK－271	2	砥石	16.9	14.3	5.8	2338	安山岩	両面に線状痕が見られるが、特に表面に顕著。一部溝状になっている部分あり。	110
64－8	ⅥP－267	Ⅱ	その他	19.3	14.4	10.0	178.6	流紋岩	器面は滑らかに整形。敲石？	90
64－9	ⅥJ－272	Ⅰ	その他	22.8	7.3	5.3	1087	流紋岩	器面全体に研磨痕（擦痕）あり。	106
	ⅥR－265	Ⅲ	Uフレイク	6.3	3.6	1.2	21.3	珪質頁岩	97試堀9トレンチ	69
	ⅥT－260	Ⅱ	Uフレイク	3.0	3.7	0.6	5.2	珪質頁岩	97試堀8トレンチ	67
	ⅥD－260	Ⅱ	台石	15.8	11.7	8.5	2571.6	安山岩	97試堀8トレンチ	112
62－19	ⅦB－260	Ⅱ	磨製石斧	10.7	4.3	2.5	177.9	緑色細粒凝灰岩	97試堀8トレンチ	68
	ⅥL－270	Ⅲ	Rフレイク	3.0	2.6	1.2	10	珪質頁岩	97試堀10トレンチ	70
	ⅥL－270	Ⅲ	Rフレイク	5.3	4.5	0.5	14.3	珪質頁岩	97試堀10トレンチ	72
	ⅥK－270	Ⅲ	Uフレイク	9.1	4.6	1.8	63.1	珪質頁岩	97試堀10トレンチ	71

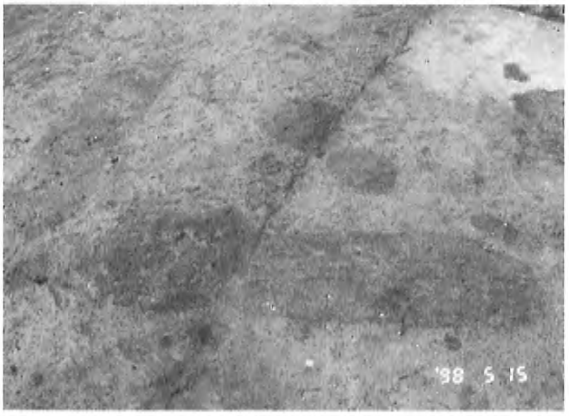
山 下 遺 跡 近 景



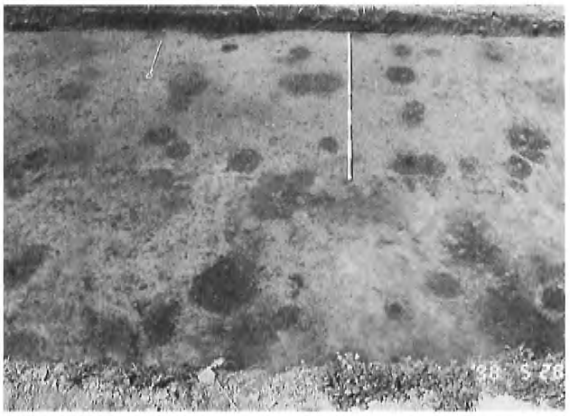
カマド状遺構群検出状況（ⅢＲ－194・195）



カマド状遺構検出状況（ⅣＨ・ⅣＩ－195）



カマド状遺構検出状況（ⅢＯ－194）



小ピット群検出状況（ⅣＦ－193）

写真１　山下遺跡１（試掘調査）

C区調査風景

C区調査風景

遺物出土状況（Ⅴ－184・185付近、図21－38・39、図22－41）

遺物出土状況（Ⅴ－184・185付近、図22－42）

遺物出土状況（Ⅴ－184・185付近、図21－40）

遺物出土状況（Ⅴ－181）

第6号土坑（南から）

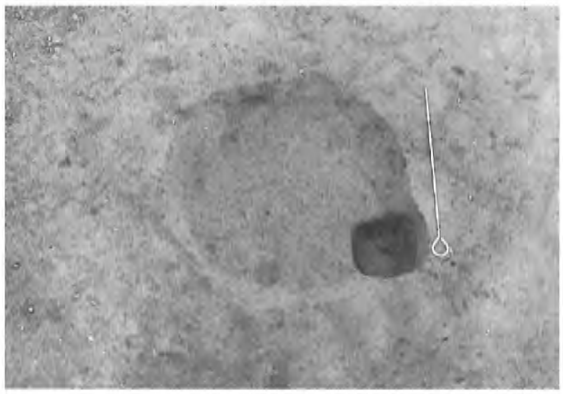
三角形岩版出土状況

写真2　山下遺跡2（発掘調査）

土器埋設遺構（東から）

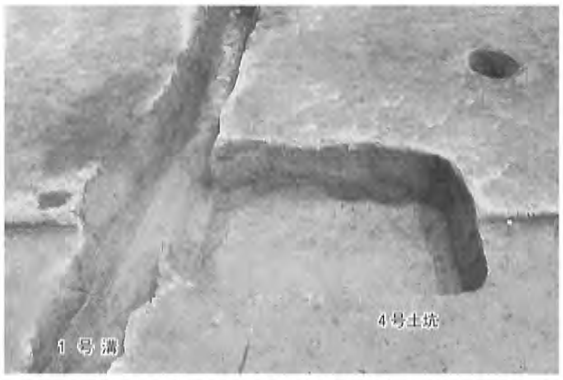
同　　左（南から）

同　　左（南から）

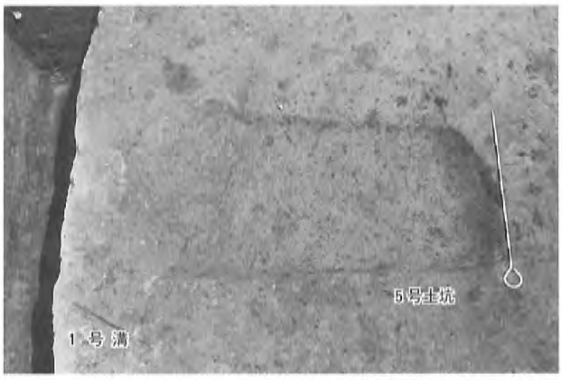


第２号土坑（南から）

第３号土坑（南から）



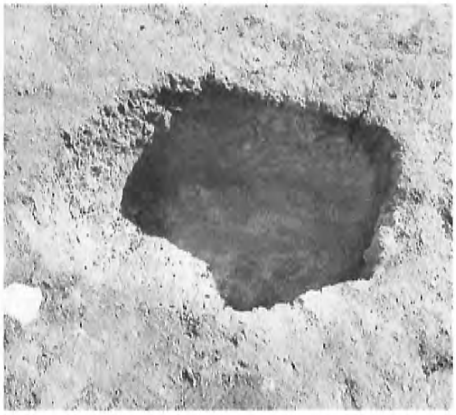
第４号土坑（南から）



第５号土坑（南から）

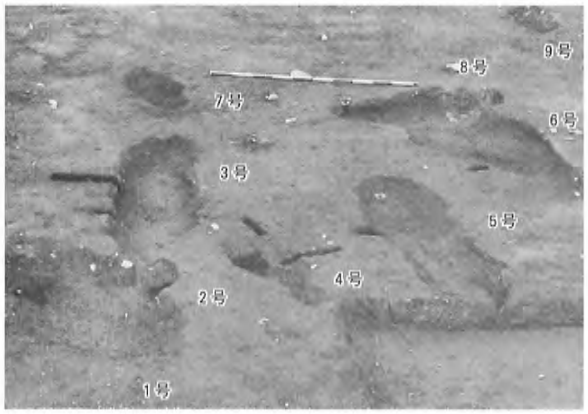
第９号土坑（西から）

第10号土坑（北から）

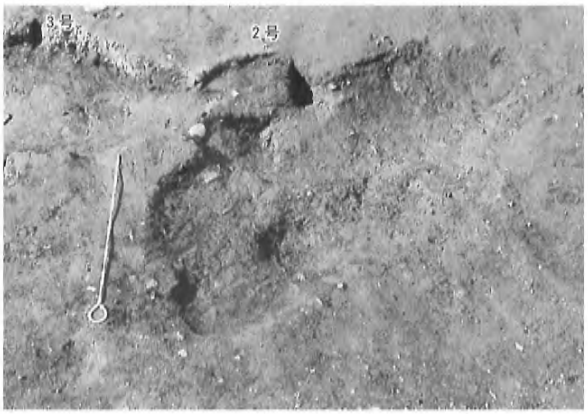


第11号土坑（北から）

写真３　山下遺跡３（発掘調査）



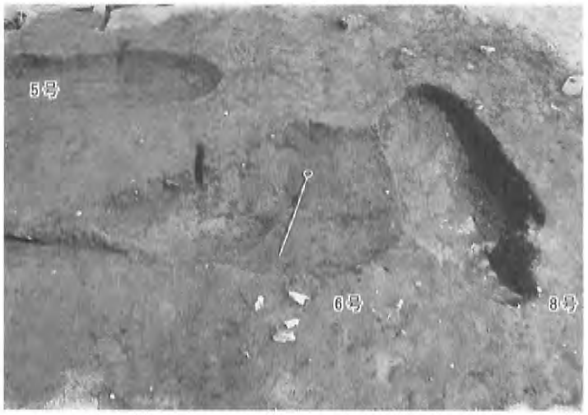
第１号～第９号カマド状遺構（南東から）



第１号カマド状遺構（南から）

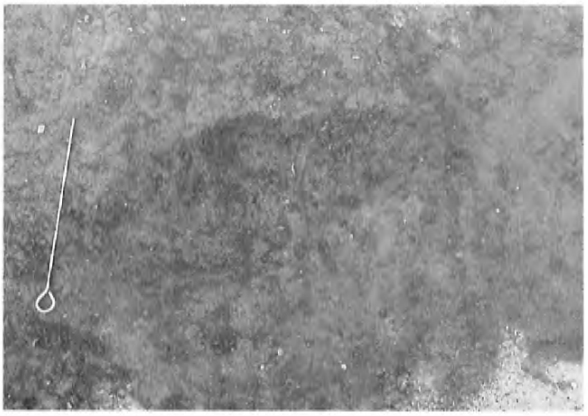
第３号カマド状遺構（南から）

第４号カマド状遺構（中央・西から）



第６号・第８号カマド状遺構（北から）

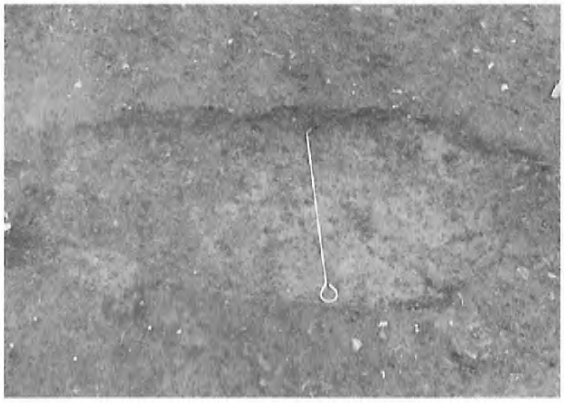
第８号カマド状遺構（西から）



第７号カマド状遺構（南から）

第９号カマド状遺構（南から）

写真４　山下遺跡４（発掘調査）

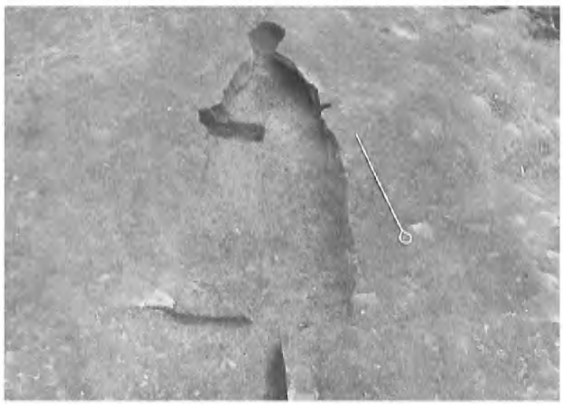


第10号カマド状遺構（南から）

第11号カマド状遺構（南から）

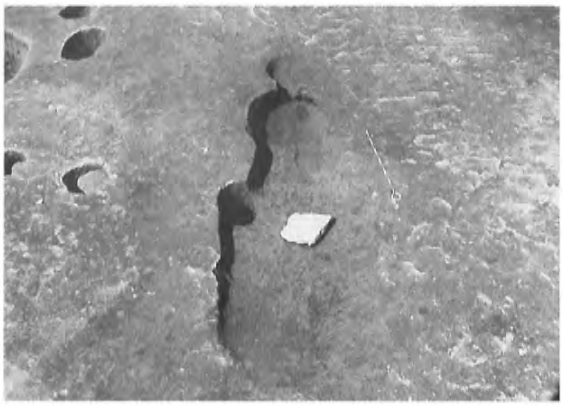
第12号カマド状遺構（南東から）

第13号カマド状遺構（西から）

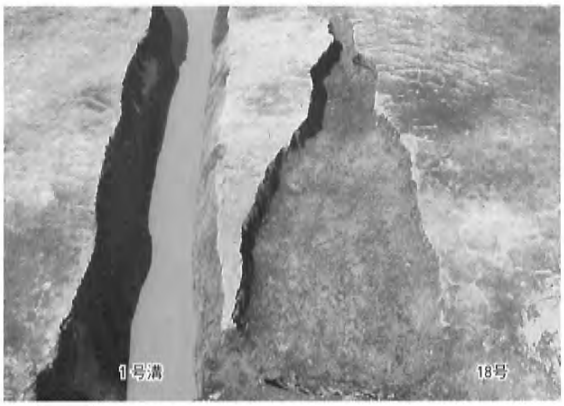


第15号カマド状遺構（南から）

第16号カマド状遺構（南から）

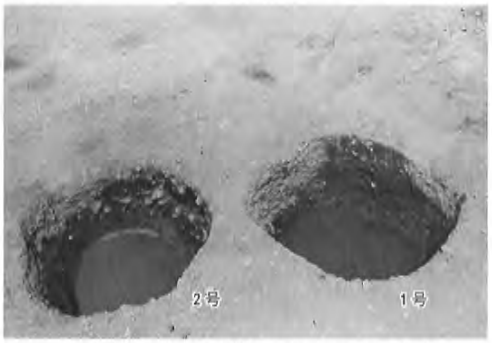


第17号カマド状遺構（南から）



第18号カマド状遺構（南から）

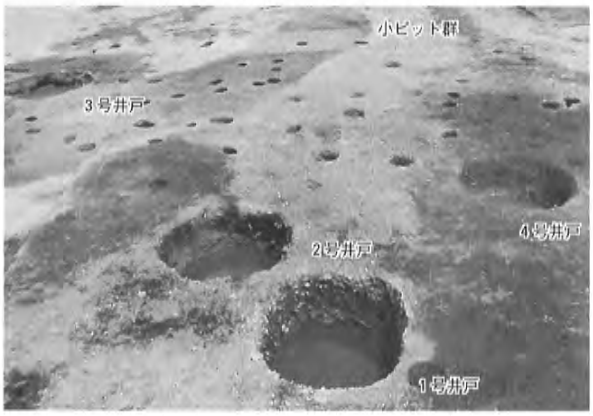
写真５　山下遺跡５（発掘調査）



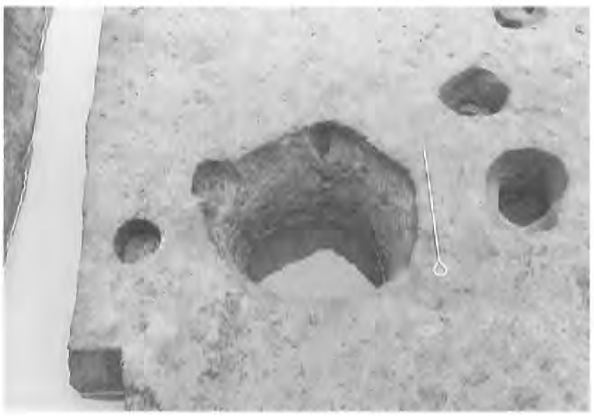
第１号・第２号井戸跡（南西から）

第３号井戸跡（南から）

第４号井戸跡（南から）



井戸跡と小ピット群（南から）



第６号井戸跡（南から）

第５号井戸跡（東から）

第５号井戸跡（東から）

第５号井戸跡井戸枠

D区西側の遺構検出状況（南から）

写真６　山下遺跡６（発掘調査）

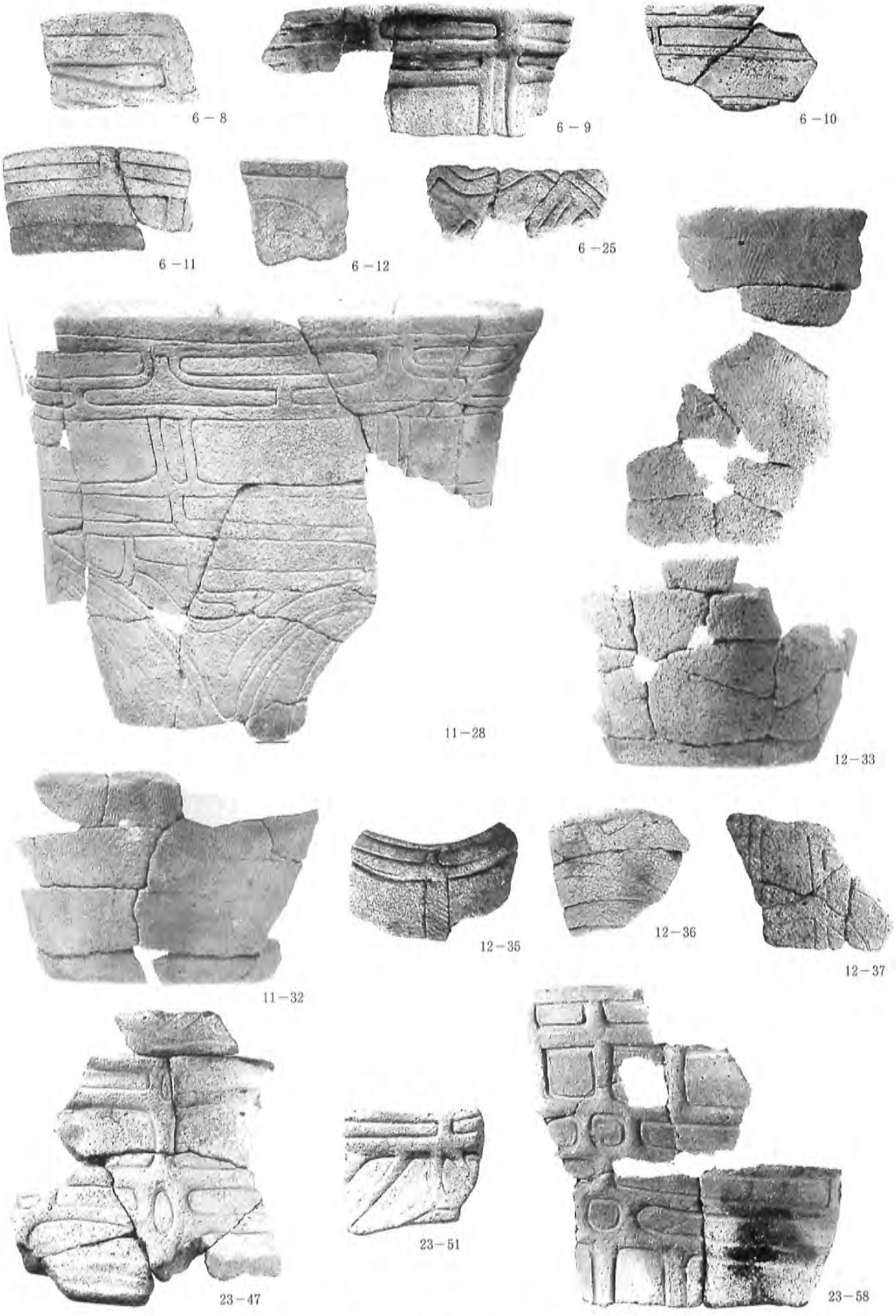


写真７　山下遺跡７（土器１）

21－38

21－40

21－39

22－43

22－44

22－43・44と同一

22－41

22－42

写真８　山下遺跡８（土器２）

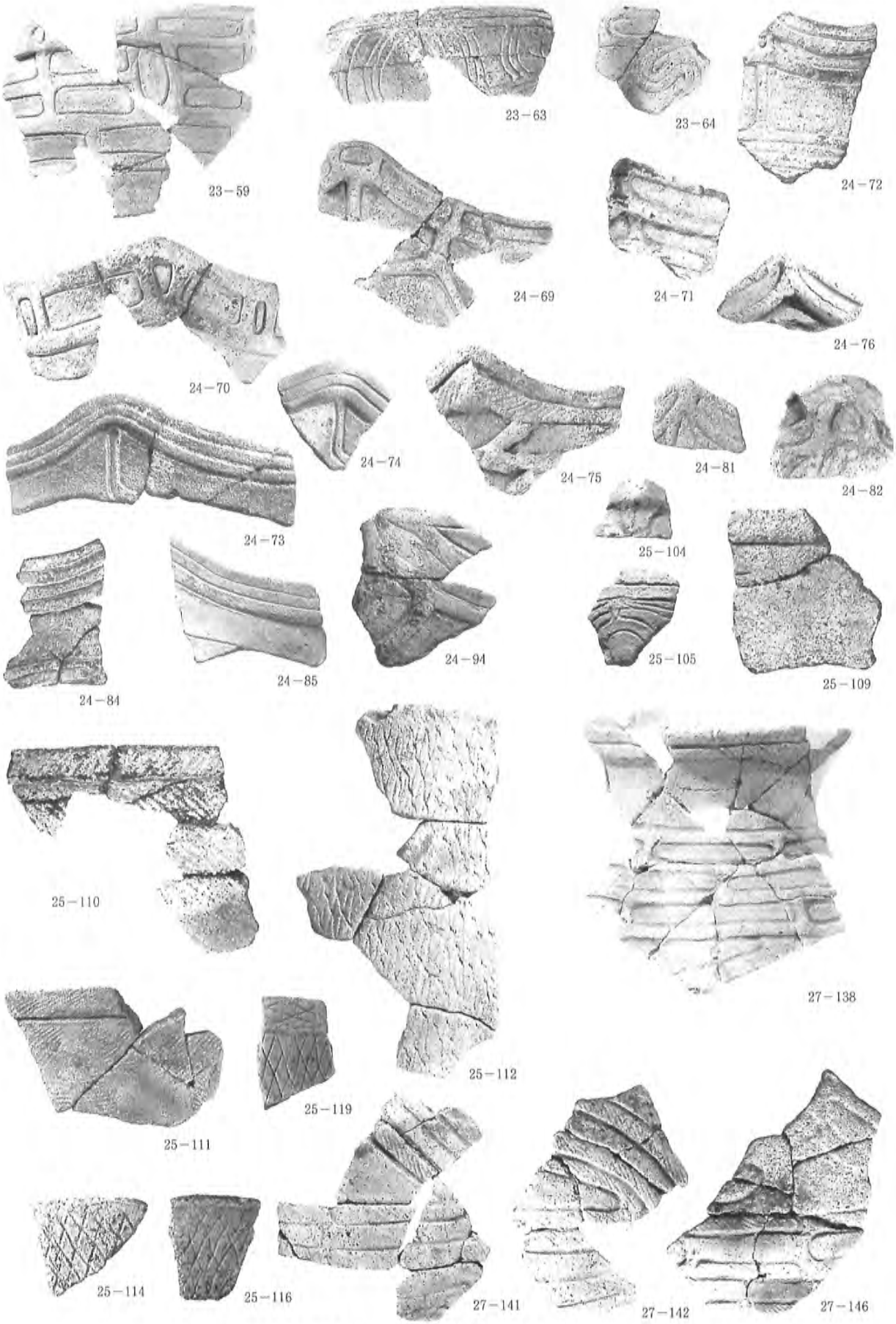


写真９　山下遺跡９（土器３）

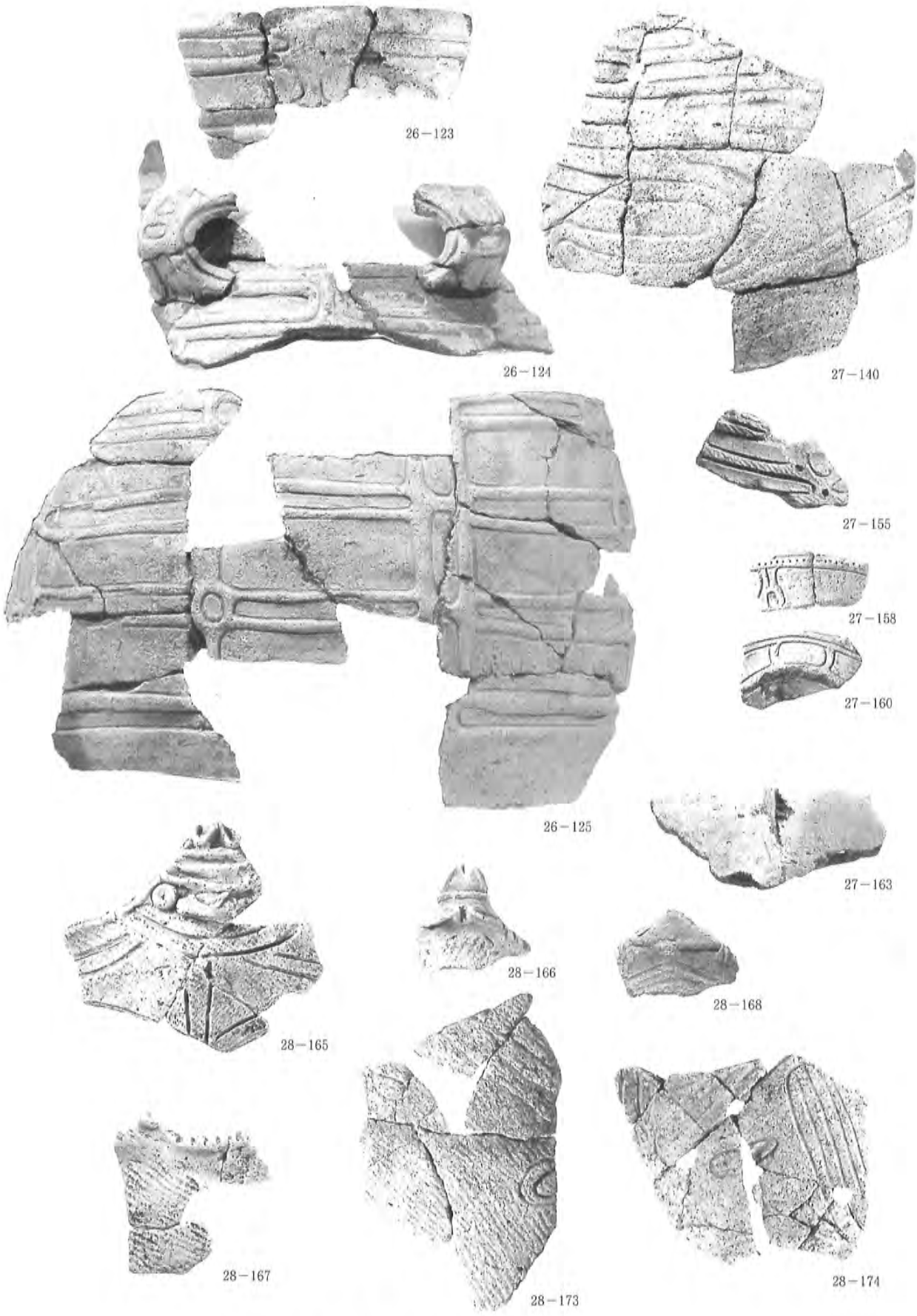
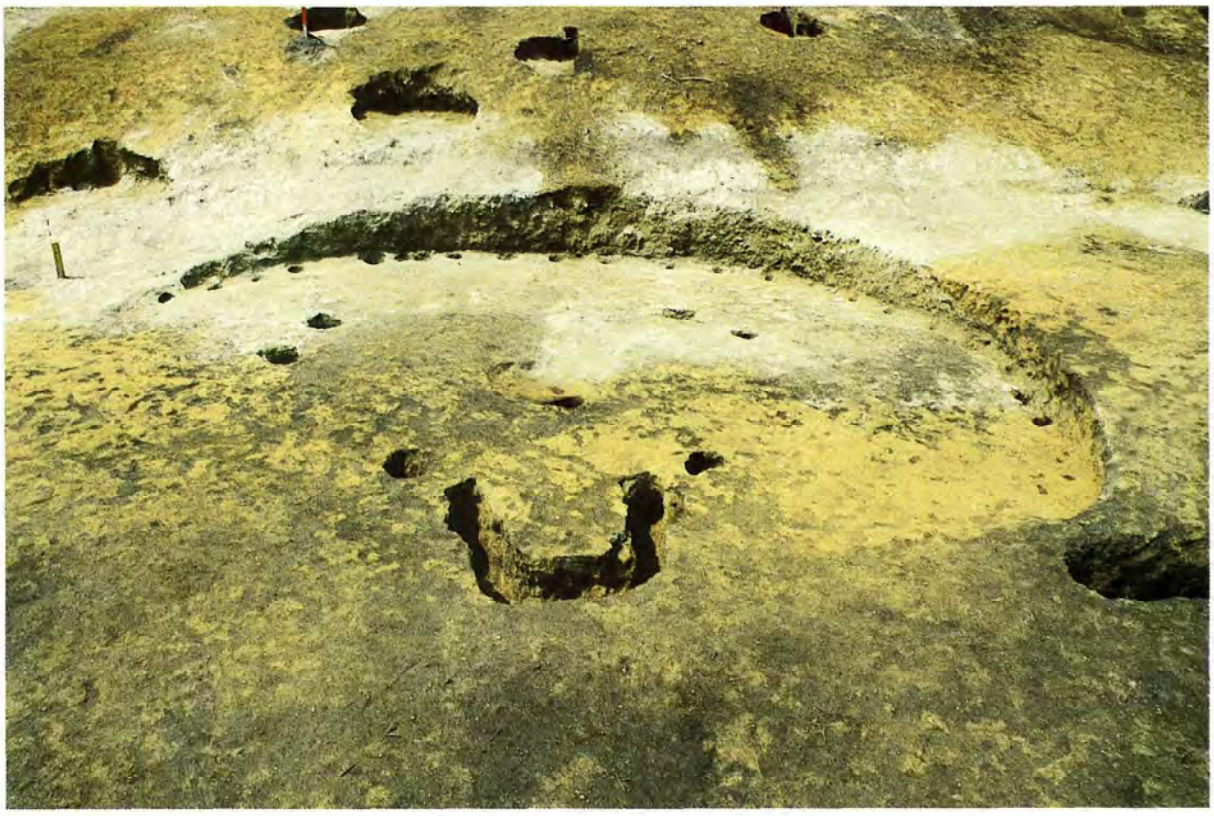


写真10　山下遺跡10（遺跡４）

米山(2)遺跡Ａ区近景（南西から）



同　上　第１号住居跡１（南から）

写真11　米山(2)遺跡（Ａ区）

A区近景（南西から）

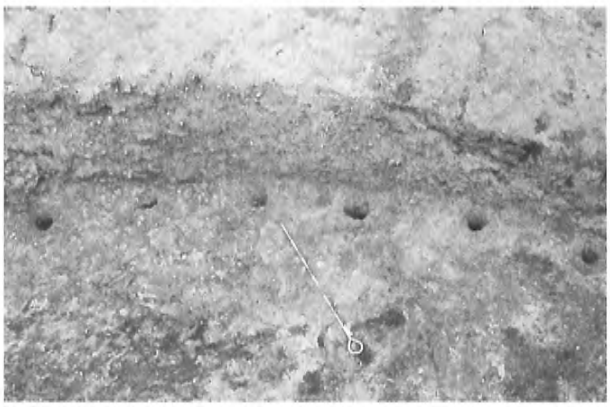
A区近景（南西から）

A区近景（北東から）

写真12　米山(2)遺跡２（A区）

第１号住居跡（西から）

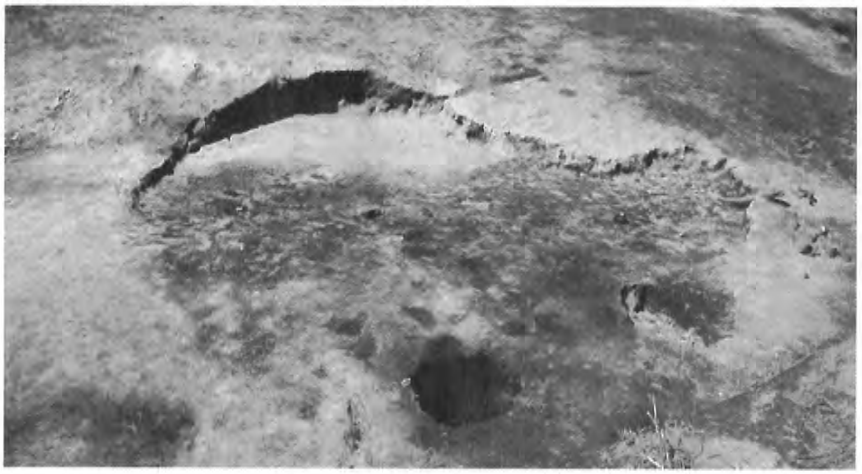
第１号住居跡（南から）



第１号住居跡 北東壁付近壁柱穴（西から）

第１号住居跡 出入口施設完掘状況（南から）

写真13　米山(2)遺跡３（Ａ区）



第２号住居跡（南から）

第３号住居跡（西から）

同　　上（南から）

第３号住居跡 倒立設置土器（南から）
（図39－９、図40－10）

写真14　米山(2)遺跡４（Ａ区）

第４号住居跡（西から）

第４号住居跡（南から）

第４号住居跡 出入口施設完掘状況（南から）

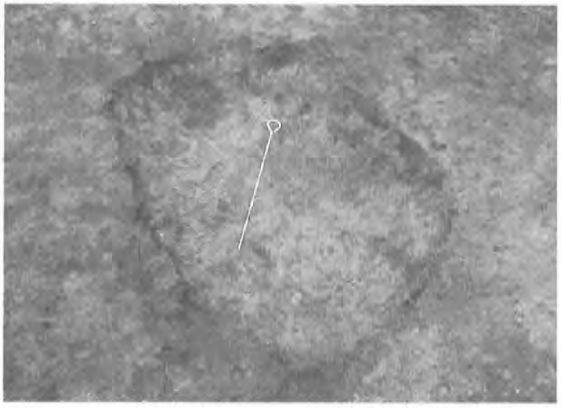
第１号土坑（南から）

同　左　土器出土状況

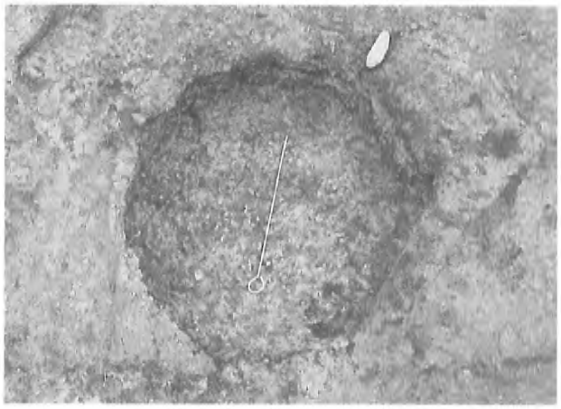
第２号土坑（南から）

写真15　米山(2)遺跡５（Ａ区）

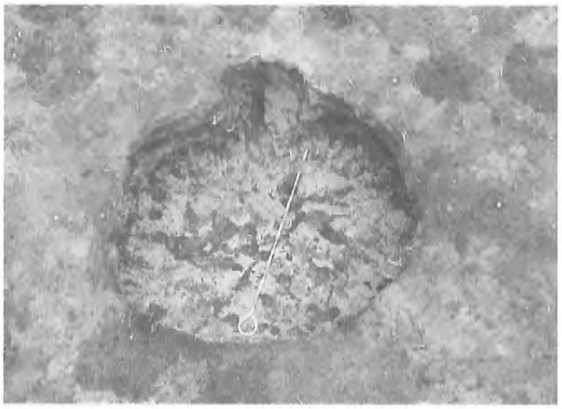
第３号土坑（西から）



第４号土坑（北から）



第５号土坑（南から）



第６号土坑（南から）

第８号土坑（南から）

第９号土坑（西から）

第10号土坑（東から）

第２号溝状土坑(西から)

第１号溝状土坑（北西から）

写真16　米山(2)遺跡６（Ａ区）

B区作業状況

縄文時代晩期完形壺出土状況（図59－193）

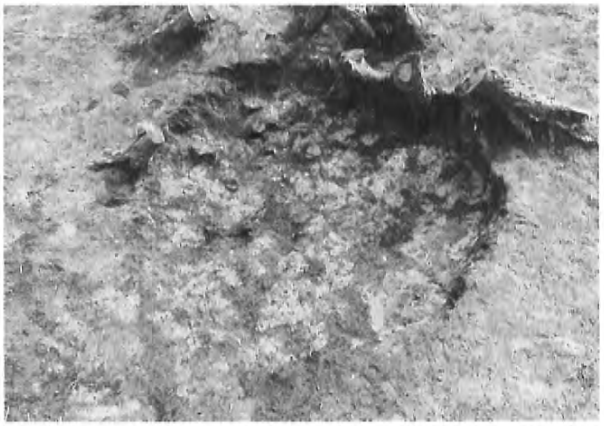
第5号住居跡（南東から）

同　　左（南東から）

同　　上　石囲炉

同　　上　遺物出土状況（図45－14）

第12号土坑（西から）



第11号土坑（東から）

写真17　米山遺跡7（B区）

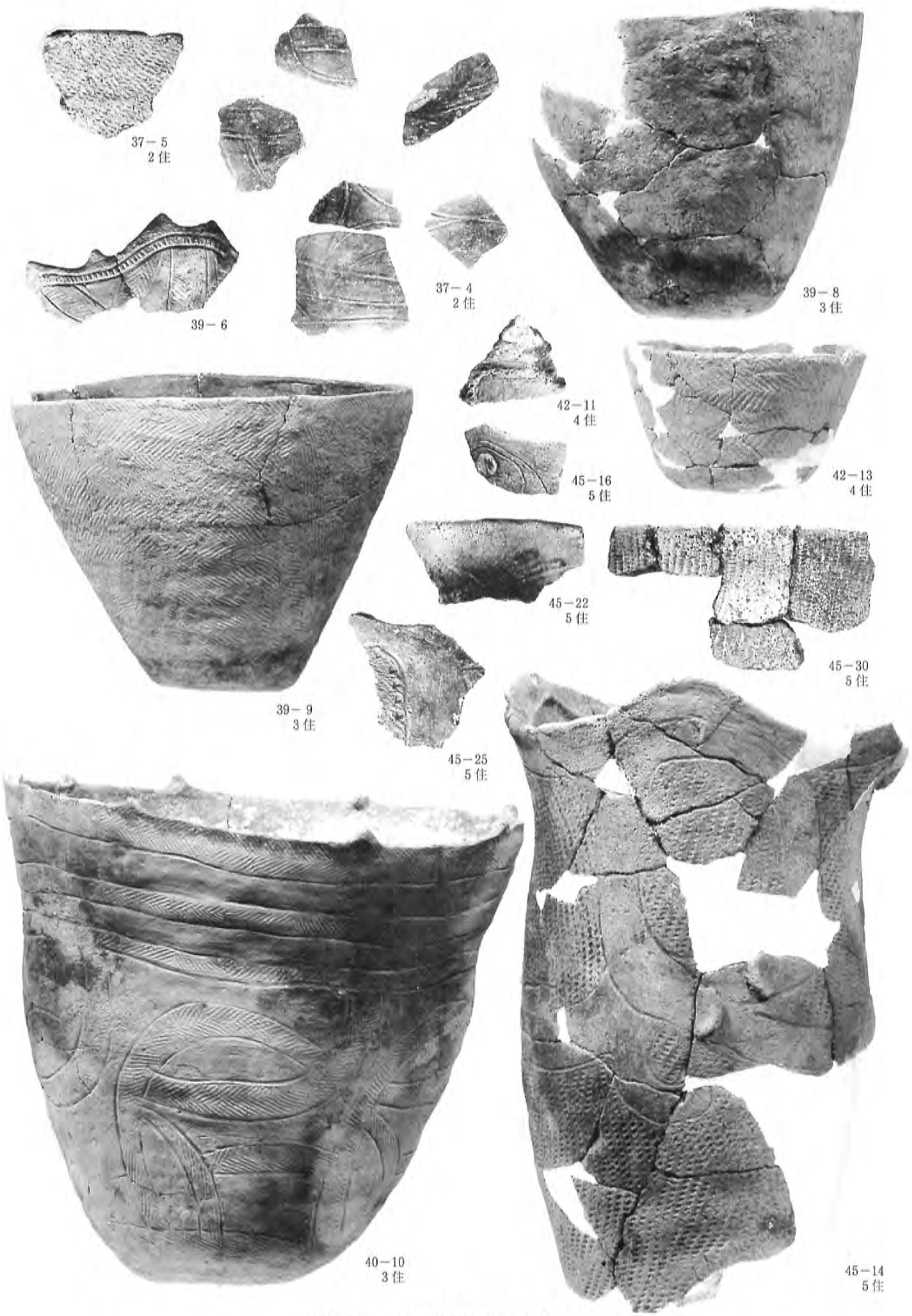


写真18　米山(2)遺跡８（土器１）

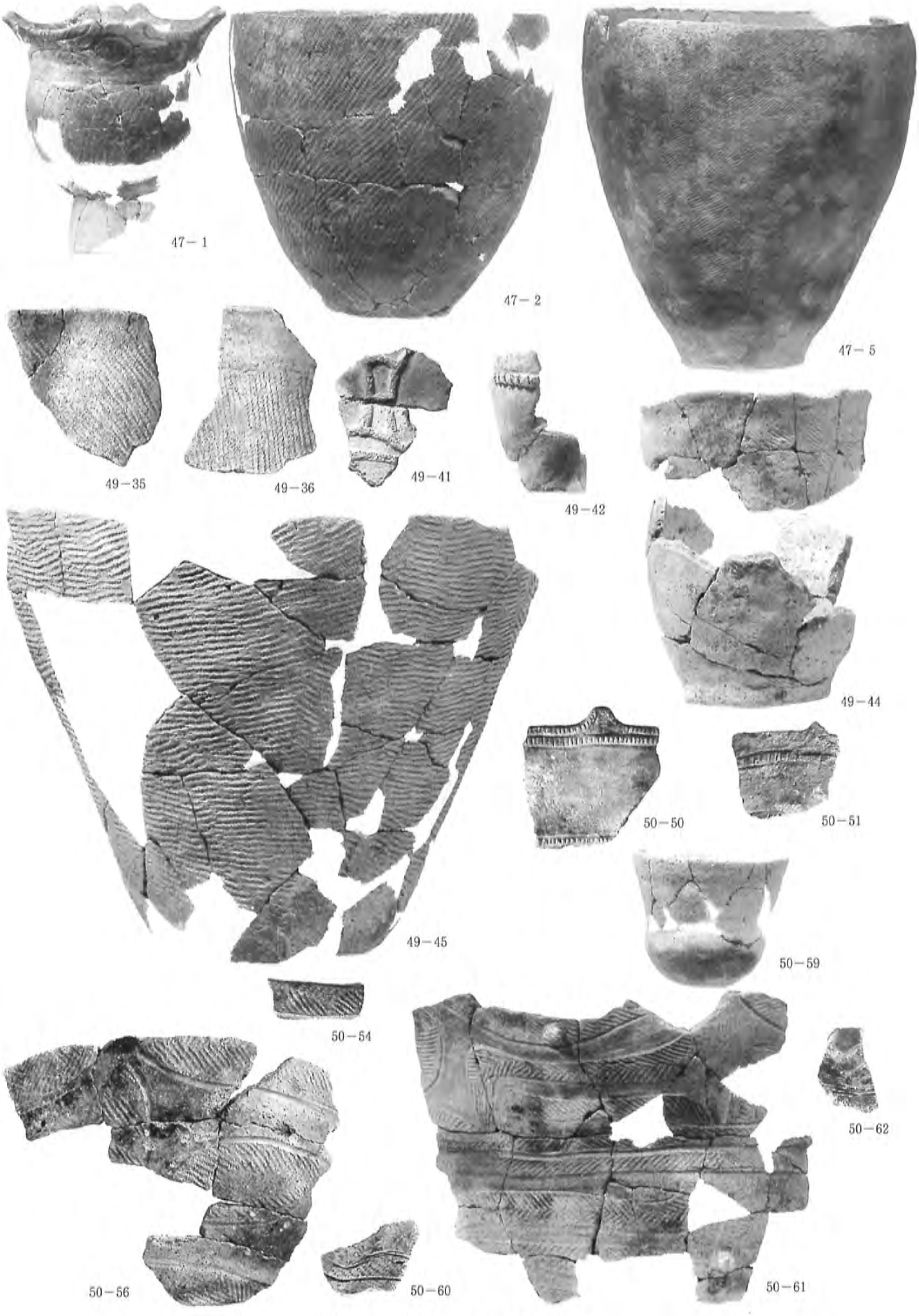


写真19　米山(2)遺跡９（土器２）

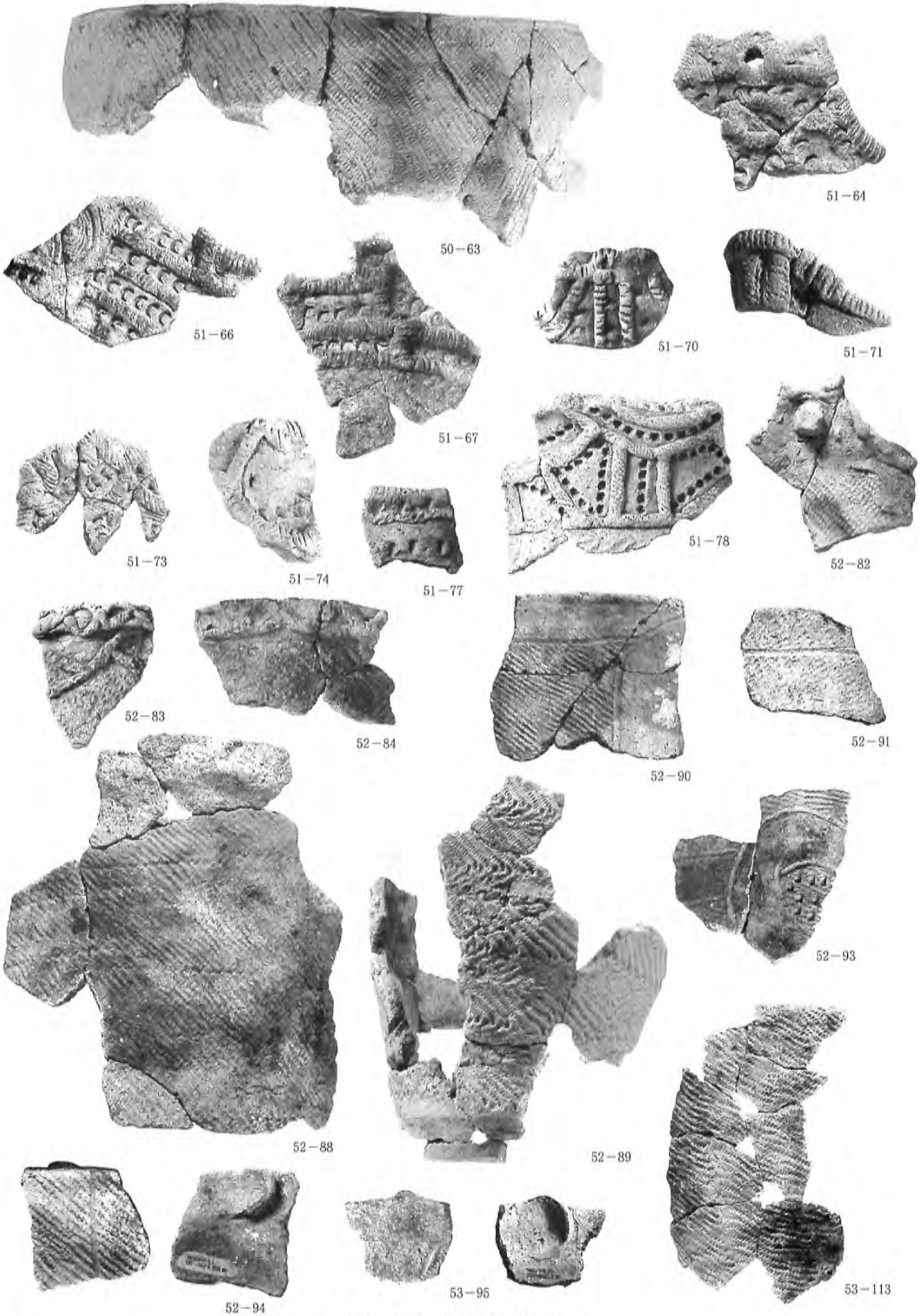


写真20　米山(2)遺跡10（土器３）

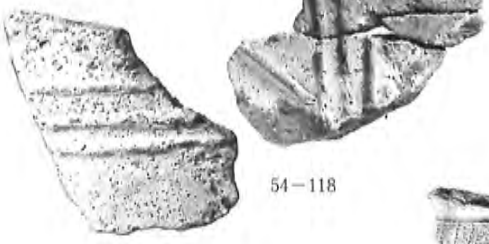
53－114

54－115

54－117

54－121

54－122

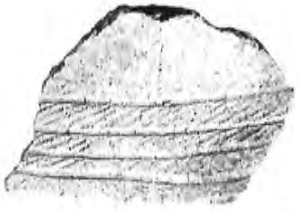


54－118

54－125

54－126

55－134



54－132

55－133

55－133

55－135

55－135

写真21　米山(2)遺跡11（土器４）

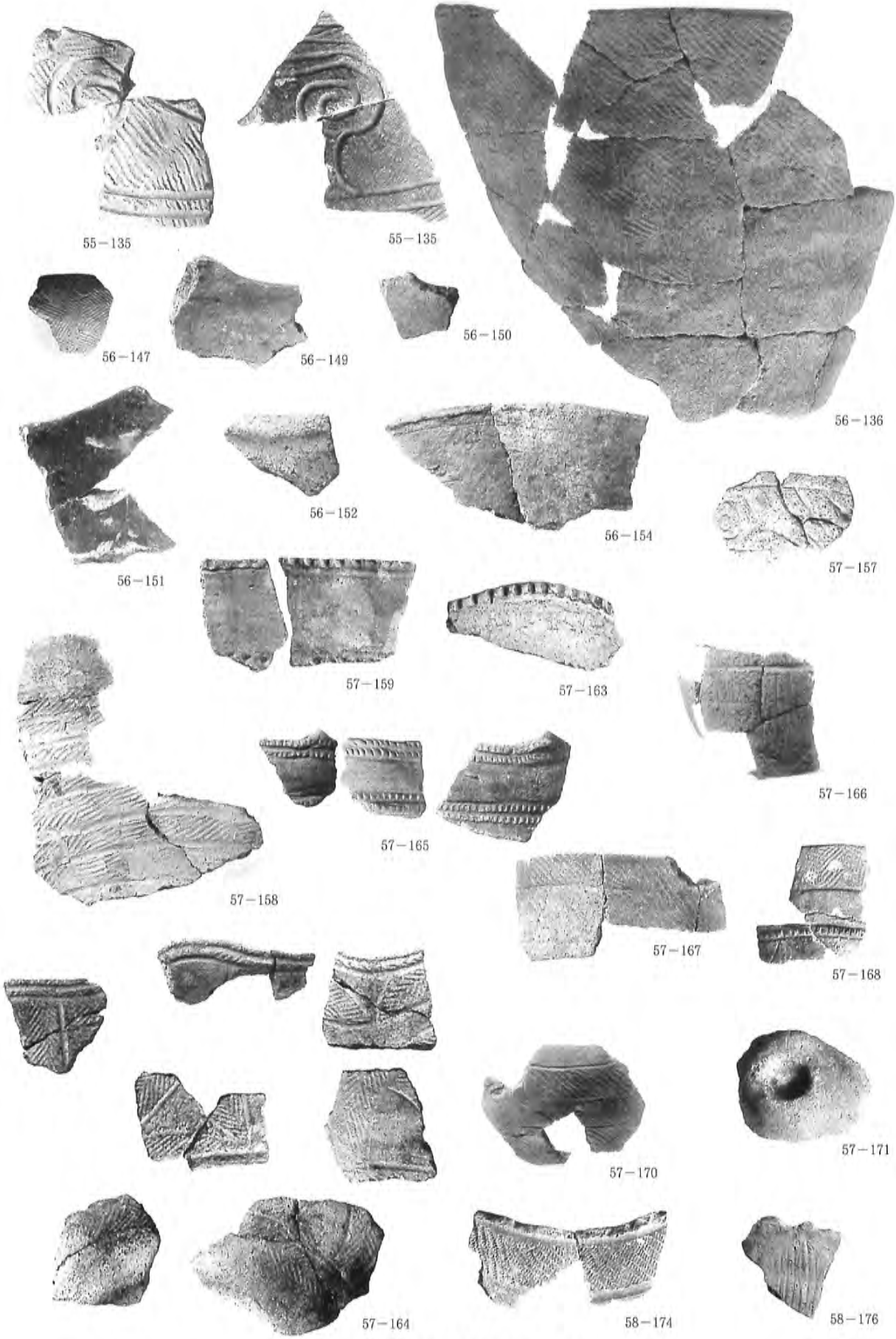


写真22　米山(2)遺跡12（土器５）

58－172

58－173

58－179

58－183

58－187

58－188

58－189

59－190 b

59－190 a

59－191

59－190 c

59－193 b

59－197

写真23　米山(2)遺跡13（土器６）

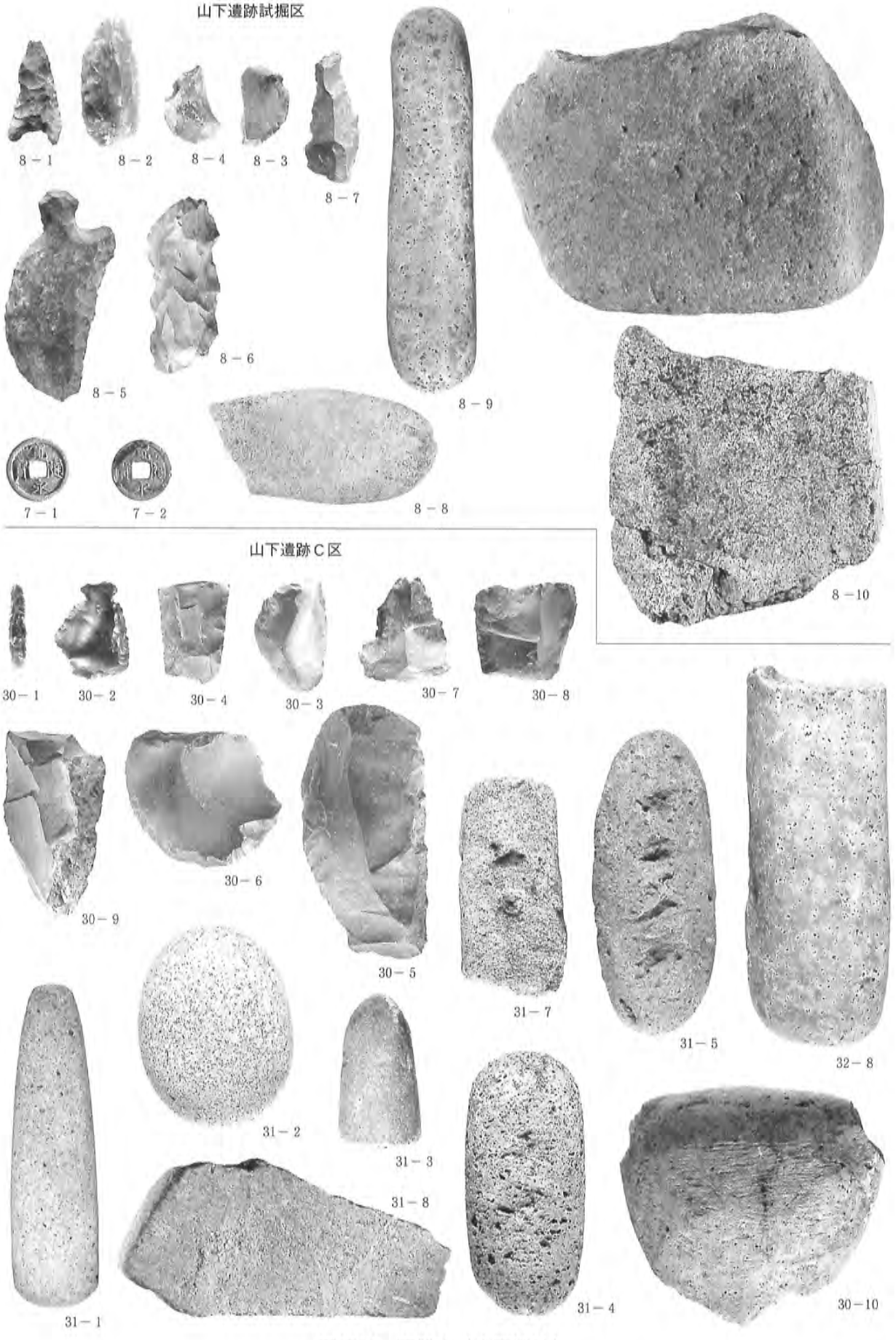


写真24　石器１（山下遺跡）

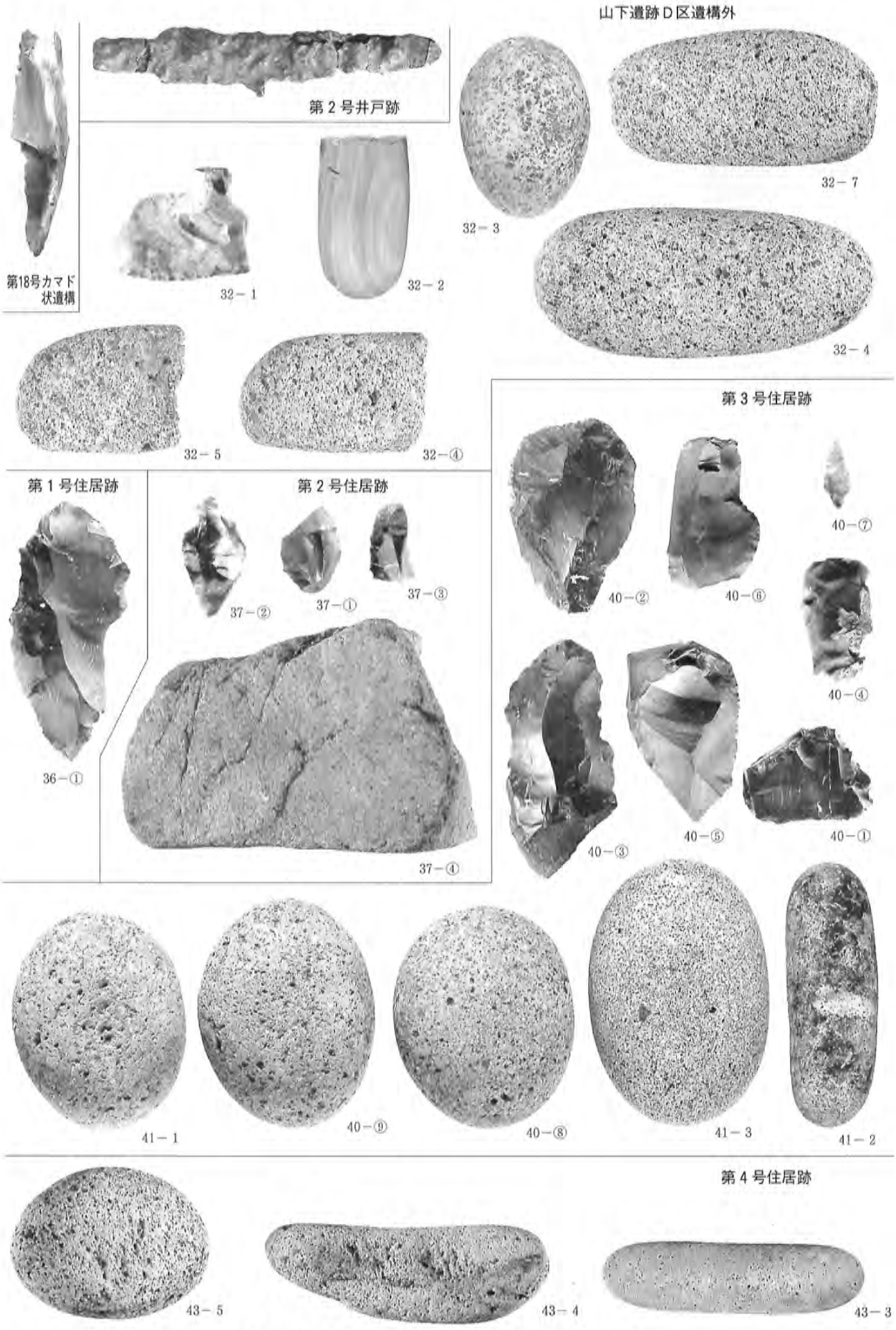


写真25　石器2（山下遺跡D区、米山(2)遺跡）

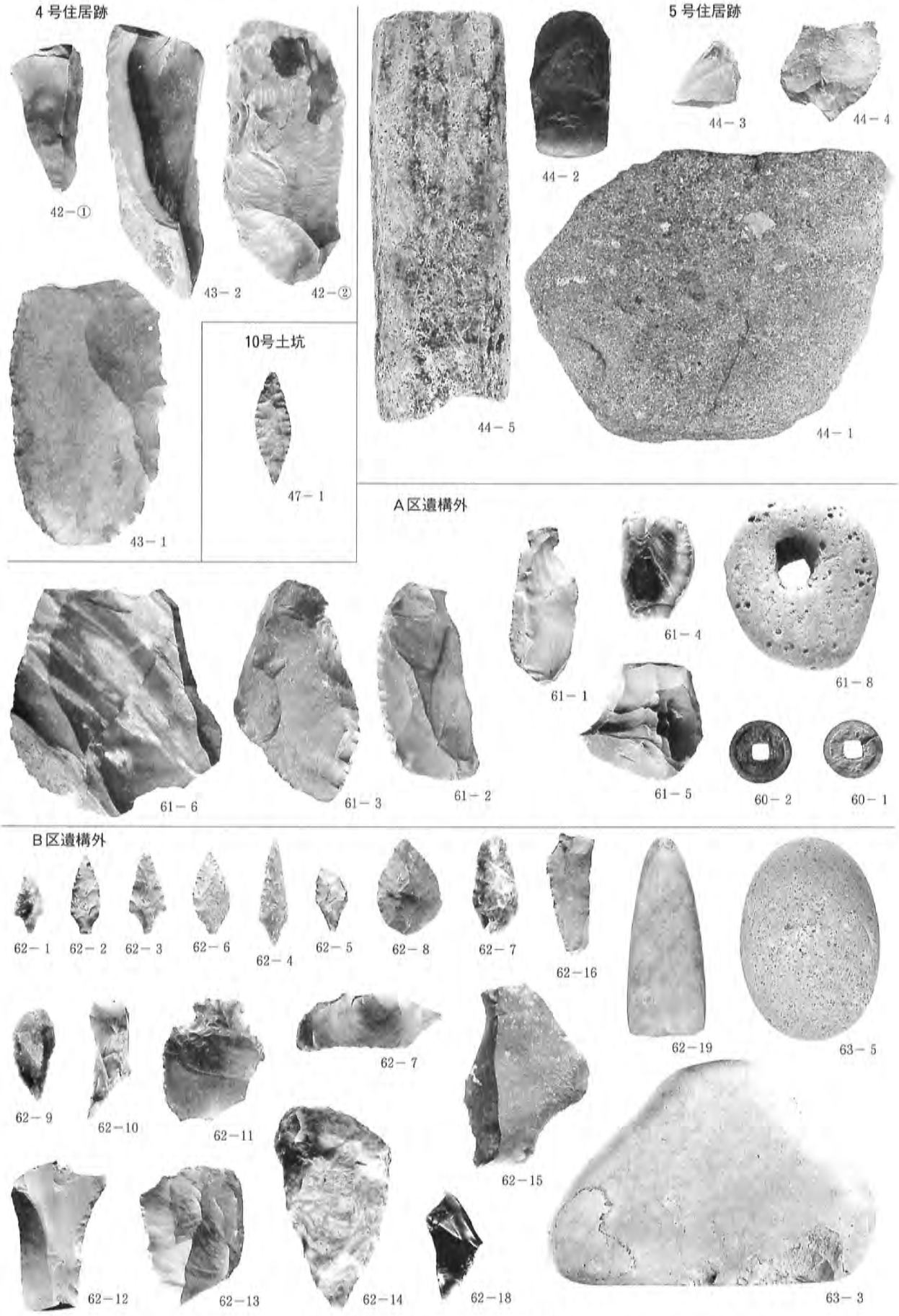
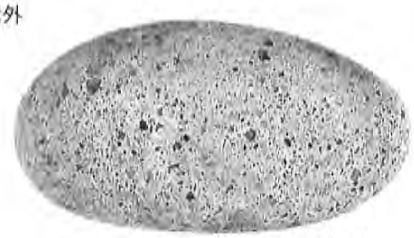


写真26　石器３（米山(2)遺跡）

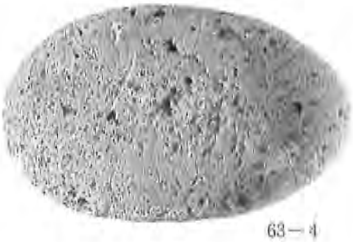
B区遺構外

63－1


63－2

64－7

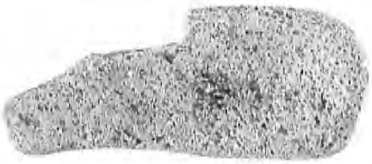
64－2


63－4

64－3

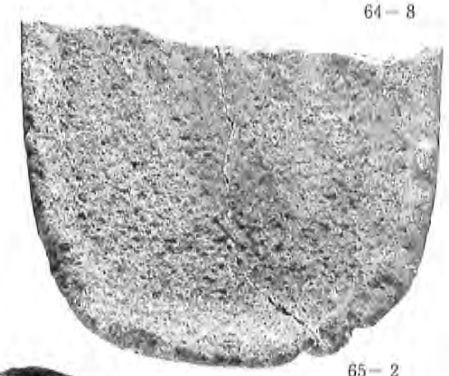
64－5

64－8


64－4

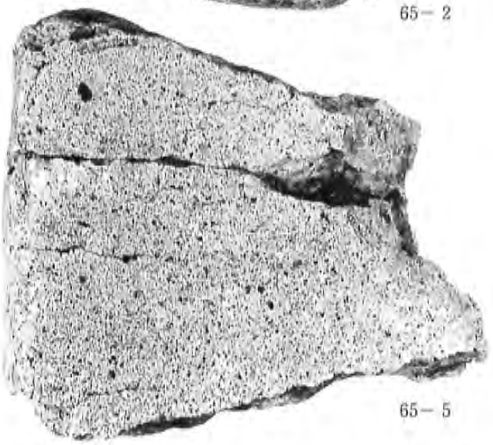
64－1

64－6


65－2

63－6

65－4


65－5

64－9

65－3

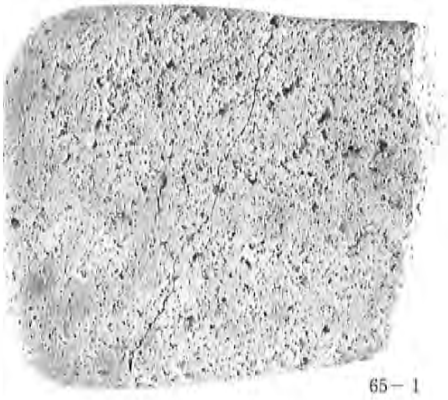

65－1

写真27　石器４（米山(2)遺跡）

報告書抄録

書名	山下遺跡Ⅱ・米山（2）遺跡
副書名	青森県新総合運動公園建設事業に伴う宮田地区埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第２７４集
編著者名	畠山　昇、永嶋　豊
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森市大字新城字天田内152-15　TEL017-788-5701
発行年月日	西暦1998年３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山下遺跡	青森県青森市大字宮田字山下108・109外	02-201	01-277	40°50′3″	140°50′50″	19980423～19980731	試掘調査 対象面積 35,000㎡ 発掘調査 4,100㎡	青森県新総合運動公園建設事業に伴う発掘調査
米山（2）遺跡	青森県青森市大字宮田字米山130外	02-201	01-276	40°50′24″	140°51′6″	19980423～19980731	発掘調査 1,800㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山下遺跡 試掘調査	集落跡？		カマド状遺構 15基 土坑 2基 溝跡 1条 小ピット群	縄文時代前期・中期・後期の土器・石器 古銭（寛永通宝）	北東区域の約9,000㎡を米山(2)遺跡に編入
発掘調査	祭祀跡（墓域？） 集落跡？	縄文時代 時期不明（中世以降）	土器埋設遺構 1基 土坑 2基 土坑 7基 カマド状遺構 19基 井戸跡 6基 溝跡 2条 小ピット群 2箇所	縄文時代中期・後期の土器・石器・石製品 珠洲焼	第５号井戸跡は^{14}Ｃ年代測定では1040±60年との結果がでている。
米山（2）遺跡	集落跡	縄文時代（中期・後期） 弥生時代	住居跡 5軒 土坑 12基 溝状土坑 2基	縄文時代中期・後期・晩期の土器・石器 古銭（寛永通宝）	Ａ区は縄文時代後期後葉が主体。

青森県埋蔵文化財調査報告書第274集

山下遺跡Ⅱ・米山(2)遺跡

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う青森市宮田地区の遺跡発掘調査報告—

発行年月日　平成12年 3月30日
発　　行　青森県教育委員会
〒030－0801　青森市新町二丁目3—1
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
TEL　017－788－5701　FAX　017－788－5702
印　　刷　不二印刷工業株式会社
〒030－0902　青森市合浦一丁目10番16号
電話　017－741－5439
FAX　017－741－2541

活彩あおもり
―輝くあおもり新時代―